
異なる運命、新たな螺旋

六爪龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異なる運命、新たな螺旋

【Nコード】

N2148N

【作者名】

六爪龍

【あらすじ】

自分を憎み衛宮士郎（過去の自分）を消そうとしたアーチャー……
……だが、その望みは果たされなかった。
しかし、『答え』を得ることが出来たアーチャーは再び頑張っていることを決意し、守護者としての己に戻っていった。
そして、『その時』が訪れる……

初めまして。未熟な文ではありますが付き合っていたいただけるとあり

がたいです。

序章 消滅からの始まり

暁の光景の中、一組の男女が向かい合っていた。

「アーチャー……………」

「凜、私を頼む。知つての通り未熟者だからな。」

そう告げる男 アーチャーの表情は穏やかなもので、その姿は段々と透けていっていた。

少女 凜は別れが避けられないことを、アーチャーが既に決意していることを理解しせめてもと笑顔を浮かべた。

「私も、頑張るから。だから、あんたも……………」

「『答え』は得た。大丈夫だよ、遠坂。俺もこれから頑張っていくから。」

そして、別れが訪れた。

荒野の中、かつて聖杯戦争でアーチャーと呼ばれた英霊エミヤが佇

んでいる。

あれから数え切れないほどの年月がたっていた。

「何とも幻想的な光景だな……。」

エミヤが見つめる先では、荒野の至るところから蛍のような小さな光が飛び立ち消えていつている光景が広がっていた。

その光の発生源、それは大地に刺さる剣であったり槍であったり、荒野自身からであったり又は
エミヤ自身
からであった。

「守護者と言う存在に訪れる最後と言うのが、これ程までに穏やかなものだとは。ククツ、私には過ぎた最後だな。」

そう、この光景は磨耗したエミヤが消滅する過程により起こっているのだ。

しかし、それを見つめるエミヤの目はとても穏やかだった。

まるで、待ち望んでいた時が漸く訪れたのかのように……いや、真実待ち望んでいた事なのだろう。

ただただ、消滅を受け入れている姿がそこにはあった。

「凜…切嗣……私は、俺は最後まで頑張ったよ。」

エミヤは目を閉じてその時を待つ。光の量はどんどん増し、比例し

て回りの物が消滅していく。
今残るはエミヤの周囲とエミヤ自身だけである。

「出来れば…もう一度…姿だけでも……」

それを呟いた瞬間、全てが光へと変化する。

しかし、そこで変化が訪れた。

ただ消えるだけの筈だった光の群れが、ある一方へ向かって流れ始めたのだ。

ここから、新たな運命が紡がれる………

一章 回る歯車（前書き）

頑張っていると思うので、よろしくお願いします。

一章 回る歯車

side アーチャー

「（…随分とゆっくりとした消滅だな。しかも、まだ思考できるとは一体？）」

消えた筈のアーチャーは今だ自分に自我が存在していることを不思議に思っていた。

「（そもそも体が重いし、感じる風は………って、何！風だと！？本当に何が起こっている！！）」

アーチャーは慌てて閉じていた目を開いた。

そこに見えたのは、漆黒の空間の中に小さな光が無数に存在している光景 即ち、星空であった。

その事実を確認したアーチャーの思考は思わず停止したが、その場合ではないとすぐに頭を巡らせる。

「（まさか、これは召喚か…？しかし私は消滅……いや、その寸前で呼ばれたのであれば、ここにいても不思議ではないか……。だが、この光景はどこかで見たことがあるような？）」

ともかく、現状を確認しようとして視線を地上に落とせば、これまた見たことがある洋館がすぐそこまで迫ってきていた。それを確認したアーチャーは思わず呟いた。

「……………なんですか。」
ガツシャーン

そしてアーチャーは洋館へと大きな音を立て衝突した。

無意識にでも身体に『強化』をかけていたのは、流石アーチャーと
いったところだろう。

side 凜

暗い部屋の中、一人の少女が立っていた。

彼女の名は遠坂凜、ここは彼女が住む家の地下室である。なぜこんな場所にいるのかと言つと……

「準備はこれでよし、と。それに、時間もバツチリ。触媒は、まあいいか。後は実行するのみね……。どんなのが召喚されるのかしら。」

詠唱が進むにつれ凜の魔力が次第に高まってゆく。
そして、辺りに充満した魔力が見えない渦を作り出し、凜の髪の毛を舞い上がらせる。

「誓いは此処に。我は常世総ての善となるもの、我は常世総ての悪を敷くもの。」

凜は最高潮に高まった魔力を、爆発しそうとまで思うような魔力を知感していた。

いける

凜はそう思った。儀式はスムーズに進み、魔力も申し分ない。絶対に成功すると確信した凜は、最後の詠唱を読み上げる。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ
……！」

終えた瞬間、漂っていた魔力が方向性を持って集約する。

確りとした手応えを感じた凜は目をあけ、相手が現れるのを待つ。

だが、いくら待っても目の前の陣に変化は訪れない。

『失敗』という言葉が頭をよぎった瞬間……

ガッシャーン

という大きな音が頭上から聞こえた。

「何でよー！ー！！」

凜はそう叫びながらバタバタと上に行くのであった。

辺りにはさんざんたる光景が広がっていた。アーチャーが衝突した影響であろうか、恐らくは目を見張るような部屋だったろうと予想されたこの場所は瓦礫の山となっていた。

「……………この…部屋は……………」

周囲を見渡せば、いいよのない懐かしさが込み上げる。

「そつだ、これは…聖杯戦争の……………」

そこに思い至った時、廊下の方からバタバタと大きい足音が聞こえた。

咄嗟にアーチャーは感情を押し隠し、いつもの皮肉げな表情を浮かべた。

例えどんな時であろうとどんな状況であろうと、感情を押さえつけることはアーチャーにとっては容易いことであった。しかし、その

事をアーチャーが悲しい事と感じることはなく、また、それを他者に悟られるようなこともなかった。

アーチャーが見つめる先で、扉のドアノブがガチャガチャと音をたてて動く。

しかし、扉が開く様子は一向にない。

これが聖杯戦争による召喚であることは理解したアーチャーだが、召喚の混乱か摩耗していたせいかな。または、消滅しかけていた影響か。細かい部分は思い出せないでいた。

その為、自ら行動を起こすことなく事態を静観していた。

「扉、壊れてる。ああもう、邪魔だこのお！？」

バキッ、と音を立てて開いた（壊れた）その場所には……

「（あれは、靴底……か？）」

蹴って開けた為か、足先が見えていた。

しかし、壊れた扉から一本の足が見えている光景は……どこかシュールだ。

足を下ろして現れた凜は部屋の状況を見て呟く。

「またやっちゃった……やっちゃったことは仕方ない、反省。…怒られるだろうなあ。（ボソッ）」

それで、アンタなに？」

そのときになって漸く向けた凜の視線の先では、白い髪に黒い肌、黒のボディーアーマーの上から紅い外套を羽織った男　アーチャーが壊れたソファアーにふんぞり返って座っていた。

静かに凜の言葉を聞いていたアーチャーは少々気になることを聞いた気がしたが、問われた言葉に直ぐ様意識を切り替えて返答する。

「やれやれ、開口一番それかね。これはまた、とんでもないマスターに呼ばれたものだ。」

でて来た言葉は、わずかに覚えていた以前の台詞と変わらないものだった。

「なんですつてえ。……いいわ、それよりもアンタが私のサーヴァント？」

「それはこちらの台詞だ。君が私のマスターかね？」

アーチャーの口調が多少頭にきたものの、召喚を考えれば仕方ないと無理矢理自分を納得させ、確認するための疑問を口にする。

それに対し、アーチャーは懐かしさも手助けしてか口許を緩めつつ質問し返す。

それを、嘲笑混じりに返されたと感じた凜は一気に頭に血が上った。

「あ、当たり前でしょう！！ほら、見なさい。令呪だってあるんだ

から。」

腕を巻くつて令呪を見せるが、アーチャーはこれ見よがしにヤレヤレと肩を竦めた。

「フウツ、本気で言ってるのかね？ そうなると私には都合七人のマスター候補がいるというわけだ。」

「あつ……………」

「私のマスターを名乗るくらいなら、レイラインの確認でも確証は得られるだろう？」

「ぐつ……………」

魔術師らしからぬ失態に二の句が告げない凜。

つつい皮肉が口をついて出るアーチャーだが、相手を打ちのめす事が目的ではないことを思いだし意識して言葉を切った。

「…いや、すまないなマスター。乱暴な召喚に些か混乱していたよ
うだ。」

突然変わった口調に、思わず凜はアーチャーを見つめる。

「え？ いや、私もちょっと混乱してたって言うか……………」

「私を召喚してなお生氣に満ちる行動、更に供給される魔力は霊地に繋がっていると見紛うばかりに高いときた。」

これではマスターと認めないわけにはいかないな。」

勝手に自己完結しているアーチャーに、凜は少し狼狽えた。

それはそうだろう。人であり魔術師としては幼いと言える自分より高位の存在である英霊に、力を誇示するまでもなく認められたのだ。嬉しさが込み上げるが、魔術師たるもの簡単に感情を表してはいけないとポーカークフェイスを保ち話題を変える。

「そ、そう言えばアンタは何のサーヴァント？」「ふむ、何だと思
うかね？」

「(さつきから思ってたけど、性格悪いわね。コイツ。)セイバー、
じゃないわよね。」

「残念ながら、剣は持っていない。」

凜はその返答に『そっか』と呟き、少し落胆の意を表す。

それにまた軽い違和感をアーチャーは感じたが、気のせいだろうと思
い直す。

「それじゃあ、最後にアンタの真名と宝具って何？」

ここで逡巡するもそれは一瞬で、すぐに決断を下す。
即ち

「すまないがそれは明かせない。なぜなら」

「なに？下らない理由だったら赦さないわよ。」

そう言っただけで浮かべる笑みは、正にアカイアクマに相応しいものだった。

こういうところは変わらないんだな、と思いつつも背中に嫌な汗をかいているのは「愛嬌」。

「何故なら、私にも解らないからだ。」

「ハア！？何よそれ。」

「余りにも乱暴な召喚だった為か、どうやら記憶に混乱が見られるようだ。戦い方などは解るが、その二つに関することはさっぱりだね。これはマスターの不完全な召喚のツケだぞ。」

そう言われると反論の出来ない凜。
苦し紛れに文句を溢す。

「むう、そんなんじゃ今回の聖杯戦争に勝ち抜けないじゃない。」

「なに、それは些細な問題だ。」

「どこがよ、真名処か宝具も解んないようじゃ無理に決まってるじゃない。」

「ククク、私は君が召喚したサーヴァントだぞ？それが最強でない筈がない。」

そう、アーチャーは今度こそ凜を勝者に導こうと決意した。

例え、記憶として残っていなくても、記録が僅かしかなくても絶対

に勝ち抜こうと。

凜はアーチャーが寄せる信頼に、さつき以上に気恥ずかしい思いを感じた。

隠しきれない照れが頬に朱を差すが、アーチャーは気付かない。

流石アーチャー、鈍感スキル保持者（笑）

「ま、まあ仕方無いわね。それに、本人が解らないなら他にバレル心配もないことだし。」

「理解してもらえて何よりだ。」

一旦話が落ち着いた時であった。アーチャーはあり得る筈のないものを感じた。

急に警戒を露にしたアーチャーに凜は驚く。

「ちょっと、どうしたのよアーチャー？」

「マスター、誰かがここに近付いてくる気配がする。」

そう、あり得る筈のないもの。それは人の気配である。

アーチャーの知る限り凜は一人暮らしの筈であり、だからこそ表情には出さないものの混乱していた。

「うわっ、やば。」

「マスター？」

「あ、うん。大丈夫よアーチャー。いや、大丈夫じゃないかも……。」

「

凜の言葉に警戒は解くが状況は未だに掴めない。
しかし、凜の態度が煮えきらないまま、気配が壊れた扉の前に到達した。

「これまた派手にやったようだな、凜。」

その言葉を吐きながら扉から現れたのは、一人の男であった。

一章 回る歯車（後書き）

注意

これはあくまでもネタです。しかも楽しいのは作者だけ（笑）

アーチャー

スキル：鈍感

レベル：E X

これは簡単に言うと『好意』に気付きにくいと言うスキルである。特に生前ハーレム、またはそれに近い状態に身を置いていたものが得やすい。

鈍感さの加減はレベルによるが、最高値のE Xでは直接好意を伝えられても気付かないと言う威力を有する。

また、このスキルを有するものは同時にたらしのスキルを持つものが殆どである。

副産物として魅了の魔術が効きにくいと言う性質も有しており、タイミングが良ければ跳ね返してしまふこともあると言う。

（ただし、これはあくまで副次的なものである）

二章 現れる差異（前書き）

しよっぱなから捏造全開です!?

因みに前回言い忘れてましたが、アーチャーの歴史はF a t e U
B W 現在のつもりです。

それにしても、沢山文章を書いたつもりでも、ページに直すとそう
は見えない罫……orz
更新停滞だけはしないよう頑張ります。

二章 現れる差異

「うわ、美味しい。凄いですね、アーチャーさん。」

「確かに、これは三人以上かもしれませんね。」

「うう、何で英霊の癖に料理ができるのよー。」

「……食事は静かにとりなさい。」

「たまにはいいではないですか、あなた。」

私は久方ぶりに料理の腕を奮っていた。腕前が衰えていなくて何よりだ。

矢張喜んで食べて貰えると言うのは作りがいが………って私は一体何をしている！！

とある理由により朝食作成時から呆然としていたアーチャーだが、漸くの事で我に返ったようである。

我を失っていても体に染み付いた行動をとるとは………ちょっと泣ける。

アーチャーの目の前にいるのはマスターである凜以外に四人だ。誰も驚くばかりの人物である。

「ハア、騒がしくてすまないな。」

「いや、私は気にしていないので貴方が謝ることはない。……遠坂時臣。」

まずは昨夜現れた男

遠坂時臣とその隣に座している女性

遠

坂葵。

アーチャーが知っている限り、遠坂時臣は第四次聖杯戦争にて命を落とした筈の人物であり、遠坂葵の方は詳しく知らないが時臣の後を追うように亡くなったと聞いた。

今回召喚されたこの世界では二人ともなぜか生きており、遠坂時臣は遠坂家の当主として存在していた。

「うーん、アーチャーさんに料理を教えてくださいませぬ……どう思う、ライダー？」

「それがサクラの楽しみであれば、好きにして構いませんよ？」

そしてもう二人　　と言うか一組　『遠坂』桜とそのサーヴァントのライダー。これまた何故か桜は養子に出されておらず、凜と真正銘の姉妹として過ごしていた。桜の髪は凜と同じ黒髪で瞳も同様に青であり、記録にある桜より明るく活発な雰囲気を感じていた。サーヴァントであるライダーは桜の側にいるのが当然であるため、桜がいる以上あまり驚くことはない。

そして、最も驚くべき事は聖杯戦争であるにも関わらず、サーヴァントが二体いて戦闘が起こっていないこと。

そして、それをこの場にいる全員（アーチャー以外）が当然と受け止めていることである。

食事を終えた頃合いを見計らい、アーチャーは切り出した。

「さて、いいかね？そろそろ説明をお願いしたいのだが。」

「そうね、ちゃんと知っていて貰わなくちゃいけないものね。」

ここで言う説明とは何の事か。それは一度昨夜に戻らなければなら

ない。

「派手にやったようだな、凜。」

そう言っただけの男は、どこか凜に似た印象を感じた。

「騒がせてご免なさい、お父様。」

凜の言葉に、薄々感じつつも驚きはあった。

そして、凜の父親がなぜ生きているのだろうかと疑問が起こる。アーチャーにとって予想もしてなかった事態に困惑するが、口を挟むことなく会話から情報収集を行おうと静かに聞く。

「それにしても、予定より早めに召喚したのだな。」

「え、早め……あれ、一時？」

凜がこの部屋の中にある時計を見ると、一時少し過ぎを示していた。どうやら、遠坂家のお家芸（うつかり）が発動してしまったようだ。

「アハ、アハハハ……あう。」

「成る程。……それで、何を召喚したんだい、凜。」
「あつそれは……」

アーチャーを見ながら答えようとしている凜を認めて、アーチャーは慌てて待ったをかけた。

「まで、マスター。」

「なに、どうしたのよ。」

「簡単にクラスを口外しようとするとは、正気か？マスター。」

「何言ってるの、その位いいじゃない。それに相手はお父様なんだし。」
「よくない。君は本当にこの聖杯戦争に勝ち抜く気はあるのか？」

「何よ、当たり前じゃない。じゃないと召喚なんて行わないわよ。」
「ならば、こちらの情報が漏れる事が死に繋がると理解できないのかね？」

24

そこで、凜は理解できない言葉を聞いたとばかりの表情をした。
音にするなら、アンタ、何解んない事言ってるの？’と言う感じだ。
アーチャーが視線をずらして見てみれば、凜の父親も同様な表情をしていた。

その反応に続く言葉を失い、暫し静寂の時が流れた。
誰も言葉を発さないでいると、新たな乱入者が訪れた。

「お父様、姉さん。どうしたんですか？」

「サクラ、あまり心配せずともいいと思いますよ。それより、早く休んでください。明日も早いのでしょっ？」

あまりの展開に、流石のアーチャーも構えることを忘れ、彼女達が入ってくるのを傍観してしまった。

「おや、キチンと召喚ができたみたいですね。」

「ちょっと、どう言う意味よ。ライダー。」

「いえいえ。深い意味などありませんよ?」

敵サーヴァントだと判るもの相手にほのぼの(?)と会話を交わす凜。

アーチャーは耐えきれずに頭を抱えてしまった。

「(一体何だと言うのだ、これは……………。なぜ桜とライダーがここにいる。いや、そもそも何故遠坂時臣が生きているのだ?)」

自分の知る聖杯戦争とのあまりの違いに思わず眉間に皺が寄る。そんなアーチャーに気付いたライダーは声をかけた。

「どうしたのです?ええと…………」

「…………アーチャー、だ。」

クラス名を告げるかどうか迷うアーチャーだったが目の前にいるライダーが全く戦闘の意思を見せていないこと、そして凜が簡単に告げようとしていた事から問題ないと判断し告げることにした。

要するに、開き直った。

「成る程。リンはアーチャーを呼び出したのですね。ああ、私はライダーです。」

それでアーチャー、先程から何かから険しい顔ですがどうしたのですか？」

「いやなに、これが本当に聖杯戦争なのか判断がつきかねてな。」

「何か可笑しいことでも？基本的な知識は聖杯から送られてくる筈ですが。」

その言葉に自分が知っている聖杯戦争の知識しかなく、ここで与えられる筈の情報が無いことに気づく。

言われるまで気付かなかったとは思っている以上に混乱していたのだな、と自嘲の笑みを思わず浮かべる。

「ああ、それでか。」

「ふむ。その反応からすると、何も情報が送られてこなかった、と言った所でしょうか。その為本当に聖杯戦争なのか理解が出来ないと。」

「ああ、残念ながらその通りだ。全く困ったマスターだな。」

二人は同時に話をしている（恐らくは説教？）時臣と凜へと視線を向ける。

二人の側で会話を聞いていた桜は、苦笑いを浮かべて父親と姉を呼んだ。

「どうしたの、桜？」
「何かあったのか？」

凜は解放されて少し嬉しそうに、時臣は単純に疑問を浮かべて尋ねる。

「はい。と言っても私でなくアーチャーさんなんですが。どうも聖杯から知識が流れてこなかったらしく、状況がよく理解できないらしいんです。」

凜はあからさまに不味い、と言う表情をした。

「……すまないなアーチャー、だったな。」
「ああ。」

「私は遠坂時臣と言う。暫くよろしく頼む。
それで、本来ならすぐに説明をしたいとのだが、流石に夜も遅い。説明は明日で構わないかな。」

「私はそれで問題ない。」
「ありがたい。では、私は先に退室させて貰う。
……凜、この部屋は片付けておくように。」

少々厳しい目をしつつもそれ以上は何も言わず退室した時臣。それに続くように『お休みなさい、姉さん』と桜も自分の部屋に戻っていった。

「…どうした、マスター。」

残された凜は恨みがましくアーチャーを見つめていた。

「別になんでもないわよ。」

「ふむ、そうか。」

余計な発言をすれば危険だと察し、なるべく少ない返答を心掛けるアーチャー。

そんなアーチャーを横目に、何やら思い付いたらしく笑みを浮かべる凜。

それに嫌な予感しか覚えないが、逃げれないアーチャーはただその場で待つ。

「アーチャー、最初の仕事だけど。」

「……………なにかね。」

沈黙の長さがアーチャーの心理を如実に表している。

そんなアーチャーの心理を知ってか知らずか（確実に前者だろうが）、悪魔の言葉を続ける。

「この部屋、片付けといて。」

「……………私の記憶に間違いがなければ、それは君に与えられた仕事で

はなかったか？」

無駄だと理解しつつも反論するアーチャー。

しかし、どこまでいっても遠坂凜は『遠坂凜』であった。

「ええ。でもアンタは私のサーヴァントでしょ？マスターとサーヴァントは一心同体、つまりあんたがやったことは私がやったことも同然って訳。理解した？」

「その理論は理解できなくもないが、君はサーヴァントを一体何だと…」

「使い魔でしょ？ま、一寸生意気だけど。あっそうそう、この事お父様に言ったら承知しないわよ。」

と、右手の令呪をうつすら光らせて脅す。

やっぱり変わらないな、と遠い目をしながら思っても、恐らくはいつものうっかりで自ら檻ひし襷を出すだろうと、部屋から出ようとすると凜を見つめ例の台詞を告げたのであった。

「……了解した。地獄に落ちろ、マスター。」

その後、一人で一晩かけ部屋を修復した後、ちょうどよい時間だからと朝食を作るべくキッチンへと移動した。

そう時間をおかず人の気配が現れたが、桜だろうと特に注意せずにした。

しかし、現れたのは妙齡の女性で、どこことなく凜や桜に似かよった

顔立ちをしていた。

「あら、どなたかしら？」

「むっ、失礼した。勝手に使わせてもらっている。私はアーチャー、昨夜凜に召喚されたサーヴァントだ。」

質問には冷静に返すも、アーチャーは見覚えのない人物に心の中では首をかしげていた。

「あら、凜の……私は遠坂葵、凜の母親です。よろしくお願いしますね。」

ここでアーチャーの思考回路は完全にフリーズしたと断言していい。いつものアーチャーなら面影もありこの家にいる以上、その可能性を考えていた筈である。

しかしながら、召喚直後の困惑と以前の世界では一言も耳にしない情報であったため、無意識の内に除外していたのだろう。

イチイチ困惑を処理していたらきりがないと判断を下したアーチャーは、説明を受けるまで深く考えることを放棄し朝食作りへと没頭した。

他人は俗にそれを現実逃避と言う。

アーチャーが朝食を作っていることを確認した葵は手伝おうとしたがやんわりと断られ、アーチャーが淹れた紅茶を飲みながらテーブルからキッチンを観察していた。

葵の目から見てもアーチャーの手際はとてもよく、魔術や英霊と言ったものに詳しくない葵は「英雄さんは何でも出来るのね」と呑気に考えていた。

…アーチャーが特別なんだよ、うん。

こうしている内に続々と起き出し、冒頭の部分に戻ると言うわけである。

食器を片付けた後、時臣・凜・桜・ライダー・アーチャーの五人は再びテーブルへとついた。因みに、葵は家事をする為ここにはいない。

本来なら登校の時間だが、凜は召喚翌日の為念を見て休みをとっている。

桜は学校へいく予定だったが、アーチャーに情報がないと言うことで同じサーヴァントがいた方が良さだろうと思いい休みをとったのだ。

まず、口を開いたのは凜であった。

「取りあえずは最初の確認だけど、これが聖杯戦争の召喚だったこととは理解してるのよね。」

「ああ。聖杯を巡り七人のマスターとそのサーヴァントによって争われるもの、だろう。」

「ええ、そうよ。七組の主従が己の総てをかけて激突するの。」

そう、そこはアーチャーが知るものと全く変わっていない。
だからこそ昨夜の『死』と言う単語に、魔術師である彼等が怪訝な
表情を浮かべたことが理解できなかった。

「そう、聖杯戦争とは聖杯を巡る戦いでもあり、魔術師の力を示す
技量比べでもあるのだ。」

「な、技量比べだと！！殺し合いではないのか！？」

思わず叫ぶアーチャー。保っていたポーカーフェイスが崩れ、驚愕
を露にする。

アーチャーの言った内容に英霊であるライダーはそれなりに理解の
色を示すが、『人間』はその言葉にこそ驚いた。

「そんなわけないだろう。現代でその様な血生臭い事とても出来は
しない。」

「だ、だが聖杯とはどんな望みも叶えるもの。それを手に入れよう
とするなら必然的にそうなる筈だろう？現実に、私の知る聖杯戦争
はそう言うものであったぞ。」

「そうはなりませんよ、アーチャー。」

聖杯からの知識を有するライダーが言った。

その内容は、アーチャーを更に驚かせるに十分な威力を有していた。

「確かに聖杯を巡る戦いは『そう言うもの』ですが、この土地の聖

杯戦争に限っては絶対に起こり得ません。

何故なら聖杯がそれを許さないからです。聖杯は純粹に自分を得るに相応しい者を望んでいます。と言っても、生きているわけではないので正確には違うかもしれませんが。

故に、聖杯から与えられた決まりを守らないものは自ら排除を行うようで、だからこそ聖杯を望むものは其を守ると言うわけです。」

アーチャーは言葉も出なかった。だが、生前から鍛われ続けていた思考回路は直ぐに現状を把握した。

ため息を一つつくことで気持ちを切り替え、表情を元に戻した。

「現状は理解した。つまり、殺しはご法度と言うことでいいのだから？」

「ええ。ですが宝具の効果上仕方ないものや不可抗力のものは除外されるそうですよ。」

これまた何とも都合のいい聖杯戦争だな、とアーチャーは思った。

そして、もしこの聖杯戦争が普通の聖杯戦争であれば、『自分』が生まれる事もなかったのだろうかといついつい考え……

「そう言えばアーチャー。自分の知るっていつてたけど、記憶が戻ったの？」

凜の声に遮られた。そして反射的に答えを返す。

「残念ながらまだだ。大まかな知識ならば存在するが、自分の素性の事となるとサッパリだ。」

「……姉さん。」

「……リン。」

凜とアーチャーのやり取りを聞き、アーチャーが知識だけでなく記憶さえも定かではないと知った桜とライダーは、何とも言えない視線を凜に送っていた。

そんな視線を向けられても文句も言えない凜居心地悪そうに身じろぎをし、視線を微妙にはずしていた。

「アーチャー。貴方は一応敵ですが、今ばかりは心底同情します。」

「はは……気持ちだけありがたいたく受け取っておこう。」

真剣な同情の視線に、こればかりは罪悪感により目が会わせられないアーチャーだった。

「では、説明の続きといこう。サーヴァント同士の戦いではどちらかが敗けを宣言した瞬間、その主従は聖杯受諾の資格が取り上げられる。」

「どういう原理かは知らぬが、聖杯はすぐその事が解るらしい。」

「ふむ。私達は相手が敗退したもの達かどうか、どうやって判断できるのかね？」

「それは令呪で確認することができる。敗退したものの令呪は、本来の令呪から色が抜けた状態となる為それで判断するのだ。」

色が抜けるのは聖杯が絶対的命令権とは違う令呪の魔力を回収する

からだとされている。」

それは分かりやすい、とアーチャーは思った。

それに、サーヴァントの魔力ではなく令呪の魔力ときた。確かに令呪による命令は通常では不可能な行動を起こすことを可能にさせるが、サーヴァントと言う魔力以上を持つとは思えない。と考えたが、そのサーヴァントに力を与えることができる以上サーヴァントよりも多い魔力を持ちうるのではないか、と言う事に思い至った。

なんにせよ、基本概念が違う以上確信を持つことは出来ず、そんなものかと納得する事にした。

「まあ、重要なのであればこのくらいであろう。もしかしたら至らないところもあるかもしれぬが、その場合は私たちよりライダーに聞いた方が早いだろう。」

なに、家の中では戦闘禁止と言う決まりにしているね。アーチャーにもそこは徹底して欲しい。戦闘をするなら外で、とな。」

「了解した。異存はない。」

そうして、アーチャーに一応の知識を与えた事でお開きとなった。皆が散り散りになる中、時臣が凜に一つ告げた。

「ああ、そうだ凜。アーチャーに町を案内してあげたらどうだ。」

「はい、そうですね。アーチャー、今から出掛けるから準備して。」

「ふむ。私はいつでもいいが。」

「何いつてるのよ、そんな格好じゃただのコスプレよ。着替えなきゃこっちが恥ずかしいじゃない。」

的はずれな指摘にアーチャーは息を吐く。今日一日でどれぐらいのめ息をついたのだろう。

因みに時臣は告げるだけ告げてさっさと離れていった。

「マスター、私はサーヴァントだ。」

「だから何よ。」

「……サーヴァントは元々霊体で、マスターからの魔力供給を受けて仮の肉体を与えられてるに過ぎん。」

「えっと、つまり……姿を消せるってことか。」

「やれやれ。やっと理解してくれたかね、マスター。召喚の手並みといい、これは拍手でも送るべきか？」

いつもの皮肉な口調に戻るアーチャー。

それは懐かしさも後押ししていた。

ライダーが目の前で霊体化したことがなかったのでつい忘れていた凜は、恥ずかしさを隠すべく大声を出す。

「うっさいわね。霊体になれるんなら今すぐ行くわよー!!」

「了解………と言いたところだが、忘れてることはないかね、マスター？」

ドアに手をかけようとしていた時に凜は呼び止められた。

忘れてること？と首をかしげるが何も思い浮かばない。忘れ物などない筈であり、訝しげな表情を浮かべる。

それをみたアーチャーは、やはりかと思っ言葉を続ける。

「私たちは契約するに当たり重要な事をまだしていないだろう。」

「重要なこと？……あ、名前……」

契約において必要な事とは何だろうと考えて、アーチャーが未だに自分の事を「マスター」とか「君」としか言っていないことに漸く気づいた。

「そうだ。真名を明かしていない私が言えることではないが、どうやら忘れていたようなのでな。言わせて貰った。」

凜は名前だけなら昨夜から幾度も聞いている筈なのに、直接の交換を言い出したアーチャーに対して頬が緩む思いだった。

確かに名の交換は重要な方に部類されるが、それでも絶対にしなければいけないと言うわけでもない。基本的に利害の一致で結ばれる主従関係が多いからだ。

なので、名の交換をアーチャーが言い出した事に凜はマスターとして認められていること、信頼されていると言うことを実感した。

「それで、マスターの名は？」

「凜　遠坂凜よ、アーチャー。私の事は、好きに呼んで構わないわ。」

「では凜と。ああ、この響きは実に君に似合っている。」

「あ、当たり前でしょ。お父様達がつけてくれたんだから。」

凜は思わず赤面し、怒鳴るように返した。

アーチャーはクククと笑ってそんな凜の反応を楽しんでいた。

「凜。」

「なによ。」

「アーチャーの名にかけて誓おう。我が弓は汝と共にあり、汝の運命は私と共にある。ここに契約は完了した。」

全身全霊をもって君のために戦おう。」

騎士の礼を取り忠誠を誓う騎士ナイトの様にアーチャーは跪く。

その表情はどこまでも真面目で、だからこそそれを見た凜は確信した。アーチャーが「天然」だと言うことを。

「さて、ここで最後ね。」

一通り町中を回ったアーチャー主従は、新都の高いビルの上に行った。

「やれやれ、散々人を引つ張り回してくれたな。初めからここに来ればいいものを。」

「何言ってるの。実際の地理は見回らなきゃ解らないじゃない。」

「そうでもないさ。弓兵は目が良くないとねれないからな。かなり遠くまで見ることは出来るし、町中ぐらいならここからでも十分把握できる。」

へえ、と感心した声をあげる凜。視線の先にいるアーチャーは、町を記憶してるのかアチコチに視線が向いている。

「じゃあ、アーチャー。遠坂邸みえる？」

「むっ、流石に隣町は無理だ。橋までならタイトルの数まで数えることができるが。」

その何でもないことのように言われた内容に驚愕した。

「嘘、橋のタイトルって新都の!？」

凜は改めて英霊と言う存在の凄さを認識した。

アーチャーの真名を知らずどれくらいの戦闘能力を有するかわからない凜だが、それでもこの聖杯戦争に負ける気はしなかった。

そして、アーチャーが寄せる信頼に答える努力をしようと空を見上げ改めて決意した。

空には次第に薄闇が広がっていつており、星が瞬き出していた。

「さてと、大分日も暮れてきたし家に帰るわよ、アーチャー。」
「そうだな。ではいこうか、凜。」

こうして、新たな聖杯戦争が開始された。

新たに回り始めた運命が導く先に何が存在するのか………それを知るものは、まだ誰もいない。

二章 現れる差異（後書き）

現在ゲームを買ってプレイしております。が、暇を見てなのでなかなか進まない（泣）

しかし、アーチャーがかっこ可愛い。皮肉げな笑みとか一寸驚いた顔とか呆れた顔とか本当にもう何でこんなに可愛いんだよアーチャーはアーチャーアーチャーハアハアは（ry

失礼、興奮で一寸頭がやられてしまったようで……え？いつもだろって？ハハハハハハハ、大正解（笑）
こんな自分でスミマセン

三章 初めての再戦（前書き）

..... やっちまったぜ ！？

今回はキャラ視点にチャレンジしたのですが、やってしまった感が
ブンブンします。

やっぱり所々程度にしていた方がいいです...よ、ねえ？

次は普通に戻して書きます。はい。

まあ、今回だけの暴走と言っことで（汗）

三章 初めての再戦

私と凜は今、学校に向かって歩いている。まあ、私は霊体化しての行動ではあるがな。

ここでもやはり学校を休むつもりはないようだ。聖杯戦争自体がすでに違うため、特に否を言う必要もないがな。

私は念のため警戒も含めて、周囲を注意深く観察した。

すぐ近くにいるライダー以外にサーヴァントの気配は感じられない。桜が間桐にいない事でどんな事が起こるかは予想できんが、そこまで酷い事にならないだろうと判断する。

私も甘くなつたものだ。ここまで楽観的に見るようになるとは。

再び回りを見渡せば、自分の記憶の底を擦るような光景が広がっている。

と、そこで私は見覚えのある赤を見つけ、心臓の音が一瞬跳ね上がった。

凜もその人物を見付けたようで、相手に声をかけた。

「あつ、士郎じゃない。おはよう。」

「遠坂、お早う。今日は早いんだな、珍しい。」

「煩いわね。生意気なこと言うじゃない、士郎の癖に。」

「って、うわ。悪かったから。殴ることないだろ、遠坂。」

どうやらヤツとは旧知の仲らしい。会話の中からも気安げな感情が読み取れる。

私の胸中は複雑な感情が渦巻いている。例え答えを得ていようと、

このときの自分は私にとって忌々しい存在と言うことに変わりはない。今でこそ殺そうなどとは思わないが、進んで関わり合いになりたいとも思わない。一度得た感情はそう簡単に払拭できるものでもないし、な。

そこに、横から別の声がかかった。

「何してんのさ、衛宮に遠坂。」

「あつ、お早う慎二。」

「あら、何よ。あんたには関係ないでしょ。」

……お早う。」

「お早う。ったく、朝っぱらから騒がしいな。」

慎二とも仲がいいのだな。やはりと言うか、刺々しさが全くない分別人を見ている気分だ。

「喧嘩するなら別のところでやってくれないかい？一緒にいる僕の評判まで下がってしまうからね。」

いや、嫌味だけは変わらないか。まあ、其でこそ慎二らしいのだが。何だかんだ言いつつ、三人は揃って校舎に入っていた。

「そう言えば遠坂、サーヴァント召喚したのか？」

「あら、勿論よ。兆しが現れたんだから参加する以外にないでしょ？」

「羨ましいね。僕には元から無理だからね。」

…解っていたが、こんなところで聖杯戦争の話や堂々とするのか。防音の魔術を行使してはいるようだが、やはり慣れんな。

「遠坂はどんなサーヴァントを召喚したんだい？」

「流石にあんた達には言えないわよ。かといって、隠すつもりがあるわけでもないから知りたいなら自分で調べなさい。」

うむ、流石に家族以外にはそう簡単に言う訳ではないか。

だが、自分で調べなさいとは、余計な首を突っ込めば殺されか……と、そう言う事がない世界だったな。

やれやれ、暫くは苦勞しそうだな。

「ねえ。一応聞いてくけど、士郎には兆し現れたの？」

ドキリとした。

そう、私は確か昨日の朝兆しが現れた筈なのだ。

この衛宮士郎の行動をじつと見つめる。

「まさか、現れるわけないだろ。」

そう言って、衛宮士郎は自分の両手を凜に見せた。

確かに、令呪の兆しはチラリとも現れていない。

私は安堵とも落胆とも取れる感情が胸に現れるのを感じた。

「そりゃそうよね。何たって半人前なんだし。」

「煩いな。これでも鍛練はちゃんとしてるんだぞ。」

「半人前だからって、聖杯にはそう言う事関係ないんじゃないか？」

「そうだけと。より相応しい魔術師がいるんだから、そっちに行くのが普通じゃないかなって思っただけよ。」

「って、慎二まで半人前って言うなよ。」

「ははは、『強化』ぐらいしか出来ないんだからしょうがないだろ、衛宮。」

私は変わらず、静かに彼らの会話を聞いていたが、凜から念話で声をかけられた。

どんな情報を得ても努めて平静でいられるようにはしていたが、どうやら私の動揺がラインを通じて凜に伝わってしまったようだ。

「（アーチャー、どうしたの？なんかさっきから動揺が流れてきているけど。）」

【何でもない、といたいたいところだが……そうだな、私の知る魔術師と、ここ、の魔術師というものが異なっていてね。故に少し困惑していただけだ。】

「（へえ、違うってどんな風に違うの？）」

【……なに、大した違いではない。凜が気にするような事はないぞ。】

「（ぶ、ん、それならまあいいわ。）」

そうだ、ここの魔術師にあちらの有り様など教えなくともいい。
血を流す事のない魔術師の在り方、それを態々壊すような真似など
出来よう筈もない。

そうこうしているうちに教室の前まで辿り着いたようだ。

「それではまた後程。失礼しますわ、衛宮君、間桐君。」

「ああ、じゃあな遠坂。」

「ふん、相変わらずだね。遠坂は。」

防音の魔術を解いた途端、優等生の猫を被る凜。……流石だな。

衛宮士郎も慎二も呆れたような表情をするのみで、さっさと己の教室へ向かった。

「（アーチャー。）」

【なんだ、凜。】

「（授業中の事なんだけど、一緒にいても退屈だと思っから自由に動いてていいわよ。）」

【むっ、いいのか？】

「（ええ、ただし学校の敷地内にいること。後、サーヴァントを見つけても昼間は戦闘をしないから注意してよね。）」

【それは承知している。では、お言葉に甘えて少し見学させて貰うとしよう。】

「（そ、いつてらっしやい。）」

「おはようございます」と言いながら教室に入っていく凜を一瞥し、私はその場から離れる。

さて、ああは言ったもののこれといって見回る必要も場所もないな。どうするか……………取り敢えず屋上に向かうか。

「こんな、町だったか……………」

屋上にある給水塔の上に立ち、私は冬木市を見ていた。

学校から見る町はどこか記憶とは違って見えた。

……………感傷に、浸っているのかもしれないな。

飽きずに眺めていると大分時間が経過してしまったようだ。時刻は昼になる直前を示していた。

さて、では凜の元に戻るとするか。‘あの事’も報告しなければならぬ。ならないしな。

凜の元に戻ると、凜は友人達と弁当を囲んでいた。報告は食べ終わるまで待つとしよう。

s i d e 凜

私は授業中アーチャーについて考えていた。（勿論、授業を聞き逃すなんてへまはしないわ。）

アイツは記憶喪失（原因の一部が私になくもないけど……）で真名も宝具も判らないくせに、自意識過剰で自信満々だし。なのに何処と無く頼りがいが……って何言ってるんの、私は。

あいつのどこが頼りがいがあんのよ!?

あんな変な奴。

「変っていえば、朝のアイツ。少し可笑しかったわね。」

私は思わず小声で呟いていた。

朝士郎達と会話をしていた時、アイツ何か挙動不審（と言っても見えないんだけどね）だったのを思い出した。

それに、自分の知る魔術師と違うとか言ってたし。

でもすぐに元に戻って、気にする事無いって言ってたしっか。

どうせ大した差じゃないだろうし、情報がないから目立つちゃっただけ……やっぱ、ちゃんと謝っていた方がいいかも。

お昼を友人達と食べてるときにアーチャーが帰ってきた。

一寸早いかもって思ったけど、サーヴァント何だしそんなもんかしらね。

何かアーチャーの奴言いたいことがあるらしく、私は教室を出て人気がない所へ行った。

「それで、どうしたのアーチャー？なんか校内に異常でもあった？」

アーチャーの落ち着き様からそんな事はないと理解しながら私は言った。

「いや、異常は何処にもなかった。ただ、一寸したお誘いはあったがな。」

「お誘い？アーチャーは霊体化してたのよね…て事はサーヴァント。まさか、校内に知らないマスターが！？」

「いや、誘いは校外からだ。一度屋上に出たとき、ご丁寧に殺気をぶつけてきてな。」

すぐに霧散したが、恐らく放課後辺りに再び現れるだろうな。」

私もその意見に賛成だ。

アーチャーが校内にいたことで、マスターが学校関係者である事はばれたと見た方がいい。

余程の事がなければ途中で帰ったりしないし、聖杯戦争に参加しているなら逃げるなんて選択肢は端から存在しない。

「アーチャー……」

「何かね。」

「放課後、迎え撃つわよ。」

「ふっ。承知した、マスター。」

アーチャーはニヤリと笑って私の言葉に同意した。

ふふふふ、やってやろうじゃない。この遠坂凛^{わたし}に宣戦布告したこと、後悔させてあげるわ。

side out

午後の授業中、私はずっと凛のそばで控えていた。

襲撃を懸念しての為ではない。

このタイミングであれば、相手はきつとヤツだ。‘ヤツ’なら寧ろ、正面からぶつかってくるタイプだしな。

何があるにしろ、すぐに動けるに越したことはない、と言うわけだ。

時間が進むにつれ、感情が高ぶっていくのが解る。

再びヤツと戦えるということ、それがどうしようもなく嬉しい。

ただ、ヤツが現時点において全力で戦えるかどうかは気になるが、此ばかりは考えていても仕方ない。

さて、今度はどちらが勝つかない？

放課後

ホームルームも終わり、教室にいる殆どの人間が帰宅を始めた。私は凜にこの後の行動を尋ねる。
さてさて、どんな返答が来るかな？

【凜、この後はどうするのだ？】

「（そうね…とりあえず図書室に行こうかしら。」

【むっ、図書室？】

「（ええ、‘優等生’の遠坂凜が図書室に居れば遅くなくても怪しまれないでしょ？）」

【成る程。だが、対策などはどうするのだ。】

「（対策う？そんなの必要ないわよ。真っ正面から受けて立ってやるうじゃない。）」

ククク、我がマスターはずいぶんと血気盛んらしい。

「（何よ、何か文句あるわけ？）」

【クク。いや、ないな。マスターは君だ、その意に従うさ。】

「（ふん、どうせ魔術師らしくないって言いたいでしょ。）」

【いいや、君はそのままが一番強いだろう。そのままの君が好ましい。】

「（あああ、当たり前じゃない。私は遠坂凜なのよ。）」「

急にどもってどうしたのだろうか。

戦闘に支障を来さなければ良いのだが。

「遠坂さん、一緒に帰ろ。」

「申し訳ありません。今日は調べたい事がありまして、今から図書室に向かうところですの。」

「そっか、残念。じゃあ、また明日ね。」

「ええ、さようなら。また明日。」

うむ、会話を聞いている限り大丈夫そうだな。

友人と別れ、図書室へと向かう凜の背後について移動する。

図書室には人っ子一人いなかった。

それなりに蔵書は揃っているのだが……そういえば、自分も生前は使用したことは余りなかったな。

「さて、時間までここで暇を潰しましょうか。」

「それはいいが、いつまでいるつもりなのだ？」

人が全くいないことから問題ないと判断し、現界して凜に質問した。

「日が暮れるまでよ。そこまで待てば人は完全にいなくなるでしょ

うから。

相手も一般人に対する秘匿があるから、そう簡単に仕掛けてこないでしょうし。」

「そうか。」

だが、私はどうやって時間を潰していよう。

ここに仕掛けてこないのが解ってる以上警戒の必要はない、かといつて鍛練などはできん。

「アーチャー、アンタも本読んでれば？知らないことだらけでしょうし。ここで少しでも現代の情報を得ておきなさい。」

それしかないか。英霊は過去の人物と言う思い込みが強いしな。

辺りも大分暗くなり魔術師が活動するに相応しい時刻になった。校舎内に人の気配は感じられない。

「凜。」

「ええ、もういい頃合いね。

行くわよ、アーチャー。」

図書室を出て、私達は校庭へと向かう。

流石の凜も緊張しているようだ。表情が少し固い。

無理もない、これから初めての戦闘を行うのだ。だが、例え死の危険がないとはいえ、そちらの方がいいだろう。

玄関で靴を履き替え、外へ出る。

その途端、チリチリと肌を焼くモノがあった。

「ふむ、どうやら待たせてしまったようだな。」

「そうみたいね。」

校門へと目をやれば、人影が二つ。

あちらも気付いたのか、こっちに向かつて歩を進める。

そして、校庭の半ば近くで互いに足を止める。

目の前にいるのは予想に違わない青い槍兵、そして見覚えの無い男装の麗人としてしか表現できない人物。

いずれも戦意に満ちた目をしていた。

「お待ち致しました。私はこの地のセカンドオーナーたる遠坂時臣の娘、遠坂凜といいます。」

「これはご丁寧に、私の名はバゼット・フラガ・マクレミッツ。協会より派遣された封印指定の執行者です。」

バゼット……確か言峰に令呪を奪われたランサーの元マスターがそんな名だったな。

ここではその事件は起きなかったのか。となると、初めから全力でくるな。

「バゼット、挨拶はそんなくらいでいいだろ。俺たちや、戦いに来たんだ。

さっさとやろうぜ。なあ、その兄さんよ。」

そう言っつて、ランサーは獰猛な笑みを浮かべ、その赤い瞳で私を射抜く。

だが、私はそれに答えず凜の側でただ佇む。ランサーは乗ってこない私に些か気分を害したようで、面白くなさそうな表情に変わった。

「確かにそうですが。全く、あなたって人は……（ハア）」

「そうね、お喋りをする為に聖杯戦争に参加した訳じゃないしね。」

そして、全員が闘気を高め出す。

「おっと、まずはサーヴァントだけでやらねえか？

せっかくの戦闘なんだ、俺らだけで軽く手合わせといこつや。」

くくく、成る程。ランサーらしい言葉だ。

だが、マスターの意向を無視するわけにもいかん。

私はランサーから注意は逸らさず、横目で凜を見た。

「……いいわ。アーチャー、貴方の力ここで見せて。」

言葉を受け、私は一步前が出る。

ランサーは己の武器をその手に呼び出す。それは血のように緋い槍。私も自己に埋没する使い馴れた武器である短剣を右手に呼び出した瞬間、ランサーが動いた。

「ヒュッ。」

「ハッ。」

ガキン

互いの武器が甲高い音を鳴らす。ランサーはすぐに引き、構えたままの格好で口を開く。

「流石にこれくらいじゃびくともしねえか。そこなくっちゃな。」

「成る程、君はランサーか。」

「そう言うテムエはセイバー…って柄じゃねえな。」

て事はアーチャーか。いいぜ、自分の獲物を出しな。そのくらいは待っててやるよ。」

ランサーの言葉に構わず、今度は自分から相手に向かって行った。一瞬虚を付かれた表情をしたランサーだが、すぐに引き締め自分の武器を振るう。

「アーチャーが剣で戦いを挑むか!!」

鋭い槍の攻撃が私を襲う。知っているものとは違い、速さも重さも上をいく。

だが、捌けない訳ではない。

しかし、少しでも気を抜くことは許されない。そうなればやられるのは此方なのだから。

記録の中にあるランサーの攻撃パターンと今得ている情報。それらを『心眼（真）』で分析し、槍を逸らし・弾き・防ぎ・いなす。

まさか長時間持つとは思わなかったのだろう。時間の経過と共に、ランサーが浮かべていた余裕の表情が消えていった。

それに伴い攻撃も鋭くなり、徐々に捌くのが難しくなる。

そして、とうとう私の手から短剣が弾き飛ばされる。

「たわけ。」

戦闘力を削ぐことが目的の槍が私の肩口を狙う。

だが、其が肩を貫こうとする直前で、‘左手’に持った短剣で防ぐ。

「なに!?!ちいつ、双剣使いか!!」

そして、私は‘両手’に携えた夫婦剣《干将・莫耶》を用いて戦闘を続行する。

ランサーももう余裕の表情は見せず、身体中から獣の如き闘気……いや、殺気が立ち上る。

戦闘は再び先程と同じ膠着状態に陥る。

唯一違うのは、私の両手に剣が握られていることのみ。

私の手から幾度も剣が弾き飛ばされ、壊される。だが、その都度『投影』し新たな干将莫耶を手の内に呼び出す。

このギリギリの戦闘において『投影』の僅かなタイムラグさえも許されないが、生前から使い続けているこの夫婦剣ならば意識せずとも『ある』と思うだけで準備されるためタイムラグなど存在しない。だからこそ、剣と槍の乱舞は未だに続いているのだ。

膠着状態に痺れを切らしたのか、ランサーは大きく槍を振るって私から距離をとった。

「27、それだけ弾いてもまだあるとはな。」

ランサーの言葉には不機嫌ながらも、その中に隠し切れない歓喜の音が潜んでいた。

「双剣使いの弓兵なんぞ聞いたことねえ。いいぜ、名前を聞いてやる。テメエ、何処の英雄だ……。」

「そう言う君は解りやすいな。ランサーのクラスは速さに優れた英雄が選ばれると聞くが、君はその中でも選りすぐりだ。英霊の中でも三人くらいしかいない。」

その中でも獣のごとき俊敏さと言えば、恐らく一人……。」

「ほう。よく言った。」

ランサーの雰囲気ガラリと変わる。

今までも全力を出していたことに違いはないだろうが、今のランサーの目は正真正銘倒すべき敵として私の事を見ていた。

「バゼット、こつからは本気でいけど。準備はいいか。」

「勿論です。ランサー。」

ランサーのマスターは手にグローブを嵌めながら応えた。

私も凜に声をかける。

「凜。君の方はどうだね。」

「いいに決まってるじゃない。絶対に勝つわよ、アーチャー。」

「無論だ。」

今度はマスターも含めて相対する。

まず動くのは、やはりサーヴァントである私達。

先程は突くばかりだった槍捌きだったが、今度は払いやフェイントも交えての戦闘となる。

更には死角からもランサーのマスターの攻撃が入る。

流石と言つか：只の拳での攻撃の筈なのだが、その攻撃力はサーヴァントに匹敵するほどだった。

二人分の攻撃をいなし続ける。不利な戦闘など慣れすぎるほど常の状態であったため、この程度では決定打を受けるへまなどしない。それにしても、何時までたっても凜からの援護が来ないのだがどうしたのだろうか。

「オラオラ、どうしたアーチャー。一人で随分と粘るじゃねえか。」
「ちっ。凜、何をしている!？」

私は怒鳴るように凜に向かって叫んだ。
しかし、凜からの返答はハッキリしないものだった。それに僅かながら嫌な予感を覚える。

私は攻撃をいなし続けながらも、更に凜へと声をかける。

「凜……………まさか、とは思いが…………。」
「ゴメン…アーチャー……………宝石、忘れちゃったみたい。」

戦闘の手を休めることなく、私は思いっきり顔を引き攣らせてしまった。

ウツカリか!? 遠坂家特有のウツカリなのか!? 何もここでそれを発揮しなくてもいいだろう!!

声に出さなくとも、まごごう事なき私の本音だ。

「君は、一体、何をやっているんだ!？」

「じ、準備はちゃんとしたのよ!……只、鞆に入れ忘れただけで。」

だから、援護したくても出来なかったのよ。」

ああ、そうだな。君はそう言う人間だったな。だが、宝石だけが君が持つ攻撃手段と言うわけではあるまい。そもそも、君には……

「ガンドがあるだろう!?自分の持つものすら忘れたのかね、君は。」

「……………ああ(ポム)」

呑気に手を叩いているが、そんな暇があれば援護の一つでもしてほしいのだが。

漸く凜の援護も貰え、押され気味だった形勢をイーブンへと押し戻した。先程のやり取りで少し気を削がれた風だったランサーとそのマスターだが、形勢を戻されたことで覇気が戻った。そのままいれば楽だったものを。

状況を確認したランサーのマスターは接近戦を苦手と見たのか、ガンドで応戦する凜の元へ向かいその拳で攻撃した。だが、凜も負けてはおらずヒラリとその攻撃をかわす。

凜の事は心配だが、体術を修めているだろう凜ならばそう簡単にやられないだろうと思ひ直す。

まあ、目の前の相手がいかせてくれるとも思えんしな。

「バゼットとさしでやりあうことになるたあ、あの嬢ちゃんも可哀想だな。」

「ふっ、それはどうか？凜だとして体術は鍛えている。」

「そう簡単に決着が着くとは思わないことだな。」

「…自分の獲物（宝石・魔術）を忘れちまうような嬢ちゃんがか？」

「……それは言わないでくれ。」

戦闘をやめ思わずと言った風に凜を指差し言葉をこぼすランサー。その指摘に頭が痛くなる思いだが、事実なだけに言い返すことはできん。

ここで2対2に移行したはずの戦いは、再び一対一への戦いへと戻った。

三章 初めての再戦（後書き）

来ました、兄貴。

私はアーチャーの次にランサーが好きみたいです。（というか槍弓が）危険人物

でも、書けるほどの文才はないのでこの小説では絶対に

出ませんけどね。

書けるからといって書くとも言えませんが。

うん。まあ、相変わらず頭が腐ってるってことで。

四章 憧れの顕在（前書き）

自分の文章力の限界を理解した！？

四章 憧れの顕在

side 凜&バゼット

バゼットの拳が次々に凜を襲う。
凜はそれを避け続ける。

バゼットに比べれば力も体力も劣る凜だが、身軽さだけは負けないとばかりに動き回る。
だが、只動くのではなく、無駄に体力を使わないよう最低限の行動だけをとる。

「接近戦はできないと思ってましたが、まだまだ見方が甘かったようですね。」

要精進と言った所でしようか。」
「冗談はやめてくれるかしら。これ以上鍛えるなんて、生きたまま英霊にでもなるつもり？」

凜の軽口にそれもいいかもしれませんが、と軽くバゼットは受け流した。

降り下ろされたバゼットの拳を凜はクルリと円を描くように避け、かわされたバゼットの拳は校庭の土を抉った。

それを見た凜は「本当に冗談じゃないわよ」と思った。
マトモに受ければ骨の一本や二本ではすまないだろう。最悪、内蔵破裂が起きるかもしれない。

そう凜に思わせるだけの力がバゼットにはあった。
凜も自分に『強化』をかけて対応するが、宝石を使う本来のスタイルには程遠い為押されていた。

「それにしても、口で言うほど参ってるようには見えませんが。」
「あら、当たり前よ。遠坂の家訓は、常に優雅たれ。」
どんな状況でも無様な姿は見せられないもの。」

言葉で示す通り、凜はたおやかな笑顔を浮かべいった。

凜はガンドを連続して放つ。しかしバゼットは素早く交わし、凜に殴りかかる。

凜は今度は交わさず、自分に殴りかかってくるバゼットの腕に自分の腕を絡ませた。

そのまま、勢いを生かして一本背負いの様に投げ飛ばした。

「ぐはつ。…くつ、なかなかやりますね。」

「そうでもないわ。只、貴女の攻撃が単純なだけよ。」

「言ってくれますね。」

（仕方ありません、やはり、あれ、を使うべきでしょうか。）

「あら、ほんとの事を言っただけよ？」

（不味いわ。今までは何とか持たせてたけど、これ以上続けば確実に不利ね。）

例え不利な状況とはいえ、心の中でも、負け、と言う言葉を使わないのはたいした精神力である。凜はマイナス思考の言葉を口にした

り思ったりすれば、それを現実にしてしまつと考えていた。
なので、現状を表現するとき以外はそんな事を言わない様に心掛
けていた。

凜がちらりと横を見ればランサーとアーチャーの戦いは拮抗してお
り、マスターの勝敗がこの勝負の勝敗となりうる事が予想できた。
凜は一か八かの攻撃を仕掛けるべく構えをとった。

バゼットも凜の気迫を感じ構え直す。

バゼットの見ると先では、凜が緊張した面持ちで制服の胸の部分握
りしめていた。

バゼットは其を緊張から来る動悸を押さえるための行動だと判断を
下した。

しかし、それは違った。

交戦の最中、凜は自分の胸元で揺れるものがあるのに気付いた。そ
れはペンダントだ。

そのペンダントは小振りなもので、本物の宝石を使用した非常用に
着けていたものだった。

例のウツカリで忘れていたのだが、今回はそれがいい方に働きバゼ
ットは凜の手元に宝石があることに気付いていない。

凜はペンダントの宝石を使うことを決意するが、今取り出しても気
付かれ警戒されかねないと行動を取りかねていた。

バゼットの方も今飛び込むのは危険だと本能が警鐘を鳴らし、同じ
く行動を起こせないでいた。

にらみ合いの状態となり、数十秒とも数分ともとれる時間がたった。
その時、あり得ないものが聞こえた。

それは、人の声である。

凜は驚愕から、バゼットは秘匿の観念から同時に声の聞こえた方を

見た。

しかし、二人の視線の先に有ったのは人の姿ではなく、ひとつの強烈な光だった。

side アーチャー&ランサー

「へえ、思ったよりやるじゃねえか。あの嬢ちゃんもよ。」

「だから言ったではないか。」

警戒を解かないまま会話を行うアーチャーとランサー。

視線はマスターの方を向いていても、お互いから注意を逸らすような愚を犯す事はない。

「さあてと。結局は最初とおんなじになっちまったが、続きといるぜえ。」

「くっ、そうだな。君に負けていては凜に示しがつかんからな。」

「言うじゃねえか、弓兵。」

「それがどうした、槍兵。」

二人はニヤリと笑い、動き出した。

戦いは、初めの戦いの焼き写しの様に進む。

しかし、先程と違いアーチャーはランサーの動きにほぼ対応できていた。

「はっ、弓兵の癖に剣で俺と対抗できるとはな。気に入ったぜ、テメエ。」

「ほう。君のような存在に気に入られるとは、私も存外すてたものではないな。」

「余計にテメエの正体が気になってきたぜ。」

「私が正直に言うとしても？知りたいのなら自分で調べることだな。」

知る事は出来んと思うが、とアーチャーは声に出さず思った。

ランサーはそんなアーチャーの返答にますます嬉しそうな表情を浮かべる。

本来の武器を使うことなく自分と相対することができるその戦闘力。それだけで自分と死合える程の物を持っていると確信し、ランサーはアーチャーを好敵手と認めた。

ランサーの宝具は『真名解放』すれば必ず相手の心臓を貫く宝具で、殺しが出来ないこの聖杯戦争で使うことは出来なかった。

いや、するつもりはなかった。

戦いを至上とするランサーにとって、存分に戦わないまま殺すなどあり得ないことだからだ。その相手が正面からぶつかれる相手となれば尚更である。

何時までも続けたいとすら思える戦いが進められる。

互いの武器が互いの身体に浅い切り傷を作りあうも、それ以上深い傷は生まれない。

「はは、楽しいねえ。」

「こんなことを楽しいと感じるのか？」
「あつたりめえじゃねえか。」

攻撃・防御の手は休めず会話する二人。
息すら切れてないのは流石サーヴァントと言ったところか。

「オメエだつて楽しいから笑つてんだろ？」
「笑っている……………」

アーチャーは気付いていなかったが、正面から相對しているランサーは見ていた。
アーチャーの口許が楽しそうに笑っていたのを。

指摘されてそれに気付いたアーチャーは、同時に自分の感情にも気付いた。

「楽しい、か。ああ……………そうかもしれないな。
確かに、君相手にここまで戦えて嬉しいのかもな。」
「はあ。その様子じゃ、俺の真名は本当に知られてる見てえだな。」

それも上等等、悔しさも力に変えて更に苛烈な攻撃を行う。

攻撃を捌きながらアーチャーは違和感を感じた。
何やら、感じる気配が多いのだ。その時アーチャーは衛宮士郎がいるかもしれない事に思い至った。

例え世界の根本が違っても、流れが完全に違うとは言えないのだ。

焦りつつ校舎の方へ目を向ければ人影が「二つ」。
それに動揺したアーチャーは一瞬動きが鈍ってしまった。
それを見逃さなかったランサーはアーチャーの武器を弾き飛ばしたが、アーチャーが一瞬でも気をとられたものが気になり自分も今気付いた気配の方を見た。

二人の人影。それは、衛宮士郎と柳洞一成だった。

しかも運が悪いことに、弾き飛ばされたアーチャーの武器がその二人に向かって飛んでいっていた。

ランサーは二人に向かって走り出した。

例え、不可抗力での殺人が聖杯によって許されていても、ランサーにとって意にそぐわない殺しは寢覚めが悪いからだ。

しかし、初動の遅れはいかんともし難く、ランサーが追い付く前に相手に当たってしまうことが簡単に見てとれた。

アーチャーが自分の投影品である其を消せば良いことを思い出したのは、ぶつかる直前でありそれ中間に合いそうにもなかった。

……凜のウツカリがうつったのかアーチャーよ。

「「うわあ!？」」

二人の人間が悲鳴をあげた瞬間、二人を中心に眩い光が走った。
まはゆ

咄嗟に目を瞑ってしまった二組の主従の開いた目に入ってきたのは、金の髪に碧の目の少女だった。

そして、手には…………… 箸と茶碗?

現れた少女は持っていた箸でアーチャーの武器を掴んでいた。

「（モグモグ）ここは何処ですか？（モグモグ）おや、シロウでは（ゴックン、パクパク）ありませんか。もしかして（モグモグ）シロウの召喚ですか？」

「あつ、多分………つて、セイバー！？食べるか喋るかどっちかにしろ　！！行儀が悪いぞ！？」

士郎が自分の手を確認したところ、右手に確りと令呪が浮かんでいた。

他の者達の間にはあまりもの出来事に、ビミョーな空気が流れた。

「セイバー、ですか？あれが？」

「信じられないかもしれないけど、本当よ。」

「あゝ……まじか？」

「本当なのだろう。やつと知り合いのマスターもそう言ってることだしな。」

士郎とセイバーが言い争ってるなか、今まで戦っていた四人は士郎と一成の元を集っていた。

もう戦う雰囲気も何も無いからだ。

再び見れば、セイバーの茶碗に盛られていた山盛りの白米がいつの間にか消えていった。

言い争っている間に食べたのか？腹ペコ王恐るべし………

「それでは、私は二人の相手をすればいいのでしょうか、シロウ。」
「いやいや、まてセイバー。これは俺達が乱入しちゃった形になっちゃったから、そういうんじゃないんだ。」
「むっ……そうですか。」

少々不機嫌そうに何も持っていない手をセイバーは下ろした。

「白けちまったな。今回はここで終いにしとくか？」

「そうですね、ランサー。モチベーションが下がってしまったのでこれ以上は無駄ですね。」

「しょうがないわね。私たちも帰りましょうか、アーチャー。」

「………確かに、これは仕方ないな。」

そんな彼らの会話に、士郎は申し訳なさそうにした。

直前までは部外者であり、邪魔をする気などなかったのだが結果的に邪魔をした事になってしまったからだ。

それが、自分のせいではなかったとしても。

「あの……その、悪かったな、邪魔しちゃって。」

お詫びて言っちゃ何だけど、今ここにいてことは晩飯未だだろ？家で食ってかないか？」

その招待に四人は思わず顔を見合わせる。

こちらが危険に晒したことで謝りこそすれ、自分達が謝られるなど思っていなかったからだ。

まあ、アーチャーだけはうっすら予想してたかもしれないが。

「まったく。そう言われちゃったら断れねえじゃねえか。ゲツシュに誓ってるからな。」

「そうでした。と言うことは、断る理由は最初からないと言う訳です。ね。」

ランサーとバゼットの二人はその申し出を快く受け入れた。

バゼットの言う通りゲツシュによって断れないからだ。

まあ、それだけでなく純粹にお腹が減っていたから、と言うのもバゼットには含まれるのだが。

簡単に決まったこちらに反して、なかなか決断が下らないのが凜とアーチャー。

アーチャーは黙して凜の決断を待つが、その気持ちは衛宮邸に訪れたいと思っていた。

理由はセイバーである。

衛宮士郎がセイバー　アーサー王を召喚するのは、繋がり故に当然の事で不思議なことではない。(そう、例えば世界が違って、セイバーと衛宮士郎は必ず出会うようになってるのだ。)

アーチャーを驚愕せしめたのは、セイバーが手に持っていたもの。

箸と茶碗、それは、ここに召喚される前から現界していた事を示している。

何より、衛宮士郎が、セイバーを知っていた。そして、凜も彼女がセイバーと言うことを知っている。

それらを含め、衛宮邸に訪れれば理由がわかるのではないかと思っただのだ。

だがアーチャーは話さないし、勿論表情にも出さない。

ただ、凜の答えを待つ。

「確かに今から帰ってもご飯は作らなきゃならないし……でも土郎は今敵マスターになったから、不用意に家に行くなんて……そう言えば最近土郎の料理食べてない、って違う違う。あつ、でも動いたからお腹空いちやっとな……」

たかが食事の誘い一つですごい悩みようである。

一寸引きつつも土郎は凜に話しかける。

「遠坂。あつちは来るって言ってるし、お詫びって言ってるのに片方にしかしないってのもあれだろ？」

「だからさ、遠坂も来てくれると嬉しいんだけど。」

「そ、そこまで言われちゃ仕方ないわね。呼ばれてあげようじゃないの。」

満更でもなさそうに承諾した凜。

「それと、一成もどうだ？同じく巻き込んだからな。」

そう、忘れていたが此処には一般人の一成もいたのだ。

‘魔術師の世界’を見られたにも関わらず、土郎……はともかく、凜もバゼットも何もしようとはしなかった。

「む、夕げの招待は有り難いが…」

「士郎、説明はアンタがしなさいよ。友達なんだから。」

「わかってるよ、それくらい。」

説明は家でちゃんとするからさ。」

「うむ、了解した。」

耐えることもまた修行なり、と呟く一成。

アーチャーはやはりと言うか我慢できなくて、それとなく凜に聞くことにした。

「凜、少しいいか？」

「ん〜、どうしたのよアーチャー。」

「魔術は秘匿するものだろう？いいのか、簡単にはいえ漏らしても。」

「いいんじゃない。確かに全く知らない奴だったら記憶を消してたけど、一成はそれなりに身近な人間だしね。多少説明してた方が逆に安全なのよ、ああいうタイプはね。だから、言いふらすような奴でないことも知ってるし、何ら問題なし。」

そうか、と納得するアーチャー。

そして、見られた場合の選択として記憶を消すことしか上がらなかったことに、再度この魔術師のあり方と言うものを認識した。同時に、とてつもなく、優しい、世界だと言うことも。

「あまり遅くなつては失礼です。そろそろ出発しましょう。」

「和むのはいいが、取り敢えずこつから動こつや。」
「そうですね。シロウ、早く戻りましょう。お腹が空きました。」

この後の動きが決定したなら早く行動に移そうと声を出す三人。
と言つか、セイバーよ。君は召喚されたとき食事をしていただろう。

「そうね、行きましょ士郎。」

「ああ。一成の家への連絡は家についてからな。」

「うむ。………ところで女狐よ、貴様口調が変わぬか。」

一成のその指摘にしまったと言う表情を浮かべる凜。
反して、一成は勝ち誇ったような表情を浮かべる。

「フハハハハ。成る程、それが貴様の素と言うわけか。貴様を、おしとやかなお嬢様、としか知らぬ生徒が知ったらどうなることか。」

「あら、それは脅迫なのかしら？生徒会長ともあるう人が脅しをかけるような方とは思いませんでしたわ。」

「ふん、こんなもの女狐の行動に比べれば脅迫にもならん。」

「あら、私そんな恐ろしいことした覚えなどありませんわ。」

二人は生き生きとした表情で、余人の入り込む余裕などない殺伐とした会話を行う。

その他の人間（一部人外含む）は一生懸命そちらを見ないようにして衛宮邸への道程を歩く。

二人の背後に竜と虎が見えるのは気のせいだろう。そうに違いない。

物凄く精神を削られる道程をこなし、彼らはとうとう衛宮邸に到着した。

目の前に広がるのは純正の日本家屋である。

始めて見るランサーや話でしか知らないバゼットは感嘆の声をあげた。

「これは、なんとも素晴らしい。」

「面白い建物だな……っと、何だか中が騒がしいぜ？」

ランサーの言う通り、衛宮邸の中から言い争うような人の声が漏れ聞こえていた。

アーチャーはその聞き覚えのある、ありすぎる声に体がうち震えた。だが、それが歓喜からなのか恐怖からなのか自分でも判断がつかないでいた。感情が、思考が纏まらない。

それは、遠坂時臣を見たときに予想できた筈の事である。しかし、アーチャーはその可能性に全く気付けないでいた。或いは、あえて気付かない振りをしていたのか………

その横で、理由と言うか原因と言うか………ともかく、何が起きているのか理解できている士郎とセイバーはため息を吐いた。

「あゝ、何て言うか……とにかく害はないから。」

「そうですね、害はありません。害は……本当にそうですね？」

セイバーの最後の言葉に一寸哀愁を背負いつつ玄関に向かう士郎とセイバー。

そして、その後ろに付いていく二組の主従+。

士郎が玄関を開けると同時に叫び声が彼らを襲った。

「離してつてば。私は士郎のところに行くの!？」

「セイバーが召喚されたんだから士郎は大丈夫だよ。」

「なに言ってるの。セイバーが召喚されたって事は、シロウにそれだけの危険が迫ってたってことじゃない。私が助けに行かないと。」

「だから大丈夫だって。セイバーが信用できないのかい?きっと無事に帰ってくるさ。」

「そんなのわからないじゃない。セイバーが強くても、シロウは半人前なのよ。怪我をするに決まってるわ。」

彼らの目に飛び込んできた光景。それは、白くて長い髪をした赤目の少女を黒目黒髪の草臥れた雰囲気を持った男が後ろから押さええている光景だった。

もしこれが個人の家の中で起きていることではなかったら、確実に警察を呼ばれていたであろう姿だ。

士郎は少女が言った‘半人前’や‘怪我をする’と言う台詞に地味に傷ついていた。

だが、客人もいるからと気力を振り絞り二人に向かって声をかけた。

「あゝ……とりあえず無事に帰ってきたからさ、玄関先で騒ぐのは止めようよ。うん。」

声をかけられたことで漸く土郎が帰っていたことに気付いた二人。男の方は安心したのか、土郎の姿を見た瞬間体から力が抜けたようだった。

それを少女は見逃さず、男の手を振り払って土郎の方へ駆け寄り……

「シローー！！！」

「ぐはぁっ!?!」

お腹目掛けて思いっきりダイブした。別名、ボディアタック。

男は仕方ないなあ、といった表情を浮かべるだけで、これがそれなりに日常の一部として展開されていることが理解できた。

「ところで、後ろの人たちはどうしたんだい。土郎？」

「お久し振りです。今日は土郎の好意で夕飯に招かれました。」

「ちよつと俺が勝負の邪魔しちゃって、そのお詫びに夕飯を作ろうと思ったんだ。」

一成はそれに巻き込んだから、その説明もかな？」

男は仕方ないなあ、と言う表情をしながらここで話すのも何だからと言って客間に案内することにした。

客間にはまた別の人間が座っていた。

姿は士郎のそばにいる少女にそっくりな妙齡の女性であった。

「あら、無事に帰ってきたのね。安心したわ。」

女性は士郎の姿を見るなりホンワリとした笑顔を浮かべた。

士郎はばつの悪いといった表情を浮かべ、軽く謝った後そくさと台所へ向かった。

「それで、そちらの方々はどうしたのかしら？」

「シロウがご飯に誘ったんだって!!」

「そう言えば自己紹介がまだだったね。」

男はそう言って座布団を用意し、人数分を机の回りにしいた。

彼らは進められるがまま席につく。

「では、招かれた私たちの方から自己紹介させていただきますましょう。私はバゼット・フラガ・マクレミッツです。」

「へえ、君が。有能な封印指定の執行者だと聞いているよ。」

「いえ、私などまだまだです。それで、彼が私のサーヴァントである……」

「ランサーだ。少しの間だが、宜しくな。」

衛宮邸には訪れたばかりだと言うのに、二人はもう馴染んだように寛ぎかけていた。

これも屋敷と住む人間の力だろうか。

「私の事は全員知ってるからいいとして。隣のこいつが私のサーヴ
アント、アーチャーよ。」

「……………」（ズズズ）」

凜がアーチャーを紹介するが、アーチャーは特に反応せずいつの間
にか入れたお茶を飲んでた。勿論人数分用意済みである。流石ブ
ラウニー。

凜はアーチャーが無視したことに一寸イラツときた。

真実は無視したのではなく、沸き起こる感情をお茶を飲むことで押
さえていたのだが。

「ふむ、これは自分もした方がいいのだろうか？名は柳洞一成と言
う。」

一成も自己紹介を行い、次に屋敷にいた人間が紹介を始めた。
始めに口を開いたのは男だった。

「まず、今食事を作ってるのは僕の息子、衛宮士郎。そして僕は父
親の衛宮切嗣。よろしく。」

「な！？貴方がかの有名な『魔術師殺し』なのですか！！」

「ああ、懐かしい呼び名だね。でも今は廃業してるから一寸違つか
な？」

男　切嗣の名を聞いた途端、バゼットは驚愕の声を挙げた。それほど、男の名と二つ名は魔術師によく知られているのだ。だが、そう言われてもあまり理解できないランサーと一成とアーチャー（演技）。だが、挨拶の途中であるため沈黙を守る。

「私の名はアイリスフィール・V・A・衛宮と言います。切嗣の妻です。」

「私はセイバー。先程シロウのサーヴァントになりました。」

「私はイリヤスフィール・V・A・衛宮よ。シロウのお姉ちゃんなんだから。」

少女　イリヤは仁王立ちでエツヘンと胸を張る。

しかし、身長も相まって微笑ましい光景となっていた。その身長は……主張しなければ士郎の姉とは解らない、とだけ言っておこう。

挨拶も終わったことを確認し、ランサーは先程の紹介で疑問に思ったことを聞こうとした。

「なあ、一寸いいか？」

「ん？なんだい、ランサー。」

「いや、随分と物騒な二つ名を持ってんなと思ってな。」

急に話しかけられた事に少しの疑問を覚えた切嗣だったが、質問を聞いて納得した。

確かに聞いただけでは切嗣の二つ名は余りにも過激であった。少し説明しようと口を開きかけたとき、士郎が台所から戻ってきた。

「お待たせ、出来たぞ……て、タイミング悪かったか？」

「いいや、そんなことないさ。と言うわけで、後にしても構わないかい？ランサー。」

「おお、いいぜ。ってか、旨そうだな。」

ランサーの視線は料理に釘付けだった。

見たことのない料理の数々。そして食欲をそそる香り。

食事を終えている衛宮家の三人以外は話を後にして、目的でもあった食事を先に取ることにしたのだった。

四章 憧れの顕在（後書き）

衛宮家総出演です。

いや、こんなこととして活かせるのか？自分

そして早くもこの後の展開に困りつつある…

ここから結構自由に捏造しやすくなっちゃうんで、ねえ。

五章 大説明会（？）（前書き）

今回はタイトル通りとなっております。

つまり、余り話としては進んでません。

そして再びやっちゃった……………

今回で最後と思うので、うん、本当に。

9月25日

意見を頂いたため、少し改訂しました。

これで少しでも違和感がなくなるといいのですが。

これからも独自設定を加えつつ岩違和感のなるべく少ない様に書いていきますので、よろしければお付き合いくださると嬉しいですよ。

此れからも独自設定を加えつつ岩違和感のなるべく少ない様に書いていきますので、よろしければお付き合いくださると嬉しいですよ。

一応チキンはーとでもあるので、お手柔らかに……

五章 大説明会(?)

side 衛宮士郎

目の前では俺が作った料理を食べる五人。
それにしてもすごい食いっぷりだな、青いのはたしか…ランサーだ
ったよな。

セイバーもさつき食べてた筈なのに、まだ食べるんだ……

でも、同じサーヴァントでも違うんだな。残りの一人、えつとアー
チャーは必要ないとか言っただけで食べる気配はないし……セイバーが其
を嬉々として食べてるし。

そっだよ、セイバー。まさか自分が聖杯戦争の参加者になるなんて
しかも、召喚に必要なことなんてなにもしてないのに、何故か召喚
に成功してるし。何でなんだろうな。

と言うか、絶対すぐにリタイアするに決まってる。

こんなことになるんなら、学校に残っとくんじゃなかったなあ。

~~~~~

「済まないな、衛宮。」

「いって、これくらい。」

俺が今何をしてるかと言うと、ストーブの修理だ。

学校の予算的に修理や買い直しが出来ないものを、一成の頼みで修理をしてる。

と言っても俺はあくまで素人だから、何とか長引かせる程度の事しか出来ないんだけどな。

「ふう、これはもう大丈夫だ。とりあえず今年一杯は大丈夫だと思うぞ。他にはどうだ？」

「うむ、かたじけない。あと二つほど緊急を要するものがあってな頼めるか？」

「ああ、いいぞ。」

一成も頑張ってるが、学校の方ももう少し予算を考えてくれないと思うんだけどな。

まあ、人助けをすることに否はないんだけど。人に喜んでもらえるのは俺も嬉しいし、な。

「よつと。じゃあ、次の場所に案内してくれ。」

「うむ、感謝するぞ衛宮。」

そして俺達は次の場所へ移動した。

「はあ、終わったぞ一成。」

「おお、流石だな衛宮。此で暫くは安泰というものだ。」

「大袈裟だって。応急処置でしか無いんだし。」

「いや、それでもだ。」

「はは、サンキュ。……って、うわ。もう真っ暗じゃないか。」

窓から外を見れば、日はとっくに暮れていた。

俺達は慌てて帰宅の準備をし、下駄箱へむかった。

「悪かったな、遅くなっちゃて。」

「いや、もとは此方から頼んだことだ。此方こそ済まなかった。」

とにかく急いで帰ろうと一成と会話を交わしながら外へ出た。

そこで不思議な音を聞いた。

なにか、金属同士がぶつかっているような甲高い音だ。

俺は一成と一緒に音が聞こえる方、校庭の中心へと向かってしまった。

そこで見たのは男女一組ずつが戦っている光景。

隣にいる一成は日常とかけ離れた目の前の映像に呆然としていたが、俺はすぐに理解した。此が聖杯戦争の対決だと言うことに。

「（まずい、気付かれる前に離れないと。）」

俺は一成を促してすぐに離れようとしたが、一足遅く赤い剣士（後で剣士でなくアーチャーだと知った。）の剣が弾かれ此方に向かって飛んできた。

それに、一成だけでなく俺も動くのを忘れてしまった。

硬直したかのように動かない俺達に向かって、短剣は容赦無く近付いてくる。

俺と一成のどっちに向かっているか俺程度の力量じゃ解らないけど、確実にこっちへ向かっていた。

このままじゃいけない。俺なら兎も角、一成が怪我をするなんて。

俺が修理に時間をかけたから。いや、そもそも物だけ聞いて帰って貰っていれば良かったんだ。（だって、聖杯戦争が始まることを知ってたのに。）

俺のせいで誰かが傷つくなんて、許すことができない。

だって、爺さんみたいな　　にはなれなくても、爺さんが俺を救ってくれたみたいに誰かを救えるようになるんだから。

そう思っではいても、硬直した身体は微塵も動いてくれない。

にたくない　　ぬ訳にはいかない。

「「うわあ!?!」」

結局動けないまま短剣が俺達を襲った　　と思っただ瞬間右手に激痛が走り、辺りを黄金の光が包んだ。

思わず目を瞑った俺の耳に、いつまでたっても短剣が人を切る音は聞こえなかった。

恐る恐る目を開いた先にいたのは知ってる姿だった。

彼女は器用に手に持っていた箸で短剣を掴んでいた。……その他の物は気にしない、気にしない。……

思いがけずマスターになった俺だけど、聖杯戦争の邪魔をしたことに変わりはなくお詫びに食事に誘った。

~~~~~

うん、やっぱり今日のは俺が悪いよな。

「うん。やっぱり士郎のご飯は美味しいな。」

相変わらず大食いだな、藤ねえ……

「って、何でいるんだよ、藤ねえ!？」

「フッフッフ、お姉ちゃんが士郎のご飯を逃す筈ないでしょ。」

ああ、そつだよな。藤ねえがご飯の気配を逃す筈ないよな。それはもう諦めるから、せめて静かに食事をしてくれ……

side out

テーブルの上にある料理がなくなって一息ついた頃を見計らい、衛宮切嗣が口を開く。

「さて、じゃあさっきの続きだけど。」

「なあ、この姉ちゃんがいてもいいのかよ。」

ランサーが食事中に現れた女性　藤村大河が要るのに魔術のことを話していいのと言外に尋ねる。
切嗣は一寸困ったような表情をし、大河を見つめているだけだった。

「問題ナッシングだよ。実は魔術と言うものがあること位は知ってるのだ。」

エツヘンと胸を張って大河は言った。
言葉から大河が魔術師ではない事を読み取ったバゼット達は、何故知ってるのかと首をかしげる。

「それは、今回の私達のように事故で知られた、と言う事なのではないか？」

「いや、一寸言いくいんだけどね……何て言うか。」

「ああ、執念って恐ろしいよな……。」

何となく理解できた者や知っていた者は、同情の眼差しを彼等（衛宮家）に送った。

大河の方を見てみれば。

「私に隠し事してた切嗣さんが悪いんです。それに、私だって家族のようなものじゃないですか。」

「はは、こう言う訳でね……此れも一種の不可抗力かな……？」

きつと恐ろしいまでのしつこさでついて回ったり覗き見たりしていたのだろう。

会ったばかりのバゼットとランサーにもそう思わせるバイタリテイを有していた。

「じゃあ続けるよ。何故僕が『魔術師殺し』と呼ばれてるか、だったね。」

「そういや、俺も理由は知らないな。」

「なんと、衛宮の父上殿は仰々しい二つ名を有しておられたのか。」

「……あんまり、人に言えるような事じゃないんだけどね。」

切嗣はどこか痛みを感じているような、悲しみを抑え込んでいるよ

うな表情を浮かべ言った。

だが、その表情は洞察力に優れた人間が辛うじて解る程度なもので、気付いたのはサーヴァントとバゼットだけであった。

「僕は十年前まで、あるものを目指していたんだ。」

「あるもの？」

「それはね…正義の味方だよ。」

表現は悪いが、その幼稚さに初めて聞いたもの達は切嗣の顔を見た。しかし、切嗣の表情は真剣そのもので、それが茶化しているものではないとわかり静観する体制をとる。

「正義の味方を目指してた僕は、所謂悪者達をやつつけるために行動していたんだ。と言っても、僕の目的は法で裁けない魔術師に対してのみ何だけど。」

魔術を扱うものにとっては、一般人に知られること無く何かかを成す事は容易である。

それは即ち、悪事を成したとて一般的な証拠がないと言うことである。

「最も基本な事として、魔術師が一般人に手を出すことは禁忌とされているんだ。」

魔術に関することを今日初めて知った一成のために、切嗣は基本から話す。

それはアーチャーに軽い衝撃を与えた。

アーチャーが生前相對してきた魔術師は目的の為なら例え命であろうとただの道具としてしか扱わないもの達ばかりだったし、それが常識に近いものと記憶していた。これも磨耗の影響なのだろうか。

だが魔術師のあり方として遠いとも言えない。何故なら魔術師とはすべからず、血の香りがする生物^モなのだから。

アーチャーは人知れず拳を握りしめていた。

「でも、決まりがあっても必ずしも守る人間ばかりじゃない。魔術の研究とは己を研磨して進めるもの、だけど人体が持つエネルギーを使って研究を行うものもいたんだ。」

「人体のエネルギー、ですか？」

「何か、嫌な予感がするよ……」

一成は不思議そうに聞き返し、大河は本能で嗅ぎとった。

「簡単に言えば、命かな？」

更に細かく言えば魂だったり血液だったり、果ては生かし続けたまま生命エネルギーを摂るものだったりするのだが、それは知らなくていいものとして敢えて簡潔な物言いをした。

この場にいる他の魔術師にんげんも切嗣の意図を理解して口を挟むことはしなかった。

「それで、僕はそういう人間を調べあげて正義の為に倒していったんだ。……今思うと、何てバカなことをしてたんだろうと思うよ。」

切嗣は目を伏せながら嘲う。

「気まずい沈黙が続くかと思われたが、呑気な大河の声が其を払拭した。」

「切嗣さ〜ん、調べ挙げたってそんな簡単にわかったんですか？ 私スツゴい大変だったのにい。」

「それはね、魔術にいきるものはえてして科学に弱いからだよ。例え高度な魔術的防御を施していても、魔術的要素を含まないものに対しては全く無防備だからね。」

切嗣は調子を取り戻したように大河に言葉を返した。

「んでよ、それと『魔術師殺し』の異名と何の関係があんだ？」

ランサーは自分がした質問の答えがわからず、再び尋ねる。

「それは僕の魔術礼装が理由なんだ。詳しいことは言えないけど、

ある魔術を施していてね。これを使うと魔術師が魔術師である為のもの。魔術回路を破壊することができるんだ。」
「成る程な、魔術師としての人生を殺すから、魔術師殺し、ってわけか。納得したぜ。」

その魔術礼装がどんな物であるかは解らないが、恐らくは回路を破壊するだけにとどまらなかった事もあつただろうと非一般人は推測した。そして、それは当たっている。

衛宮切嗣の魔術礼装は銃である。普通の魔術師は科学になど頼ることとはないのだが、魔術使いを公言している切嗣にとって使うことに躊躇いはない。

銃を使うと言うことは、当たり処によっては致命傷になる。つまり、殺してしまうと言うことだ。

この事をよく知る者達は、だからこそ二つの意味で畏怖を込め、魔術師殺し、と呼んでいる。

魔術師としての禁忌とされている殺人を犯している切嗣には、本来ならば魔術協会から何かしらの手が伸ばされる筈である。だが、そこで切嗣が手を出していた人物が関係してくる。

その魔術師達は悪辣なことをしているという事は判つていても、表だった行動をせずその魔術防御により協会は証拠を掴むことは出来なかった。だが、放置していれば神秘の漏洩に繋がりがかねないのは想像に固くない。そんな魔術師達を、殺し、回っていたのが切嗣と言うわけだ。

協会は自分達の手に負えなかった者達と対峙する切嗣を黙認する事で、対処できなかつた事実をないことにしたのだ。

切嗣は「魔術師を殺す」が魔術回路を持たない者は魔術師とは言えない。
魔術師でない人間は協会に所属することはできず、また存在もしない。
そして存在しない人物は殺せない。つまりはそういうことだ。

「そんな事を続けていたけどアイリと出会い、十年前の聖杯戦争に参加してそれは違つと漸くわかつたんだ。

ただ、自分にとっての正義を押し付けてるだけに過ぎないってね。

……聞いていい話じゃなかつたろ？」

「そんな！？貴方の活躍は執行者な中でも語り継がれています。その様なこと仰らないで下さい。」

自らを罰するように言う切嗣だが、バゼットはそんなこと無いと遮つた。

そこで士郎は聞き覚えの無い単語を耳にし、思わず呟いた。

「執行者？つてなに。」

「あれ、教えてなかつたかい？」

そして、それに素早く反応したのはやはりと言うか切嗣だった。

「では、私の方から説明させて頂きましょう。」

「ああ、そうだね。本人の口からの方が解りやすいと思うし。」

バゼットは一つ咳払いをし、徐に口を開いた。

「執行者というのは、厳密に言えば封印指定の執行者というもので、言葉通り封印指定にされた魔術師に対処する人間の事を指します。」
「ふむ、封印指定とは何やら穏やかではないように思つのですが。」
「うう。まだお話続くの。」

バゼットの封印指定という物々しい表現に、眉を寄せながら一成はついと呟いた。

大河はさつきから続く難しい話(?)に辟易したようで、テーブルに突っ伏している。

そこで暴れられては堪らないからと菓子(貢物(笑))を大河の前に置いた。

寧ろ、今まで暴れなかったのが奇跡だと思つのだが。

「確かに少々表現は大袈裟ですが、そこまで大したことではありません。」

封印指定と言うのは二つありまして、一つは今後二度と出てこないだろう、'技'を持つ魔術師を指します。」

へえ、と土郎は声をあげる。そして、そんな技を持つ奴は凄いな、なんて暢気に考えていた。

アーチャーにとっては封印指定と言う言葉は余り聞きたくない単語であった。

それもそうだろう。何しろ生前の最後の方では自分が封印指定にさ

れ、命を狙われるのが常の状態であったのだから。
だが、魔術師の在りようが違ふ此処では、きつとこれも違ふのだろ
うなと冷静に考えていた。

「『技』は色々ありますが、一番わかりやすいのは固有結界ですね。
そんな魔術師達に、その技を後世に伝えるために情報の提供をして
いただきます。勿論、すんなりと受けて頂けるのは稀ですが。
その封印指定の魔術師達を迎えにいたり、護衛をしたりするのが
我々執行者と言つわけです。」

へえ、やらほう、やら感嘆の声をあげる一成達。

執行者と言つ存在が持つであろう力量を何となくとはいえ感じた
のだ。

「二つ目は禁忌を犯した者達の事を指しています。

魔術師の禁忌を犯した者はすべからく拘束され、協会本部でもある
時計塔へ連行することになってます。しかし、そう言う者は全力で
抵抗し戦闘になることもあります。その場合、力づくでの対処もや
むをえません。また、その様なものは魔術師としての力量も高いも
のばかりですので、生半可な人間では対処できません。

それに対抗する事を含め、執行者には戦闘力の高い者達だけが選ば
れることになります。」

「へえ、凄いですね。バゼットさんは。」

「おうよ、バゼットはスゲエぜ。なんせ、素手で英霊とやりあえる
からな。」

ニヤニヤしながら言ったランサーの言葉を聞いたこの場にいた人間は、空いた口か塞がらなかった。詳しくは知らなくても話から人以上である存在と対等と聞いた一成達もわかりだ。だが、さっき戦闘したばかりの凜やアーチャーは身を持って知ったため、それほど驚くことはなかった。逆に、あれで対峙できないと言われた方が納得出来ないとすら思っていた。

「いえ、私などただ力があるだけです。それに、一人でできることなど限られていますし。その意味でも、全てを一人でこなしていた衛宮切嗣と言う人間は、執行者にとっても憧れに近い存在となっています。」

そう、これもまた切嗣が処罰されない理由の一つである。

‘協会’という集団でさえ得ることの出来なかった情報を科学技術を巧みに使って（盗聴、盗撮 e t c）入手し、封印指定の魔術師が公に出る前に対処する。

協会に属してないとはいえ、執行者と同等の働きを評価しないわけにはいかなかったのだ。

質問への回答が終わり、食事もすんだ今解散の空気が流れ始める。

元々は聖杯を奪い合う敵同士なのだ。

だが、そこでアーチャーが動いた。自分の疑問を聞くにはここしかないと感じたからだ。

本当であれば他の誰かがするであろうと思っていたが、誰もその事に言及せずにいたため自分で聞くことにしたのだ。

「少し私から聞きたいこともあるのだが、いいかね？」

今まで静かに話を聞き、喋ろうとする素振りすら見せなかったアーチャーが口を開いたことに一同は軽く驚く。

そして、聞きたいこととはなんなのだろうかと興味を抱いた。

アーチャーの視線は切嗣の方を向いていた。

「えっと、僕にかい？それで、聞きたい事って……」

「その……セイバーに関してのことなのだが。」

‘そのの’と言う言葉でセイバーを指差しながらも、視線は切嗣に向けながら言う。

当のセイバーは大河に与えられた筈の菓子を奪い合いながら食べていて、自分の事が話題に上がったことに気付いていない。

「セイバーがどうかしたのかい？」

「あつ、分かった！？セイバーに一目惚れでしょ、アーチャー。だめよ、セイバーはあげないからね。」

途中でイリヤが茶々を入れるが、アーチャーは苦笑いを返すだけに留める。

その反応の薄さに、つまらない’とすぐに諦め大人しくなった。

確かにアーチャーは士郎であった時にそう言う感情を抱いていた。しかし、それは‘セイバー’であって目の前のセイバーではない。同一人物であってもアーチャーにとっての彼女はただ一人だけなの

だ。もう、会うことは出来ないとしても……

「シロウだったらすぐに赤くなって慌てるから面白いのに。」

「イリヤー!!」「こら、イリヤ。士郎も大人しくしなさい。」

済まないねアーチャー、それで?」

「校庭でその小僧に召喚された時、手に食器を持っていたのが気になってな。」

あの時に召喚されたのであれば、あんなものを持つてるのは可笑しいのではと思うのだが。」

小僧と表された士郎はムツとし、コイツは好きになれないと感じた。

矢張と言うべきか、‘士郎’と‘アーチャー’で有る限り相容れることはないのだろう。

切嗣はアーチャーの洞察力の鋭さに流石英霊と思った。

だが、目の前(食卓)にこれでもかと言うほどヒントが転がっていたことに気付き、その指摘も当然かと思った。

「そついやそつだな。いや、あんまりにも衝撃的だったんで、逆に忘れてたわ。」

「そう言えば、遠坂のマスター「凜で良いわよ。面倒臭いから。」

では、御言葉に甘えて。リンもセイバーの事を知っていたみたいですが、もしかや以前から?」

アーチャーの発言で漸く思い出したランサー主従も、そう言えばと

切嗣に視線を向けた。

「まあ…そう言うことになるかな。」

僕が十年前の第四次聖杯戦争のマスターだったのはさっきも言ったと思うけど、その時の僕のサーヴァントがこのセイバーだったんだ。

「

切嗣は懐かしそうに目を細めた。そして、隣にいるアイリスフィールもそんな切嗣をニコニコと眺めている。

「詳しい内容は割愛させて貰うけど、一応勝利者となったのは僕だったんだ。」

アインツベルンが用意した聖杯に聖杯としての力が溜まり、願いを叶えるときに原因不明の聖杯の起動が起きたんだ。」

「原因不明？誰か近くの者の願いを受け取ってしまったのではないのか？」

「それはないよ。聖杯に願いをかけるには色のある令呪が必要だし、何より叶った願いが僕らとは全く関係ないことだったしね。」

関係ないこととはいったい……いや、薄々解っていることに態とわからない振りをするのもないだろう。

原因不明の聖杯の起動、彼らの願いとは違う願いの成就、そして恐らくはその時から現界し続けているであろうセイバー。そこから導き出される結果は………

「叶った願いとは、サーヴァントの受肉：か？」

「そうだよ。あの時放たれた強大な魔力で受肉した。

セイバーは元々霊体化出来なかったんだけど、これによってマスター無しでもずつといられるようになったんだ。

今じゃすっかり家族の一員だよ。」

何処か嬉しそうに、同時に若干虚ろになった目でセイバーを見つめる切嗣。

セイバーは相も変わらず食べ続けている。

切嗣の虚ろな瞳に始め意味が解らなかったが、菓子を食べ続けているセイバーをみて理解した。

受肉をしたと言うことはマスターからの魔力供給は要らず、肉体を得たがゆえに自ら魔力を生み出すことが出来る。

しかし、肉体があるがゆえに普通の人間と変わらなくなってしまったものもあり、それはすなわち――食欲だ。

作っても作ってもすぐに無くなる料理と、食べるペースが全く変わらないセイバー。比例してどんどん高くなるエンゲル係数。

シロウの料理は美味しいですね。

……そう、喜んで貰えて俺も嬉しいよ。

アーチャーは引き攣つりそうになる表情を抑えるので精一杯だった。努力のかいあって誰もアーチャーの表情には気づくことはなかった。

「そ、そうか。私の聞きたかったことはそれだけだ。

凜、余り長居するのなんだ。そろそろお暇おやすみさせていただくとしよ

う。」

「そうね。いくら魔術師が夜の生き物だとしても、余り遅くなればお父様に叱られちゃう。」

凜は切嗣の微妙な表情には気付かなかったようで、アーチャーの言葉に普通に返していた。

「ではランサー。私達も帰りましょう。」

「そうだな。勝負がついてない時の馴れ合いはしねえほうがいいしな。」

「では、自分も。本日はお招きに預かり感謝します。」

バゼット達も丁度いいと帰ることを決めたようだ。

一成も帰宅の挨拶を行い出ようとするが、ランサー達が遅いから送ると言い出した。

確かにこの時間に一人で出歩いていれば危険であるため、快く申し出を受けた。

衛宮家の人間（+虎）は玄関まで見送りに来た。

「では、本日はお邪魔しました。士郎、勝負では手加減しないわよ。」

「うへ。勘弁してくれ。」

士郎の一寸情けない姿に、一同失笑が漏れた。

「心配ないわ、シロウ。私とバーサーカーが守ってあげるから。」

「む。それには及びません、イリヤスフィール。私がキツチリシロウの事を守りますから。」

「あら、そう簡単に………って、イリヤ、今なんて？」

「ホラホラ、早く帰らないと。じゃあね、リン。オヤスミ。」

言葉が終わると同時に目の前で扉が閉められた。

最後の最後までもたらされた新しい情報に、凜は頭を痒き筆りたくなつたが我慢する。

平常心平常心と己に言い聞かせる。

「あの白い嬢ちゃんもマスターだったとはな。上手く騙されたぜ。」

「ええ、衛宮の人間でもありますし、一筋縄ではいかないでしょうね。」

此方は冷静に評価をしている。

誰がマスターであれ、正面からぶつかって戦うと決めているのだからそこまで重要ではないと判断したのだろう。

「それでは、私達もここで失礼させていただきます。行きますよ、ランサー。」

バゼットと一成に続いていこうとしていたランサーがふと振り返り、アーチャーの方を向く。

「おい、アーチャー。」

「何だね、ランサー。」

「テメエは変な野郎だな。弓兵の癖に剣を使いやがるし、それで俺と対等に戦いやがる。」

「何だね、急に。弓兵だからと言って、弓だけを使うわけではあるまい。それが悪いとでも？」

唐突なランサーの発言に微塵も狼狽えることなく言葉を返すアーチャー。

ランサーは獰猛な笑顔を浮かべ楽しそうに喉をならす。

「いんや、いいんじゃないの。だだな

テメエの心臓は俺が貰い受ける。

それまで、負けんじゃねえぞアーチャー。」

「それはこちらの台詞だ。そう簡単にいくと思わないことだ。」

「ほざけ。」

「くつ。せいぜい勝ち残れるように頑張ることだな。」

互いに不敵な表情を浮かべ、今度こそランサーは背を向けた。

全ての騎士が揃いし今夜から、聖杯戦争の時は刻まれ始める事となる。

五章 大説明会（？）（後書き）

次からは本格的な聖杯戦争の話……頑張らないと。

第六章 行動の開始

昨夜の騒動から一晩経ち、放課後の時間を早くも迎えた。

【さて、凜。今後はどの様に動くつもりだ。】

「（そうね……………取りあえずは残りのサーヴァントである、キャスターとアサシンの居場所を探すことかしら。）」

アーチャーの問いに、軽く考えて答える凜。

二人のいる場所は教室で今は誰も残っていないが、喋っている所を聞かれては堪らないとラインを通しての会話をしていた。

【ほう、その理由は？】

「（一つは昨夜の事が理由よ。士郎に仕掛けてもいいけどその場合もれなくイリヤとバーサーカーもついてくるでしょうからね。」

セイバー達なら誇り云々で一对一でやれるでしょうけど、イリヤならそんなこと関係なく乱入してくるわ。ええ、絶対。）」

【ふむ、そう言えば凜は彼らの事を知っているようだったな。セイバーも含めて。】

「（まあ…十年近くの付き合いがあるからね。私のお父様も第四次聖杯戦争に参加していたから。だから、士郎の単純さもイリヤの性格の悪さもよく知ってるわ。」

一寸予想外だったのがイリヤがバーサーカーを召喚していた事よ。

お陰で彼処には二体のサーヴァントがいるから、今仕掛けるのは愚策よ。）」

確かに昨夜の話を聞いたとき、イリヤがセイバーを従えていてもおかしくはないと思った。

だが、実際にはイリヤがバーサーカーを召喚し士郎がセイバーを従えたことで、衛宮家には二体のサーヴァントが存在することになった。

アーチャーは確かにイリヤスフィールなら、'守る'と昨日宣言した通りに動くだろうと思った。

【そうか。ところで凜の父親も聖杯戦争の参加者だったのかね。】

「（あら、言ってなかったかしら。」

まあ、御三家の参加は決定事項なんだけどね。だから、アンタで良かったわ。」

【む？】

急な話題の転換に流石のアーチャーもついていけなかった。

そんな反応に言葉が足りなかったと思い至り、凜は言葉が続けた。

「（……もうサーヴァントが決まったから言えることなんだけどね、私一番はセイバーが良かったの。最優のサーヴァントと言われるし、何よりすごく格好良かったから。」

それは、'以前'言われた事でもある為知っていたが、こつも直接言われるとくるものがあった。

どうせ私は、と面に出さず落ち込んでいると、まるでそれを見透か

しているかの様に凜はさらに言葉を続けた。

「（でも、アーチャーが嫌って訳でもないのよ？セイバーがダメならアーチャーが良いって思ってたんだから。ホントよ？）」

それを聞き、アーチャーは召喚当初の事を思い出した。

確かにセイバーでないと知ったときわずかに落ち込んだ素振りを見せたが、直ぐに持ち直していた。

前は‘失敗’だの言われて自分もついつい反応してしまったと言うのにだ。

「（だって、お父様のサーヴァントと同じクラスだもの。

本来六十年周期の聖杯戦争が今回十年と言う短期間で始まったからちよつと不安だったのよ。しかも、間桐からの参加者はいないしね。でも、お父様と同じアーチャーが召喚できて一寸嬉しかったわ。）」

凜はほんのりと笑うがそこに感じられる歓喜は間違いようもなく、その言葉が本当である事を示していた。

真つ直ぐに向けられる好意に慣れていないアーチャーは、無意識のうち困惑や悲哀の様な表情を浮かべていた。

自分はそんな感情を向けられる資格は無いとでも言うように、受け取れる様な立派な存在ではないとでも言うように………。

霊体化によりそれが見えていないのはアーチャーにとって幸いだっただろう。

「(っつて、話が逸れちゃったわね。
次にランサー達よ。あいつらの本拠地何て知らないけど、偶然にし
る探したにしろ、会ってすぐ戦闘と言うことにはならない筈よ。昨
日夜まで待ってみたいに、ね。
そう言う気質を知ってるからこそ、別に焦らなくてもいいと思った
わけ。」

律儀と言えるあの二人なら派手な行動をしないだろうと言うことな
のだろう。
敵として相對したからこそ解ることもあると言うわけだ。アーチャ
ーもその考えには同意だったため、特に何も言うことはなかった。

まあ、元々知っていたと言う反則技も有るわけだが。

「(ライダーは言わずもがなよ。令呪が浮かんだから召喚をしたけ
れど、桜は元々争い事は嫌いな。
自分から戦いを挑むことは皆無よ。ライダーもマスターの桜の言う
通りにしてくれてるし。」

相手から仕掛けられない限り戦うことはない。凜はそう言い切った。

「(つまり、知っている奴等より解らない奴等の情報を集めた方が
いいと思ったのよ。
それに、キャスターたちが此方に気付く前に私達が情報を掴めば、
奇襲だっしてしやすくなるしね。」

【奇襲か…。】

「（何よ、文句あるの？奇襲だって立派な戦略よ。）」

【いや、文句はないさ。それがマスターの下した判断なら私は従おう。】

技量比べに奇襲と言う言葉は似合わないな、と思いついつい反応してしまったアーチャー。

その経歴から実践的な思考が深く根付いているからこそ余計にだ。

【では、今日はこれから他サーヴァントとそのマスターの搜索か。】

「（そうよ。まっ、そう簡単に手掛かりが掴めるとは思わないけど、塵も積もればなんとやら。やれることはとことんやるわ。）」

今度は不敵に笑い、己の意気込みを告げた。

そこには負けるわけがないと言う自負が滲んでいる。

己のマスターの勇ましさを再認識したアーチャーは、苦笑いを浮かべる以外出来なかった。

【では、何時までも会話をしている訳にもいかんな。そろそろ行動を開始するとするか。】

「（そうね、今日は時間も早いことだし新都の方へ行きましょう。）」

「【了解、マスター。】」

そして、二人は行動を開始した。

新都は開発が進んでおり、様々な施設の建物が乱立している。そして、それなりの時間まで営業しているところも多く、日が落ちてすぐに活気がなくなると言うわけではない。

今日も例に漏れず、新都は人で溢れかえっていた。

「やっぱりこっちは夜でも賑やかだね。」

【やれやれ。態々人混みの中に入るとは。】

「（あら、相手が此方に気付いていない内は有効よ。」

それに、こつても一般人が多い中じゃ例え気付かれても手は出せないし、相手が行動に移す前に此方の準備も完了するでしょ。」

【ふむ、なるほど。確かに理にかなってはいいるな。だが凜。今日は大丈夫なのかね？】

アーチャーは意味ありげに呟いた。

それが何を指しているか瞬時に凜は理解し、多少吃りながらもアーチャーに言葉を返す。

「（ぐつ。だ、大丈夫に決まってるでしょ。ちゃんと宝石は持ってきてるわ。」

同じ失敗はしないわよ。」

【ククク、それは頼もしいな。だが、昨日の慌てている凜も中々に可愛らし」五月蠅い!？」

アーチャーの言葉に凜は思わず立ち止まって大声で返した。

だが、回りにいるのは普通の人間。突然大声を出した少女に奇異の視線が集まる。

いたたまれなくなった凜は、早足でその場を後にする。

その頬が朱に染まっていたのは、果たして羞恥のせいなのか照れのせいなのか。

アーチャーはそんな凜のすぐ後ろを楽しそうな笑みを浮かべつつ付いていく。

「（ああもう、あんたのせいで恥ずかしい思いをしたじゃない。）」

【ふむ、それは済まなかった。だが、実際に大声を出したのは君だろう。】

「（出させたのは誰よ!!)」

【まさかあの程度で自制心を失うとは思わなくてな。精進したまえ。】

そう言われると恥ずかしさであっさり自制心を手放す結果となってしまうた凜は何も言えなくなる。

魔術を行使する際に何よりも自制心は大切であり、重要なことだからだ。

「（……………さっさと行くわよ、アーチャー!?)」

口論でアーチャーに敵わないと理解した凜は、この話はこれで終了とばかりに締めくくった。そして、‘女子高生の買物’をし始める。

凜の行動を静かに見つめるアーチャー。

凜の目は油断なく周囲を見渡し、それとなく辺りに違和感がないかを確認している。だが、商品を見回り欲しいものがあつたとき目を輝かせ、辺りを見ていたときは別の真剣な眼差しで見つめる姿は、その辺りの普通の女の子と変わらない姿だった。

前の凜ならば確実に心の贅肉と切り捨てるな。と何とはなしにアーチャーは思う。

その様に不自然にならない程度に新都を歩き回るも、異常らしい異常はどこにもなかった。

残るキャスターとアサシンがアーチャーの知る存在なら、恐らく己の神殿から出てこないであろうと確信するも、それをマスターに言うつもりはなかった。

言えば会ったことも無いのになぜ知っているのかと問い詰められるのが火を見るよりも明らかだからだ。

それに、殺し合いをする必要がない以上、一参加者として楽しんでみるのもいいかもしれないと考えていた。

「（ん）……今日のところは収穫なしね。まっ、初日なんだしこんなものかしら。」

【初日と言つことは、明日も此処に来るのだな。】

「（当然よ。たった一日で効果が得られるわけじゃないの。こ
う言つものはじっくりいかないと。）」

【ふむ。だが新都ニウにマスターがいるなら時間をかけるとこちらには
不利だろう。

寧ろ、誘導させられて待ち構えられてる可能性が高いぞ。】

戦略として考えられる可能性を上げるアーチャー。

だが、凜はそれがどうしたと言わんばかりだ。

「（挑むところよ。それならそれで探す手間が省けて良いじゃない。
それとも何？勝つ自信がないの？）」

【それは心外だな。私はただ考えられる可能性をあげたに過ぎん。
もしも、を考えていて損なことはないからな。

それに、自信ならある。】

「（ホントかしら？）」

凜は弱気に聞こえるアーチャーの発言にここぞとばかりに突っ込ん
だ。

その顔はやつと有利に立てたとでも言つように、生き生きとしてい
た。

だが、アーチャーの方が一枚上手だった。

【本当だとも。私は君が呼び出したサーヴァントだ。それが最強で
ないはずがない。】

告げられた内容に凜は面食らった。

もしこれが軽い調子で言われたのなら凜だとてすぐ反応できただろうが、その声が思いの外真剣な響きを含んでいたからだ。

凜はうまく言葉が出てこなくなり、ついつい長い溜め息を吐いた。

「（あんだ……………それ、素で言ってるの？）」

【ムッ、なんのことだ？】

「（素、と言うか天然で言った方がいいかしらね…）何でもないわ。お腹も空いたことだし、さっさと帰るわよ。」

そして、二人は帰途についたのだった。

家に着いた凜達を迎えたのはお帰りと言う母親の声や自分達を確認しに来た父親の姿ではなく、珍しい桜の叫び声だった。

「ライダーの馬鹿……………!？」

その声は何があったのかと慌てた凜は、靴を脱ぎ捨てて桜の声が聞こえたりビングへ走っていった。

部屋に入った先にあったのは泣いてはななくとも目が潤んでライダー

を睨み付けてる桜と、それを困ったように見つめるライダーと言う光景だった。

一見緊迫した空気が流れているように思えるが、そばにいる遠坂夫妻の「困ったなあ」というのんびりした空気がそれを打ち消していた。

「えっと……何がどうなってるの？」

「私に聞かれても解るわけなからう。」

状況のつかめない凜は思わずアーチャーを振り返り尋ねるが、ずっと凜と一緒にいたアーチャーに解る筈もなく二人して疑問符を飛ばした。

声を出したことで二人が帰ってきたことに気付いたのか、ライダーはあからさまにホツとした表情を浮かべた。

その視線は、眼帯で見えないながらもアーチャーを見つめていることが解った。

「ああ、帰ってきたのですね。」

「たった今帰り着いたところだ。しかし、何があったのかね。帰って早々怒鳴り声とは少々驚いたぞ。」

ライダーはスミマセン、と謝り再び桜の方を見る。

視線を外している間、どんどん桜の機嫌が落ちていったからだ。

「お父様、お母様。ただ今帰りました。
それで、これは一体どうしたんですか？桜があんな大声を出すなん
て……………」

当事者に聞いても答えは得られそうにないと考えた凜は、恐らくこ
の原因を見ていたであろう両親へと問いかけた。
アーチャーも興味を引かれ、耳をそばだてた。其ほど桜が大声を出
すのが珍しかったのだ。

時臣は話す気がないのか黙たんまりを決め込んでおり、その代わりなのか
葵が口を開き話始めた。

「ちょっと仕方が無いことなのよ。」

困ったように、しかしどこか慈愛や期待も滲ませたような声で話す。

「最初はね、単純にお洒落の話をしていたのよ。どんな服が似合う
とか、今のお化粧はどんな風になってるとか。
ライダーさんはスタイルもいいし、どんな服でも似合いそうってお
話ししていたの。」

確かにライダーならどんな服も着こなしそうだなと凜は思う。
だが、それが何故今の状況になったのか繋がらず、まだ続きがある
んだろうと静かに聞く。

その手には、いつの間にか紅茶が用意されていて、同じく葵の手元にもセットされていた。

……もうなにも言うまい。

「でも、ライダーさん身長が高いでしょう？家にある服はライダーさんにとって小さいから、現代の服を着せたくても着せることが出来なくて。

ならショッピングするのもいいわね、て話になったのだけれど……」

ここまで来れば凜にも何となく理解できた。

多分、ライダーが拒否かそれに近い発言をしたのだろう。

そして、アーチャーも時臣が話す気がないのでなく、うまく話せないから黙っていたのだと理解した。

女性特有の話題は、口にしにくいことこの上ない。

「ライダーさんの魔眼がねえ……」

素顔で出るわけにはいけないし、でも霊体化しての買い物は桜が嫌がるのよ。一緒に買い物したいってね。」

それはどうしようもない事だ。

流石に魔眼を解放したままでは秘匿も何も無い。

桜も理解はしているだろうが、感情が追い付かなかったのだろう。

そこで凜はあれ？と思った。

確か家には魔眼封じがあったのではないかと思ったのだ。

その確認を行うべく、凜は父親へと尋ねる事にした。

「お父様、質問があるんですけど……いいでしょうか？」

「なんだい、凜。」「ウチには魔眼封じがないのですか？あればライダーも出歩けると思うのですが。」

時臣は気まずそうに目を泳がせた。

……イヤゝな予感がする。だが、凜は追求を緩めず続けて問いかける。

そうすると観念したのか遂に時臣が口を開いた。

「ああ、確かにあったな。」

「では、それをライダーに貸し与えれば……」

「だからあったんだよ、凜。」

そう、‘あった’のだ。

確かに魔眼封じと呼ばれるものが遠坂家には存在していた。…つい数カ月前までは。

その日、時臣は魔術品を整理すべく掃除をしていた。

流石に魔術品が詰め込まれたこの部屋を癩に掃除させるわけにはいかず、自ら行っていたと謂う訳だ。

手際はあまり良くなくとも着実に整理が進んでいたのだが、ほぼ終わりに差し掛かった時それは起こった。

大きい荷物を持ち、視線をほぼ塞がれながらも移動しようとして一歩足を進めた途端、足の裏に何か硬い感触がした。恐る恐る下を見ると、完全に壊れた道具。魔眼封じがあったと言っただけだ。

「では、いま家に魔眼封じは。」
「ああ、存在しない。」

無いものをねだってもしょうがない、と桜に申し訳なく思うも説得しようと思わなかった。

アーチャーは見ていた。記憶の桜よりも明るく、感情豊かな彼女を。その顔を悲しみに歪ませたくないと思ってしまった。救うことの、気づいてやることの出来なかった桜のかわりかと問われれば、アーチャーは反論することは出来ないだろう。だけでも、笑顔でいてほしいと思ったのだ。

だからアーチャーは覚悟を決め、多少魔力は食うもののそれを投影することにした。

「凜、桜、ライダー。」

アーチャーが声をかけると三人が一斉にアーチャーを向く。ライダーは同じくサーヴァントであるアーチャーが何か援護をしてくれるものと期待していた。いまだ僅かしか会話をしていないもの

の、その頭の回転の早さはライダーも認めるところだからだ。だが、アーチャーの口から出た言葉は、予想だにしない物だった。

「魔眼封じ、それがあればいいのだな。」

「そうだけど……何するつもりよ、アーチャー。」

「なに、こうするのさ。」

トレース・オン
「投影開始」

最後の自己に埋没するための呪文を口のなかだけで呟き、己の手の中にとある眼鏡を投影した。

アーチャーの手の中に突然武器以外の物が現れたことに、回りの人間は驚愕を露にした。

そして、手に握られているものを見て再度驚く。

「嘘、その魔力。まさか本当に魔眼封じ!?!」

「なっ、アーチャー君は一体。」

何故そんなものを持っているかと問い詰めたくなる彼らだが、アーチャーに記憶がないことを思いだしどうにか踏みとどまった。ライダーと桜も急な展開についていけないよう目で白黒させていた。

「ふむ、魔眼封じときいてなにやら気になったのだが、どうやら何かしらの関係はあったみたいだな。」

「……魔眼に係る弓兵って、ホントにどこの英雄よ。」

アーチャーは眼鏡型の魔眼封じを桜に渡した。

桜はまだ現状が理解できてないようで、渡されるまま手に持ちそれを見つめていた。

「どうした、喜ばないのかね？」

「えっ、あつ、でもこれ……」

「なに、私にとっては大したものではない。魔眼も持っていないしな。」

ああ、ただ衝撃には弱いのでね。あまり乱暴に扱わないことだ。」

時間がたつ毎にじわじわ理解していったのか、桜の顔が笑顔へと変わっていった。

同時にライダーも何処か安堵の表情を見せた。

「ありがとうございます、アーチャーさん!!」

ライダー。これでライダーと一緒に掛けるね。」

「良かったわね、桜。」

ライダーに抱きついて喜ぶ桜、そしてそれを笑顔で見つめる凜。

そんな娘達を暖かな眼差しで見つめる遠坂夫妻。

その光景を見届けた後、アーチャーはひっそりリビングから出ていった。

遠坂家の屋根の上、そこにアーチャーはいた。理由は見張りである。本当はそんなことをしなくてもいいのだが、時間をもて余していたのと癖のようなものでしていいと落ち着かないのだ。

「必要ないと理解はしていても、染み付いた習慣と言うものは抜けないようだな。」

全く、因果なものだ。そうは思わないかね、ライダー。」

始め独り言のように呟いていたアーチャーだが、最後の方で後ろに向かつて言葉を投げ掛けた。

そこにはアーチャーの言った通りライダーが佇んでいた。

「それで、何か用かね。君はとっくに眠っていたと思ったのだが。」
「基本的にサーヴァントに睡眠が足りないのは貴方も御存知でしょう。」

振り向きなが言ったアーチャーに大きな反論はせず、ライダーはほんの少しアーチャーに近付いた。

隣にいかないのは、未だ敵であるのを踏まえての事だ。それに内心苦笑いする。

現れたときの言葉から一向に話し出す様子を見せないライダー。

ただ静かに見つめ会う時間が過ぎる。

「……………先程の事、感謝いたします。」

やっと口を開いたライダーから出たのは、感謝の言葉だった。それが何を指しているのか理解し、その律儀さに今度は表情に出して苦笑いする。

「偶々持っていただけだ。感謝されるようなことではない。」

「いいえ、貴方のお陰でサクラを悲しませずに済みました。」

私には何も出来ませんでしたから……………だから貴方に感謝を。」

既に使っている魔眼封じに触れながら、ライダーは微笑した。

もう魔眼封じが変わってるのは桜が言い出して変えさせたのだろう。直ぐにでも素顔を見たかったに違いない。

「お役にたてて何よりだ。」

だがさつきも言った通り強い衝撃は厳禁だ。せいぜい気を付けたまえ。」

「ええ、解りました。」

……………これは一応借りにしておきます。いくらマスター同士が姉妹とはいえ、敵である貴方の手を煩わせてしまいましたからね。

この借りは、いずれお返しします。」

言いたいことは全て言ったのか、ライダーはクルリと踵を返した。

「それだけです。では、私は中に戻らせていただきます。

貴方も入ったらどうですか？」

「ふむ、そうか。君がそこまで言うならいつか返して貰うとしよう。……生憎とこの様に警戒してないと落ち着かなくてな。悲しい弓兵の性かな。

なに、君が言った通り我々に睡眠は必要ない。夜明けまで此処にいるさ。」

そうですか、とだけかえしライダーはその歩みを進めた。

それを認めたアーチャーも向きを戻し、再度街を眺め出す。

「そうそう、いい忘れるところでした。」

もう、話しかけられないだろうと思っていたアーチャーは、未だ何かあるのかと言う疑問を持ちつつ顔だけ振り向く。

さつきよりも遠い場所にたっているライダーが、同じ様に顔だけ振り向いてるのがアーチャーに確認できた。

「未だ何かあるのかね？」

「ええ、食事に関しての事です。」

食事、それは摂れなくもないがマスターからの魔力供給がしっかり

存在する今、特に必要なことではないとアーチャーは考えている。ならば自分が作った料理に何か問題でもあったのかと思っただが、凜の好みをバツチリ知っているためそれはない筈だと思ひ直す。

考えても何も思ひ付かないアーチャー、それが感じ取れたのか今度はライダーが苦笑いをした。

「アーチャー、貴方は食事をとっていないでしょう。」

それがリンは気に入らないみたいですよ。」

「しかし、魔力供給があるので何かを食べる意味がないが。」

「我々に意味がなくともサクラ達にはあるのでしょうか。」

「サクラも何で食べてくれないのかと心配していましたから。」

だから私も一緒に食事をとらせて頂いてますし、とライダーは続けた。

しかし、と渋り続けるアーチャーにライダーはそれ以上言う気はないのか、最後に一言だけ言って家の中に入っていった。

「リンの怒りが爆発しないといいですね。」

ライダーにとっては召喚されてから知った凜の性格を考慮しての言葉であったのだろうが、アーチャーにとってトラウマに近いものがあった。

例えば、絶対服従であったり、ガンドの嵐であったり……

アーチャーには乾いた笑いしか出てこなかったのだった。

第六章 行動の開始（後書き）

と言うわけで、取り合えず探査をはじめました。

これから複雑な話になっていく筈です。恐らく、きっと……

七章 驚愕（前書き）

ユニーク10000

栞 100突破

ありがとうございます御座います。

こんな小説でも読んでくださる方々がいると言っつのは、嬉しいものです。感謝感謝。

一週間で作るページ数はほぼ固定しそうですが、もし良かったらまたまだ見てやってください。

七章 驚愕

時間は昼、学校の屋上に彼等はいた。

「うん、これも美味しいわ。また腕をあげたわね、士郎。」

「そんなことない。遠坂の弁当だってかなり美味しいじゃないか。なあ、桜。」

「そうですね、先輩。でも、作ったのは姉さんだけではありませんけど。」

屋上では数人の人間がほのぼのとした時間を過ごしていた。

また、お互いの弁当のおかずを交換するなどして、料理の腕を軽く競ったりもしていた。

そして、彼等の視線はとある一方を見ないようにしていた。

「流石アーチャーですね。時間を置いたものでも味が落ちないとは。」

「なんと！？これはアーチャーが手掛けたのですか……………シロウ以上の腕前とは素晴らしい。」

「いや、必要だったから身に付けたに過ぎない。そう言われるようなことではない。」

勿論そのサーヴァント達もこのときばかりはゆっくりとした時間を過ごしていた。

そして、彼らもマスター達と同じようにとある一方をなるべく見な

いようにしていた。

アーチャーは夜の会話から、なるべく一緒に食事をとるようにした。それは起きるかもしれない凜の怒りの恐怖ゆえではない……とは言い切れないのが悲しいところである。

そんな風に食卓につくようになったアーチャーに、桜はもとより凜も嬉しそうな表情を浮かべた。

だが、この場にいるのは彼らだけではなかった。

彼等が一生懸命見ないようにしている方向、そこにそれはいた。「こちらも食べてみてください。一生懸命勉強して作りました。」

「うむ。」

「どうでしょうか、美味しいですか？」

「うむ。」

「本当ですか！？嬉しいです。」

「うむ。」

寡黙な男性とその男性にベタ惚れしていると解る女性。

二人は所謂‘あぐん’をして食事をしていた。……それが、見ないようにしていた理由だ。

中々にシユールな光景である。そう、顔が引き攣りそうな程に。

何故聖杯戦争中というなかに、こんな風に一緒に食事をとっているのだろうか。

元々凜たちは聖杯戦争中と言うこともあり、他のマスター（土郎や桜）との過度な接触は控えるようにしていた。出来ているかどうかは別として。それは各々が己の力量を示すために必要なこととして、自力で情報を得ようと決めたからだ。

だが、予想外の事が起こり、一旦話し合いを行つべく集まつたと言
うわけだ。そして、その予想外の事というのがこの男女に関係して
いる。

「まだまだありますので、沢山食べてください。宗一郎様。」
「うむ、頂こう。キャスター。」

男女の正体、それは凜の担任である教師の葛木宗一郎と、そのサー
ヴァントのキャスターである。

これだけであるなら問題はなかった。只の聖杯戦争の参加者と言っ
ただけなのだから。

問題 それは葛木宗一郎が魔術回路を持たない只の一般人である
と言ふことだ。

いや、只の、と言ふことは正しくない。

葛木宗一郎はとある暗殺技能を有した、かなり高い戦闘力を持つ人
間だからだ。

魔術回路を持たないということは本来マスターになり得る筈はなく、
また直接姿を表す機会が殆どないと考えられるキャスターがサーヴ
アントである以上知られることもなかった筈である。

では何故それを知ることが出来たのか。
時間は少しだけ遡る。

~~~~~

時間は四限目の授業も後半に差し掛かっていた。  
凜は授業を真面目に聞きつつも、心はアーチャーが作ったお弁当に向いていた。

【凜、どうした。授業に集中できてないぞ。】

「（え、っ。そ、そんなことないわ。）」

【……私の作ったものを楽しみにしてくれるのは嬉しいが、弁当は逃げたりせんぞ。】

「（だから違うって言うてるでしょ、バカアーチャー。）」

そう返答していても昼御飯の時間が待ち遠しいのは違いない凜であった。

それは、アーチャーと一緒に食事をとるようになったからだ。

必要ないと言って召喚の日より食事をしようとせず、何かを口にするとしても飲み物ばかりであったアーチャー。

確かに魔力供給をしつかり行えている以上食事など無駄な行為かもしれない。

しかし、それに凜は寂しさを覚えていた。ライダーが食卓についてるだけに尚更その感覚は強かった。

まるで、自分と交流する必要はないと言われてるようだ。

だが、今朝から一緒に食事をするとわれ、凜は少し嬉しかった。  
凜の気がそぞろになっていつているとき、アーチャーは不思議な気

配を知覚した。

【むっ、これは……？】

「（……………。つて、どうしたのアーチャー。）」

【いや、今何かの気配がした様な気がしてな。】

「（‘何か’の気配？…………アーチャー、一応確認してきて。）」

何かとしか言わず、断言しないアーチャーに凜は少し考え込んだ。

英霊であるアーチャーですら完全に知覚できない気配。それが何をもらったすのか、確認すべきだと凜は判断する。

それが何かしらの害をもたらさないととも言えないからだ。

思考を一瞬で魔術師のそれに変えた凜は、時間や状況を冷静に考察した後アーチャーに指示を出した。

【ふむ、離れてしまってもいいのかね。】

「（ええ。流石に一般人の多い昼間に、事を起こすとは思えないから。」

なら、逆に今のうちに確認だけでも済ました方がいいわ。

後、確認した後の判断はアーチャーに任せる。ただし、報告はすぐにしてね。」

【了解、マスター。】

凜の指示を聞いたアーチャーはすぐに行動に移った。

アーチャーにとっても正体がハッキリと解らないそれに懸念を抱い

だからだ。

アーチャーが気配を感じていた方向　学校の正門であった　に  
向かっていると、同じく移動している存在があった。

「やはりあなたも気づきましたか、アーチャー。」  
「と言うことは君もか。」

それは、自分の様にマスターの側にいるようにしているライダーだ  
った。

回りは授業中ということで人の気配はなく、故に二人は声に出して  
会話をしていた。当然、霊体化したままで。

もし此処に人がいたなら、声だけ聞こえるという状況にパニックに  
陥ったに違いない。

そして、学校の怪談に加わったことだろう。

怪奇、授業中に突然会話が聞こえる廊下……………微妙だ。

「ええ。サクラに言ったところ、どうしても確認してきて欲しいと  
言われました。」

「ああ、それは彼女らしいな。」

苦笑いして告げるライダーに、アーチャーも苦笑いを返した。

恐らく凜のように魔術師まじゆしに関係があるものだと判断したのだろう。だからこそ、他に影響が出る前にライダーをお願いしたのだろう、とアーチャーは思った。

だが、きっと本当は行って欲しくなかったに違いない。何故なら、傷付く可能性があるからだ。

心優しい桜の事だから、怪我をしまえばきっと自分を攻めるに違いない。

行って欲しいとお願いしたせいだ、と。

だから二人はなるべく遠目での確認に勤めようと思った。

正門にたどり着いた二人は門の側で一旦足を止めた。

そして、注意深く辺りの気配を探った。

「矢張正確にはわかりませんね。一体何なのでしょうが。」  
「解らん。だが、確実に言えるのはその気配の主が学校に近づいてきていると言うことだ。」

改めて気配を探っても、その正体に当たりをつけることは出来なかった。

だが、確実に言えるのはアーチャーの言う通り学校に向かってきているということ。そして、魔術関係者だと言うことだ。

英霊である彼らが気配を感じ取れても詳しいことがわからない。それが、魔術以外の何だと言うのだろうか。

アーチャーとライダーは気配がゆっくりながらも確実に向かってきていることを認め、門のところまで待ち伏せることにした。

「さてさて、鬼が出るか蛇が出るか。それとも、別のものか。」

「少なくとも蛇ではないですね。」

此処にいるのですから。」

二人は軽口を叩きつつ待つ。

そして、数分と待たずその気配の主が彼らの前に現れた。

それは現代の服に身を包んだ女性だった。手に大きめの鞆を下げ、笑顔でこちらに向かっていった。

その姿を目にした途端、二人は理解した。サーヴァントだと。

その女性は二人に気付くことなく横を通りすぎようとした。いや、それは演技だろう。

同じサーヴァントである以上、ここまで近くにいてわからない筈がない。

これだけでこのサーヴァントに事を荒立てるつもりがないのは理解できたが、アーチャーはそんな彼女に声をかけることにした。何故なら、彼女の足が校内に向かっていたのである。

逆に声をかけられた女性は見えない場所に冷や汗をかいた。

知らない振りをすれば昼間というこの場では、見逃して貰えるだろうと思っていたからだ。



戦闘とまではいなくても、この場で何かをされれば彼女に抗う術は存在しない。

ただでさえ2対1である上に、彼女のクラスが大きな理由だった。

彼女のクラスは接近戦に適さず、遠距離攻撃を得意とするキャスターである。

故に魔術以外での攻撃方法など殆ど存在しない。あってもこの場で使用できるものでもない。

「それで、学校に何の用かね。」

「返答によっては強制的に移動させて貰いますよ。」

こうなつては仕方ないと、キャスターは答える。が、全てを正直に話すつもりは毛頭なかった。

「一寸関係者が中にいるの。その人が忘れ物をしたから渡しに来ただけよ。」

ふむ、とアーチャーが考え込んだ。磨耗した記憶の中からキャスターの事を思い出しているのだ。

ライダーは自分でも情報を鑑定しているが、主な決定はアーチャーに任せるつもりでいた。

前にも言った通りアーチャーの思考能力を認めているからであり、凜の方が真摯に聖杯戦争にあたっているからだ。

アーチャーは思い出そうとするも出てくる情報は殆どなかった。辛

うじて思い出せたのはキャスターのマスターが学校関係者であったはず、だということだ。  
それをもとに考えるが、すぐにおかしいことに気づく。  
学校には凜達意外に魔術師は存在しないのだ。

「キャスターのマスターは一般の人間か………？」

意図せずアーチャーの口から言葉が溢れ出た。  
それに、ライダーは一般人がマスターと言うことに、そしてキャスターは少ない情報からの確に自分達の事を言い当てたように見えるアーチャーに対して驚愕の表情を浮かべた。

「何を根拠にそんな事を。」

「いやなに。キャスターである君が直接神殿を出で赴くなど、マスター関連意外にあり得んと思ってるね。」

口にするつもりはなかったアーチャーだが、最初からそのつもりだったとも言つようにシレッと言葉を続ける。

しかし、アーチャーが軽度ながらもうつかりをするとは………遠坂のウツカリでも移つたのだろうか？

遠坂一族、恐るべし………

「キャスター？」

「ああ、そうだ。残っているのはキャスターとアサシンの二つ。アサシンならばこの様に表での行動などしないはず。なら、残るは一

つ。」

「成る程、だからキャスターなのですね。」

アサシンであれば昼間だけでなく、夜の時ですら表に出てくるのは珍しい。

その事からキャスターであると看破したのだな、とライダーは思った。

「……………そこまで知られて認めないわけにはいかないわね。」

ええ、確かに私はキャスターのサーヴァントで今のマスターは一般人よ。」

「今の、ですか？」

ライダーは今のと表現したキャスターに不振を覚えた。

だがそれをアーチャーが遮った。

「ここで話し込むのも何だ。もうすぐ昼飯の時間になることだし、マスターを交えての話し合いといこうではないか。」

一般人がマスターであると知った以上、我がマスターに言わんわけにはいかんしな。」

「あら、何故貴方のマスターに会わなければならないのかしら？」

「すぐに知れると思うのですが、私達のマスターはこの地のセカンドオーナーであるトオサカの人間です。」

開催者の一族である彼女等に会っておくのは、貴女にとっても損にはならないと思いますが。」

アーチャーの言葉に警戒を露にするキャスターだが、ライダーの言葉に思うところがあつたのか迷う様子を見せた。

「なに、今は昼なのでどうしようと言つわけではない。場所も学校と言つところだしな。」

その言葉が決め手となり、キャスターは会うことを決めた。

「解つたわ。こつちの不利益になることも無さそうだしね。それで、何処に赴けばいいのかしら？」

「では、マスターを連れて屋上までおいで願おう。昼食もそこで摂るといい。」

屋上であれば人が来ることは全くと言つていいほど無い。それに人払いの結界でもかければ、実質的な密室の出来上がりである。

故に、其処ほど適切な場所はないと思つてアーチャーはその場所を告げたのだつた。

アーチャーより早く召喚されていたライダーもそれを理解しているのか、特に異議を唱える事なく集まる場所はすんなりと決定した。

「解つたわ。それじゃ、届け物もあることだし先に行かせていただくわ。」

そう告げてキャスターはスタスタと校舎に向かって歩いていった。残される形になったアーチャーとライダーは、この後の行動を簡単に決める。

「では、私はサクラに教えてきます。」

「頼む。私は同時に衛宮士郎にも伝えるよう凜に言っておこう。なので直接屋上に向かってくれ。」

「ええ、ではまたあとで。」

二人は己のマスターの元に移動を始めた。

アーチャーはこの後凜に報告するかの様に話していたが、実際のところその必要は無かった。

何故なら、会話と同時に凜にもラインを通して伝えていたからだ。

よって凜は既に知っているためアーチャーにやることはなく、強いてあげるとすれば士郎を屋上に連れていくことだろうか。

だが、それも凜がやるだろう。きっと首根っこを掴んで引き摺っていくこと間違いない。

その光景が頭の中に浮かび、また昔の自分と重なって思わず目の端に光るものを浮かべるアーチャーだった。

「（お帰りアーチャー、ご苦労様。……………どうしたの？何か元気がないみたいけど。）」

【いや、気のせいだ。（キッパリ）】

「（そう？……………それにしても、正体不明の気配の主がキャスターだったなんてね。でも、何ではっきり解らなかったのかしらね……………」

「さあな。だかこの後会うのだ、直接キャスターに聞くといいだろう。」

「（それもそうね。一般人がマスターになっているってことも一緒に問い詰めないと、ね。」

フッフッフ……………」

【……………張り切りすぎんようにな。】

一見ニコやかに笑っているように見える凜。近くの席に座っていた数人の男子生徒は偶然その表情を目撃し、軽く頬を染めた。

勘違いするな！？確かに見た目は可愛らしいかもしれないが、中身は猛獣、いや悪魔だぞ！！と声を大にして言いたいアーチャーだったが、諸々の理由により自制する。

「（アーチャー、今、変な事、考えてなかった？）」

【はっはっはっ。そんなわけ無いだろう、マスター。】

一句一句丁寧に発言した凜に恐怖を感じるしか無かった。返答するアーチャーの言葉は棒読みに近いものであり、凜が尚もいい募ろうとするが丁度チャイムが流れた。

これ幸いとばかりに即時行動を促す。  
凜もアーチャーより会う時間の限られてるキャスターの方を優先して、弁当をひつつかみ教室を後にする。

ついた先は土郎の教室。凜は躊躇い無くドアを開け、土郎を呼んだ。

「衛宮君はまだ教室にいるかしら？」

「これは遠坂さん！？衛宮ですか、いますよ。」

「おい、衛宮。遠坂さんからの呼び出しだぞ。」

その声は教室中に響き、（主に男子の）視線が一気に土郎へと集まる。

土郎はその視線を気にすること無く凜へと声をかけた。

「ん、どうしたんだ、遠坂。何か用か？」

「ええ、今日は自信作なの。久し振りにどうかしら？」

自分のお弁当箱を掲げて言った。

これは以前からたまにある出来事で、その都度注目されれば嫌でも慣れると言うものだ。

注目の割に嫉妬の視線が少ないのは、幼馴染みであることが知れているからだろう。

若しくは、土郎の鈍感振りにそれはないと断定してるか。ありそうである。

なんにしろ、相手が士郎でなかったら他の人間（主に男子）の視線で殺されていたかもしれない。冗談抜きで。

「おう、いいぞ。ちょっと待ってくれ。」

そう言って、通常の鞆とは違う大きめの鞆を手にして凜へと歩み寄る。

士郎の鞆に違和感を感じるものは皆無だ。

何故なら、士郎「工具箱と言う図式が先生を含めた全校生徒に広まっているからだ。」

そうして、二人（＋）は連れ添って教室から離れていった。

「んで、ほんとはどうなんだ。」

防音の魔術を張ったことを確認した後、士郎は凜へと尋ねた。

「ちょっとした問題がね。アンタもマスターだし、一応呼んどこうと思って。」

「……………やっぱり優しいんだな、遠坂は。」



マスターと言う言葉を使うという事は、問題とは聖杯戦争に関係することだと察した。

だからと言って自分に正直に教える必要はない筈なのだ。それも立派な戦略の一つであるのだから。

なのに凜は情報を共有しようとしている。それ故に出てきた言葉だった。

言われた凜に特に変化は見られなかった。

アーチャーに対しては付き合いが数日と浅いこともあり咄嗟に反応することは出来なかったが、士郎に関して言えば十年近い付き合いがある。

士郎の天然タラシ発言にも慣れたものだ。

ハイハイと軽く返答するだけで流す。

そして、屋上の扉に到着した。

「アーチャー、もう実体化していいわ。」

その言葉を合図に黙ってついていていたアーチャーが姿を表した。

「どつちやら我々が一番手のようだな。」

屋上を見回しても、まだ人の姿は無い。

だが、一つだけこの場にはじめからある気配があった。

士郎は鞆を下ろし口を開きながら気配の主へと声をかけた。

「飯の時間だぞ、出てこいよセイバー。」

屋上の気配の主、それはセイバーだった。

セイバーは霊体化出来ないため、この様に隠れているしか出来ないのだ。

「やっつですか、シロウお腹が空きました。」

次の瞬間には三人の前に目を輝かせて…訂正、ぎらつかせている、  
「獣」が姿を表していた。

最速の英霊足るランサーもかくやというスピードだ。

「悪い悪い。でももうちょっとだけ待ってくれ。桜達も来るからさ。」

「む……それはでは仕方ありません。」

すぐに食事に取りつけないと見るや、みるみる萎んでいったセイバー。  
！。

すぐとなりでは土郎が鞆から弁当を取り出していた。鞆の大きさそのままのお弁当　重箱を。

「……相変わらずね。」

それを見てため息をつく凜。羨ましが滲んでいるのはしょうがない、女の子だから。

出し終わると同時に桜達も到着した。

手には複数の弁当箱があり、凜の手には弁当箱が一つ。

「え〜と、それって……」

「はい、アーチャーさんの分です。姉さん、忘れて行っちゃってましたよね？折角アーチャーさんも一緒に食べてくれる事になったのに。」

桜の言い分に言葉も返せない凜。

だが、桜には深く突っ込む気はなかったのか、すぐに別の話題を口にした。

「えっと、キャスターさんは、まだ来ていないみたいですね。」

そわそわと体を動かしていたセイバーは、何故此处にキャスターが来るといったのかと訝しげな表情になった。

キャスターが来る前にと、土郎とセイバーに少し前の出来事を説明した。

二人は納得しセイバーが口を開こうとした瞬間、ガチャリと屋上の扉が開いた。

キャスターが来たと思い見てみれば、そこにいたのはキャスターでなく教師　葛木宗一郎だった。自分達だけが屋上にいるのなら何とか誤魔化されたが、今サーヴァントも現界し姿を見せているため彼等は慌てた。

「あつ、先生これはその……」

「君達がキャスターの言っていた人物か。」

言い訳しようとしていた言葉を遮ったのは宗一郎だった。宗一郎の言葉に鳩が豆鉄砲を食らったような表情になった。

学校にいるのは何も生徒だけではないのだが、無意識に生徒だろうと考えていたからだ。

「え！？では、葛木先生がキャスターの？」

「ええ、宗一郎様が私のマスターよ。」

そして、宗一郎の後ろからキャスターも姿を表した。

困惑は収まりきれないが、昼休みの時間は限られているので早く食事を済ませるため食べ始めた。

そして、冒頭に戻ると言う訳だ。

キャスター達のラブラブ光線（死語）に耐えながら食事を済まし、  
漸く話し合いの体制に入るのだった。

## 七章 驚愕（後書き）

今回は此処で一旦切り。

あんまりキリはよくないですが（汗）

やっぱりもう少しぐらいページ数を増やす努力を……

## 八章 状況把握（前書き）

アーチャーの影が薄くなってしまったー！ー！ー！？  
ちよっ、自分。主役はアーチャーだろ。アーチャー大好きなんだろ。  
……自分でも解らん……。

文章って不思議デスネ。

そして、何だか説明文が多かった気がする。  
うゝむ……。。

反省反省……って毎週している気がする。  
いい加減勉強しろよ、自分よ……。

## 八章 状況把握

「さて、と。じゃあ時間もあまり無いことだし、さっさと本題に移りましょうか。」

食べ終えた弁当箱を片付け、全員が輪状になって座る。

凜達は思考を魔術師のそれに切り替え、真剣に聞く体制へと入った。凜に関して言えば、辻褄が合わない部分がないかをしっかりと探るつもりですらあった。

最初に口を開いたのはセイバーだった。

先ほど答えを得ることが出来なかった疑問を解消したかったのだから。

「それで、何故この場にキャスターがいるのですか？

それに、先程その男性をマスターと表してましたが、魔力を全く感じる事ができないのですか。」

「キャスターがこの場にいることに関しては、彼女が学校に偶々向かっていたのを私達が関知し、聞き捨てならない情報を手に入れたためだ。」

君も昼前に不思議な気配を感じなかったか？」

「……………ああ、そう言えばそんなものを感じたような。」

セイバーの問いの一部を答えたのはアーチャーだった。

自分達も感じたのだから、セイバーはもっと早く解っていたのではないかと思っただが、セイバーははつきりしなかった。



昼前と言う条件により空腹だったセイバーはそのとき感じた気配を  
歯牙にもかけていなかった。

実力ゆえに何があっても対処できるからと言えば聞こえはいいが、  
単純に頭が回らなかったのだ。そんな事でいいのか、セイバー。

「もう一つの疑問であるマスターが何故魔力を持たない一般人か、  
と言うのは私たちもこれから聞くことだ。

と言うわけで、早速経緯を教えてくれないか、キャスター。」

アーチャーの促しの言葉にそのつもりだからこの場にいるんじゃないの、  
という表情を隠そうともせず語り始める。

「私を召喚した人間はちゃんとした魔術師だったわ。

ただ、そいつが何に所属していたのか、なんの目的だったのかは全  
く知らないけど。すぐに逃げ出したから。」

キャスターを召喚したのは、それなりに年齢を重ねた中肉中背の魔  
術師だった。

始めキャスターはちゃんと己のマスターとして扱おうと考えていた  
が、当の魔術師がそのチャンスを打ち砕いた。

キャスターだと！？こんな役立たずを召喚してしまうとは、運が  
ない。

精々私を守り抜け。わかったか。

それが、クラスをいった直後にキャスターに向かつてかけられた言葉だった。

その瞬間、キャスターにマスターとして敬おうという気持ちは粉微塵に砕け散った。

数日ほどは共に行動したが、召喚者（マスターと呼ぶことすら、嫌悪した。）は何を思ったか戦闘すらしていないと言うのに役立たずだと何度も罵り、あげくの果てに手まであげようとした。恐らくは女性と言う外見であったことも影響したのだろう。

だが、いくら非力なキャスターと言えどもその身は英霊。ただの間が叶う筈もなく、逆に堪忍袋の緒が切れたキャスターに返り討ちにあい気絶した。

その隙にキャスターは主従契約を切り、記憶消去の魔術と今後物忘れが激しくなる魔術（嫌がらせ）をかけ逃亡したと言う。

「何と云うか、最悪ねその魔術師。」

マスターとして冬木に入ってきてなくて助かったわ。」

「大変、だったんですね。キャスターさん。」

「そいつ最低だな。キャスターは女性じゃないか。なのに暴力を振るおうとするなんて。」

マスター達はその魔術師に対する批判を口にする。

しかし、方向性は違うものの士郎が口にはしているのは、その魔術師の思考とあまり変わらない事に気付いていないのだろうか。

「愚かですね、クラスだけですべてを判断するなど。」

確かに私達のように対魔の高いクラスには不利かもしれませんが、それは戦い方次第でどうにかなりうることだと言うのに。

本当に魔術師なのかと疑いたくなります。」

「全くです。しかし、中々にいいものを仕掛けましたね、キャスタ  
ー。」

私なら限度ギリギリまで血を……………いえ、そんな不味そうな存在は止めた方がいいですね。気分が悪くなりそうです。」

「やれやれ、英霊をなんだと思っているのだろうな、その魔術師はまっ、自業自得といったところか。」

サーヴァント達は男に対し静かに（？）怒っているようだ。

それもありなん。男の行動は英霊と言うもの全てをとぼしているようにも思えるのだ。

「逃げ出したはいいんだけど、契約も切ったからすぐに消えても可笑しくない状態だったの。」

「ちよつと待って。何でサーヴァントの方から契約が切れるの?」

「あら、私だって魔術師よ。そう簡単に自分の手の内は話さないわ。」

「ぐっ、それもそうね。」

……………でも、要警戒と言った所かしら（ボソツ）」

凜が話の内容で気になったことを尋ねるが、内容が内容の為簡単には口を割らない。

念の為に聞いたただけであった凜だが、僅かながらも警戒を強固にした。

そして、キャスターの話は続く。

「森のような場所で私は殆ど消えかけていたわ。何も出来ないで消えるのは嫌だったけれど、魔力もマスターもない状態で残れるなんて普通思えないしね。」

でも、そこにこの方が現れたのよ。」

キャスターはうつとりと頬を染めながら明後日の方を見つめた。どうやらその時の光景を思い出しているようである。

表情はまさに、恋する乙女であった。

逆に、宗一郎の方は動揺の欠片もなく、冷静沈着であった。事実である以上、特に口を挟む必要性を感じなかったのだ。

「彼は消えかかっている私を見ても、眉一つ動かさなかったわ。だから始め魔術師なのかって思ったけど、すぐ違うって解ったわ。魔力が全くなかったんですもの。」

そんな人だから一か八か聞いてみたの、私のマスターになってもらえないかって。魔力だけなら自力でどうにかできる可能性があったから。」

キャスターは体が透けている自分をただ見つめるだけの宗一郎に、魔力を持たない一般人であつても聖杯戦争に参加出来る力量があると思つた。

だから、受け入れられようと拒否されようと一度聞いてみようと思ひ聞いたのだ。

願いが叶う聖杯を得る戦いに参加してみないか、と。

そのときの宗一郎が何を考えていたかは定かではないが、その提案を受け入れた。

詳しい情報など話してないにも限らずだ。

その時からキャスターは宗一郎に惹かれ始めたといっても過言ではない。

散々人生を弄ば<sup>た</sup>れば果ては裏切りの魔女とまで言われたキャスターにとって、すんなり受け入れられたと言うだけでも心に響くものがあったのだ。

「本当に、あの時に来てくださったのが宗一郎様で良かったわ。

そのお陰で私はこうして今も現界してられるし、幸せを感じるこ  
とが出来ているんですもの。」

ホウツと息を吐き話を切るキャスター。

キャスターが宗一郎との邂逅を熱く話しているのに対し、隣にいる宗一郎はどこまでも変化がなく落ち着いていた。

これだけ見るならばキャスターが一方的に思いを寄せているように見えるだろう。

だが、そんなことはない。宗一郎とて少なからずその様な感情を抱いていた。

暗殺術を教え込まれていた葛木宗一郎は、愛情と言うものがよく解らなかつた。

そして何事にも効率の良し悪しで考えてしまう節があり、そこに自

分の考えを挟むことは希だった。

そんな彼がキャスターに出会ったのは偶然である。

習慣の鍛練を行うべく人目につかない場所を歩いていたとき、それを目にした。

顔を驚きに染めるそれを一瞥しただけで自分の行動に影響の無い、もの、と断じた宗一郎は、気にした素振りも見せずに止めていた足を動かさそうとしていたときそれは声を発した。

その提案を受け入れたのに理由など無い。そう、気紛れ以外の何物でもなかった。

宗一郎は聖杯を欲しいとは思わなかったし、またかける願いも存在しなかった。

自分でも理由なき判断をしたのに驚いていた。

行動を共にすることとなり家に帰るとき、キャスターをつれていくのに婚約者と言う設定にした二人。

何故かと言うと多くの人間が同じ敷地内に住んでおり、宗一郎はそこの一室を借り受けて住んでいる人間だったからだ。

自分を慕う言動をするキャスターに、始め演技をしているものと宗一郎は思っていた。

だが、キャスターの瞳は真摯そのもので、鍛えられている観察眼はそれを真実と判断した。

これには流石の宗一郎も困惑した。自分は最低限のやり取りしか交わしていないと言うのに、なぜ自分に好意を寄せるのだろうか。

宗一郎は変わらず寡黙で素っ気ないとすら言われるような態度を取

り続けるが、キャスターはめげる所かますます情を深くしていった。そんなキャスターを見ている内に、宗一郎の胸に暖かいものが灯るようになった。

それがなんなのか解らないが、放っておく事も出来ないと分析し始める。

その結果、たどり着いたのはそれが愛情若しくはそれに近い感情であると言ったことだった。

理解できないと思っていた感情を自分が持ったと言ったことに宗一郎は驚愕する。

だが、悪くないとも思った。

「私達は今の生活が維持できればそれで文句はないわ。だから、聖杯戦争に参加する意思はもうないの。」

「ふん。ホントかしら。」

キャスターの言葉に懐疑的な反応を示す凜。

言葉を鵜呑みにするのは危険と知っているからの反応だ。

それはキャスターとて理解している。が、やはり本音を疑われるのはいい気がしない。

証拠の代わりに魔術的公約が必要かと考えていたキャスターに、思わぬところから助けが入った。

「リン、キャスターの言っていることは恐らく本当でしょう。」

「なに、セイバー。解るの?」

「ええ、私の勘は本当だと告げています。それに、キャスターなら結界をはって強襲することも可能のはずですが、それをしていないことが何よりの証拠でしょう。」

それに凜は納得した。セイバーのスキル直感から派生する日常での勘も信頼に値することを知ってるし、キャスターとして呼ばれるほどの腕前なら結界+強襲も十分可能であることを認めただ。

「解ったわ。キャスターの言葉を信じましょ。」

「あら、有難う。」

あっ、一つ忠告しておくけれど、本拠地に巻き込まれないよう防衛手段を備えているから。

不用意に近づいて怪我をしても知らないわよ。」

それは当然の処置といえるだろう。例えそのつもりがなくても戦闘狂が仕掛けてこないとも言えないからだ。

ほぼ全員がその防衛手段を魔術結界の類いだと捉えていた。敵意があるものに対してのみ発動するのだろうと。

だが、そうではないと一人だけ正確に推測しているものも存在した。

「ふうん。まっ、仕方ないわね。鍛練の一つとでも考えておきましょ。」

「えっと。気を付けます。御忠告ありがとうございます、キャスターさん。」



魔術師のうち二人は特に気負う様子を見せなかったが、一人に関しては冷や汗を流していた。

その人物とは……お分かりだろうか衛宮士郎だ。

「え〜と……………俺、物凄く不安なんだけど。

そういうのまだよく解んないし……………」

「何言ってるんですか、先輩の方がすごいじゃないですか。」

「凄いつて、何がさ。」

「あつきれた、まだ自覚してなかったの？」

あんな人工の物にしる自然の物にしる、結界とかの空間異常に人一倍敏感じゃないの。」

そう、士郎に使える魔術は少ないが、何故か空間の歪みとも言えるものを感知する能力が高かった。

本人はそれがどれだけ凄いいことなのかよく理解してないのだが。

また、士郎が発動できる魔術で一つだけ特殊な働きをするものがあるのだが、今は関係ないのでおいておくとする。

「そうか？ だって何となくわかんないか？

なんか変な空気がするとか、この辺りは見にくいなとか。」

「魔術を使って調べない限り、士郎みたいにハッキリと解んないわよ。」

「ええ、ですのでシロウの身から事前に危険を遠ざけるには好都合です。」

嫌な気配を感じた場所に一人で近づかないでくださいね。シロウは無茶ばかりしますから。」

セイバーの言葉に視線を泳がせる士郎。

純粹に自分の身を心配するセイバーにいたたまれなかったのだ。

自分がそれなりに無理をしてしまう人間であることは、士郎とて理解している。

例えば風邪を引いているのにバイトに行ったり、自分の用事を後回しにして人の頼みを聞いたたり。

これから聖杯戦争と言う形で魔術が深く関わってくるので、その無茶が怪我に繋がりがかねないかセイバーは心配なのだ。

だが、理解しているのと自重できるかはまた別問題である。

士郎にとって人を助けると言うことは恩返しの意味も含まれるのだから。

「そう言えば、キャスター。貴女の気配が感じられにくいのは何故なのでしょう？」

支障がなければ是非疑問を解決したいのですが。」

「私も不思議に思ってたのよ。サーヴァントが気配を読みきれないってあり得ないわよ。」

取り与えず区切りがついたと判断したライダーは、邂逅時から疑問に感じていたことを尋ねた。

同じく気になっていた凜とアーチャーもキャスターへと視線を向けた。

桜は特に気にならないようで合わせて見ていると言う雰囲気を出し

ており、土郎とセイバーは深く考えていなかった。  
考えていない方向性は違うが。

「ん〜……ま、それくらいは話してもいいわね。」

別に大したことはしてないわ。ただ、認識障害の魔術に手を加えて、  
気配を人間に近くしただけよ。」

十分に大したことである。流石はキャスター、魔術に関してはお手  
のものと言ったところか。

「結果から言えば失敗ね。」

サーヴァント対策だったんだけど、逆に目立つちゃったみたいで  
すもの。」

心底残念そうに呟いたキャスター。

そこで、昼休み終了の予鈴が響いた。

「もう時間か。まあ、知りたいことは知れたし、これでヨシとしま  
しょう。」

「そうだな、欲張るのは頂けん。最低限の情報は得られた。それで  
十分だ。」

教室に戻ろうと凜達が立ち上がってドアを見ると、まだ宗一郎がそ  
こに立っていた。

教師である宗一郎は授業の準備があるため早く行かなければいけないはずなのだが、どうしたのだろうか。

全員の、いや生徒三人の視線が自分を向いたことを確認した宗一郎は、徐に口を開いた。

「お前たちはこの学校の生徒で私は教師だ。」  
「……………はい。」

何が言いたいのかわからない。  
だが、宗一郎の表情は真剣で（何時もだが）時間を気にしながらも真面目に聞いていた。

「…参加する気はないにしても、参加の資格は有している。  
困ったとき手伝いくらいはしてやろう。」

不器用ながらも真っ直ぐな優しさに、三人は感動してしまった。

宗一郎はそれだけ告げてさっさと中に入った。  
だが、キャスターはまだ残っていた。

「ああ、宗一郎様だったら、何てお優しい人なんでしょう。  
宗一郎様がそう仰るなら協力してあげないこともないわ、魔術師の基本を守ってさえくれれば、ね。」

魔術師の基本、それは等価交換である。  
どんな関係であろうと、魔術師であれば当然だ。

冷酷な魔術師の表情で告げるキャスター。しかし、セイバーを見つめ一気にそごうを崩す。

実は屋上にきてセイバーを見た瞬間から、緩みそうになる頬を一生懸命押さえていたのだ。

「まっまあ、もし何もなかったら、セイバーを一寸貸してくれるだけでもいいわ。」

「うえ！？いや、流石にそれはちょっと……」

そう、いくら戦う気がないとと言っても、脱落していない状態で己のサーヴァントを貸し与えるなど言語道断。

だからこそその断りなのだが、キャスターは一気に落ち込んでしまった。

実はキャスターは無類の可愛い物好きなのである。

そのキャスターにとって、セイバーは正にクリーンヒットな存在だったのだ。

先程の感動も緊張も吹っ飛び、その場に残ったのは脱力感だけだった。

学校も終わり、凜と桜は帰宅してくつろいでいた。

「ハア、なんか今日は疲れたわ。」

「お疲れ様、マスター。」

そんな君の為にリラックス効果のあるハーブティーをいれてみたのだがどうかね？」

「んっ、ありがと。貰うわ。」

アーチャーの手元から立ち上る薫りだけで、凜は疲れが軽くなったような気がした。

紅茶を一口含めば強すぎない香りが口内に充満し、美味しさを最大限に引き出しつつ渋味が全く出ていない味が身体中に染み渡った。

「なによこれ、スツゴク美味しいじゃない。」

アーチャー、あんた料理だけでなくこんなことも出来たのね。」

「なに、体に染み付いていたのだろう。以外と自然に動けたからな。桜、君も一杯どうかね？」

「では頂きます。ありがとございます。」

桜のカップに紅茶を注ぐアーチャーを見つめる凜。

アーチャーの動作は流れるように洗練されていて、まるで執事のようだった。

「（アーチャー、て言うよりホントは執事バトラーのサーヴァントなんじゃ

ないの、こいつ……って、そんなことあるわけ無いか。」

凜は余裕が出てきた思考でつい下らないことを考えるが、すぐに打ち切った。

こんな美味しい紅茶があるのに、変に思考に没頭してしまつては勿体無いと感じたのだ。

凜は今だけ何も考えず、只紅茶を堪能することにした。

紅茶を飲み干し休みである明日の計画を部屋で話し合おうと凜が椅子から立ち上がったとき、桜が凜に声をかけた。

「あ、あの。姉さん。」

「どうしたの、桜？」

「明日お休みなので、ライダーとお買い物に行こうと思って。」

「あら、いいじゃない。好きにきなさい。」

以前から楽しみにしていたショッピングに行くと言つ桜だったが、それを凜に告げてきた。

仲の良い姉妹だがマスターとしてある程度行動を隠した方が良い筈なのだが。

「それですね、あの……その……」

「？」

言い淀む桜。一寸赤くなつてもいる。

何が言いたいのか全く推測できない凜は、ただただ首を傾げるばかり

りだった。

魔術関係において察しのいい凜ではあるが、日常の事となると途端に鈍くなる。

傍観していたアーチャーは桜が何を言いたいのか判り、仕方ないとばかりに手を差しのべることにした。

「凜。桜は君とも一緒に行きたいのだ。だろう？桜。」

「は、はい！一緒に買物に行きましょう、勿論アーチャーさんも。」

期待の眼差しを向ける桜。  
その眼差しに凜は唖った。

桜の困ったような、そして懇願するような眼差し。凜はそれにめっぽう弱かったのだ。

狼狽えて答えを返せずにいると、桜が俯き落ち込み始めた。

「そうですよね。駄目、ですよね」

「~~~~っ!? わかった、一緒に行くから、泣かないの桜。」

聞いて、満面の笑みを浮かべる桜。

姉さんと出掛けるのも久しぶりだ、とはしゃいでいる。

「で、ライダー。桜のあの行動は天然かね、わざとかね？」



「私にも判りかねます。ですが、桜が喜んでいるなら私には問題ありません。」

的確に凜のツボを押さえている桜の行動に、アーチャーは桜もやっぱり魔術師だなと認識した夜であった。

パタパタと小走りの足音が邸内に響く。

「桜、準備できた？」

「はい、大丈夫です。姉さん。」

玄関先でお互いをチェックしあう二人。その傍らに各々のサーヴァントが立っている。

ライダーは魔眼封じの眼鏡をかけ、服装は簡単なTシャツにジーパンと言ったラフな格好だった。

ライダーが着ても違和感なく、かつ人から見てサイズが気にならない様な格好を選んだらこうなったのだ。

アーチャーは黒のシャツに同じ色のスラックスをはいている。

肌の色も含めて黒尽くしである。だが、これがまたにあっていた。

アーチャーの服に関しては、遠坂家の物ではなくいつの間にかアーチャーが身に付けていたのだ。

父親の服で着せ替え人形にしようとしていた凜は、そのとき残念そうな表情をしていた。

そして、いつか現代の服を使って実行しようと思ったのだった。

「よし。忘れ物もないし、そろそろ出ましようか。」

「はい。いこう、ライダー。」

そして、ニコニコと行動を見守っていた母親に顔を向けた。

「ふふ、楽しんでらっしゃい。英霊のお二方も今日はゆっくりしてきてくださいね。」

葵も本音を言えば一緒に行きたかったのだが、家事の事もあり断念した。

代わりに、帰ってきたら沢山買い物の様子を話して貰おうと考えた。

「それじゃ、気をつけて行ってきなさい。」

そうそう、最近通り魔みたいなのがいるらしいから十分に気を付けるのよ。

反撃にしてもやり過ぎては駄目よ。解ったわね。」

「はい。」

いや、心配する箇所が違う。普通襲われること自体を心配するものだろう。

……自分の子供を十分に理解してるとも言えるが。

「やり過ぎ、ですか。見ている限り否定できないのが何とも言えませんね。」

「その場合は我々がすぐ対応した方が良さそうだな。血が上った凜は何をしでかすか解らん。」

頷きあう二人。

その会話は漏れ聞こえないよう潜めて行われていたのは、言つまでも無いだろう。

「それでは行ってきます、お母様。」

「お土産も買ってきますね。」

楽しそうに会話をする二人を眺め、アーチャーは珍しく穏やかな気持ちになった。

大変だろうが、今日はきつととても良い一日になるだろうと思う。

だが、楽しむどころか疲れはててしまうことになるとは、誰も予想できなかった。

## 八章 状況把握（後書き）

次回までは日常な感じで、そろそろ本格的な戦闘を書かないと。

一応自分なりに伏線的なものを今までのも含め書いてみたんですが、どう書けば伏線と判りつつも予測できないものになるかは難しいです。すね。

ちゃんと回収しないと。

## 九章 休日の騒動（前書き）

時間がかかった上に構成が甘くなってしまったかもしれない。

息抜き話的なものとして多目に見てもらえたらと思います。（汗）

## 九章 休日の騒動

家から出た四人は様々な箇所へ行くための交差点に足を向ける。凜と桜は笑顔を浮かべ、とても楽しそうな雰囲気を醸し出していた。

「ふっ、こうしてみるとそこらにいるの少女と変わらんね。」  
「そうですね。」

アーチャーとライダーはそんな二人を後ろから見つめつつ、ついていっていた。

自分達のマスターを見つめる目は、限りなく暖かった。前の聖杯戦争を知るアーチャーはひとしおだ。

確かに一度は絶望し、過去の己を殺そうと考え………実行した。だが、自分とは違う、自分から答えを得ることができ、再度信念を持ち直し貫くことが出来た。だが、それでも掃除屋としての仕事は変わることなどなく、守護者として殺戮の中に身を置いてきた。

そんな自分が守護者として派遣され続けていても考えていた幸せ……

………  
そんな幸せが詰め込まれた様なこの世界………  
召喚されて数日たつが未だに消滅間際に見ている夢なのではないか  
と思うときがある。

「どうしました、アーチャー？」  
「何やらぼんやりとしている様ですが。」

「いや、何でもない。」

慌てて思考を振り払うアーチャー。

現実にいる以上答えがないことを考えていても埒があかない。

ふと、近くにサーヴァントの気配を感じた。

よく知っていて、あまり知らない気配。

「ライダー。」

「ええ、この気配は彼等ですね。」

どうしましようか？」

「ふむ……まあ、このまま放置で良いだろう。」

問題があるようには思えん。」

「そうですね。私もその考えに同意します。」

このまま行けば丁度良いタイミングになりそうですし。」

とうとう道路の交錯地点に到着した。

和風の住宅街に繋がる道から姿を表したのは、士郎とイリヤそしてセイバーだった。

霊体化して姿は見えないが、バーサーカーも側にいることも気配でわかる。

他のサーヴァントならともかく、バーサーカーが実体化してお出掛けなど出来よう筈もない。外見的に。

「「「「あつ。「「「「

出会って声をあげたのはマスターである四人だけだった。どうやら、セイバーも察知した上で放置していたようだ。

「あら、リンとサクラじゃない。貴女達もお出掛け？」

「も、ってことは士郎達もなのね。」

「買い物か？こう言う風に会うのは珍しいな。」

「はい、ライダーと買い物に行きたくて。」

仲良く喋り出す彼等。……………一応聖杯戦争中何ですけどねえ。

「それにしても、二人だけで出掛けるなんて珍しいわね。」

「いや、イリヤがついていくって聞かなくて。今日はお詫びとして一成を誘って出掛けようって思ってたんだけどな。」

「なによ、シロウったら。たまには一緒に買い物ぐらい良いじゃないの。」

「士郎…あんだ、お詫びっていつて前に夕飯ご馳走したじゃないの。」  
「あれは遅くなった分で、今日は巻き込んだ分だ。全然違うぞ。」

士郎の返答に頭を押さえる凜。

桜は先輩らしい、等と微笑んでいる。

イリヤとセイバーに至ってはいつもの事だと、気にもしていないようだ。

ライダーは興味無さげな顔で干渉を貫き、アーチャーは私はこんなに馬鹿だったか、と凜のように頭を抱えたい気分だった。まあ、



そんな感情は微塵も表に出していないため、誰も気付いてはいないが。

「遠坂達も新都に行くんだろ。どうせだから一緒にいかないか？」

「あんた、それほん……って、そうに決まってるわよね。そう言う奴なんだから……。」

桜、どうする？それでも良い？」

「あつ、私は……。」

チラッとライダーを振り返り、'サクラのしたいように'、'とでも言うような笑顔を見て己の考えを述べた。

「私は、良いと思います。それに、みんな一緒の方が楽しそうですし。」

凜は、この買い物は桜が立案者だからと桜のしたいようにさせるつもりだ。

それは、言い出した本人が楽しめなければ意味がないと考えていたからだ。

桜の返答を聞いた後に、士郎はイリヤへと声をかける。

「イリヤもそれで良いか？」

「ぶー、決めた後に聞かれても反対できないじゃない。

仕方ないなあ、私はお姉ちゃんなんだから、シロウのお願い聞いて

あげる。」

イリヤはよく、お姉ちゃん、と言う言葉を使っていた。見た目だけなら逆に見えるため、他の人へのアピールも含まれているからである。

話が一応纏まったのを見計らい、アーチャーが移動を促す。

「話が纏まったところで移動を開始するぞ。話は移動しながらでも出来るが、時間は待ってくれんぞ。」

それもそうだと、一成のいる柳洞寺へ向かい始めた。

柳洞寺へ初めて来たライダーは目を見張った。

「これは………凄いものですね。」

ライダーが驚いたもの。それは柳洞寺に張り巡らされた一種の結界である。

柳洞寺は龍脈の溜まり場の一つであり、その影響かは知らないが鳥居の入り口以外は結界が完全に覆っていること。

そして入り口以外から侵入しようとする場合、サーヴァントを含む霊的存在に負荷がかかることなどを説明した。

「成る程。それにしても、中が窺えないとは自然の物にしてはかなり強固な結界ですね。」

石段を登りながら呟くライダー。アーチャーは誰にも解らないよう、少しだけ警戒を強めた。

恐らくこの先で待っているであろう存在を知っているが為に。

この世界であることと昼間であることを考えれば、そうなる可能性は限り無く低い。

だが、低いだけで無いと言い切れないからこそ、慎重すぎる予測の上の行動を行っていた。

石段の頂上にたどり着き鳥居を潜ろうとした瞬間、それは来た。

ヒュッ

カン

鳥居の影から現れた男が無造作に、しかし素早く手の木刀を降り下ろしてきたのだ。

念のためと警戒していたアーチャーが素早く動き、投影した双剣の片方（瞬時に武器を見極め、刃は潰してある）で防ぐ。

それに、ほうと相手の男　袴に似た着物を来た、長髪をポニーテ

ールに纏めている　　は感嘆の声を溢す。

「いやはや、油断の無い御仁よの。」

「ふむ、影撃ちが君の得意技かね？たいした特技だな。」

男の言葉には反応せず、いつものように皮肉な物言いをするアーチヤー。

鷹の目とも評されるその鋭い目は更に細まり、威圧感を持って相手を見据えている。

だが、相手もその程度で怯むようなことはなかった。

他の者達も結界が関係ないほど近くに寄ったため、その男の正体が何であるか理解した。

「うそ、サーヴァント!？」

「何でこんなところにいるんだ。」

なぜこんな場所にサーヴァントがいるのか。近くにマスター（らしき人）の気配がしないためその驚きは大きかった。

「いかにも、我が名は佐々木小次郎。アサシンのサーヴァントだ。」

男　アサシンの言葉に、彼等は思わず脱力した。

隠すことが基本である真名を会ってすぐ明かすなど誰が予想出来よ

うか。

僅かながらも交流を持つセイバー達とですら明かしていないというのに。

「……アサシン、そう簡単に真名を明かしていいのか。」

「なに、我が望みは強者との戦い。故に問題はない。」

しれつと言い放つアサシン。

「うーん、珍し……くもないかもね、戦いだけが目的なら。」

「そう言うもんか？イリヤ。」

「多分。十年前の聖杯戦争でも、堂々と名乗るサーヴァントがいたってお母様がいつてたし。」

二人の衛宮の会話を聞いて納得する二人の遠坂。

凜達もその話は聞いていたからだ。

「理解もしたところで続きと「アサシン殿、客人に斬りかかってはならぬとあれほど言ったでしょう!？」……いけぬようだな。」

声のする方へ皆が向くと、此方に走り寄る一成がいた。

それを認めたアサシンはオモチャを取り上げられた子供のような様な表情だった。

そこから、どれだけ手合わせと言つものに渴望しているのが窺えた。

「つと、寺への客人ではなく衛宮だったのか。」

「ああ、一成。お早う。」

「うむ、おはよう。して何用なのだ？」

疑問を投げ掛ける一成。アサシンはその後ろで鳥居の側に戻った。

「いや、もし今日暇だったら一緒に出掛けないかと思ってさ。無理ならいいんだけど……。」

「なに！うむ、問題ないぞ。是非行こうではないか。」

ウキウキとしながら、準備をするため家に戻る一成。他の者達は何とはなしについていていた。

「なあ、一成。さっきの事だけどぞ……。」

「アサシン殿の事か？」

歩いてる間無言のままと言つのもアレなので、士郎は一成に話しかけた。

内容はアサシンに関する事だ。なぜいるのかは勿論、それなりに親しそうな関係もだ。

「名からすると彼もサーヴァントと言っものなのだろう？」

「なんだ、気付いてたのか。じゃあ聞くけどさ、何でサーヴァントがいるんだ？」

一成は土郎の友人であり魔術師でないため、教えて貰えるだろうと思っ聞いた。

「彼は今家を間借りしている方が連れてきたのだ。今思えばその人が魔術師であり、ここに来てから召喚したのであるうな。」

「何？と言っことはここに魔術師がいるわけ？」

セカンドオーナーの家には何の報告も来てないわよ。挨拶もないなんてどんな目にあっても仕方ないってわかつてるのかしら。」

力ある霊地には管理を任されている一族が存在する。

もし、その土地に魔術師が入る場合管理者であるセカンドオーナーに挨拶をするのが基本である。

それがなかったため凜は憤っているのだ。

触らぬ神に祟りなし、とばかりに土郎は会話を続ける事にする。

「それで、その人はどんな人なんだ？」

「ふむ、彼女はとても優しそうな方だな。僧たちにいつも気を配っ

てくれておられる。

それに、我が兄代わりの人の婚約者でもある。」

「へえ、彼女って言う事は女の人なんだ。

それに、兄代わりつてのは初めて聞いたな。」

「そうだったか？話していたと思ったが。」

雑談を交えつつ歩みを進める。

後ろで士郎達の会話を聞いていた幾人かは、ん？と何かに気づいたようだ。

「サクラ達、いきなり黙り込んでどうしちゃったのよ。」

「いえ、こんな話をどこかで聞いたような気が……………」

住居部にたどり着き、皆を待たせて軽く準備を済ませようとした時、  
から声がかかった。

「あら、一成くん。今からお出掛け？」

「はい、友人と。すみませんが家の事をお願いしても良いでしょうか、メディアさん。」

現れたのは昨日学校で話し合ったキャスターだった。  
キャスターと凜達の間、沈黙が落ちる。

「えーと、何でここにいるのかしら？」



「いや、一成とは友達だし。」

キャスターはそんなことを聞いていた。

「ふーん、貴女の真名メディアアって言うんだ。‘裏切りの魔女’かあ。」

「イリヤ、昨日ちゃんといったる。キャスターは戦わないんだから手を出したらダメだぞ。」

「解ってるわよシロウ。」

意味ありげに呟いたイリヤに不安を覚えて、士郎は念を押した。

「すみません、キャスター。我々はただ買い物物の誘いをしに一成を訪ねただけです。」

セイバーの姿と買い物という言葉にキャスターは反応した。それにアーチャーは嫌な予感がした。

可愛い物好きのキャスターがこう言う機会を見逃すはずがないと思っただからだ。

「お買い物って、どんなものを買うか決めているのかしら？」

「……？ええ、基本、服屋を回ることになってますが。」

服と聞いた途端、キャスターの目が子供のように輝いた。それはもう、キラキラと。

アーチャーは口許がひきつりそうになるのを必死に堪える。

キャスター様子に気づいた他の者も、思わず一歩下がっていた。

「ねえ、私も同行してはダメかしら？」

私もそろそろ服がほしいと思っていたところなの。良かったら意見を貰いたいわ。」

うふふふふ、と笑いながらいうキャスター。

言った言葉が本当の目的でないのは明らかだが、なんというか断れない空気が流れていた。

ジーーーー

「わ、私に聞かれても、その……」

ジーーーー

「それに貴女は、ここの人で……」

ジーーーー

「そもそも、サーヴァント同士があまり馴れ合つのは……」

ジー——

「……………シロウ、イツセイ。助けてください!？」

ひたすらセイバーを見つめるキャスター。

セイバーは自分が決めることは出来ない、拒否の言葉を言っがそれでも視線は揺るがない。

見つめる。見つめる。見つめる。ひたすら見つめ続ける。

それに半泣きになりセイバーは助けを求めた。

その時、‘泣き顔も良いわね’という言葉が聞こえた気もしたが、聞かないふりをする。

そう、聞いてないと言いきかせる。

「むづ。どうする、衛宮。自分も誘われる身だからな、そちらが決めてくれ。」

「え、と言われてもな。」

チラツ、と士郎が同行者に目を向ければ、キャスターの反応にもうどうでも良いんじゃないと言っ反応が帰ってきた。

「ああ、うん。良いんじゃないか。一緒にいっても。」

「(パアッ)ありがとう。じゃあ準備してくるわね。」

士郎の言葉を聞いた瞬間、きびすを返したキャスター。  
それに続き、一成も部屋に戻っていった。

「…ねえ、桜。」

「…何ですか、姉さん。」

「昨日の時点で気付いてはいたけど、キャスターってホントに可愛いもの好きなのね。」

「そふみたいですね。まさか、あれほどとは思っていませんでしたけど。」

それに皆がうんうんと頷く。

反応がないのは、昨日の話し合いにいなかったイリヤだけである。

準備が済んだ二人も合流し、再び新都に向けて出発する。

鳥居に差し掛かったとき、キャスターはある方向に声をかけた。

「アサシン、お留守番お願いね。あと、一成くんに聞いたけど、今度人に襲いかかったらお仕置きよ。」

「やれやれ、僅かな楽しみですら取り上げるのか。だがまあ、一応承知しておこう。」

この会話と一成の言葉から、真実が見えた。

それを、全員が理解した。

「ふむ。信じがたいが、矢張アサシンは君が召喚したのかね、キャスター。」

「ええ、そうよ。私も魔術師、出来なくは無いと思ったからね。」

アーチャーがキャスターに聞くと、すんなり認めた。  
言葉から確信に満ちた響きが認められたためだ。

キャスターとは魔術を極めたものが呼び出されるクラスである。  
その為、サーヴァントの身であっても召喚は不可能ではないだろう  
と思ひ、またキャスター程の力があれば不足があるうと他の部分で  
補えると判断したのだ。  
故に、身を守る手段のひとつとしてアサシンを召喚したのだ。

「不用意に入り込んでしまえば、彼に排除されてしまうと言っわけ  
ですね。」

結界でなくサーヴァントと言っのが予想外でしたが。」

笑みを深めるキャスター。

彼らが勘違いしていたのを理解して、あえてそうなるように仕向け  
ていたからだ。

直接会った今となつては、もう意味はないが。

そして、新都に到着し、先ずは昼御飯を取ることにした。

「それで、何処に行くのだ？凜。」

「そうね、結構人もおいしい、ファミレスが一番良いかしら。」

辺りを見ながら考えを巡らせる。

他の人間も一応考えるだけは考えるが、約一名だけは違う。

セイバーはうつとりしながら辺りをみていたのだ。

それを理解していたもの達は放置を決め込む。

近くのファミレスにいき、席を確認するが時間もちょうど昼時のため空き数が足りなかった。

他何件かも回るが、同様な結果だった。

セイバーが目に見えて落ち込んだ。

彼女にとって現代の食事はいくら食べようと飽きることはなかった。だから毎回毎回、食事と言うものは楽しみであった。

今回は滅多に無い外食と言うこともあり、楽しみも大きかった。ので、反動もすごかった。

「（シユン）……」

「大丈夫よ、もうちょっと探しましょ。」

「そうですね、すぐ見つかりますから。」

「俺、あそこも聞いてくるな。」

「セイバー、よしよし。」

マスターズは一生懸命セイバーのご機嫌をとろうとしていた。

サーヴァント達と言えば、アーチャーは過去の経験から無言を貫き、そんなアーチャーを見てライダーも口をつぐむ。

キャスターは……

「（ああ、可愛い可愛い。落ち込んだ姿も可愛いわ。シャシンと言うものにとって残しておきたい……はあはあ。）」

うん、自重しろ。

幸いなのは表情に出していないことか。

だが完全に隠しきれてはないようだ。

不穏な空気を感じてかアーチャー達はキャスターから少し離れた位置に立っており、人の流れも僅かにそこは少なかった。

士郎が戻ってくるもやっぱり席を確保できなかったようだ。

こうなつてはファーストフードしかないかと言う流れになったとき、事態は動いた。

「そんなところに何を突っ立っておるのだ。」

声をかけてきたのは金髪でライダースーツを着た男だった。  
アーチャー達は人でない気配を感じとり、僅かに警戒をにじませる。

「アーチャー！？あんだ、こんなところにいたの！」

その男は第四次聖杯戦争において、アーチャーのクラスで呼ばれた男だった。

「何だ、トキオミの娘達か。こんなところで何をしておる。」

「それはこっちの台詞よ、家にも帰らないで。」

事態を理解できないキャスターは近くににいるアーチャー達に尋ねた。

「ねえ、アーチャーって貴方の事じゃなかった？」

なぜ彼がアーチャーと呼ばれているの？」

「奴がアーチャーと呼ばれているのは、前回アーチャーとして呼ばれたかららしいのだが……」

「ええ、なぜいるのでしょうか。」

「……もしま、例の話し、セイバーだけではなかったのでは？」

疑問符を浮かべるキャスターに、セイバーから聞いた話を伝える。  
キャスターもライダーと同じ結論に至った。

則ち、四次のサーヴァント全てが現界しているのではないかと言う



ことだ。

証明するのは聞くのが一番だが、今は聞ける雰囲気ではないため議論は一旦ここで終わらせた。

「何故我が言うことを聞かねばならん。我は王ぞ。」

「……言っても無駄か。」

「ふん、理解したか。」

むっ、そこにいるのはセイバーではないか。成る程、我に会いに来たの……か……。」

ここに来て凜達の後ろにセイバーがいることに気づいたアーチャー（金）だが、いつもと様子が違った。

沈んだ表情に潤んだ目、今にも壊れそうな雰囲気醸し出していた。その様子はアーチャー（金）心臓を貫いたのだった。

「どどどど、どうしたのだ、セイバー。」

何故そんな顔をしておる。」

「アー……いえ、ギルガメッシュですか。」

セイバーはアーチャーと言おうとしたが、紛らわしくなると思い真名を呼ぶことにした。

「なんだ、特別に我が力になってやらんでもないぞ。言ってみるが

いい。」

「いえ……その……」

「昼飯を食べようと思ってたんだけどさ、どこも一杯で入れなかったんだよ。」

言いくそうにするセイバーの代わりに土郎が答える。

「なんだ、そんなことか。特別に我の店に招待してやろう。なに、我の奢りだ。」

ギルガメッシュはここぞとばかりに懐の大きいところを見せようとした。

これで我の事を見直す筈。そしてゆくゆくは……と思ってる辺り懲りない男である。

全員がギルガメッシュがオーナーを務める店に移動し、昼食を済ます。

味は、流石高級店の一言だった。

そして、流れるにギルガメッシュもついてくることになる。だが、いつもを取り戻したセイバーが鋭い一言を放つ。

「それで、いつまでついてくる気ですか。ギルガメッシュ。」

「つれないぞ、セイバー。我とセイバーの仲ではないか。」

「ええ、だから言ってるのです。昼食にかんしては感謝してますが、

いつまでもついてこないで下さい。迷惑です。」

だが、いくら無下に扱われてもギルガメッシュは引くことはなかった。

「衛宮、ギルガメッシュ殿はセイバー殿に懸想しておられるのか？」  
「そうなるのかな？十年前から求婚され続けているって言ってたしな。」

「フムフム。サーヴァントと言う存在にもやはりそういう感情はあるのだな。」

セイバーとギルガメッシュのやり取りは徐々に視線を集め出しており、そろそろ止めなければ完全な見世物になってしまう。

「セイバー、お昼もご馳走になったし今日ぐらいはいいんじゃないか。」

「うむ、雑種もたまにはいいことを言うではないか。」

「それは……………仕方ありません。今日だけですよ。」

こうして、総勢11人（バーサーカー）で行動を開始した。

「きゃあ、これ可愛いわ。」

「姉さん、ライダー。これ、おそろいで買いませんか？」

「いえ、こう言うものは私には……………」

とあるファンシーショップでは、可愛いアクセサリーをつけられそうになったライダーが逃げ出そうとして失敗したり。

「これも似合うわ。ねえねえ、これも着てみてくれないかしら。」  
「き、キャスター。流石にこう言うものは……………」

ある可愛い服を売っている店ではキャスターがセイバーを着せ替え人形にしたり。

「セイバー、我のためにこれを着ける。」  
「天誅……………」

ある下着売り場ではギルガメッシュがセイバーに下着を押し付けて、セイバーが宝具を解放しかけたり。

（セイバーは士郎が宥め、ギルガメッシュはアーチャーが後ろから念のために羽交い締めにした。

因みに、二人の顔は場所が場所なだけに真っ赤だったと言う。）

兎に角、女性陣は楽しそうだが、一部の男性に取っては疲れがますますばかりだった。

「一成、今日は悪かったな。」  
「いやいや、なかなか体験できぬことが多く、有意義な一日だったぞ。」

遊び疲れたのか眠ってしまったイリヤをおんぶしながら土郎は一成と話す。

一成の言葉に嘘はないようで、笑顔で答えていた。

彼等の後ろではまだセイバーにちよっかいを出しては殴られるギルガメッシュがいたが、もうだれも宥めようとはしなかった。

別れ道へと到着し、彼等は別れの挨拶をする。

「それでは、今日は楽しかった。またな。」  
「充実した一日だったわ。また機会があれば誘ってね。」

一成とキャスターは柳洞寺への道へと進み。

「じゃあな。遠坂、桜」  
「リン、サクラ、アーチャー、ライダー。今日は色々と迷惑をかけすみませんでした。」

士郎達は和風の住宅街に繋がる道に進み。

「なら、我もここで別れる。トキオミには戻る気はないと伝えておけ。」

ギルガメッシュは新都へと再び足を向けた。

「まったく、あの金ぴか。サーヴァントの癖に。お陰で疲れたわ。」  
「……疲れたのはこちらの方だ。」  
「でも、楽しかったです。」  
「それは良かったです。サクラ。」

そして、彼等もまた。自宅へ向け歩き始めた。

「「ただいま。」」  
「お帰りなさい、二人とも。今日は楽しかった？」  
「はい。楽しかったです。」  
「色々大変だったけど。」

今日の出来事を話ながら家の中へ入っていく。

こうして、騒がしい一日が終わったのだった。

## 九章 休日の騒動（後書き）

実は今回の話に外道麻婆神父を出そうと思っていたのですが、終わってみれば出番がなかったと言っただけ。なぜだ。

いずれ本編に挟じ込む形で出すようにします。

そろそろ戦闘開始しないといけない空気が……

## 十章 激突（前書き）

戦闘はしなくてもいいのではないかと意見を頂きましたが、戦闘に  
関することが今後微妙に関わってくるので書かせていただきました。  
あまり自信はないですが……………

そして徐々に遅れてくる投稿時間……………土曜日に投稿できたから  
いと言つこと（ダメですか）汗（）



## 十章 激突

騒がしかった買い物を終えた日の夜、疲れてはいたが軽く情報を整理しようと思と凛とアーチャーは部屋で話し合っていた。

今日の外出で思いの外重要な情報を得られたためでもある。

「さて、一応全部のサーヴァントは解ったわね。思いの外早く知れたのは僥倖だったわ。

あとは、どんな風に攻めていくかね。」

「考えはあるのかね？」

「一応現状では二通り考えてるわ。

一つはアサシンに仕掛けること。キャスターが不参加を表明してるから、手を出してくることはないと思うの。だから、一対一でやれる筈。」

手を出してこないかと断定するのは甘いと考えるアーチャーだが、キャスターから聞いた話と今日の様子を省みればそう断じてもいいかと考えた。

「二つ目は桜に協力してもらってセイバー達に仕掛ける。

セイバーとバーサーカー、どちらに仕掛けるにしろ片っ方が黙ってみってくれるとは思えないから。押さえておく位はしてもらえないかなって。」

「ふむ、だが桜が了承するかな？」

「だから只の案の一つよ。ランサーの拠点なんて解らないし、わかっている奴らから攻めた方がやり易いもの。」

確かにそれを考えるとこれが現在取りうる策である。

「それで、どちらにするのかね？」

「……………どっちがいいと思う？」

「……………マスター。基本的にそれを考えるのは君の役目だったと思うのだが。」

「いいじゃない、意見を聞くぐらい。」

軽くあきれながらアーチャーは告げる。が、凜に堪えた様子は見られない。

いや、と言うよりも疲れが先だって他に思考を回す余裕がないように見受けられた。

「ふう……………どちらにもメリット・デメリットは存在する。故に、一概にどちらがいいとは言えん。」

つまり、凜がどのように考えてどちらを先に攻めるか、と言うことだな。」

「結局どっちがいいとか言っていないじゃない。」

「当然だ。精々悩むがいい、マスター。」

アーチャーは以前決意した通り、凜の勝利の為に力を尽くすつもりである。

だが、だからと言って全てを自分でやるつもりもない。

凜が考え又は判断した上で勝ち、凜自身の勝利としたいからだ。

アーチャーの性格からして、素直にそう言うことを言ったり態度に表すことはないのだが。

「ほらほら、どうするのかな？」

悩んでいるうちに他のもの達はキチンと策を考えてるかも知れんぞ。

「

追い討ちをかけるように更なる言葉を紡ぐ。

アーチャーの表情がイキイキとしているのは、恐らく目の錯覚ではないだろう。

それとこれはまた別、と言っいいい(?) 一例だ。

ベッドの上に寝転んでいる凜は、唸りながらごろごろと転がっている。

何度も行つては来てを繰り返し、唐突にやむ。

見守っていた( ) アーチャーは何事かと方眉をあげ、ベッドを覗きこむ。

そこにはとうとう睡魔に抗えなくなったのか、目をトロンとさせた凜がいた。

これにはアーチャーも苦笑いを溢し、話を進ませようとしすぎたと反省するのだった。

「アーチャー…眠い。もう無理……………」。

「そうだな、今日は騒がしい一日だったしな。

続きは明日にするとして、ゆっくり休むといい。」

「ん……………おやすみ、アーチャー……………」

こうなつては話し合いなど望むべくもないと、アーチャーは凜を休ませた。

凜がすっかり眠ったことを確認しアーチャーは、何時ものように警戒のため屋根の上に移動した。

屋根の上でアーチャーは今日一日を振り返つた。

今日出掛けた中で、新たに知つた事がある。

それは、大災害の中心となつた筈の場所に公園がなく、代わりに建造物があつた事だ。

以前どこかで公園になる前、とある建設計画が進んでいたと聞いたことがあつた。

だが、聖杯の泥が溢れ出て焼かれたとき、公園になつたのだと聞き及んだ。そこからこの街は泥に焼かれなかつたと推測できた。

つまり、この世界において、この世全ての悪<sup>アンリ・マユ</sup>に汚染された聖杯が存在していないと言うことを示していた。

それに気づいたとき、アーチャーの心に複雑な感情が湧き出た。

‘衛宮士郎’の歪みの原因が無くなり、切嗣の死と言う結果の回避。それに喜べばいいのか。

多くの死人が聖杯戦争によって出なかったことを安堵すればいいのか。

他の「衛宮士郎」の様な苦悩を知らない衛宮士郎を　　すればいいのか。

「そうだ…このヤツは何も知らない。苦悩も、己の特異性も。何故、ここだけ…何故、私にそれを見せる。」

考えれば考える程解らなくなり、思考の迷路に陥っていく。多くの平行世界のエミヤシロウの記録も識ってはいるが、このような歴史などアーチャーは識らない。だからこそ、此が現実なのか夢なのか何度も考えてしまう。現実か夢か、まるで胡蝶の夢の様だ。

「　矢張、私は…俺は……………」

凜の笑顔、桜の笑顔、一成の笑顔。

笑っている。楽しそうに。

ライダーの笑顔、セイバーの笑顔。

望んでいたもの。ずっと見たかった光景。だが…

士郎の笑顔、イリヤの笑顔。

思い出す毎に湧き出るこの感情は……

ポツリと頬に何か当たった感触でアーチャーは我に返った。そして、考えていた事を振り払うかのようにかぶりを振った。

「バカな……何を考えている。

私は答えを得た。そんな気など、とうになくしただろう。」

ポツリポツリと、段々と降ってくるもの 雨 が多くなってくる。

「やれやれ。知らない歴史を、世界を知ったからと言って簡単に揺らぎすぎだ。」

ドクドクと心臓が煩いくらいに鼓動を刻む。

それに合わせるかのように、何か不安のようなものが沸き上がってくる。

それをアーチャーは心の奥に押し込めた。

幸せと言う可能性に満ちたこの世界で、不安になるものなどないと。

雨が強くなる中、アーチャーは敢えてその身にそれを受ける。

それはまるで、雨がこの不安を洗い流してくれる事を願っているかの様だった。

アーチャーは知らない。

考え込んでいたときの表情が虚ろであり、目に光がなかったことに。

アーチャーは気付かない。

それは、どこか陰鬱な雰囲気を纏っていたことに。

「朝か………下に戻らないとな。」

雨は日が昇り始めた時点で完全に止んでいた。

アーチャーは濡れ鼠の状態で、普通の人間であれば完全に風邪を引く格好だった。

しかしそこは魔力で肉体を作りだすサーヴァントである。

本当の肉体を持たないがゆえに風邪を引く理由はなく、姿も一度霊体化しさえすれば元に戻るのだった。

下に戻ったアーチャーは朝食の準備を行う。

初日にやって以来、朝はアーチャーが作ることになったのだ。

他の理由のひとつとして、食事を一緒に摂ることになったので、ただ食べるだけと言うのが自分で許せなかったと言うこともある。サーヴァントは睡眠を必要とはしていないから、朝早くとも問題ないと言うこともある。

因みにライダーは料理をする処か、台所に寄り付くこともない。それにはちゃんとした理由が存在する。

ライダーも一度だけだがアーチャーに触発されたのか料理を行おうとした時がある。

そこで惨状が繰り広げられた。

材料を切ろうとすれば、切るのではなく潰し。

フライパンで焼こうとすれば、黒焦げ若しくは火が吹き上がり。

煮込もうとすれば、何故かどろどろとしたあり得ない色をしたペーストの様なものが出来上がる。

使った道具もただ重ねるだけにして雪崩を引き起こし、それにより壊れてしまったものもある。

これが、結果である。この事から、ライダーは料理に関して全くの無干渉を貫くことにしたのだ。

………ライダーは見事に格の違いを見せつける事となった。

壊したものや変形したものは魔術によって修復したため、実質的な被害が食品だけだったのが幸이었다。

そんなことを思い出しながらもアーチャーの手は休まることがない。手際よく六人分の朝食が用意されていく。

メニューは遠坂一族の好みを考え、洋風であつらえられている。

先ず葵が起きテーブルや食器の準備を行う。

次に時臣が現れ、目覚めの一杯の紅茶を飲みながら準備が終わるのを待つ。



ライダーと桜はその後一緒に現れ、桜が葵の補助に入る。最後に凜だ。まるで幽鬼の様な表情で登場し、足を引きずるように歩いてテーブルにつく。

その瞬間を見計らいアーチャーが凜の前に紅茶を起き、それを口にする。することで表情がましになるのだ。

此がここ数日の朝の光景である。

今日も一日が終わり、学校も下校時間を過ぎた。

道に存在するのは凜とアーチャーの二人だけである。

アーチャーは霊体化しているため、端から見れば凜一人だけだが。

「今日も終わるか。早く帰らなきゃ。」

【早く帰る、か……………決めたのかね？】

主語が抜けた言葉だが、二人の間ではそれで十分だった。

凜は笑顔で、しかしその目には確りとした力強さを湛<sup>たた</sup>えて返す。

「(ええ、今日一日じっくり考えて決めたわ。

帰ったらすぐ準備して、日が落ちたと同時に出るわよ。)(」

【了解した。キチンと確認はしてくれよ？マスター。】

「(解ってるわよ、いちいち煩いわね。

そんなへまするわけないでしょ。)(」

【ランサーの時もあるからな、信頼するには些か不十分だ。】

それを出されるとぐうの音も出ない凜。

墓穴を掘る前に話題の転換を図った。

「（それにしても、何も聞かないのね。）」【なに、信じているからさ。うっかりがあれど、君が下手な判断を下すはずがない、とな。】

皮肉げなアーチャーの言葉だが、不思議とすんなり凜の中に入っていく。

だからこそ、頑張ろうと言う気持ちが凜の中に出てくる。

そう、ウツカリさえ無ければ凜は最高のマスターと言えた。

なので、アーチャーの言葉にも自然と凜を認める発言が多くなるのだ。

「（ふん、当然でしょ。私は遠坂凜よ。」

この程度で下手な判断なんて下す筈ないでしょ。」

隠しきれない照れを持ちながら、凜は家へとたどり着いた。

帰ると凜は直ぐに己の部屋へと直行した。

そして、武器となる宝石を準備し始める。

アーチャーに準備するものなど無いため、戦力把握もかねて凜の行

動を見つめる。

凜は宝石を一つの袋にすべてをいれようとすることはせず、発現する効果毎に纏め取り出しやすいよう服のあちこちに仕込んでいった。準備が終えたのを見計らったかの様に、太陽も地平線へと沈み徐々に闇が強くなっていく。

「日も暮れたわね……………行きましょう、アーチャー。」  
「ああ、わかった。」

凜は家族に何も告げること無く家を出たのだった。

両親である時臣と葵は聖杯戦争のマスターである凜たちの行動に口を出さず真似はしないようにしていた。

全ての行動がマスターとしての行動・作戦と踏まえ、本人の力量で対応させるためだ。

なので、夜遅くだろうが朝近くになるうが、聖杯戦争中は口出しをしない。

それで負ければ弱かっただけの事なのだ。

薄暗い道を静かに進む。

分岐点に到達し、凜が足を向けたのは

柳洞寺。

やはりか、とアーチャーは思った。

行き先は告げられてなかったが、誰にも言わず家を出たときから薄々は感じていたことだった。

「ふむ、アサシンに仕掛けるか。」

「ええ。やつぱり一人の魔術師としての力試しなんだから、先ずは自分の力やサーヴァントでやらなくちゃと思ってね。」

「ほう。確かに道理だ。」

「そう考えれば、桜に力を貸してもらうのは最後の手段。その時まで残っていたら話だけだ。」

そう、拠点がわからないランサーの事もある。

戦局がどう傾くなど完全に予想できる筈もない。

今あるカードで最も良いと思われる行動を取るのみだ。

そして彼等は柳洞寺の石段の下へと到着する。

辺りにピリピリとした空気が漂っている。

「着いたわ……」

「ああ、そして既に気づかれているようだな。」

「そうね、こんな風に殺気……いえ、闘気ね。それを巻き散らかすなんて、挑発とは思えないわ。」

「実際そうなのだろうな。恐らく、戦いに飢えているのだろう。」

登りきった瞬間始まるやまな、昨日のように。全く、血気盛んなことだ。」

ホントね、とお互いに軽口を叩きながら登っていき、一番上に到達した。

だが、すぐにアサシンが攻撃してくることはなかった。

アーチャー達の目の前に彼はいた。

姿は時代を感じる着物で、手には獲物『物干し竿』。

仄かな笑みを浮かべ、待ちきれない様子だった。

「おや、待たせてしまったかね。」

「いやいや、勝手に待っていただけの事よ。」

久方ぶりの戦いとあって、押さえきれぬでな。」

アーチャーの手にもいつの間にか黒白の双剣『干将・莫耶』が握られていた。

二人の間に緊張が走る。

「それで、二人共に来るか？これはそういう戦いなのだから、それでも文句は言わぬ。」

「あら、嘗めないでもらえる？」

貴方のマスターのキャスターが参加しないのは聞いてるわ。」

二人から距離をとりつつ話す。

「そっちのマスターが参加しないなら私も参加しないわ。これで条件はイーブン。」

それに、二対一だなんてまるで私たちが弱いみたいじゃない。」

「ああ、成る程。そう聞こえてしまったか。」

それは詫びよう。」

アサシンが望は緊迫した戦い。そのための発言だったが、浮かれ相手がどう思うか考えが巡らなかつたようだ。

「それに、アーチャーは私が呼び出したの。  
それなのに……………負ける筈ないでしょ？」

自信満々に言い切る凜。

この発言にアサシンも思わずカラカラと笑った。

「大した自信よの。  
ならば楽しめそうだな。行かせて貰うぞ、アーチャー。」

アサシンは剣を正眼に構える。

「と言うわけだから、勝ちなさい。アーチャー。」  
「クツクツクツ。ああ、精々期待に応えろとしよう。  
ゆくぞ、アサシン。」

アーチャーは両手を垂らす構えをとる。

誰も動かないまま緊迫した空気のみ高まっていく。  
ランサーの時とは違う空気。凜はしらず睡をのみこむ。

ガサ

キイン

木々のざわめき。それを合図にしたかのように同時に動きす。

鏑迫り合いは一瞬。

直ぐに離れ、次の攻撃へ移る。

アサシン　佐々木小次郎の剣筋は鋭く、セイバーに迫るものだった。

それをアーチャーは受けるだけしか出来ない。否、しない。

守って守って、相手の隙をつき反撃する。それがアーチャーの戦闘スタイルだ。

鋭く、素早く、時にフェイントを混ぜて繰り出されるアサシンの攻撃。

それをアーチャーは巧みに双剣を使用していなし続ける。

「ほらほら、どうした。」

防御ばかりでは倒すことなどできぬぞ。」

「言われなくとも理解しているさ。」

攻防の最中に会話をする余裕を見せる二人。

これから、本当の意味で全力でないことが伺えた。

そして、その時が訪れる。

アサシンの攻撃をいなした瞬間、ほんの僅かだがアサシンの体が流れた。

それは直ぐにたて直され一瞬にも満たない間だったが、相手にはそれで十分だった。

これを機にアサシンとアーチャーの攻防が入れ替わった。双剣である利点を利用し、アーチャーは手数で攻める。

元より、アーチャーは今回召喚された中で力のステータスは高くない。むしろ低い。

キャストが参加してないいま、アーチャーが一番力がないサーヴァントとなっている。

……………体格は二番目に確りしてるのに。

息もつかぬ攻防。アサシンは流れを変えるべく、浅い傷覚悟で力任せに物干し竿を振り抜いた。

それを察知したアーチャーは攻撃を中断し、自ら下がり距離をとる。

「なかなかの剣さばき、見事なものよ。」

「ふっ、受けることしかできぬ剣だ。称賛される様な物ではない。」

アーチャーの言葉にも発言を撤回する様子は見られない。

何故ならアサシンはアーチャーの剣の腕だけではなく、その中身にも感銘を受けたからだ。



剣を生業としているものならばすぐにわかることだ、アーチャーに才能といったものが感じられないと言うことは。

それでも、剣がすべてであった自分と同等の戦いを繰り広げられることが出来る。

それだけで、アーチャーがどれ程それを積み重ねてきたかわかると言うものだ。

「くくく、真に楽しきことだ。出来るならば長く剣を合わせていたいのよ。」

「そこまで評価して貰えるのはありがたいが、時間をかけすぎるとここでは回りに迷惑がかかる。

残念だが、早々に決着を着けさせて貰おう。」

そう告げるアーチャーの手には、いつの間にか剣ではなくクラス名通りの洋弓が握られていた。

この世界に来て、アーチャーは初めて弓を握った。

「むっ。」

「確かに剣も使えなくはないが、本来私は弓を使う存在だ。

悪いが本気で行かせて貰おう。」

構えた弓から流星のごとく次々と矢が放たれる。

使うのは普通の矢で、単純な構造のものばかりだ。

アサシンは自分に当たりそうなものだけを選んで落とし、牽制のも

のは避けて対応する。

アーチャーはそれを気にすること無く矢を放ち続ける。

「些か驚いたが、これも同じ。これだけでは倒せぬぞ。」

それにアーチャーはふっ、と笑った。

訝しげに見るアサシンだが、次の瞬間疑問は氷解する。

「ブローケンファンタズム  
壊れた幻想」

辺りに散らばった矢が魔力を解放して爆発する。

しかし、唯の矢にたいそれた魔力がある筈もなく、軽く土ぼこりをあげ視界を塞ぐだけだ。

「視界を塞ぐ」、これを考えた瞬間ハツとした。これが目的だったのだと。

正解とでも言うようにアーチャーのいた方から高まる魔力を感じた。

視界が晴れた直後にアサシンが目にしたのは、捻れた剣を矢として構えたアーチャーだった。

魔力は十分蓄えられ、放つだけの状態。そして

「フルンディング  
赤原獵犬」

放たれた。

剣は一直線にアサシンへ向かう。

一本だけだったこともあり、アサシンは迎え撃つ。

剣の勢いに負けそうになりながらも、何とか弾くことに成功する。

隙を見せまいとアーチャーに向き直るが、当のアーチャーは不適に笑っていた。

その時ヒュンと音が聞こえ、本能のままに避けるとさっき弾いた箭の剣が目の前を通りすぎた。

「何!？」

「その剣は追尾機能がついていてね。敵を殲滅するか使用者が命ずるまで敵を追いかけるぞ。」

驚くアサシン。

そして追い討ちをかけるように再度簡単な構造の矢を投影し、次々放つ。

流石のアサシンも焦りの色を見せる。

「流石に多いか………致し方なし。」

と、アサシンは異なる構えを見せた。それは、アサシンの奥義を出す構え。

「……《秘技・燕返し》」

迫る矢を三つの斬撃で払い、連続して技をだし今度は三つの斬撃全てを剣に叩き込み剣を破壊した。

間を置かずアサシンはアーチャーに迫り斬りかかる。

手の洋弓を投げつけることでわずかに時間を作り、再び双剣を手を持つ。

「予想はしていたが、やはりこれだけではダメだったか。」

「いやいや、見事な策だった。確かに押しが弱かったのは否定できぬがな。」

アサシンは宝具と言える技を見せたためか、斬り合いの最中にも燕返しを使い始めた。その為、防ぎきることが難しくなり、少しずつアーチャーの体に傷が増えていった。

凜はそれを心配そうに見つめる。

途中押していたようにも見えたため不利になった今の状況に不安になったのだ。

だが、それを振り払うようにアーチャーに向かって大声をだした。

「何やってるのよ、アーチャー。」

あなたは最強なんですよ！？サツサとケリつけなさいよ。」

思わぬ激励の言葉にアーチャーだけでなくアサシンも苦笑いをこぼす。

「何とも豪胆なマスターな事だ。」

「ふっ、お転婆が過ぎるがな。」

アーチャーの言葉に対する文句が聞こえた気がしたが、聞かない振りをした。

「マスターの命令もある。此方も手の内の一つを披露しよう。」

鶴翼、欠落ヲラズ《しんぎ、むけつにしてばんじゃく》」

アーチャーが双剣をアサシンに向かって投げる。  
武器を投げるとは何をバカなと思いつながらアーチャーを見ると、投げた筈の剣がその手にあった。

「心技、泰山ニ至リ《ちから、やまをぬき》」

再び剣を投げつける。

先程と同じように剣を弾くアサシン。

剣はまた、その手にあった。

「心技、黄河ヲ渡ル《つるぎ、みずをわかつ》」

三度剣を弾き、また来るだろうとアーチャーを見れば……

確かにその手には双剣が握られていた。

しかし、それは大きさが違った。

本当に同じ剣なのかと尋ねたくなるような大きさになっており、まるで鳥の羽の如く広げられていた。

「何と……」

「此がこの剣のもう一つの姿だ。

鶴翼三連!？」

そのままアーチャーはアサシンに突っ込み、その剣を振るう。

完全に振り抜いた剣は、耐えきれなかったと言っ様に崩壊する。

その一撃に耐えたアサシンは、獲物がなくなったアーチャーに迫ろうとし……

「これで終わりではないぞ、アサシン。」

「ちい。」

足を止めた。

何故なら、アサシンを取り囲む様に弾いた双剣が浮いていたからだ。

「唯名、別天二納メ《せいめい、りきゅうにとどめ》  
両雄、共二命ヲ別ツ《われら、ともにてんをいだかず》!？」

全ての剣が一斉にアサシンに向かって飛ぶ。

アサシンは再び燕返しで一気に落とそうとするが、そうはさせまいとアーチャーが動く。

「ブローケンファンタズム  
壊れた幻想」

ドガアン!!!

アサシンの剣が触れるか触れないかのタイミングで魔力を解放する。その爆発はかなりの威力を有し、余波の風だけでも凜の場所に叩きつけられたのだった。

至近距離で爆発を受けたアサシンはボロボロの体に鞭打ってすぐその場から離れる。

「……………見事なり。拙者の負けだ。」

だが、既にそれを予見していたアーチャーが回り込み、死角からアサシンに剣を突きつけて決着が着いたのだった。

爆発の威力に関してはアーチャーも予想外の事であった。

思いの外強かった爆発が考えていた以上に土埃をたたせ、それが先程と同じ状況…………いや、それよりも思考を巡らせにくい状況を作り

出した。

後はさっきのように見えない状態で矢を放たれては不味いと考えるだろうアサシンがでで来るだろう位置、正反対の場所に回り込んでだと言っわけだ。

ここに、初めての対決の決着がついた。

アサシン vs アーチャー

勝者：アーチャー

残り五組



## 十章 激突（後書き）

はい、戦闘描写ダメダムだったー！ー！？  
むつかしいよう

今回の叫び、終わり

## 十一章 異変の起り

「ヨッシャ、勝った。」

よくやったわ、アーチャー。」

戦闘が終わったので二人の側に駆け寄る凜。

表情は満面の笑みである。

そして、近づいてくるのは彼女だけでは無かった。

「あら、決着がついたのね。

それにしても騒がしくやったわねえ。」

キャスターがサーヴァントとしての姿で現れた。  
どこが、あきれを含ませた雰囲気纏っている。

「まったく、私が念のためと思って防音の魔術を張っていたから良かったものの……………」

そこで彼らは思い出した。なんの対策もとらぬまま戦闘を開始していたことに。

だと言うのに誰も戦闘に気付いた様子がなかったのはそう言うこと

だったのだ。

「すまない、キャスター。」

私としたことが、思い至らなかつたようだ。助かった。」

「拙者の場合は女狐がマスターなのだ。

問題あるまい。」

「……………」

アサシンはキャスターが自分のマスターなのだから、そんな対応をするのは当然だと言った風体だ。

また、アーチャーは素直に感謝の言葉を言うが、凜は一瞬ハツとした表情をしたと思つたら気まずげにキャスターから視線をそらした。

キャスターはこれといって追求する気はないようで、すぐに話題を変えた。

「それで、満足したのかしら？アサシン。」

「ふむ。アーチャーの剣も面白き強さをひめており、確かに楽しい手合わせではあった。

まさか、アーチャーでありながらあそこまでやりあえるとはおもわなんだ。」

アーチャーが剣で相対した理由。其を確りアサシンは理解していた。

一つは勿論戦略の内と言うことである。

前日の昼出会った事で、アーチャーと言うことは既に知られている。

出会い頭の襲撃こそ剣で防いだものの、アーチャーと言うクラス名から弓で攻撃してくるといふ先入観があるだろう事は予想された。故に、始めに同じ剣を持つていることでフェイントに見せかける事も可能だったと言うわけだ。

(実際、アサシンはすぐに距離を詰めてきた。)

そして、もう一つの理由。これは途中から気付いたことだが、アーチャーは敢えて剣をメインに交戦していた。

勿論、前述の理由もあるだろうが、まるで自分に合わせるかのようだと感じたのだ。

(そも、アーチャーの戦闘スタイルが双剣メインであるのだが。)

アーチャーの宝具も知らぬままに終わった戦闘。本来なら侮辱だ手加減だと思うところかもしれないが、剣から感じる年月が本物だっただけに意外と悪い気はしていないアサシンだった。

つい先程のことを思いだし、軽い笑みを浮かべつつ続ける。

「だが、まだ満足とは言えぬな。此度は様々な強者じわものがおるようなのでなあ。」

一応の欲求は満たされたようではあったが、セイバーやランサーと言った純粹な戦士と剣を交えていないためそれらとも戦いたいと言う願望がまだ存在した。

これだから戦闘狂は、とでも言いたげなキャスター。召喚したのは失敗だったかしら、とまで思っていた。

「しかし、残念ながらここで負けたゆえに、これ以上の戦闘は望め

ぬやも知れぬな。」

「ふっ、そうとも限るまい。

敗退したサーヴァントの戦闘禁止の取り決めなどないだろう？

相手の合意を取りさえすれば問題ないと思うが。」

既に敗退したサーヴァントを相手にするかどうかは当人たちが決めることだが、とアーチャーは締めくくる。

残念そうに呟くアサシンに、アーチャーは思わず助言ともとれる発言をした。

いや、実際に助言だった。

その事実にも、自分も丸くなったものだとしみじみ思う。

「おお、確かに。それならば問題ないな。

相手が近くに来るのをのんびり待つとしよう。」

アーチャーの言葉により思い至った事柄に期待を隠せぬようで、アサシンは若干嬉しそうな表情を浮かべた。

だが、皮肉な物言いを付け足すのもまたアーチャーだった。

「まあ、近くに来たところで柳洞寺の結界で気付かない可能性の方が高いがな。」

普段いる場所だからからこそ気付かなかったことに、再度アサシン

の顔が思案げになる。

「むっ、確かにそうであった。

ならば、自分の存在を相手に知らせる方法などはないのか？」

「知らせてどうするのよ。」

それに、普通は隠すものなのよ、あるわけないじゃない。」

「ならば、この結界を一部解除など………」

「無理よ。これは自然に出来たものだから、このままか全部消すかのどちらかよ。」

それに、例え消すにしてもこんな霊地に自然発生した結界は結構強力だから、その場合かなり魔力を消耗しちゃうわ。

まっ、しないけど。」

ここから動けないアサシンは相手をここに呼び寄せる方法を考えるが、大していいアイディアは思い浮かばない。

思い付いたことを挙げて、直ぐにキャスターに却下されてしまう。

それにしても、柳洞寺の結界を消すのが、出来ない、でなく、しない、とは………」

さすがキャスターのクラスで召喚されただけはあると言うものだ。

見る人が見ればコントのようなやり取りに見えなくもないやり取りをしている二人に、アーチャーは帰還の意を告げるため声をかけた。先程の戦闘時の疑問は、帰ってから検討してもいいだろうと今は考えないことにしたのだ。

この場を無言で立ち去っても良かったのだが、声をかけたのは何となくそれは憚<sup>はばか</sup>れたからだ。

つくづく律儀な性格である。

「すまないが、私たちはそろそろお暇いぐまさせて貰おう。  
凜は学校もあるからな。」

アーチャーの声に掛け合いを中断し、二人は顔をこちらに向けた。

「あら、そうだったわね。」

宗一郎様に迷惑をかけてはいけないし、早く帰るといわね。」

「ふむ、そうか。」

機会があればまた手合わせ願いたいものだな。」

キヤスターは払うように手を振りながらいい、アサシンは再戦の言葉  
を投げ掛けた。

そんなアサシンの言葉に、機会があればな、とはぐらかしながらア  
ーチャー達はその場を後にするのだった。

家路の途中での凜は、鼻歌を歌いそうな程ご機嫌な様子だった。  
アーチャーが勝ったのがよっぽど嬉しかったのだらう。

「ご機嫌だな、凜。」

「当たり前じゃない。私のアーチャーが勝つたのよ、しかも剣で。」

アーチャーは肩をひょいと竦めながら凜に返す。

「アーチャーだからといって剣が全く使えないわけではない。私なら構わないが、対戦相手にそれを当てはめ無いことだ。クラス名だけで判断すれば、いずれ痛い目を見るぞ。」

アーチャーの言葉に少し機嫌が悪くなる凜。

だが、反論しないのは確かに思い込みとも言えるものを初めに抱いていたからに他ならない。

「…解ってるわよ。何しろ、その代表と言える存在が目の前にいるんだから。」

「代表か。確かに普通でないのは認めるべきかな。」

（そう…私と言う存在も、生きてきたあり方も……………）」

「これで真名が判れば戦略も立てやすいかもしれないんだけど…」

…」

見えないように自嘲の笑みを浮かべ、すぐに消すアーチャー。  
凜は歩きながらアーチャーを振り返る。

「……………残念ながら、まだ思い出せん。」

「んっ。まあ、大して期待はしてなかったから。」



真名の事を話すアーチャーの声も表情も固いものであったが、その変化は僅かなものであったため年若い凜はそれに気付くことはなかった。

アーチャーはこの世界（歴史）を知れば知るほど自分の真名は明かすべきではないと、絶対に明かしてはいけないと思った。

程度はどうであれ衛宮士郎と言う存在は、アーチャーにとって気の食わない存在であることに代わりはない。

だが、一つくらい人間らしく生きている衛宮士郎がいてもいいのではないかと考えられる位にはなっていた。

せつかく歪みのない（少ない）衛宮士郎がいると言うのにもし自分の存在が知れたら、英雄に成れる可能性を己が秘めていると知ったらどうなるか解らない。

最悪、力が働きその道に矯正される事すら考えられる。

こう考えるも、それは本当に‘最悪の可能性’でしかない。寧ろ、起こらない可能性の方が高いだろう。

しかし、それでもアーチャーは自分のような存在を知るべきではないと思ったのだ。

「例え真名を知らなくても強いことは分かったし、解らなくても問題ないわ。」

「そうか、ならば私もゆっくり思い出すことにしよう。」

さて、と前を向こうとしたとき、凜は奇妙な感覚に襲われ足を止めた。

それはアーチャーも同様だったようで、視線だけ鋭く辺りを見渡していた。

それはアーチャーを持ってしてもはつきりとしなかった。空気が変わったと言うわけでもなく、周囲に異変が起きたと言うわけでもない。

ただ、本能だけが異常の存在を告げていた。

「なに、これ。何か、ざわざわするわ。アーチャー、何かわかる？」

「いや、すまないが解らない。だが、何やら危険な感じがする。」

凜は鳥肌が立ったときのように両手で二の腕を擦っていた。

「最近の通り魔が関係あるのかしら……？もしかして、そいつが魔術師とか。いえ、お父様の所に挨拶に来てないし、わざと来てなくてもお父様が察知できない筈がないわ。」  
「……………」

凜は気を紛らすかのように考えうる可能性をあげ連ねていた。その横でアーチャーは静かに警戒し、油断なく何時でも動ける体制を取っている。

数十秒だったろうか、数分だったろうか。

それは唐突に収まった。

それでも警戒を解かずにいたが、再び変わる様子が無かった為ようやく二人は警戒を解いた。

「戻ったの、かしら。」

「……どうやらそのようだな。」

訳の解らない異変。

それに二人は困惑するも、理由も解らなければヒントすらない。ただ、先程の雰囲気を出しては身震いするのみであった。

アーチャーは考える。

周囲には何の変化もないと言つのに、まるで纏わりつくようになつた雰囲気。

それが、どこか引つ掛かった。

それにあの感覚。そう、例えるなら

アチコチから監視されているような

「アーチャー、取り敢えず早く帰りましょ。」

凜の声に思考を中断する。

確かに、あんな異変を感じた以上、いつまでもこんなところに佇んでいると言つ危険行為をし続けるわけには行かない。

「そうだな、いつまた異常が起きるとも解らん。どんなものが相手であれやられるつもりはないが、ここは早く帰宅した方が懸命だな。」

「ええ、それにお父様にも報告しておかないと…。  
この土地に何かあれば大変だし。」

アーチャーの声には、無意識だろうが警戒の響きが存在した。それは、この異変がいずれ関わってくるだけでも言うように。

凜は管理者である父に今感じたものを報告しようと考えていた。言葉にした通り、もし今感じたものが冬木に悪影響をもたらすものならば大変であると思ったからだ。また、父親ならもしかしたら何かわかるかもしれないという思いも存在した。

二人は心持ち足を早め、家に向かうのであった。

このときのアーチャーの頭からは、柳洞寺で感じた疑問の事がすっかり抜け落ちていた。

そう、その生き様ゆえに多くの事を記憶し、生き残るための戦略に活用してきたアーチャーがである。

忘れたことに気付かずに 否、気付かずに凜に従って遠坂邸へ足を向けるのだった。

帰宅した凜達は、一直線に時臣の私室に向かった。  
一刻も早く報告をするためだ。

コンコン

「お父様、凜です。」

『凜か、入りなさい。』

「失礼します。」

凜と一緒にアーチャーも時臣の私室に足を踏み入れた。

アーチャーについては何も言ってはなかったが、サーヴァントがマスターと共にいるのは当たり前と捉えているのか時臣の表情に変化は見られなかった。

凜たちが入室したあとそちらを向いた時臣。

見た瞬間、少し険しい顔に見える二人に怪訝な表情を浮かべた。

「どうしたんだい、凜。そんな顔をして。」

「お父様に報告したいことがあります。」

「報告、かい？」

「取り敢えず座りなさい。」

時臣は椅子に座った凜に向き直った。

今日戦いにいった事の報告に来たのかと初めは考えたが、それならばこんな風に改まって言う筈はない。

また、時間が惜しいとでも言うように帰ってすぐ来たと思われるタイミング、そして凜の真剣な表情から違うことがわかった。

何も聞かない内に考えを巡らせても無駄だと、先ずは話を聞こうと視線で凜に話すのを促した。

「報告したいと言うのは、帰宅途中であつた異変のことです。」

「異変……」

「はい。魔力の高まりもなく、なにか目に見える変化があつたと言うわけではありませんが、よく解らない違和感があつて……」

冬木におきた異変と聞き、時臣の表情にも真剣さが増す。

家にいる時臣には何も感じ無かつたが、ここまで訴える凜にそれが嘘とは思えなかつた。

それに、アーチャーですら真面目な表情で見つめているとなれば決定的である。

「アーチャー、君の意見も伺いたいのだが。」

「私にも特に解つたことはない。あれは本能で察知するような感覚だつたが。」

強いてあげるなら、我々二人に纏わりつくように異変が存在したように感じられた、と言うことか……」

「纏わりつくように……何が原因かは解らないんだね？」

「ああ。」

「はい。」

少し考えた時臣だが、やはりこれだけで判明することはなくすぐに思考を切り上げた。

「とりあえず今日は休みなさい、凜。」

異変については地脈の調査や魔力探索で調べておく。

それと、もしまた異変を感じたら報告に来なさい。」

「はい、解りました。失礼します。」

異変が何を示しているかは解らないが、時臣は土地の調査から行うことを決めた。

それにより、一旦いる必要のなくなった凜に、夜遅いため休みなさいとつける。

二人が出ていったあとの部屋では、調査の準備を行う時臣だけが残った。

「異変か、一体何が……」

もしかすると聖杯戦争の短期開催による影響か？」

時臣は時臣で考えられる可能性を一人ブツブツと呟く。  
一番考えられるのはやはりと言うか今回の聖杯戦争の影響だと言うことだった。

十年前にも聖杯の誤作動とも言える形での発動があり、それは考えられなくもない。

十年前のあれで蓄えられていた魔力を使いきって無かったから、今回は十年と言う短い周期で起きたのだらう。そう考えたのだ。

もしそうであれば地脈等にかなりの負荷がかかっているもおかしくないと、早く調査を行えるよう準備を進めた。

「そうだ、もしそうなら彼等も呼んでだ方がいいかもしれん。」

時臣は調査のための準備とはまた別の事をしはじめた。

それは保険をかける為の行動。

今冬木にいる魔術師とサーヴァントでも異変に対応するには十分だと思っている。

だが、時臣の魔術師としての勘がそれを否定していた。

それだけではダメだと。それでは危険すぎると。

それが何を示しているのかは判別はきかないが、この勘によって危機を脱したこともある時臣はそれに素直に従うのだった。

「…何も、起きなければいいんだが。」



それはないだろうと思いつつ、願わずにはいられない時臣だった。

side ????

‘それ’は目が覚めた。

以前より包まれる様な何かに漂っていたが、唐突に自分のナニカが流れる物を感じたのだ。

今まで感じたことのない変化に‘それ’は戸惑い、戸惑うと言う感情が生まれた事に驚いた。

今までは存在するだけであり、自我も感情も何も無かったのだ。

そんな自分の変化を不思議に思い探ろうとするが、ある意味では生まれたばかりの‘それ’はどうすればいいかわからず結局何もわからなかった。

ただ、一つだけ‘それ’のなかに浮かんできた物があった。

それは“飢え”。

ナニカが流れたことで‘それ’の中にタリナイと言う感覚が沸き起こった。

何がタリナイのか、それが全く解らないままにタリナイものを埋めたいと‘それ’は動き出す。

‘それ’が動ける範囲は然程広くない。

その上、行動は酷くゆっくりとしたものだ。  
だが、確実にタリナイ物を補うべく、その感覚を延ばす。

そして、‘それ’は遂に捉えた。

捉えたものが何なのかは‘それ’には理解できなかったが、それが自分にとって必要なものだと言うことは理解できた。  
だから、それを食らうべく己を伸ばし、捕まえた。

それは暴れていたが、少しずつ取り込んでいく内に段々と抵抗が弱くなり、ついには動かなくなった。

それ幸いと、暴れていたときよりも早いスピードで喰らい続けた。

喰らい終わったとき、‘それ’のタリナイ部分が完全ではないものの充たされた。

充たされた事で再び‘それ’にまどろみが襲い掛かり、それは眠りについた。

再度の飢えで、‘それ’は再び目が覚めた。

そして、同じ様に飢えをしのぐ為の行動を開始する。  
目標は以前とらえたものと同じモノ。

それを探し、影を伝って情報を集め 気付いた。

前目覚めたときわからなかった事が出来ていることに。

何故だろうと考えるがやはり解らない。

なので気にせず侵攻を再開した。

それはすぐに見つかり、同じように喰らった。

今度は直ぐにまどろみは訪れず、自分から目覚めた場所に戻る。

そこは、暗い昏い場所。

光溢れる外とは違い、闇だけしか存在しないトコロ。

だが、‘それ’にとってはこの上なく落ち着ける場所であった。

自分と同じモノで満たされ、自分を優しく包むゆりかご。

戻った瞬間に、‘それ’は安堵と言つものを覚えた。

そして、そのままゆりかごで眠りの中に落ちていった。

また、‘それ’を飢えが襲う。

‘それ’は今度も影を使って“見た”。

影から情報を貰うだけでなく、映像も見れるようになったのだ。

‘それ’は解った。

飢えが訪れ表のモノを喰らう度に、出来ることが増えていくと言つことに。

それに、考えることも出来るようになり、感情と言えるものすら増えてきた。

‘それ’はゆりかごから動かず、影を使った映像だけで獲物を探す。そして、見つけた獲物を影の中に沈めるように喰らった。

獲物は恐怖に歪んだ顔を浮かべ、苦しそうに影の中へ沈んでいった。

それを見ていた‘それ’の中に愉しいと言っ感情が生まれた。

そして、自分がそう言うものなのだと唐突に理解した。

それを喰らった後も動く余裕があり、まだいないかと辺りを探し始めた。

そう時間もかからず‘それ’は二人組を見つけた。

自分に気づいたようで辺りを警戒する二人組。

その片方から‘それ’は目が離せなかった。

感じたのだ。自分と限りなく似た存在であると。

何故そう感じたのかは理解できないが、そのことは‘それ’の心に確りと根付いた。

接触を試みたかったが、警戒されている上そろそろまどろみが訪れていた為仕方なく諦めることにした。

ゆりかごで‘それ’は先程の存在について考えていた。

始めて見たのに懐かしく、以前より知っているような感覚。

そして、見たことで触発されたかのように、グルグルと魔力が渦になり定まらないでいる。

なれない感覚に翻弄されそうになるが、一度眠りにつけば収まるだろうと本能で察知していた。

そして、今以上に知識がつくであろうことも。

新たな変化を愉しみにしながら、また眠りにつくのであった。

## 十一章 異変の起こり（後書き）

今回は何時もより少し少ない文章量での投稿です。

油断すれば段々減ってきてそうな予感がするので気を付けないと……

…（汗）

そして、ついにあれの登場!?

ふふふ、盛り上がってきたぜ………私だけ。

まあ、どんどん妄想するぞー!!（違）

## 十二章 動きの激化（前書き）

とうとう栞が200を突破しました！？

ありがとうございます。

趣味と言つか何と言つか、あまり計画性なく投稿した小説だったんですが、自分でも定期的に投稿できて実は驚いています（笑）

これも読んでくださる皆さんのお陰です。

まだまだ頑張りますので、よろしく願います。

## 十二章 動きの激化

父である時臣に報告を終えた凜達は、そのまま己の自室に戻った。本来ならすぐ桜とサーヴァントであるライダーに異変の事を伝えるべきなのだが、現在の時間や同じ家に住んでいることから明日の朝にしようと思ったのだ。

「ハア……………取り敢えずお父様に報告はしたけど、あれ、一体なんだったのかしら……………」

「さて、な。だが、姿が見えない敵ほど厄介なものはない。私も警戒はしておくが、君も注意はしておきたまえ。」

アーチャーの言葉に、解ってるわよ、と返す凜。表情は異変を感じてから冴えない顔のままだ。

異変を感じたあのととき、凜はまるで自分が消えてしまうような感覚を味わっていた。

全ての感覚が段々と無くなっていき、己と言う物すら確固たるものとして存在出来なくなる様なイメージ。

ジワジワと何かが己に入ってくるような。それが自分の中身を食い荒らしているような。

立っている地面すら感じられなく、すべてが崩れ落ちていく。そんなイメージに侵食されていっていたのだ。



たかがイメージとは言え、魔術師にはそれは重要な要素である。もし、凜がそのイメージに支配されていけば、どうなっていたことか……

凜はチラリと己の隣に立っているサーヴァントを見た。

あの空気に晒されてなお己を確立し、辺りを警戒していた。

自分は立っているのでさえやっとだったと言うのに、この皮肉屋な英雄は意にもかかさず確りと戦闘体制を維持していた。

英霊となりうる存在にとって、あの程度の空気はたいした重圧とはなり得なかったのだろう。

そこに、英霊と言う存在の凄さを改めて認識した。

「ん？どうしたのかね、凜。」

「何でもないわ。」

今日は疲れたから、もう休むわね。」

凜の視線に気付いたアーチャーが何かあるのかと凜に聞くが、ただ見ていただけで何もなかったため差し障りのない返答を返す。

それに、疲れているのも事実なのだ。その為、もう寝てしまおうと考えていた。

「ああ、そうだ。あの事は桜だけでなく他の参加者達にも一応教えるにいくわよ。」

「そうだな。その方が良さそうだ。」

「でも、ランサーだけは相変わらず居場所が解らないのよね。」

「……………まあ、彼は生き汚い事を自負するような奴だ。そう心配することもあるまい。」

アーチャーは呆れを滲ませた口調で言った。

まるでランサーの事をよく知っているとでも言うような口振りに、凜はアーチャーがランサーの真名に見当をつけていたことを思い出した。

「そういえば、アーチャー。あなた、ランサーの真名本当に解ったの？」

「ああ。何だ、教えて欲しいのか？」

アーチャーの言葉に、凜は口を嚙くんだ。

そのまま教えてくれるものと思っていたのだが、アーチャーは簡単に教える気はないようだ。

こんなときに浮かべる皮肉げな笑みは、アーチャーが何を考えているか悟らせない。

このままやり込められるのは癪な凜は、応戦を開始した。

「あら、自分のサーヴァントが解ったことを知っておくのもマスターの義務よ。」

だから、解ったのならそれを知っておこうと思っただけよ。

本当に解ったのなら、ね。」

「ふむ、それは済まなかったな。だが私とてマスターを考えての事だぞ？」

ただ情報を与えられるのではなく、少ないヒントから答えを導き出せるようにと思ひ敢えて告げなかったと言うのに。それが伝わらなかつた様で残念だ。」

笑顔で見つめ会う二人。

ニコニコと言う擬音が似合いそうだと言うのに、バックには竜と虎  
いや、象と蟻？月と鼈？（スッポン） 大違&阿呆） が浮かんでいた。

何処かで甲高い鐘の音が響いた。

「そんなに深い考えを持つてたなんて思いもしなかつたわ。ご免なさい。」

腐つても英霊ですものね。口先だけでは無いわよね。」  
「いやいや、私も悪かつた。」

経験を積んでない以上、そうそう答えを導き出せないと言うことを失念していた。

そうだな、仕方のないことだつたな。」

「ふふふ、本当に口が悪いわね。」

「年長者としてのアドバイスだ。聞き入れない程狭量だとは思つてもいながつたが。」

後はもう喧喧囂囂けんけんしゅうしゅうのいい争いだ。

笑顔のままなのは変わらず、一見口喧嘩をしていないように見えるのがまた恐ろしい。

声が響かないように小さくしているのが微妙に笑えるのだが。そして、そのまま幾ばくかの時間が過ぎる。

約30分後

凜は荒い息をついていた。

これの勝者は、まあ当然と言うかアーチャーだった。

人生経験も浅く語彙も少ない凜が気の遠くなる時間を過ごしたアーチャーに敵うはずもない。

「……………はあ、はあ。

ム力つく……………」

言い負かされながらも悪態をつくことは忘れない凜。

アーチャーと言えば、思いの外熱くなってしまった自分に多少の驚きを感じていた。

前も多少ならばこんな風に言い合うことはあつたが、徹底的とは言わないがここまでやることもなかった。

ある程度主張し、妥協する。そんなやり取りばかりだったと言つのに。

「悪かった、凜。

やり取りが楽しくてついつい言い過ぎてしまった。」

凜は胡散臭そうにアーチャーを見た。

言い合いをしているときのアーチャーが素にしか見えなかったからだ。

「そんな顔をしないでくれ。悪いと思ったのは本当だ。」

「じゃあ、ランサーの真名をちゃんと教えなさいよ。」

「了解した。」

元々言う気ではあったアーチャー。

ただ、凜の言葉に過剰に反応して反発してしまったのだ。

ここに来て、感情の動きが大きくなったなとアーチャーは感じていた。

「恐らくランサーの真名は『クー・フリーン』。アルスターの光の御子だ。」

「つて、ケルト神話の!？」

「言うことはあの紅い槍は……」

「ああ、ゲイボルグ魔槍。必ず心臓を貫くと言われる槍だろう。」

「因果の逆転……反則じゃない。」

凜は頭を抱えた。

まさかそれほどの存在とは思わなかったのだ。

ゲイボルグ。放てば必ず心臓を貫くと言われる槍。

そんなものを相手にするのはアーチャーでは不利だと凜は考えた。

確かに、校庭での一戦はほぼ対等に戦っていたが、それはランサーが宝具の解放をする気配がなかったからであり、改めてやり合えば確実に宝具の解放をするだろうと凜は思ったのだ。

「殺しは御法度だけど、サーヴァント間での宝具の効果によるものや不可抗力なものは例外ですものね。」

凜は重いため息をついた。

考えるのが億劫になってくるが、今ある程度考えていなければ動けなくなる為思考を止めることはない。

「…ランサーは後回しにした方が良さそうね。」

先に他のサーヴァントと戦わせて脱落するならそれでよし。そうではなくても、魔力は削れるはず。」

アーチャーが凜に戦略等を考えることをさせていたためか、先ずは自分でキチンと考える凜。

整理しやすいように口に出して考察しているが、それを聞いてアーチャーが動いた。

「……凜、頼みがあるのだが。」

「うん、だったら……て、頼み？アーチャーが？」

「ああ、出来ればランサーと戦いたいんだが……」

アーチャーの頼みと言う言葉とその内容に凜は驚いた。自分で考えろと言ったアーチャーが、自分の望みを初めて口にしたのだ。

「どうしてもって言うなら考えるけど……珍しいわね。」

「いや、なに。決着を着けたいだけだ。」

決着と言う言葉に凜は納得の表情を見せた。

ランサーとの対決は乱入者の為にウヤムヤになってしまったが、それが心残りだったのだらうと理解したのだ。

勿論それもあるが、アーチャーにとってはそれだけではない。

更に前の二回分（校庭と教会前）も含め正式な決着が着いてないからだ。

そう、教会前のあれも決着がついたとは言えないとアーチャーは思うのだ。

初めて邂逅したときは、ただ殺されるだけしか出来なかった自分。

あの槍が己の心臓を貫いた感触は未だに忘れることが出来ない。

あの矮小な存在でしかなかった自分が、どれだけ成長したのか。どれだけ追い付くことが出来たのか。

この感情に関してはセイバーも当てはまる。自分を鍛えてくれた彼女。彼女とは違う存在であると理解はしていても、セイバー相手にどれだけ戦えるか楽しみにしている自分もまた存在しているのだ。

「これで真名が解ったのは四人か。」

アルスターの光の御子「クー・フリーン」

裏切りの魔女「メディア」

日本の武士「佐々木小次郎」

そして、かつてブリテンを治めし王「アーサー・ペンドラゴン」…

…セイバー。」

「後はバーサーカーとライダーか。」

既に大半の真名が解っているとは早いな。」

この時点で四人の真名が判明している。

その半分は自ら名を名乗ったというか、主張したと言うか……そんな感じだが。セイバーに関しては前回の後告げられたので凜は知っていたのだ。

「ライダーはともかく、バーサーカーの真名は早めに知りたいわね。もしぶつかる事になれば、知っていた方が動きやすいし。」

凜はまだ直接バーサーカーを目にしたことはないが、理性を代償に力を得ているバーサーカーと対峙するのが困難なのは目に見えている。

故に、少しでも勝率を挙げるため情報が欲しいのだ。

「後、重要なのは此方の真名を知られないようにすることだが、私の場合心配することはないな。」

主にマスターのお陰で。」

「さー、もう休みましょうか。話し込んで遅くなっちゃったしね。」



注意はしていてもそう簡単に癖は抜けないためか、皮肉な言い方をまたしてしまうアーチャー。  
しかし、凜も流石に慣れたのかアーチャーの物言いを華麗にスル―した。

冷や汗は隠しきれなかったが。

そして、漸くの事床につき休む凜だった。

アーチャーは何時もの如く屋根の上に移動したが、ふと考えた。  
このまま周囲を警戒するのもいいが、皆が寝静まっている間に町に異変がないか見回るのもいいのではないかと。

既にこの時間に奇襲をかけてくるような存在がいないことは解っている。

家中にライダーもいる以上、少し側を離れても問題ないだろうと思っただのだ。

そして、アーチャーはその身を闇に沈む町の中に踊らせたのだった。

明け方近くにアーチャーは遠坂家に戻ってきた。

深山町から新都にかけて一通り見回ったが、特に異状らしい異状は見当たらなかった。

それについては一安心であるがだからと云って気は抜けないと気持ちを引き締めつつ、朝食の準備に向かった。

時間は過ぎ、学校の昼休みの屋上。前回と同じように彼等は集まっていた。

ただし、葛木宗一郎は先生であること、魔術に関しては素人であることからキャスターに直接伝えたほうがいいと呼んでいない。

また、予定を変更して桜に伝えるのも一度にした方が効率がいいと朝食時に話すのを控えたのだ。

他にも、母親の葵に余計な心配をかけたくないと言う心理も働いており、それを察してか時臣も朝食時にその話題をあげることはなかった。

「それで、今回はどうしたのですか？私達を呼んだと言うことは何かあるのでしょうか？」

食事を終えセイバーが凜達に向かって口を開いた。

その言葉に凜は表情を引き締めた。

それにかなり重要なことなのだとここにいるもの達は理解した。

「ええ。重要……かどうかはまだ解らないけど、警戒はしておいて貰わないとね。」

「警戒ですか？一体……」

士郎達だけでなく桜達も疑問の声をあげたことに、士郎達は思わず

顔を見合わせた。

「桜も聞いてないのか？」

「はい、朝はいつも通りでした。」

「お母様にはあんまり言わない方がいいと思って。」

魔術の事なら話しても問題ない筈なのに、あまり耳に入れたくないと言つ凛に悪いことなのだと察した。

ならば、はやくちゃんと聞いた方がいいと、凛に話すのを促した。

「昨晚出ていたんだけど、その帰宅途中に異変があったの。」

「異変ですか？それは一体どんなことでしょう。」

「何も起こってはいないわ。でも、異変を感じたの。」

何も起きていないのに異変があったと言つ凛。

上手く理解できず、一緒にいた筈のアーチャーへと一斉に視線を向けたのは仕方ないことだろう。

「私とてそうとしか言えんぞ。」

もつと言つなら、それは視覚で認識する異変ではなく、本能で理解する異変だと言つことぐらいか。

その正体と言えるものは全く解らんが……」

「アーチャーでも解らないのですか？」

「ああ、私もただ異変だとしか感じ取れなかった。」

サーヴァントを持ってしても異変だと言うこと以上は解らなかった  
と言うことにライダーとセイバーは驚愕した。  
そして、その深刻さを認識したのだった。

「そう言うことだから、夜はいつも以上に注意してね。  
それと、もし異変を感じたらすぐに連絡してほしいの。」

「ええ、解りました。心しておきましょう。」

勿論、キリツグ達にも伝えておきます。」

「ええ。お願いね、セイバー。」

ちゃんと伝わったことが解った凜は、満足そうに笑い、何時もの調  
子に戻った。

「こつ言つのは士郎の得意分野だから、期待してるわよ。」

「得意分野って。なんだよ、それ。」

「だから、前も言ったように、こつ言つ空間異変に人一倍敏感だっ  
て事よ。」

「そうですよ。頑張ってください、先輩。」

凜はからかうように、桜は真剣に言った。

どちらにもどうとは返しにくく、困惑するだけの士郎だった。

そして、チャイムがなり各々が教室へと移動し始める。

そこで、思い出したかのように凜は足を止め士郎へと向き直った。

「そうそう、慎二にも伝えていてね。」

あそこも魔術師の一族だし、もし何か解ったらやりやすいし。」

「解ったよ。慎二に言っとけばいいんだな。」

返事を聞いて、今度こそ教室へと凜達は向かったのだった。

そして放課後、凜達は柳洞寺からの帰り道にいた。

「（やっぱりキャスターは凄いわね。）」

【ああ、既に察知していたとはな。】

既に説明を終えたのだが、キャスターは昨夜の異変を僅かながらも察知していたことが判明したのだ。

その為説明も簡単ですみ、思いの外早い時間ですんだのだ。

「（今日はこのまま帰りましょ。」

昨日戦ったばかりだし、異変の事もあるし。

ランサーはまた明日以降ね。）」

【ま、仕方ないな。】

話していると昨日の場所に到着し、思わず足を止めてしまった。日のある今何か手がかりはないかと目を凝らす、やはりと言うか何も見つからなかった。

【そろそろ移動を開始しないと、奇異の目で見られるぞ。マスター。

「（そうね。何もなさそうだし、ここに手がかりはないとした方が言いかもね。」

この時間は人通りが少ないが皆無ではないため、立ち続けていると周りの人におかしい人物という目で見られてしまう。

それは本意ではないため何も見付からない事を確認し、その歩みを再開したのだった。

夕食時珍しく全員揃っての食事に、葵は嬉しそうであった。

「今日は出ないのね。凜。」

「はい。あまり毎日と言うのも疲れが溜まるばかりだと思ったので。」

「そうよね、たまにはお休みを入れないとね。」

うふふ、久しぶりに全員揃っての夕食で嬉しいわ。」

言葉の通り、ご機嫌な様子で準備を進める葵。  
張り切って一人で全部行うと主張したため、他の者は各々椅子に座  
ったりテレビを見たりと寛くわいでいた。

『……と言うことでした。』

次のニュースです。開発中の新都に新しいレジャー施設が誕生しま  
した。』

「へえ。新しい施設か。」

「どんなものなんでしょうね、姉さん。」

『この施設は完全室内型温水プールで、様々な種類のプールを楽し  
めるとの事です。』

「完全室内型のプールかあ。面白そうね。」

「行ってみたいですね、ライダー、姉さん。」

凜と桜は時臣がつけていたニュースを一緒に見て、新しいレジャー  
施設の誕生にはしゃいでいた。

逆に時臣は静かにテレビを見ていたのだった。

それを更に背後から見守るアーチャーとライダー。

アーチャーはテレビがあるのかと感心していた。だってねえ……

『この施設の名は、わくわくざぶくん。それでは支配人のギルガ  
メッシュさんから一言お願いします。』

『フハハハ。雑種ども、我のプールで存分に遊ぶがいい。』

『はい。と言う訳で、わくわくざぶくん』の紹介でした。』

凜とアーチャーは思わず吹き出し、桜とライダーはポカンという表情をしていた。

肝心の時臣と言えば…固まっていた。

ある意味行方知れずの己のサーヴァントが突然テレビに現れれば仕方ないことだろう。

「さ、流石に今のは驚いたわ。流石金ぴかね。」

「支配人って、凄いな…」

「……………一体何をやっているんだ。」

漸く我を取り戻した時臣だが、そう呟くだけで精一杯だった。

心配なんてしていないのは、黄金律のスキルで確実に生きているのは予想できたからだ。

かといって、ここまでのものは予想できなかったようだが。（当然か…………）

それにしても、ギルガメッシュの言葉を気にしないどころかそのまま放送するテレビ局も凄いような気が。

溜め息をつきたいのを堪えていると、葵から声がかかった。

「準備ができましたよ。早く席についてくださいな。」

「はい。」

「ああ。」



テレビを消し忘れて食卓につく彼等。

『……昨夜再び人の失踪が起きたようです。』

『恐ろしいですね。皆さんも夜の外出には十分注意してください。』

『それでは、次のニュースに移りましょう。』

『……………』

『……………』

彼らの耳に届く事のなかったニュース（ヒント）。

これがどんな影響をもたらすのか……………今は誰もわからない。

side 衛宮家

夕食の時間が過ぎ、士郎とセイバーは今日の昼説明を受けたことを報告していた。

「見えない異変、サーヴァントでも解らない、か……………厄介だね。

魔術まじゅつ関係なのは間違いないんだね、士郎。」

「ああ、らしい。」

真剣な顔で話し合う衛宮家。

こちらでは全員で話し合っていた。

「やっぱり、前回の影響かしら……この霊地に損傷を与えているかも知れないですし。」

「貴女もそう思いますか、アイリスフィール。」

「そっちはセカンドオーナーの遠坂時臣に任せるしかないね。」

前回の聖杯戦争に参加した切嗣とアイリスフィールも原因を考えるが、時臣達と同じ答えしか出てこなかった。

今まで異変などなく聖杯戦争が始まってから起きたことにより、それが関係あることは明白なのにそれ以上が解らない。

それに、少なからず不安を覚えた。

「この異変がどれだけの事かまだ解らないけど、最悪の場合は御三家が集まることも視野に入れないとね。」

「そうね。家同士の秘匿なんて言ってる暇はないものね。」

「えっと、取り敢えず今は注意してるってことでいいのか？」

先の事を話始めた二人に現在の事の結論を確認する土郎。  
それに先を急ぎすぎたと反省する二人だった。

「そうだね、いまはそれしかないかな。」

僕達も原因がはつきりするまで夜に外を出歩かない方がいいみたいだし。」

「そうね、キリツグ。」

子供達にはサーヴァントがいるから、私たちよりはるかは大丈夫でしょうし。」

「だからと言って警戒は怠らないように。」

解ったかい？ 士郎、イリヤ。」

「解ってるよ。」

切嗣の言葉に士郎は返答するが、イリヤからの答えはなかった。そう言えば、初めから発言をしていなかった様な……

イリヤを見てみれば、コックリコックリと船を漕いでいた。

「……あれえ、お話終わった？」

「こら、イリヤ……！」

ちゃんと聞いてなきゃ駄目じゃないか。」

「だって、難しい話解らないんだもん。」

目を覚ましたイリヤに注意する士郎だが、イリヤはどこ吹く風と受け流した。

切嗣とアイリスフィールは流石親と言うか、苦笑いで済ましていた。

「危険かもしれないから話してるんだぞ。」

「大丈夫よ。だってバーサーカーがいるから。」

よっぽどバーサーカーを信頼しているのだろう。  
イリヤの言葉には不安が少しも見られなかった。

「あつ、そうだ。私がバーサーカーと一緒にパトロールしてあげる。」

「なつ。駄目だって、危ないじゃないか。」

「ダイジョーブだってば。シロウったら心配性なんだから。」

「ああもつ。爺さんとアイリさんも何とかいってくれよ。」

言葉を撤回する様子が見られないイリヤに、切嗣達に助けを求める  
士郎。

苦笑いを浮かべながら切嗣が発した言葉は、求めたものと正反対の  
言葉だった。

「危ないと感じたらすぐに戻ってこれるかい？」

「勿論よー!!」

「怪我をしないようにね。」

「はあい、お母様。」

それじゃ、いつてらっしやいとイリヤを送り出した。

それはあつという間の出来事だった。

何故そうしたかと言えば、イリヤの頑固さを知っていたからに他な  
らない。

下手に反論してコッソリ出ていかれるよりはと判断したのだ。

それを言われて、士郎も渋々ではあるが納得したのだった。

「やっぱり夜は気持ちがいいね、バーサーカー。」

住宅街が多い深山町ではこんな時間に出歩いている人などいないため、イリヤはバーサーカーを現界させて一緒に歩いていた。

「異変かあ、どんなのだろうね。」

「まあ、私にはバーサーカーがいるから怖くなんて無いけどね。」

イリヤの疑問にバーサーカーは解らないという事を首をかしげることで表した。

一つ一つちゃんと反応を返してくれるバーサーカーに、イリヤは嬉しそうに笑うのだった。

そして、バーサーカーもイリヤが向けてくれる信頼に嬉しそうな空気を纏うのだった。

バーサーカーと言うクラスは理性を代償に力を得るクラスであるため、本来なら此のような反応を返すことはない。

それが可能なのはイリヤの莫大な魔力で狂気を押さえ込んでいるか

らだ。

「うん、これといって異変は無いみたいね。

これ以上回っても無駄だしそろそろ戻ろっか、バーサーカー。」

「  
」

雄叫びのような声をあげ、バーサーカーはイリヤを肩に担ぎ上げ衛宮家へと足を向けた。

だが、バーサーカーは途中でその歩みを止める。

命令していないのに急に立ち止まったバーサーカーに、イリヤは声をかけた。

「どうしたの？バーサーカー。」

バーサーカーはイリヤの声にも反応せず、一つの方角を向いて唸り続けるだけだった。

それにちよつと気分を害しながらも、視線の先が気になりそつちを向いた。

いた。

そこには何も居なかった。

だがイリヤには解った。バーサーカーが何に反応したのか。

「そっか。それなのね、バーサーカー。」

「うん。じゃあ、行こっか。」

バーサーカーは再び足を動かし始めた。

その先は衛宮家とは少し違う方向を向いていた。

イリヤの表情は楽しそうで、バーサーカーはその身より闘気を発していた。

イリヤとバーサーカーは明確な目的の元に移動を開始したのだった。

## 十二章 動きの激化（後書き）

ザブタイをつけるのが段々と難しくなってきました……  
投稿直前にどうしようかってな感じでつけてます。

そして、今山場を書きたい症候群に襲われています。

いやね、色々な山場のネタが頭の中でグルグルと回ってるんですよ。

後はこのネタを忘れない様にメモをしておいて、この熱が冷めないようにしておかないと……



### 十三章 槍兵vs狂戦士(前書き)

今回も難産でした……

しかも、今までのなかで一番遅い投稿時間orz

ほんと、付き合ってくださいる方には感謝ですね(涙)

### 十三章 槍兵vs狂戦士

街が闇に染まるなか、一組の男女がその中を歩いている。

「にしてもよ、あれ以来全く敵に会わねえな。腕が鈍っちまうってんだ。」

「仕方ありません、ランサー。」

相手の情報が解らない今、敵にかち合うのは運頼み何ですから。」

その人物達とはランサーとバゼットであった。

彼等はアーチャー達と剣を交えた日から夜な夜なこのように敵を求めてさまよっているのだが、運が悪いのか全く遭遇する気配がなかった。(ランサーの幸運はEだからね)

衛宮家や遠坂家の位置は知っている筈だが、そこに襲撃するようなことは無かった。

それは、ランサーが真っ正面からのぶつかり合いを望んでいるからに他ならない。そう言う意味でランサーは真の武人なのだ。

多分に食事を共にしたゆえの情の移りも否定できないが。

「あゝあ、折角全力での戦闘が出来ると思ったのによ。まだたったの一度だけだぜ？しかも、途中終了。」

ハア〜と大袈裟に溜め息をつくランサー。  
召喚当初から変わらないランサーの言動に、バゼットはクスリと笑みを溢す。

バゼットにとってランサーと共にいるだけで満たされるものがあった。

それは、クー・フリーンと呼ばれる英雄が例えようのない憧れの存在であるからだ。

昔から何度も耳にしてきた彼の英雄譚。そんな存在を召喚でき、尚且つ方を並べて戦うことができる。

魔術視としても彼等の末裔としても、こんなに誇らしいことはない。

「マジでそろそろ誰かと会わねえかなあ……  
暇すぎて死にそうだけ。」

「……？何を言ってるのです、ランサー。」

貴方は英霊なのですから、もう死んでいるではないですか。」

「いやな、バゼット。ただの言葉のあやだって何度も言ってるだろ。」

ランサーの溢した愚痴に真面目に反応するバゼット。

その元来の生真面目さから、なかなか冗談を冗談として受け取ることが出来ないのだ。

なので、ピントのずれた返答をすることも屢しばしばあり、その度にランサーは脱力感に襲われていた。

見た目はいい女だったのに、何でもこう会話が噛み合わないのかねえ。それがランサーが思っていることである。

「まったく、もうちつと冗談かそうでないかぐれえ察せるようになれよ。」

「うう……すみません、ランサー。」

「まっ、ゆつくりでいいから」

言葉を途中で止め、ランサーはあらぬ方を見た。

疑問に思いバゼットがランサーを見たところ、その顔には歓喜が浮かんでいた。

ランサーは何を感じたのか。

それは、今の自分と似た気配。即ち　　サーヴァントである。

サーヴァントと言う存在は他のサーヴァントを感知することができ  
る。

だが、相手が近くにいると認識してない場合、近づかない限り察することは難しい。

しかし、ランサーは距離があるにも関わらず相手の存在を察知していた。

それは、戦士であるがゆえの気配の察知能力と組み合わせで、辺りの探索を行っていたからだ。

バゼットはランサーが何を感じ取ったのか理解しつつも、敢えて尋ねた。

「ランサー、どうしたのです。」

「この気配……間違いねえ、サーヴァントだ。漸く見つけたぜ。」

ランサーはバゼットの問いに返してるのか、独り言なのか解らない口調で呟いた。

堪えきれないとも言つような、獰猛な笑みを浮かべて。

「バゼット、行くぜ。」

「ええ、行きましよう。」

そうして、二人はわざと気配を出しながら、軽やかな足取りで素早く移動を始めたのだった。

そうして、槍兵と狂戦士の主従は邂逅した。

「今晚わ、ランサーにバゼット。数日ぶりね。」

「よう、嬢ちゃん。オメエだったのか。」

「ええ、お久し振りです。イリヤスフィール。」

あの晩はお世話になりました。」

彼等は気安く会話を交わす。これから戦うとは思えないような軽さである。

しかし、そんな会話を行いつつも、どちらも隙を見せるようなことはなかった。

お互い油断なく構えながら会話を続ける。

「偶々外に出ただけで、丁度会っちゃうなんて思わなかったわ。」

「へえ、偶々ねえ。俺達にや珍しくついてるじゃねえか。」

で、解ってんだよな？」

もう少しこのような会話が続くかと思われたが、ランサーが雰囲気  
をガラリと変えて問いかけたことで空気が張り詰めた。

やっと巡ってきた機会に逸る<sup>はや</sup>気持ちを押さえきれなかったのだ。

たまりにたまった戦闘願望は爆発寸前だ。

普通の人間なら気絶か、良くて腰が抜けるであろう空気の中、イリ  
ヤはそれを真つ向から受け止める。

それどころか、笑顔さえ浮かべていた。

「勿論わかってるわ。じゃないとここまで来ないわよ。」

「はっ、よく言った。だが嬢ちゃんは参加できるのか？」

「むう、私だって魔術師よ。」

ランサーはイリヤが戦闘に参加出来るのかと思い、つい聞いてしまった。

見た目に惑わされてはいけないことを理解しつつも、やはり気になっってしまうのだ。

それにイリヤは不機嫌だと言う顔を露にした。

己の魔術師としての力を示す場であるのに、そんな力がないと言われてるように感じたからだ。

と言っても、アインツベルンの魔術にはあまり戦闘手段がないため、サーヴァント頼みになるのは間違いないのだが。

「それに、サーヴァントの戦闘は兎も角、マスターは主に魔術でやりあうんだから見た目とかは関係ないでしょ。」

リンみたいに魔術でなく殴りあいの戦いなんて野蛮だし、これの意図と外れてるじゃない。」

バゼットは目を泳がせた。数日前の校庭で、まさに意図に外れた行動をとっていたからだ。

思い起こせば、確かに魔術は身体強化ぐらいで体術ばかり使っていた。

そんなバゼットにイリヤは気づき、どこか呆れたような視線を寄せた。

「と、とにかく始めませんか？何時までも話し込んでいるわけにはいきませんし。」

視線に耐えきれず、バゼットは開始を促す。

「……まあ、いいけど。」

「んじゃ、やりあうかね。泣いてもしんねえぞ。」

「あら、大丈夫よ。バーサーカーは最強だもん。」

二人がかりでも負けないわよ。」

自信溢れる台詞に、ランサーはますます楽しげに笑った。

そこまで評されるようなサーヴァントなら、予想以上の戦闘が出来るのではないかと期待したからだ。

「はっ、よく言った。なら……いくぜ!!」

「行って、バーサーカー!!」

「!!」

ランサーはその手に槍を呼び出し、バーサーカーに向かってつき出した。

それをバーサーカーは己の石斧で弾き防いだ。

弾かれると同時に追撃ができないよう即座に下がったランサーだが、そのあまりもの力に手が軽く痺れていた。

「ってーな。流石バーサーカーってか。その怪力はちーと厄介だな。バゼット、二人がかりでって言うのはあながち間違いじゃねえ見てえだぜ。」



「そのようですね。」

バーサーカーの力。たった一撃でそれを理解したランサー達は、その顔に緊張の色を滲ませた。

油断なく構えた二人に、バーサーカーもいつでも動けるような体制をとる。

イリヤはその後ろに少し離れて立っており、楽しげな雰囲気を隠しもせずランサー達に話しかけた。

「ふふ、だから言ったじゃない。

二人いっぺんに来てもいいわよ。どうせバーサーカーが勝つんだから。」

「…そうですね。では、お言葉に甘えさせてもらいます。」

そう言うやいなやバゼットはバーサーカーに殴りかかった。

だが、バーサーカーはそれに構わず石斧を左後ろに向かって振り上げた。

## ガキン

石斧が受け止めたのは紅い槍。

バゼットが飛び込むと同時にランサーがバーサーカーの後ろに回り込んで攻撃したのだ。

槍を受け止めたことで無防備になったバーサーカーの腹部に拳が決まるが、まるで堪えたようには見えなかった。

「くっ、まるで岩を殴ってるような感触ですね。」

すぐにバーサーカーのそばから離脱し、そう呟いたバゼット。

彼女が言う通り、バーサーカーの体は鋼のように固いのだ。

だが、一度効かなかったからといって諦めるわけにはいかない。

ヒットアンドアウェイの戦法をとりつつ、バゼットは攻撃を続ける。

ランサーも似た様なやり方をとっていた。

己のスピードを駆使し攻撃を定められぬようバーサーカーの周囲を駆け、顔・胸足元に向かってその槍をつき出す。

そんな攻防が幾ばくか続いたが、ランサー達が大きく距離をとった。

「一体どうなってやがる。」

「全く効いたようには見えませんね。」

何度も攻撃してると言うのにバーサーカーには傷ひとつ見当たらなかった。

確かにランサーの攻撃は、何度もガードを越えて当たったはずである。

しかし、血を流さない処がかすり傷さえついていないのだ。

「どうしたの？もう諦めちゃうの？」

「はっ、んなわけあるか。  
ますますやりがいがあるってもんだよ。」

そうかえすランサーだが、表情は先程より厳しくなっている。  
それはそうだろう、普通の攻撃は通らないと証明された様なものな  
のだから。

「ランサー……どうします。」

「こっとなったら、使う、しかねえな。」

「……そうですね。」

「たとえどんな勝負であろうと、俺は負ける気はねえからな。」

ランサーの言葉に、バゼットも腹をくくった。殺すかもしれないと  
言う結果を。

バーサーカーに生半可な攻撃が効かないと言うのはすでに判明して  
いる。

そのバーサーカーを倒すと言うことは、致命傷を負わしかねないと  
言うことだ。

そして、再度攻撃を始めた。

ランサーは身を低くしてバーサーカーの足元を主に攻撃し始めた。

巨体ゆえに低い攻撃は対処しづらい為、バーサーカーの攻撃は大降  
りなものになってしまふ。

ランサーの攻撃に対処するためつい目で追ってしまい、バーサーカーの意識がランサーに集中する。  
敏捷のスキルは同じ高さであるため、確認だけなら容易い。小回りは効かないが。

それを待っていたとばかりにランサーがバーサーカーの目前から姿を消し、代わりに現れたのは拳だった。

下を向いていたバーサーカーの顔面にそれはクリーンヒットし、炎の爆発がそこを襲った。

ルーン魔術である。拳に炎と風のルーンを宿し、インパクトの瞬間に一気に発動させたのだ。

傷をおうことはなくても、その衝撃までなくすことはできない。

バーサーカーは体ごとのけ反った。

「ランサーー!!」

「おうよー!!」

バゼットと入れ替わったランサーは即座に後退しており、まるで獣がごとく地に這っていた。

片手に己の槍を構えており、バゼットの声と同時に槍に魔力が集中し出す。

ランサーはバーサーカーに向かってその槍を振りかぶり。

「刺し穿つ《ゲイ》」

放った。

「死棘の槍<sup>ホルゲ</sup>！」

それは紅い閃光だった。

目映い朱がランサーからバーサーカーに向かって突き進む。

カ一杯投擲されたそれは、ろくに狙いも着けていないものだったが、真名を解放された槍は秘められた概念に従い、バーサーカーの心臓に向かって突き進む。

余裕の態度を崩さなかったイリヤもこれには流石に驚いた。

「なっ、バーサーカー!？」

そして槍は体勢を崩したままのバーサーカーに当たった。

ランサーとバゼットは勝利を確信する。

これを避けるのはよほどの幸運を持つ者でしかなし得ない。

例えばバーサーカーが高い幸運を持っていようと、動くことのできな  
い状態から避けることなどできない。

それ故の確信だった。

ランサーとバゼットはイリヤに目を向けた。

「ワリいな、嬢ちゃん。俺達の勝ちだ。」  
「ええ、宝具を解放した以上、ランサーの勝ちです。」

その言葉にも反応せずバーサーカーを見ているイリヤ。  
それを、自分のサーヴァントが負けたのが信じられないためだと彼等は思った。

ランサーはもう一度イリヤへと声をかけた。

「嬢ちゃん、信じらんねえのかも知れねえが、奴は死ん「それほど  
うかしらね?」「……何?」

ランサーの言葉を遮るイリヤ。

先程までの驚愕を消し、再び余裕を取り戻した彼女がそこにいた。

それを疑問に思う間もなく、ランサーの背に悪寒が駆け抜けた。  
本能に従い、バゼットを抱えてその場から飛び退いた。

直後……

ドゴオオオン

大きな音が辺りに響き渡った。

さつきまでランサー達がいた場所にあったのは石斧。それを持っているのは、倒したと思ったバーサーカーであった。

心臓部を見ても槍は刺さっておらず、見れば地面に横たわる槍があった。

ランサーの槍は、バーサーカーの心臓を穿てなかったのだ。

「なん……だと？」

「まさか、宝具が効かないなんて。」

今度驚くのはランサー達の番であった。

「うふふ、驚いた？でも、私もビックリしちゃったからオアイコね。」

クスクスと笑うイリヤ。

「何で効かなかったか知りたい？」

「教えてくれんのか？」

「それならば是非聞きたいものですね。」

イリヤの意図は読めないものの、教えて貰えるならば聞くだけだと耳を傾ける。

そこに攻略のきっかけがあるかもしれないとなれば尚更である。

「聞きたいんだ。なら教えてあげる。」

私のバーサーカーはね、どんな攻撃でもB以下の攻撃は全て無効化しちゃうのよ。勿論法具だって例外じゃないわ。」

クルクルとその場で回りながら説明する。

内容にランサー達は納得がいったと言う表情になった。

ランサーの宝具のランクはB。

つまり、無効化の効果内に入ってしまったのだ。

「ちっ。成る程な、それがこいつの宝具って訳か。」

「そのような宝具なら、クラスに関係なく発現できると言うわけですね。」

悔しそうに言うランサー達だったが、それは違うとイリヤは言う。

「それはね、本来の宝具から零れる効果のよ。それが宝具じゃないわ。」

その言葉に冷や汗を流す。

攻撃の無効化だけでも凄いと云うの、それが宝具の効果の一部だと云うのだ。



驚かない方が無理である。

「どうせだから言っちゃおっか。バーサーカーの宝具の名前は十二の試練<sup>ト・ハン</sup>」

例え殺されても、十一回は生き返るの。もっと分かりやすく言うなら、命のストックを持っているのよ。」

予想以上の情報に驚くランサーとバゼット。

思った以上の情報をもたらされたからでもあるが、何よりその情報から導き出される英雄の名

「十二の試練<sup>ト・ハン</sup>……まさか、バーサーカーはかのギリシャの大英雄……」

「そんな有名な奴だとはな。キャスター以外のどのクラスにも当てはまるらしいが、バーサーカーで現界していたとは思わなかったぜ。なあ、……」

ヘラクレス

それが、バーサーカーの真名である。

「やっぱりすぐにわかつちやったね。」

それで、ランサーの宝具は効かないって解ったけどまだやる？」「舐めんじゃねえぞ。このくらいで諦めてたまるかってんだ。」

イリヤが戦闘続行について尋ねるが、ランサー達はその闘気を薄れさせることはない。

寧ろ、上等だと言わんばかりだ。

「ふーん、じゃあ、やっちゃって、バーサーカー。」

それを合図に、バーサーカーがランサーに向かって突っ込んでいった。

バーサーカーはその石斧を振り回す。

ランサーはその攻撃を受けることなく、避けることに徹した。

一度でも受けてしまえばただじゃすまないのは目に見えている。

だが、その風圧だけでもすごいもので、完全に避けていると言うのに肌が斬れ血が流れていた。

バゼットも援護するが、今度はバゼットの拳もうまくいなし先程のように受けることはない。

そして、とうとう石斧がランサーを捉えた。

「がっ。」「ズザザ

」「ランサー。」「

受けるも飛ばされるようなことにはならず、確り足で大地を踏み締

める。

再度バーサーカーが接近し攻撃しようとするが、ランサーは足を傷つけてしまったのか軽く引きずっている。

「あら、最速の英霊なのに動き回れなくなったんじゃおしまいね。」

「たわけ、この程度で終わるか。」

チラリとバゼットを見るランサー。

それに頷くバゼット。

「頑固ね。死んじやっても知らないから。」

バーサーカーが動こうとする前に、ランサーがルーンを発動させた。

「!?」

雷がバーサーカーを襲う。

流石に電気を生身の体で防げるはずもなく、バーサーカーが膝をつく。

「嘘!?いつの間にもルーンを書いたの。」

ランサーが発動したことはわかったが、ルーンを書く暇などなかった筈なのに使えたことに驚きイリヤはランサーを見た。それをうけ、ランサーはニヤツと笑い、地面（下）を指差した。

バーサーカーの足元に引き摺ったような跡。それで、イリヤは気付いた。

「まさか、地面に……」  
「当たり前だ。」

先程足を引きずっていたのは怪我をしたからでなく、これを書くためだったのだ。だからこそ、違和感のないように攻撃を敢えて受けていたと言っただけだ。

イリヤは余裕の表情を消した。  
余裕ぶつていては足を掬われてしまうことを理解したのだ。

イリヤは奥の手を使うことを決めた。

「バーサーカー、狂いなさい!!」  
「!!」

イリヤは令呪を使い、バーサーカーを狂化させた。  
今のよう比較的理性のある攻撃はできなくなりただ暴れるだけの存在となってしまうが、負けるよりはいいと判断したのだ。

だが、それは一足遅かった。

「ハアアア　　。」

バゼットのいた方から宝具級の魔力を感じたイリヤはそちらを向く。あつたのは宝具‘級’等ではなく、正しく宝具であつた。

「うそ、何で宝具を持つてるの。いや、あるの!?!」

「そりゃ、あれがバゼットの一族に伝わる現存する宝具だからだ。」

イリヤの驚きに答えるランサー。

バーサーカーの情報を教えてもらった代わりのようなものだ。

「いきます、切り決る戦神の剣!?!」  
フラガラック

バゼットが放つた宝具が炸裂する。

この宝具の別名は、後より出でて先に断つもの《アンサー》。その二つ名の通りの効果を有している。

本来のままではランクの低い宝具だが、迎撃に使用した場合ランクがAにあがり最強の迎撃用宝具へと変化する。そう、相手の攻撃より先に断つという結果を引き出すことで、その攻撃を無かったことにするのだ。

そして、迎撃の発動条件は相手が奥の手と認識している手段を使うこと。

イリヤの態度から十二の試練トウ・ハンがそれに当たると判断したバゼットは、常にその宝具が発動している状態なのだと判断した。

なので、自分の宝具を使用すれば迎撃状態となり、相手の守りを貫けるのではないかと考えたのだ。

剣は一直線にバーサーカーに向かい

バーサーカーの命を刈り取った。

「うそ……バーサーカーを一回殺した……？」

呆然と立つイリヤ。

英霊の宝具で殺せなかったバーサーカーを、現存する（人が使う）宝具が殺したのだ。  
驚きは大きかった。

バーサーカーは肉体を修復している。

それを見ながら体勢を立て直すランサー達。

先に宝具の情報を知っている以上当たり前の行動である。バーサーカーの修復が終わり、再開するかと思われたその時……

「私達の負けよ。」

イリヤが敗けを宣言した。

「「は？」」

思わず間拔けな声を出すランサー主従。息がピッタリだ。

「えーと、嬢ちゃん今なんてった？」

「だから、私達の敗けって言ったの。」

顔を見合わせるランサーとバゼット。

イリヤ達は言葉を証明するかのように戦闘体勢を解除する。

「一回殺されちゃったし、お母様達に無理はしないって約束したから。」

そうイリヤは言うが、ランサーたちはまだ納得のいかない表情だ。それもそうだろう、一回殺されたからと言ってあのまま押しきればランサー達の方が危険であったし、ランサー達は知らないが一度受けた攻撃の耐性付与も存在するのだから。

「納得いかないって顔ね。」

「あー……まあな。」

「一回殺されたからと言つのは……英霊の宝具は英霊の一部でもありますし。」

自分達が勝つたと言つのに素直に受け取れないなんて、とクスリとイリヤは笑う。

「いいのよ。勝ちも勝ちなんだから、素直に受け取りなさい。」

そこまで言つて、やっとランサー達は受け入れたのだった。

バーサーカーvsランサー

勝者：ランサー

残り四組



### 十三章 槍兵 vs 狂戦士（後書き）

イリヤーズ、一回殺されたことで敗けの宣言。  
これも一応伏線的なものになるのかな？

自分のなかでは攻めて30話位はいきたいなと考えてます。

が、予定は未定。

先人の言葉は偉大だ……

## 十四章 戦闘のあと

勝敗が決まったたからか、彼らの間にあった先程までの張り詰めた空気が霧散していた。

「それにしてもホントに驚いたわ。まさか現存する宝具があつて、しかもバーサーカーを貰っちゃったんだから。」

イリヤの言葉にバーサーカーも肯定の意を示す。

バーサーカーもまさかそんな宝具が存在するとは思つてもいなかつたため、バゼットへの警戒は最低限のものにしていた。そこを突かれる形となつてしまったのだ。

苦笑いを浮かべながら、バゼットは漏らしても問題ない程度の事を口にする。

「先程ランサーも言ったように私の一族に伝わる宝具ですので。あまり外に知られていないのは確かですね。使う機会も限られてますし。」

それにイリヤは納得した。

封印指定を捕獲する仕事の時に使うならば相手は知るだろうが、すぐに捕獲されるだろう人間が知つてもそれ以上情報が広まることはない。

それに、執行者はあまり他の魔術師と交流をとるような時間がない為（主に保護対象の警護などで）、知る機会もないと言っわけだ。他にも執行者は単独任務が多いことも理由の一つに挙げられる。

「それに……意外と使い勝手が難しい宝具ですので、一族の者も使わない人間の方が……」

「ああ、確かにそうよね。」

相手の切り札がなんなのか解らなければ使えない上に、間違えたらランクは低いまま発動しちゃうし。

一度使っちゃえば狙いがなんなのか理解されちゃうものね。」

そうなのである、前情報がない場合相手の切り札など推測できず、そのまま解放してしまえば狙いがカウンターであることなどすぐにはばれてしまう。

下手な奴が使うならば、発動すら難しいだろう。

ゆえに使い勝手が悪とイリヤがいつているのだ。

「そう言えば。その宝具バーサーカーに使っちゃっても大丈夫なの？現存する宝具なんて、かなり貴重なものでしょう。」

「問題ありません。私たち一族は所有しているだけでなく、作り出すことができますから。」

フーンと頷いたイリヤだが、今何か聞いてはいけないような情報を耳にした気がし一瞬動きを止めた。

バゼットはそんなイリヤに疑問を覚え、自分の発言によって動きを止めたのが明白なのでよくよく自分の言葉を思い出してみた。そして、バゼットもピシりと固まった。

「宝具を作る」。自分は確かにそういつてしまったのだ。

宝具を作れるなど、そうそう口にしていい事実ではない。

他の魔術師達に宝具の存在を知られていないのはあまり使わないのもそうだが、その事を隠す動きがあるからこそ広まることがなかったのである。

一族の土地より距離のある東洋の地で思わず口を滑らしてしまったバゼットは焦る。

オロオロと落ち着きのない行動をとり、僅かながら目が潤んでいる。

「ど、どうしましょう。流石にこの事を口にしてしまうのは……いや、作れると言う事実だけなら未だなんとか。製法等などを口にしたわけではありませんし。でも、これがばれたら確実に怒られてしまう。」

そんなバゼットを見て、イリヤは逆に冷静になった。

他人が慌てているのを見ると、自分は落ち着いてくるものだ。

「落ち着きなさいよ、それでも魔術師なの？」

しかも、執行者になれるだけの実力があるんだから。」

「う……ですが。」

「安心しなさい、別に言いふらしたりしないから。」

イリヤの言葉にバゼットの表情は明るくなる。

この場にいるのは自分達だけであり、イリヤさえ黙っていれば自分が口を滑らしたことがばれることはない。

口封じを行わずにすんだことに、安堵の行きを吐く。

(口封じとは所謂肉体言語である(しかも、一族共通))

だが、次の一言に再び不安に襲われた。

「た・だ・し、それだけじゃあれよね？魔術師なんだから。」

「う……等価交換、ですね。」

「そのとおり。黙っている見返りはちゃあんと貰わなきゃね。」

弾むような声でイリヤはつける。

バゼットはますます不安を煽られた。

イリヤの表情はとても楽しそうで、こちらが困っているのを楽しんでいるようにしか見えない。

それに、等価交換と言うがどんな無理難題を吹っ掛けてくるのだろうか、バゼットはつい身構えてしまった。

「それじゃ、なんにしようかなあ。」

「……………」

「う……、そっだー!!」

黙っている条件を考えるイリヤ。  
バゼットはそれを黙ってみていることしかできない。

少しの時間考え込んでいたイリヤだが、バゼットの方をチラリとみて何か思い付いたようだった。  
そして、イリヤは条件を告げた。

それを聞いたバゼットは一気に肩の力が抜けた。

イリヤの出した条件は確かに難しいものであったが、無理難題と言えるものではなかった。

自分のみでそれを決めてしまっていたいいものかと言う考えが頭をよぎったが、背に腹は変えられないとその条件を受け入れたのだった。

「うふふ、交渉成立ね。」

「ええ、本当に御願いますね。」

「解ってるわ。一度約束したことは破らないから、安心して。」

こうして、ダメツ…ゴホン、バゼットの一寸した失敗は何とか収拾できたのだった。

バゼットとイリヤが話している間一言も口を挟まなかったサーヴァント達はというと、少し離れた場所でこれまた話し込んでいた。

「ギリシヤの大英雄の名は伊達じゃなかったな。」

「ただバースーカーってのが、ちいっとばかり残念だったぜ。」

ランサーの誉め言葉に、バースーカーはふつと笑みを溢す。その表情はランサーの腕を称えているようにも見えた。

「どうせならまた戦り合いたいもんだ。

剣技もまともだったら言うこと無しなんだが……まっ、それは贅沢  
つてもんか。」

「……………」

理性がキチンとあり、正当な剣を操るバースーカーと戦いたかった  
と言うランサー。

バースーカーと言うクラスでさえ自分を高ぶらせたのだから、もし  
他のクラスであったのならそれこそ限界ギリギリの戦いが楽しめた  
のではないかと思ったのだ。

ランサーの言葉に同意するかのように、バースーカーも少し残念そ  
うな表情を見せる。

彼もまた己の技がどれだけ通じるのか、どれだけ相手の攻撃を防ぐ  
ことができるのか試してみたいと言う気持ちが沸き起こっていたの  
だ。

そう、バースーカーとて戦士なのだ。

気が高ぶらない筈がない。

だが、今回はバースーカーとして召喚された以上、望むべくもない。

不満と言っわけではないが、た少し残念だった。

「っと、マスター達も話し終わったみてえだな。

そんじゃ、戻りますかね。」

「……………」(コクッ)

マスターのもとに歩み寄るランサー達。

これらの戦いの一部始終を遠くから見つめる一対の目が存在した。

「まさか、こんな場面にかち合うとは。

私にしては運がいいと言っべきか？」

そう、アーチャーである。

元より視力が良く『千里眼』のスキルも有する彼だからこそ、当人達に気付かれることなく戦いを見ていることが出来たのだ。

その目は戦い初めから外されることなく彼らに注がれていた。

何故アーチャーがここにいるのかと言えば、昨夜と同様に簡単に冬木の町を見回っていたからだ。

目を『強化』し辺りを見回りながら動くアーチャーの目に止まったのがイリヤだった。



その後すぐランサー達も発見し、お互いが近づいていつているのを確認したアーチャーは戦闘を確信し、大人しく彼等を見続けていたというわけである。

「バーサーカー対ランサーはランサーの勝利か。だが、命を一つ使っただけで敗けを宣言するとは、イリヤらしくないが一体……？」

アーチャーの知るイリヤなら、一度死んだくらいではそう簡単に負けたなど言わない。  
なので、今の結果に首をかしげていた。

考えても答えは出ず、そういうものなのだろうと思うことにした。  
なんの情報もないのに考えてはそう言うものと納得する。  
最近、そういう結末で終わる思考が増えてきたなとアーチャーは思った。

どうせそういう結論に至るなら初めから考えなければいいのだが、それでも考え込んでしまうのがアーチャーがアーチャーたる所以だろう。

アーチャーの見つめる先でマスターはマスター同士、サーヴァントはサーヴァント同士で話していた彼等が集まった。  
恐らくこれを最後に帰るのだろうなと考えた。

予想に違わずそれぞれ別れようとし、アーチャーは何か嫌な予感がした。

戦士の勘とも言つべきそれに従い辺りを警戒する。  
しかし、これと言って変化は見当たらない。

気のせいかとも思うが、頭の中の警鐘は消えない。  
再び周囲を見渡していた時、ゾクリと悪寒が走った。

それは覚えのある感覚だった。

しかし、多少の違和感がありあのときとは違う感覚がした。  
まるで、多少距離があるかのよう。

アーチャーはハツとして慌ててランサー達の方へ目を戻した。  
ここに居るのは自分だけではない、多少距離があるとはいえランサ  
ー達も居るのだ。

あの異変がまた自分の近くに起きるものと思ひ込んでいた自分に疑  
問を抱きながら、もしもの場合に備え頭を戦闘用のそれに切り替え  
た。

ランサー達を見れば、彼らも戦闘体勢をとっていた。

そして、その周囲に黒い蠢くものをアーチャーは確認したのだった。

それは、例えるなら、闇であった。

影よりも深く、夜よりも昏い。そんなものが出現していた。

「あれは……何処かで……」

アーチャーの頭に、ノイズ混じりの映像が流れる。

赤い世界。その中に混じる黒。

回りには誰もおらず、何も無い。

………ついで、………よ

その光景の中に存在するナニカ。そのナニカが見えないのに、あるとわかる。

唯一の動くものが足を踏み出した時……

「(ズキン!!)…ぐうつ。」

ひとときわ酷い頭痛が襲った。

それにともないノイズ混じりの映像は消え、頭痛もその一度だけで直ぐに引いたのだった。

「今………のは、一体………」

考え込みそうになるも、今はそんな場合ではないと余計な思考を振り払う。

再度ランサー達の方を見れば、‘闇’に囲まれ身動きができなくなっていた。

‘闇’は攻撃を仕掛けることなく取り囲んでいるだけのようで、それ以外の行動を見せるのは今のところ無いようである。

ランサー達が攻撃を仕掛けないのは様子を見てるだけなのか、しよ  
うにも出来ない状況なのか……

アーチャーはランサー達の活路を作り出すべく、その手に弓を取り出した。

「  
トレースオン  
投影開始」

現れるは漆黒の洋弓。それを矢をつがえることなく引き絞る。

「  
I am the bone of my sword.  
身体は剣で出来ている」

弓に剣が現れる。

先ずは様子見と考えたのか、現れた剣は銘などないものだった。だが、その剣に込められた魔力はそれを差し引いても目を見張るものがあつた。

アーチャーは一度溜め、その‘矢’を放つ。

‘闇’の一角に当たった剣は、その一部を吹き飛ばした。

アーチャーは、それでこの方法が有効であることを確信した。

ランサー達は自分達に援護する存在に気付き、何時でも囲みから離脱できるよう体勢を変えていた。

それを確認し、アーチャーはまた弓を引く。

次に作り出すは先程の剣よりも込められた魔力の高い一品だ。

さっきの剣でも一部は吹き飛んだが、囲いを完全に壊すには至らなかった。

その為、より威力の高いものを選んだのだ。

多少威力が高過ぎたとしても、サーヴァントが側に居るならば多少の危険は回避できるだろうとも考えたからでもある。  
逃げれないよりは良いだろうと。

「 I a m t h e b o n e o f m y s w o r d . 》

我が骨子は捻れ狂う《

アーチャーは造り出した剣に魔力を込めていく。

ランサー達にもその魔力は感じられたのだろう。いつでも動けるように姿勢を低くしていた。

そして、大いなる破壊力を込めた剣が放たれる。

「 偽・螺旋剣カラドボルク！！」

多くの魔力を込められた剣は、光の早さで飛んでいった。その姿は、まるで彗星のようであった。剣は、闇、に突き刺さり、ズタズタに引き裂いていった。だが、何か抵抗したのか完全破壊には至らなかった。

故に、アーチャーは止めの一言を放つ。

「  
壊れた幻想」  
ブローケンファンタズム

魔力解放の衝撃により、闇、の一角は完全に破壊され、ソコからラ  
ンサー達は脱出していった。

それを確認したアーチャーもまた、素早くその場を離れようとした  
ときだった。

ドクンと鼓動が跳ねたかと思えば、強烈な脱力感がアーチャーを襲  
った。

心臓の辺りを掴み、崩れ落ちないように踏ん張る。  
何が、と思うアーチャーに驚くことが起きていた。

「な、んだと。」

だが、驚いたのは一瞬。直ぐにそれを受け入れた。

「そつだ、驚くような事ではない……これは予想して然るべき事だ  
つたのだ。」

段々と落ち着いてきたことを確認したアーチャーは、今度こそその場から離れたのだった。

ランサー達はランサー達で、バーサーカー達はバーサーカー達で別々に逃げだしたあと、戦闘場所よりかなり離れた位置でランサー達は漸く安堵の息を着いていた。

「取り敢えず、追っ掛けては来ねえみたいだな。」

「その様ですね。……あれは一体、なんだったのでしょうか……」

バゼットの言葉に、さっきまでの事を彼等は思い返した。

お互いに雑談が終わり、いざ別れようかとしたときそれは現れた。

それは突然だった。

いきなり悪寒が駆け抜けたかと思えば、回りの闇が息を持ったかのように動き出したのだ。

「ひっ……な、何よこれ。」

「見るだけで恐ろしい、なんて。」

「バゼット、離れんじゃねえぞ。」

「闇」を見たイリヤ達は冷や汗が止まらなかった。

ただそれを見ているだけだと言うのに、言い知れぬ恐怖感が沸き起こってくるのだ。

サーヴァントは己のマスターを庇うように立ち、最高級の警戒をとった。

恐怖感はサーヴァントである彼らも襲っているが、生前戦場に身をおいていた彼等には大して効いた様子は見られなかった。だからといって全く無いわけでもなかった。

人は生きるために恐怖を感じる。

その根本的な恐怖をその「闇」は引き出してるのだ。

ランサー達はすぐさま離脱したいと思っっているが、このまま攻撃するのは危険だと本能が訴えていた。

その為手が出せず、周囲を囲まれたまま膠着状態に陥った。

「まさか、これが凜の言ってた異変？」

なら、凜は嘘つきね。ちゃんと見えるじゃない。」

イリヤは自分を奮い立たせる様に、いつもの様な口調で喋る。それをバゼット達が聞き咎めた。



「イリヤスフィール、言っていた異変とはなんなのですか？」  
「嬢ちゃん、あれを知ってんのか？」

そこでイリヤは気付いた、ランサー達はあの話を知らなかったことに。  
今動きがないとは言えいつ事態が動くとは限らない。

出来うる限り簡潔に要点を纏めて、バゼット達に自分が聞いた話を伝えたのだ。

「見えない異変ですか。」

だと言うのに、目の前で起こっているのは見える異変。」

「異変が成長でもしてるってか？」

「笑えねえ話だな。」

見えなかったものが、闇と言う肉体を得て見えるように変化する。

‘成長’。確かにその言葉が相応しいと感じた。

このまま動かずにいるのは不味いと感じたランサーは、一点突破をしようかと考えた。

何故なら徐々に、ほんの僅かずつではあるが‘闇’の包囲網が狭まってきたいるのだ。

多少の事ではびくともしない自分達が先に行き、そのあとをマスターたちに付いてこさせる。

それしかないとランサーが動こうとしたとき、彼等の目の前の‘闇

、を何かが吹き飛ばした。

「何？あれ……」

「あれは……剣、ですね。」

、闇、の一部を吹き飛ばした剣は、彼等の前で霧散して消えた。

「この魔力……アイツか。」

人の戦いを盗み見てるたあ、いい趣味じゃねえか。」

「成る程、アーチャーですか。」

確かに見られていたのは少し遺憾ですが、今回は助かりましたね。」

剣が「飛んできた」こと、それに内包された魔力からこれがアーチャーの仕業であることを理解したランサー達。

同時に自分達が気づかないほどの距離から見られていたと言つ事實に、アーチャーとしての力を垣間見て感服するのであった。

イリヤは良く解らなかつたものの、ランサー達の様子から悪いものではないと推測し緊張をほぐした。

「嬢ちゃん、すぐに動けるようにしとけ。」

「ええ。」

「バゼット。」

「解ってます。」

イリヤはバーサーカーの肩に乗り、バーサーカーはいつでも走り出せるような体勢をとった。

バゼットは自分の体に『強化』の魔術をかけ、素早く動ける準備を終える。

ランサーもいつでも動けるよう、軽い前傾姿勢をとった。

彼等は解っているのだ。先程の剣が威力偵察に過ぎないと言っことを。

どの程度『闇』に力が効くことを確認した後は本番がくる。それに合わせ突破するのだ。

数拍の後、離れた所より立ち上る魔力を感知した。

それに、ランサー達は身構える。

爆発的に魔力が高まったと思った瞬間、再度目の前に剣が飛来してきた。

今度は捻れた剣であり、『闇』の一角を吹き飛ばしたものの完全に消すには至らなかった。

「何よ、駄目じゃない。」

「いや、これだけの筈がねえ。」

落胆と非難の声をあげるイリヤだが、ランサー達はまだ何かあると予測していた。

それは、一度戦ったから故の勘だった。

アーチャーは白兵戦もこなせるようだが、本来は頭を使う戦をする

やつだとランサー達は見抜いていたのだ。例え不利な条件・状態であれど、幾重にも策を巡らし徐々に追い込む。そんな戦いをする。

だからこそ、そんな奴がこれだけで打ち止めになる筈がないと考えたのだ。

そして、それは正解だった。

見つめる先で剣がその神秘を解放し爆発した。それにより完全に「闇」の一角は破壊された。

その好機を見逃さず、すかさず彼らはその中より脱出したのだった。

思い返しても良く解らないことばかりであった。

何故あんなものが現れたのか、何故あの場に出現したのか。それが、全くわからない。

「しかし、あれは本当になんだったのでしょうか。」

「さあな。だが、軽く見ていい事態じゃねえってのは確かかみたいな。」

「ええ、これからはあれに十分注意しなければなりませんね。」

イリヤの説明では、彼女がそこまで危険なものと思っていなかったと言っ考えが随所に見られていた。

だが、あれを目の当たりにした事で理解したらしく、一瞬の恐怖のあとの眼差しの強さはかなりのモノだった。

目の当たりにしたこととその危険度を理解したのはランサー達も同様である。

それにより、夜の徘徊にあたって今までよりも警戒しておくことを決めた。

出歩かないと言う選択肢がないのは、どんな状況であれ今が聖杯戦争の最中だからだ。

「取り敢えず、こっちの攻撃が効きそうなのは確認できたんだ。

もし、また目の前に現れりゃ、蹴散らしてやるさ。」

「そうですね。頼りにしてます、ランサー。」

「……ですが、あのアーチャーの攻撃も凄いものでした。」

「ああ。つたく、剣を飛ばすんなぎ、どんな奴だよ。

真名が全く解らねえ。」

話題はアーチャーが飛ばしてきた剣へと移る。

ランサーは不服そうな言葉とは裏腹に、その表情は物凄く嬉しげであった。

それは、アーチャーにまだまだ手が隠されていることを知ったからだ。

あの時は黒白の夫婦剣て応戦してきたが、アーチャーである以上弓が本来の獲物である。

それは当然の理だが、つがえるのが矢でなく剣ときた。

これは予想外の事であった。

自分は今の戦いに勝ち残り、アーチャーもあの場にいた以上まだ残っていると考えるのが妥当だ。

となれば、まだやりあえる機会が残っていると云うわけだ。

「そんじゃ、今日は戻るか、バゼット。

一応気い抜くんじゃねえぞ。」

「わかっていますよ、ランサー。」

あれは油断などとしてはいけないものです。

何故あんなものがここにいるか知りませんが、気は抜きません。」

ランサーは、バゼットの言葉に良くいったと笑い足を進めた。

再度アーチャーと会いまみえることの期待を胸に、警戒を怠ることなくランサーはバゼットと共に夜に溶け込んでいった。

## 十四章 戦闘のあと（後書き）

あれの再登場です。

まあ、これから出番は増えていくわけですが。

そしてアーチャーにもふりかかる異変。

一体何が起こったのか。

それは今後のお楽しみです。

それにしても、本当に時間が遅くなってきたなあ。  
頑張らないと。

十五章 新たな動き（前書き）

毎度ながら遅い時間 W W W W

うん、ダメダメだな o r z



## 十五章 新たな動き

遠坂家のとある部屋。

朝も早い時間に話し合う人物達がいた。

「  
　　と言うのが、昨日起こったことのあらまじだ。」  
「そう。バーサーカーとランサーが戦って、ランサーが勝ったのね。  
そして、異変の顕在化、か……」

お分かりだろうがその人物達とは、凜とアーチャーである。  
何時もならギリギリの時間まで起きることのない凜だが、今日は何か予感がしたのか何時もより早い起床と相成っていた。  
その為、これ幸いとこの時間に昨日の報告をしているのだ。

「バーサーカーの真名が解ったのは嬉しいけど、敗退したんじゃないわね。」  
「  
　　確かに、そうだな。」

昨日のことを知る限り事細かに説明したアーチャー。(ただし、とある一点を除いて。)  
だが、彼は重要なことを忘れていた。それに気づく様子は今のところない。

「それで、他に言うことはないかしら？アーチャー。」

「むっ、他にか？いや、特にないと思うが……」  
「あら、そうなの……」

アーチャーを見る凜の目。それは危険な色を有していたが、未だ昨日の事に思考を馳せているアーチャーは気付かない。

「そう、本当に何も無いのね……」  
「りっ、凜？」

ここに来て、漸くアーチャーは凜のオドロオドロした雰囲気気付く。  
だが、なぜそうなったのか、いくら考えても思い至ることがなかった。  
このときばかりは、アーチャーの鍛えられた頭脳も空回りするばかりだった。

理由はわからないがまず謝ろうとしたが、もう遅かった。  
凜は己の部屋に防音の結界をはり、衝動のままに動いた。

「ぬぁに、一人で、無断で、出歩いてるのよ！！」  
このアホサーヴァント                    「！！」  
「グハア！！」

叫んだ凜は拳をアーチャーの鳩尾に叩き込み（魔力で強化済み）、その衝撃で僅かながら下がった顔にガンドの嵐をお見舞いした。

哀れ、アーチャーは星にな……る訳もなく、床の上でピクピクと痙攣している。

凜はそれを一瞥するとフンと鼻をならし、ベッドの上に腰かけた。そして、もう一度だけ問いかけた。

「それで、私に言うことは？」

「その、勝手に行動したりして済まなかった。」

「ふん、解ればいいのよ。」

彼女は勝手に動かされたこと、相談もされなかったことに怒っていたのだ。

何か行動を起こすなら一緒に動くと考えていたため尚更。

確かに、異変については今父親が調べてはいるが、その間街に影響があるかどうかは解らないし心配でもある。

だからといって、何も言わずに一人だけで見回らなくてもいいではないかと凜は怒っていたのだ。

「また行くときは必ず私にも声をかけなさい。私もいくから。」

それと、アンタは私のサーヴァントなんだから、勝手に行動するんじゃないわよ。」

「ああ、わかった。次からは一緒に行こう。」

遠坂家は、今日も平和だった。

そして、時間は流れ学校の屋上。  
またまた彼等は集まっていた。

凜は朝アーチャーに聞いていた為、何故呼ばれたのか予想がついていた。

しかし、桜は例のごとく教えることが出来なかったため疑問符が浮かんでいた。

そして、以前とは違うことが一つ。

「それで、僕まで呼んで一体なんなのさ。  
詰まらないことだったら怒るからな。」

この場に、間桐慎二がいることだ。

例の話をするにあたり、結果をただ伝えるよりも話し合いの場にしてもらった方がいいと思ったのだ。

例え魔法が使えなくとも彼は魔術師だ。

しかも、彼は御三家の一つの家の嫡男でもある。今の状況を知って貰っているに越したことはない。

「慎二、例の異変の事は覚えてるよな。」

「聞いたばかりの話をおぼれるわけないだろ。僕を馬鹿にしてるのか？  
で、それがどうしたのさ。」

確認のために聞いた土郎につっけんどんに返答する慎二。  
面倒臭いと言つ感情が態度にありありと現れていた。

それに苦笑いしつつも、ちゃんと聞いてくれるのが慎二のいいところ  
だよな、と思う土郎。

しかしそれを表に出すことはない。言つたが最後、怒鳴つて立ち去  
つていつてしまうことが解つていたからだ。

「うん、その異変の事なんだけど。」

昨夜遠坂に聞いたことを説明したら、イリヤが見回りに行くつてき  
かなくて実際に行つちやつたんだ。」

それを聞いて、慎二はやや呆れの表情を呈し、桜達は行動の早さに  
驚いた。

「危険かもしれないつて所に自分から突つ込んでいくかい？普通。  
と言つか、よく止められなかつたね。」

「寧ろ送り出してたぞ。言い出すと聞かないからつて。」

「ええ。それにバーサーカーもいますから、大事には至らないと判  
断したのでしよう。」

思わず肯定の頷きを返す。

付き合いの長い彼等も、イリヤの性格は重々承知だからだ。

バーサーカーに関しては見たことがないため判断できないが、知っているだろうセイバーが強く諫めていなかったことからその実力が予測できると言うものだ。

「それで、何か見つかったんですか？先輩。  
あつ、それともまた異変が起きたのでしょうか？」

なかなか鋭い指摘をする桜。  
だが、自分ではその可能性は低いと思っているのか、本当に何気ない口調だった。

聖杯戦争が始まって暫くして現れた異変が、昨日の今日でまた現れるなど普通に考えれば可能性は低い。  
だから、特に意識せずに出た言葉だったのだろう。

士郎は桜の言葉に表情を引き締めた。  
それに、桜達は軽く目を見張った。  
視線をずらせばセイバーも士郎と同様な表情をしており、その目は真剣だった。

まさか、と言う思いが強くなる。

「……実は、その通りなんだ。」

「はい、イリヤスフィールは異変に襲われたといっていました。」

「ん……？異変に、襲われた？」

聞き逃せない一言を聞き、慎二はその言葉を繰り返していた。何故なら、前聞いた話は見えなかったといっていたのに、今はハッキリ襲われたと言ったのだ。

「そんな！！イリヤさんは大丈夫だったんですか？」  
「それで、どんなモノだったんだい。」

桜はイリヤの身を心配し、慎二は相手がどんなモノだったのかを尋ねた。

イリヤから聞いた状況の説明を始める土郎達。  
なるべく分かりやすい様にと意識しながら言葉にする。

この場にいる全員が事態の重要性を理解している為、静かに話に耳を傾けた。

「最初は特に異常はなくてある程度見回ったから帰ろうとしたらしいんだけど、ランサーの気配を感じたからそっちに向かったんだ。」  
「異常事態が起きているとはいえ今は聖杯戦争中です。戦いの時間である夜に遭遇したならば、己の信念と誇りのため向かい合うことは必然ですから。」

フムフムと頷く聞く側の者達。

参加者同士がぶつかるのは当然で、そこに異常など存在しない。

その中でアーチャーだけは誰にも悟られないように苦い顔をしていた。

セイバーは誇りと信念のために向かい合うと聞いていたが、アーチャーにとってはそんなことはない。

信念には同意できるとしても、誇りと言うのはアーチャーにとって必要ないものであるのだ。

勝つためならどんなこともやるし、どれ程非常な策であろうとも実行してきた。

そう、勝利のためならどんな泥であろうと被ってきた。

そこに誇りなど存在せず、ただただ結果のみを求める姿がそこにはあった。

だからこそアーチャーは誇りなど理解できなかったし、しようとも思わなかった。

そして、そんな生き方をしたからこそ英霊と言うものにたどり着いてしまったのだ。

そこまで考えて、矢張そうそう変わるなどできんか……と心の中で自嘲した。

そんな考えをおくびにも出さず真剣に聞き入っている態度を貫いていた為、アーチャーが違うことを考えていた事に気付くものはいなかった。

「イリヤのバーサーカーとランサーが戦ったあと一寸話して、いざ別れようとしたときに異変が現れたらしいんだ。」



話は続く。

核心の部分に差し掛かったからか、士郎とセイバーの表情は一層引き締まった。

「現れたそれは、イリヤ曰く影みたいだったっていった。」

「影……ですか？」

「それだけじゃ解らないだろ。もっと詳しく説明しろよ、衛宮。」

慎二の言葉に、解ってるよ、と返す士郎。

だが、上手く言葉が見つからないようで、どう説明しようかと逡巡していた。

それは、イリヤの説明にも原因がある。

帰ってきたイリヤは興奮し混乱していたのか、説明もに纏まりがなく支離滅裂だった。

かわりにバーサーカーが伝えようにも言葉を話せず、また文字も書けないため説明することができない。

イリヤは一通り喋った後疲労が表に出てきたのか、すぐに寝入った。そして今朝士郎達が学校に行く時間になっても、起きてくることはなかった。

だからこそ士郎達もキチンと理解できているわけではなく、自分達なりに纏めて話すしかできないと言う訳だ。

「私達も昨夜イリヤスフィールから何とか聞けた程度ですので、これ以上詳しくとなると……申し訳ありません。」

自分が悪いわけではないのに、実直に謝罪の言葉を口にするセイバ

！。  
真面目であるからこそ、正確に伝えることができない事に申し訳なさを感じているのだろう。

それを見て、僅かに懐古の念にアーチャーは駆られた。

彼女らしいと思つ心に、チクリとした痛みが襲う。

この場にいるセイバーが‘彼女’ではないことは理解している。

それでも‘同じ存在’であるが故に重ねてしまう瞬間があるのだ。

「仕方ないわね。」

アーチャー、影のことで貴方がわかる限りの事をここで話して。」

黙って聞いていた凜が突如話だし、アーチャーに話を振った。

彼等はその内容に一様に驚く。

話せ、と言うことはつまりアーチャーが知っていると云うことで……

そこで、土郎とセイバーは何か思い至った様だ。

ハツとした表情になった。

「そういえば、襲われているとき誰かに助けられたって言ってたな、

イリヤ。

そうか、あんだだったのか。ありがとな、助けてくれて。」

「と言うことは、飛んできた剣と言うのは貴方の攻撃だったのですか。」

成る程、納得しました。

イリヤスフィールを助けていただいたこと、私からも感謝します。」

飛来する剣の正体がアーチャーによるものだとわかり、納得の意を表す。

‘アーチャー’であるなら、そのようなことも容易いだろうと。

二人はアーチャーにイリヤを助けてくれたことに対する感謝を笑顔で述べた。

セイバーは兎も角、士郎からも素直に感謝の言葉が出てきたことに内心アーチャーは驚いていた。

自分達がエミヤシロウであるかぎり、お互いに相容れない存在の筈だからだ。

衛宮士郎がアーチャーを知らなくても本能の部分で拒絶を行い、互いに反発し合う。

自分も含め、今まではすべからくそうであった。

だが、ここではそれが無いようだ。

自分はその歴史ゆえにその感情を抱かずにはいられないが、奴は自分に対し忌避の感情がない。

‘名前が同じだけの他人’。そんな考えがアーチャーの脳裏を過つた。

実際にそれに大きな違いはないだろうと思う。  
衛宮士郎が「衛宮士郎」として産まれた起源があの大火災なら、それがなかったここでは衛宮士郎はエミヤシロウではない。……なり得る筈がない。

内心の動揺を押し隠し平然を装いながらアーチャーは口を開いた。

「……いや、感謝されるような事ではない。

遭遇したのは偶然で、一般の人間を襲わないと言う保証もないから行っただけだ。」

顔を逸らしながらのそれに、他の者達は照れ隠しなのだと認識した。  
アーチャーの性格からして、そう考えるのが妥当だからだ。

アーチャーもそれに気付いたが、あえて知らんぷりを決め込む。  
勝手に勘違いしてしてくれるなら、それに越したことはない。  
まあ、照れていると思われるのも糺ではあるが。

「なあに、アーチャー。照れてるの？」

いいことしたんだから別に照れなくても良いじゃない。」

「別に照れてなどいない。」

凜がからかうように言う。

アーチャーは反論するが、それも勘違いを助長させるのを理解した  
上での言葉だ。

桜はそんな凜を宥めるように動き、慎二はコント何てしてないでさつさと話せとばかりにイライラしていた。

昼休みの時間も少なくなってきたこともあり、アーチャーは話を進める。

「はぁ……それで、例の影のことなのだが……」

その一言で、さっきまで緩んでた空気が張り詰めたものへと戻る。

「そうだな……敢えて言葉にするなら、負のモノが闇や影と言った物を借りて実体を持った様なもの、と言えはいいのだろうか。攻撃が効いていたことから、実体があるのは間違いないだろう。」

「負のモノ、ですか……それでイリヤスフィールが憔悴ぎみだったのですね。」

セイバーは昨夜のイリヤの状態を思い出しながら告げた。

イリヤは困惑していただけでなく、疲れているようにも見えたのだ。

それが、影による影響であるならば確かに納得がいく。

影から発せられる負のプレッシャーがイリヤには堪えたのだろう。

「それに、直前までランサー達が気付いてなかったことを考えるに、そう言うものを伝った移動ができるとも考えた方が良さそうだ。」

「ええ、そうね。あのランサーならそうでもない限りスグに気づきそうだし。」

「成る程、ですから突然現れたように感じると言っわけですね。」  
更に状況から推測できることを口にするアーチャー。  
この中でランサーを知るものはアーチャーと凜しかいない為判断が  
つきかねないが、その口ぶりには聞いている者達も納得させれるだ  
けの響きがあった。

「私は遠目に見ただけなので、これ以上言えるようなことはない。  
もつと情報がほしいなら、直接対峙した者達に聞くことだな。」

その言葉でアーチャーの台詞は締め括られた。  
これでも十分な収穫と判断したのか、異を唱えるものは存在しな  
かった。

そこに、タイミングよく昼休み終了の鐘がなった。

「もう時間ね……ねえ、これからは毎日昼休みに集まらない？  
何かあつて集まるのも大変だし、効率が悪いでしょう？」

教室に足を向けながら凜がそんな提案をした。

一瞬呆気にとられた一同だが、確かにその方がいいと思えるだけの  
理がありこれも反論らしい反論はなかった。

明日からは異変が終息するまで毎日昼休みに集まる事が決定した  
のだった。

言わずとも知れたことだが、勿論聖杯戦争に関する手の内を話すこととはない。あくまでも異変への対策であるからだ。

更に時は過ぎ、放課後へと移る。

凜と桜が一緒に歩いていた。

「それにしても、二人だけで行動するのは久し振りですね、姉さん。」

「そう言えばそうね。こうやって待ち合わせでもしない限り、時間が合わないしね。」

厳密には霊体化したサーヴァントもいるのだが、見えない以上いないものとして行動していた。

なぜ二人で帰っているかと言うと、昼の話から異変は主に夜に現れる可能性が高く、今の時期は日が落ちるのが早いため念を押してのことだった。

桜にはライダーがいるため大丈夫だとは思うが、矢張心配だったのだ。

サーヴァントが2体いれば、大抵のことにも対処できるだろうと考えたのも大きい。

本来であれば家が同じ方面である慎二も誘ったのだが、それは拒否されたのだった。

曰く……

『お誘いはありがたいけど断らせてもらおうよ。僕は女子皆のための存在だからね。』

二人だけ鼻屑は出来ないのさ。』

あまりにも自信満々に言い放ちさつさと帰った慎二のその言葉に、凜と桜そしてライダーが閉口した。

ただ、アーチャーだけは苦笑いを浮かべていたが。

だが理由はそれだけではない。

魔力を持たない自分なら襲われる心配は無いだろうと判断してのことでもある。

楽観視し過ぎていると言えなくもないが、彼等の知る限り魔術師の前に現れていたため仕方のないことだろう。

反論の言葉がなかった凜達を尻目に、足早に帰っていった。

そして、慎二はこうもいつていた。

一族の書物も漁り異変のヒントになりそうなものを探す、と。

例え魔術回路が途絶えてしまっても、伝わる魔術の知識まで無くなるわけではない。

魔術が使えなくとも魔術師足りうと言っ慎二の覚悟の表れでもあっ



ただ。

「まっ、慎二がマキリの書物を調べてくれるって言うんなら言うことないわね。」

「（クスクス）頼っているならそう言ってもいいんですよ、姉さん。」

「誰がよ、桜！！私はただ調べる人間が増えれば楽になるなっと思っただけよ。」

珍しく桜が揶揄するように言葉を放った。

凜は赤くなり否定するが、発している言葉が頼っていると言うことを如実に表していると言うことを本人だけが気付いていないのだった。

気持ちを落ち着かせるために凜は一旦深呼吸をし、軽く自分の妹を睨んだ。

「桜、アンタ口が達者になっただわね……」

「姉さんのお陰です。」

「まあいいわ。」

「ってそうだ。桜、私達今夜から見回りに出るから。」

凜はアーチャーと決めていたことを桜に告げた。

始め心配させまいと伝えずにいようと思ったのだが、それでは逆に心配されるぞとアーチャーに指摘されて伝えておくことにしたのだ。

凜が言わんとしてることを察し、桜は一瞬目を見開いた。ついで、不安そうな表情をする。

「見回り、ですか？」

「そつ。聖杯戦争もまだ続いているし、それも兼ねて、ね。」

桜の反応にヤツパリかと思しながら、殊更何でもないように凜は言った。

桜はほんの少し考え込んだかと思えば、決意を瞳に込め凜に告げた。

「では、私もいきます。」

思わぬ宣言に、凜が呆気に取られたと言う表情をした。

見回りにいくと言うのは、戦闘しに行くも同義である。なので、人を傷付けることを嫌う桜がこんなことを言うとは思わなかったのだ。

「なつ、桜。アンタ何をいつてるのか解ってるの!？」

「はい。私も皆を、この町を守りたいんです。」

ライダーには悪いかもしれませんが、その為なら私だって戦います。

「【サクラ、私のことは気にしないで下さい。」

【サクラが望むなら、私は戦いましょう。】

ありがとう、と小さく呟く桜に、ライダーも同じ気持ちなのだと思は理解した。

凜は厳しい表情になり、もう一度だけ桜に聞いた。

「ほんとにいいのね？」

異変の調査だけでなく、聖杯戦争の参加者とも戦うことになるのよ。

「解ってます、姉さん。」

その覚悟があります。参加を辞退すればいいのかもしれませんが、自分で召喚しておいて戦わずにそうするなんて出来ません。」

桜の決意は固く、凜がどんな言葉を発そうとも翻すことはなかった。

桜は意外と頑固であり、一度決めたことを途中で放り出すことは皆無であった。

故に、きつと今回もそうだろうと解りつつも、説得せずにはいられなかった。

遂には凜が折れ、それを認めた。

一連の流れを見ていたアーチャーが、流石は姉妹よく似ている、と声なき声で呟いていた。

会話の終わりに丁度家の前に到着した。

凜と桜は今夜から巡回することを報告すると共に、現時点でわかっていることはないか尋ねようと父親の部屋に行くことを決めた。

玄関を開け、帰宅の声をあげる。

「「ただいま。」」

奥の調理場から、葵のお帰りと言う声が届く。

アーチャーとライダーは廊下の上で霊体をとき、実体を纏った。

凜達が靴を脱ぐ動作をしていたとき、二人同時に「それ」に気付いた。

「どうした、凜？」

「何かあったのですか、サクラ？」

少したつても上がってこない凜と桜に、アーチャーとライダーが疑問の声を上げた。

凜達のもとへ行き、視線を辿ればそこには……

「……靴がどうかしたのですか？」

ライダーは尚もわからず声をあげるが、アーチャーにはわかった。

確かにそれは何の変哲もないただの靴である。  
ただし、'今まで全く見たことがない'事を除けば。

新しく買ったにしては使い込まれており、そうではないことを主張  
していた。

つまり、最も可能性が高いのは客人と言うことで、この時期の客人  
と言うことはつまり……

顔を見合わせた凜達は、恐らくこの客をもてなしてるだろう父親の  
元へ向かったのだった。

## 十五章 新たな動き（後書き）

うーん、引きがまいちなあ……

それに、言いたいことや言わせたいことを入れるのも難しい……って、ここまで書いておいて今更なきもしますが（笑）

来週は土曜出勤と忘年会が重なってしまったので、恐らく日曜の投稿になります。

## 十六章 会合（前書き）

まさかこんな時間になるとは……

昨夜少し位は書こうと考えてたのに、帰宅早々寝入ってしまった。  
今日も眠気がとれず、うつらうつらしたままの執筆。

このままでは駄目だ……何れ決めてる投稿日に投稿できなるなる。

頭鍛え直してきます!!

（ダッシュで逃亡）

## 十六章 会合

side 遠坂時臣

凜から異変の事を聞いた日より2日、時臣は今日もその事について調べていた。

調べることと言えば、やはり龍脈の流れである。

この土地に魔術的異変が起こった場合、最も考えうる原因であるからだ。

だが、大した発見は見当たらなかった。

強いてあげるとすれば、龍脈に流れる力が僅かに強くなっていることである。

だが、これは十年での開催による影響だろうとあまり重視してなかった。

「……龍脈に異常は無し、か。

とすれば、外部の仕業か？聖杯戦争に乗じてこの地に入り込んだとも考えられるが……」

龍脈を利用した簡易的な結界の反応がなかったため、それもないかと考え直す。

あれこれ考えを巡らすが、一人ではやはりこれと言ったものは思い浮かばない。



さて、どうしたものかと考えていると、遠坂邸に張ってある結界が反応したことを察知した。

しかし、自分の元に向かってくるそれに悪意を感じることはなかったため、そのまま到着をまつ時臣。

そう時間をおかず現れたものは、魔術師が使役する使い魔だった。そして、それに時臣は見覚えがあった。

「やれやれ、何のようだね。」

いくら知り合いとはいえ無断侵入は頂けないな、衛宮切嗣。」

『悪いね、遠坂時臣。こっちの方が直接赴くよりいいと思ってね。』

それは、衛宮切嗣の使い魔だった。

ここは冬木を治めるセカンドオーナーの家であるため、無断で入り込んだ切嗣に対し苦言を呈す。

しかし、そこまで本気で言っていない事を察しているのか、切嗣はサラッと受け流した。

言っても無駄だと言うことを理解している時臣はその一言だけで打ち切り、サツサと本題に入ることにした。

「それで、用件はなんだい。わざわざ使い魔での連絡と言うことは、それなりに重要なことなのだろう？」

『ああ、そうなんだ。』

息子から聞いたんだけど異変が起きてるんだらう？それに関する事

なんだ。』

時臣の表情が一瞬で真剣な物へと変化した。

わざわざそれを伝えに来たと言うことは、恐らく自分が知らない情報を探ったことに他ならないと考えたからだ。

それならば話し合いに時間がかかるため本人が直接訪れた方が効率よく、魔力だつて無駄にならないはずだ。

しかし、切嗣はそれをしなかった。

それは、知っているからだ。葵に心配をかけたくないと言う時臣の心境を。

だからこそ、滅多に訪れない自分が向かえば何か大変なことが起こっているかもしれないと教えることになりかねないと、使い魔による訪問となつたのだ。

勿論、魔術師の本拠地に行くわけにはいかないと言う理由とである。いくら交流があるとはいえ、他の魔術師を工房やそれに近い場所に入れるなどあり得ないことだ。

それならば、魔術使い、を自称する己の家に来てもらった方が言いと切嗣は判断したのだ。

それらすべてを理解した時臣は一瞬顔を緩め、すぐに真面目な表情に戻した。

「では、昼過ぎにでも向かわせて貰うよ。流石に今すぐと言うのは無理だからな」

『うん。じゃあ、待ってるよ。』

後程の訪問を取り決めた彼らは一旦話し合いを終了し、時臣は切嗣の使い魔が出ていくのを見送った。そして、完全に結界の範囲内から出たことを確認したあと動き出したのだった。

昼を過ぎ、時臣は言った通り衛宮家を訪れていた。

寛んでいる様子はないものの余り緊張したようではないことから、信頼関係が見えると言うものだ。

「すまないね、わざわざ来て貰うことになって。」

「いや、こちらの方が都合がいいのは間違いない。」

アイリスフィールがお茶を置き、切嗣の隣へと座る。

そして、人が少ないからかバーサーカーも現界して部屋の中にいた。

時臣はその事を不思議に感じ尋ねた。

「バーサーカーのマスターはどうした？」

「イリヤは部屋だよ。」

まだちょっと辛そうだったから、休ませてるんだ。詳しいことは例

の事を説明しながら。」

そう言つて、切嗣は昨夜起きたであろうことを伝えた。  
内容はほぼ同時に学校で行われていることと変わらない。

ただ一つ違うのは、当事者でもあるバーサーカーがいるため確認を  
とりやすいと言つことだ。

「異変が目視できるようになったと言つのか……」

「ああ、らしいんだ。」

たった数日でこの変化は異様だと思つんだけど、セカンドオーナー  
の調査ではどうだったか出来れば教えてもらえないかい？」

少しだけだとしても情報があるか無いかでやれることは全然違つて  
くる。

それは、攻めだけでなく守りについても同様だ。

家族を守る為ならばどんなことでもしようと切嗣は決意を固めてい  
る。

だからこそ、情報が必要なのだ。

時臣としてその気持ちはある。

それに、土地の管理者として町の人間も守らなければならないと言  
う責任まで存在する。

それらを踏まえ、管理者だけの情報だ等と言つわけにはいかない  
と、時臣は知る限りの情報を伝えようと決断を下す。

とは言うものの、現状で知り得た情報はさして多くないのだが。

「現状では有益な情報はない。辛うじて龍脈を流れる力が上がっていることを確認はしたが……」

「異変との関連性は解らないって訳だね。」

「そもそも、六十年周期であるはずの聖杯戦争が、たった十年で始まったことも異常だ。」

龍脈に関してはそちらの影響と言う方が説得力がある。」

「確かに、そうだね。」

それに、十年前の聖杯の誤作動とも言うべき働きも考えれば、その時から異常があったとも考えられるしね。」

ポンポンと意見を言い合う二人だが、それらは現状での打つ手の無さが露になるだけだった。

異変の正体も現れた原因も全く解らないことに、同時にため息を吐いた。

アイリスフィールも力になりたいと考えてはいるが、そこまで魔術の知識を有しているわけではないため口を挟むことはなかった。喋れないバーサーカーは言うまでもないだろう。

「やはり、異変に関する情報は殆ど無いか。」

「そうだね。今に伝わる魔術での探索じゃ神秘の面からも難しいし……そうだ、キャスターに協力を仰げないかな？」

切嗣の言葉に思いもよらなかったと言う表情をする時臣。

だが、よく考えればそれほどいい案はないと理解した。  
しかし……

「確かにキャスターとして召喚されるほどの存在なら、かなりの魔術を知り扱えるだろうが……今は聖杯戦争中だぞ。」

それに今度は切嗣が何をいつてるんだと言う表情をした。

「あれ、知らないのかい？」

キャスターは聖杯戦争に参加してないんだよ。だから、その理由で断られることはない筈だよ。

最も、協力してくれるとも限らないけどね。」

始めて聞いた情報に驚くが、すぐに冷静になり確かにそれならば問題ないと思う時臣。

結局、異変の対応はこれから調査を進めると共に、経過を観察するしかないと言うことになった。

「それにしても、異変が目に見えるようになったと言うのは危険だな。」

「そうだね。攻撃が効いていたらしいから実体があるのは確実だし、下手をすれば一般人にまで被害が出かねないよ。」

話題は異変自体の考察へと移る。

「それに、イリヤの様子から何らかの精神干渉の力も持っているよ  
うだしね。」

バーサーカーを見て眩けば、切嗣の言葉を肯定するように頷いてい  
た。

その精神干渉が何であるかを時臣は聞く。

「その干渉がどう言ったものであるかは解るのか？」

「多分何だけど、恐怖何だと思う。」

恐怖、と繰り返す時臣。

バーサーカーも先程と同じように頷いていた。

「昨夜イリヤが帰ってきたとき気丈に振る舞ってはいたけど、体が  
震えていたしバーサーカーに抱きついたまま離れなかったんだ。」

「そうね、あんなイリヤは久しぶりに見たわ。」

眠らせるときも、私にしがみついたまま離れようとしなかったです  
し……」

切嗣ぐに続き、アイリスフィールも昨夜のイリヤの様子を告げた。  
それを聞いて、確かに恐怖と言うのが妥当だと感じた。

「成る程……恐怖を感じさせる異変か。」

つまりは、負の感情を押し込めたようなものか。」

口にした内容は、アーチャーが言ったことと殆ど同じであった。

「結局はまだ詳しいことは解らないってことだね。」

「ああ……頭のいたい問題だな。」

切嗣は他人事とばかりに頑張つて、と軽いエールを送る。

それに多少恨みがましい視線を送るものの、実際時臣だけで処理しなければならぬことも多いため息をつくにとどめたのだった。

手元のお茶を飲み干し、話は終わりだと時臣は席をたつ。

見送りのため切嗣とアイリスフィールも立ち上がり、玄関へと向かう。

バーサーカーは己のマスターを安心させるべく、イリヤの自室へと向かった。

「では、今日はこれで失礼させてもらう。」

「今日はわざわざ来てもらって本当にすまなかったね。」

「対したおもてなしもせず、ご免なさい。」

玄関についた彼らは別れの挨拶を交わす。

「一応、これからも異変の情報が入れば今日のように報告し合つてしよつ。」



「了解したよ。情報と頭脳は多い方がいいからね。」

最後に情報交換について簡単な取り決めをしていたとき、時臣は話題に出ただけではつきりと決めていなかったものを思い出した。

「そうだ、キャスターの事をまだ決めてなかったな。どうするのだ？」

「おっと、忘れるところだったよ。」

「うん、そうだね……土郎に行かせるかな？キャスターのいる場所的にも、その方が違和感も無さそうだし。」

キャスターがどこにいるかは知らないが、この点に関しては自分より知っている切嗣がそういうのだからそうなのだろうと時臣は思った。

なのでわかった、というだけで今度こそ衛宮家を後にしたのだった。

外に出てみれば話の進まなさに反して時間がたっていたようだ。

日も暮れかかり、辺りは赤く染まっていた。

まだ明るいと言えるこの時間に異変が現れるとは思わないが、それも絶対とは言えないため早足で帰宅する時臣。

他にも、学校帰りや買い物帰りであろう人が多く歩いている。

「平和、だな。」

今起きている異変を知らない町の人々はすべからく笑顔で歩いている。

それを歩きながら見ている時臣はこの町を守らなければいけないと、異変に平和を壊されるわけにはいかないと再度決意を固めた。

その為に、家にあるすべての文献や魔術道具をあさり、何か役に立ちそうなものをこれから探すことを決めた。

そう考えているうちに、時臣は自宅にたどり着き玄関を開けた。

「葵、今帰った。」

「おかえりなさい。」

お客様が先程からお待ちですよ。」

客がいると言う言葉に時臣は面食らった。

それは客がいたからではない。

何故なら己が呼び寄せた人物であるからだ。

驚いたのは、外部から来た以上冬木の結界が反応する筈だが、それに気付かなかったことだ。

それほど話し合いに集中していたと言うことだろうが、魔術師として少し情けないと思う時臣だった。

「客はリビングかい？」

「はい、たった今ついたらしいので取り敢えずお茶をお出ししました。」

客が今どこにいるかを尋ね、その場所へ向かう。

リビングには言われた通り客がお茶を飲んでいた。

時臣が一步足を踏み入れると、片方の男がそれに気づき時臣に一礼した。

それにもう片方の男も家主が帰ってきた事に気づき、手にしていたカップをおいて振り返った。

「久しぶりだな、遠坂時臣。」

「そうだな。長らくぶりだな。」

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト、それとランサー……は紛らわしいので、デイルムッド・オディナ。」

そう、客とは十年前に相對したランサーの主従だったのだ。

以前呼ぼうと時臣がいていたのは、十年前の聖杯戦争に参加したもののたちだったのだ。

そして、ランサー。彼がいることで、数日前にアーチャー達が受肉したのはセイバーだけではないと推測したのが事実と言うことが解る。

あとのどのくらい受肉を果たしているかは、時臣が呼び寄せた事で何れ解ることだろう。

「済まないがここで話すのも何だ、私の部屋にいくつ。」  
「ああ、いいだろう。いくぞ、ランサー。」  
「はっ。」

時臣はケイネスとデイルムツドを伴い自室へと向かった。  
また、葵には話を聞かせないようにお茶は要らないと言つのも忘れない。

時臣の部屋に移動し、ケイネスはすぐに話を切り出した。

「それで、ワザワザ呼び寄せた理由を教えてくださいか。」

ケイネスは尊大な態度で時臣に尋ねる。  
本来なら頭に来る態度だが、そういう人間だと知っているため苦笑いに留める。

そして、今冬木で起こっていることを二人に説明した。

「影の異変……嘗てのキャスターの海魔の様な姿でしょうか？」  
「ふん、厄介なことが起きているようだ。だから我々に助力を願ったと言っわけか。」

現状の厄介さを理解し鬨めっ面になる彼ら。  
なぜ発生するか、いつそれが襲ってくるのかわからないものほど厄介なものはないと知っているからだ。

「恐らく魔力を持っているものを襲うのではないかと思っているのだが……そう言えばソラウ殿はどうした？」

「アイツならホテルだ。結界は入念に張っているから問題ない。」

ふと、この場にはいない人間を思い出し、時臣はケイネスに尋ねた。デイルムツドに供給する魔力はソチラからされているのを知っており、一緒に行動している事を確信しているからだ。

結界がどこまで効くのかは解らないが、ある程度の効果は認められるだろうとそれについての話は終わらせることにした。

「そうか、それで今のところ余り解っている事が無いため、異変に対する見回りと起きたときの対処・報告をお願いしたい。頼まれてくれないか。」

「ふん、仕方ないな。十年前の事にも関係してるかもしれないと聞かされてはやらんわけにはいかん。

いいな、ランサー。」

「はい。主の仰る通りに。」

時臣の要請に渋々ながらも頷くケイネス。

突っぱねることとて出来たが、寧ろ性格的にはそちらの可能性が高かった。自分の関わったことで異状がそのままになっていることが許せなかったのだ。

「助力感謝しよう。」

「ただの気まぐれだ。」

そして、細々としたことを話し合っているとき、時臣はもう一つの事が気になった。

ついでとばかりに、それを聞く時臣。

「そうだ、もうひとつ気になることがあるのだが。」

「むっ、何だ？」

「いや、君の弟子とは一緒に来なかったのかと思ってね。」

同じ時計塔から来るのだから、一緒なものだと思っていたのだが。」

時臣の言葉にケイネスは重いため息を吐き、ディルムッドは困惑したような苦笑いをした。

それに、何となく起こったことがわかった時臣だった。

「もしかして、またかい？」

「ああ。全く、マスターならば己のサーヴァントくらい制御できるようになっていっていると言うのだ。」

あれから十年たっているのだぞ。私の弟子を名乗るものが情けない。

「ケイネス様、流石にあの方を完全に御す事は難しいかと……」

ケイネスは相変わらず自分のサーヴァントに振り回されてばかりいる弟子に対して悪態をつく。

そんなケイネスを宥めるようディルムッドは言う。

実際、誰であろうと行動を制御できるとは思えなかったのだ。  
かのサーヴァントとは、そんな存在なのだ。

十年たつて少しくらい成長したかと思えば、自分のサーヴァントの突拍子もない行動にあたふたしている弟子の姿を思い浮かべる。  
彼等二人のやり取りは、ある意味時計塔の名物コンビとなっていた。  
その面白さや凸凹さで。

このように弟子にたいして悪いとこばかりあげるケイネスだが、自分が制御できるかと聞かれればそう断言できない。

今思えば、自分のもとに届く筈だった最初の聖遺物を弟子が横取りしていったことに、逆に感謝をしてもいいくらいと思っていた。  
いや、本当は業腹物<sup>しゅつぱくぶつ</sup>なのだか、そのお陰で今の従順なランサーを得たことと、召喚する筈だった存在を比べるとどうしてもそちらに考えが傾いてしまうのだ。

「変わらず振り回されているとは……大変だね、ウェイバー君も。  
いや、この場合は現代に馴染みすぎたライダー……イスカンドルに  
さすがと言うべきかな。」

時臣の言葉にもあまり力はなかった。

ケイネスの弟子とはウェイバー・ベルベットと言う名であり、そのサーヴァントは征服王とも言われるイスカンドルである。

このイスカンドルを知るものを悉く脱力<sup>ことごと</sup>させることとは、イスカンドルが現代に馴染みすぎていると言うことだ。

さらに詳しく言うのなら、現代日本が誇るサブカルチャーである漫

画やゲームを気に入り、それに没頭していると言っただ。挙げ句の果てに、キャラクターが描かれたシャツやグッズを集めているのだから相当なものだ。

今回も呼んだのが日本の時臣と言っことで、これ幸いとばかりに東京の秋葉原によっているのだ。

だから、ここにいるのはケイネス達だけと言っわけである。イस्कन्दル、彼はもう立派なオタクの一人と化していた。

しかし、受肉した際は再び征服に乗り出すと言っようなことを言っていたはずなのだが、いいのだろうか。

……まあ、本人が幸せそうならそれでいいのだが。ただ、付き合わされるウェイバーは可哀想であると言っ言えない。

「では、彼が到着するのは明日と言っわけか。」

「なのだろう、詳しくは知らん。」

素っ気ないケイネスの態度だが、四六時中彼等と関わっているのだから仕方ないなと思っ。

と、ディルムツドが唐突にあらぬ方を向いた。

「どうした、ランサー。何か感じたのか？」

「いえ、サーヴァントの気配が近付いてきたもので、つい気になりまして。」



ランサーの言葉に、時臣が答えた。

「ああ、それは家の娘のサーヴァントだろう。」

ほう、とケイネスは呟いた。

だが、デイルムツドは晴れぬ顔をしていた。

「何だ、まだ気になるのか？」

「はい、その……サーヴァントの気配が二つあるもので……」

来れにはケイネスも二つ？と首をかしげた。

真相を知っている時臣に目を向ければ、笑いを含んだ表情でこちらを見ていた。

何も言わず見ていれば、隠す気もなかったのだろう。すぐに答えが得られた。

「デイルムツド、君の感覚は正しいよ。家には二人のサーヴァントがいるからね。」

「なぜサーヴァントが2体いるの……そう言えば、お前には二人娘がいたな。つまりは……」

「そう、二人ともマスターになっていると言うわけだ。」

ケイネスは感嘆の息を吐いた。

いくらこの町にいる魔術師が少なくとも、一つの家から二人マスタ

ーが出るなど稀有なことだからだ。

例えば本人が自覚していないにしろ、魔術師の才能を秘めた人物だと  
ている。

十年前もそんな人間が参加していたと言う実績もある。

その中で選ばれたと言うのなら、かなり才能を秘めていると言うこ  
とになる。

衛宮家でも同様なことが起きているのだが、到着したばかりのケイ  
ネスはまだ知ることはない。

会話をしている内に、ケイネス達にも気配が解る程度に相手が近づ  
いてきていた。

部屋の前に到着した彼女たちがどんな人物なのか楽しみにしながら、  
ドアが空くのをケイネスは待つ。

「お父様。 来客中済みませんが今宜しいでしょうか。」

時臣はケイネス達に視線を送り、問題ないことを確認したのち返答  
した。

「ああ、大丈夫だ。入ってきなさい。」

ドアを開けて入ってきたのは時臣の娘と解る二人の少女。それとそ  
の後ろに付き従う鋭い目付きの紅いサーヴァントに眼帯をした長い

髪のサーヴァントだった。

## 十六章 会合（後書き）

逃亡と言つのは嘘ですすみません。

でも、もう少し余裕を持たせるように鍛え直さなければいけないのは本当かも……

頑張ります………

## 十七章 二つの交わり

帰宅した凧達は迷っていた。

帰宅してすぐ報告し夜の準備を行おうと考えていたのだが、来客中の今部屋に訪れていいものかどうか解らなかったのだ。

「どうしましょう、姉さん。異変に関することなら報告していた方がいいと思うんですけど……」

「そうね。何時まで時間がかかるか解らないから、今すぐ報告だけでもしておきたいけど……でも、下手に入って邪魔するのもしけないし。」

取り敢えずリビングに移動し、今すぐ時臣の部屋に行くかどうかを話し合う。

アーチャーとライダーは話し合うまでもないことに気付いていたが、凧たちもすぐに気付くだろうと黙っていた。

だが一向に気が付く様子がない。……これもウツカリの一種なのだろうか。

見るに見かねて、とうとうライダーが口を出した。

「サクラ、リン。悩む必要はないと思うのですが。」

「えっ?」

「どう言ひつとよ。」

凜達はまだ解らず、疑問符を浮かべている。  
ライダーは少し溜め息を吐きたくなった。

一つの事に集中するのはいいが、その分他のところに考えが及ばなくなるのはどうなのだろうか、ついついライダーは思ってしまう。そして、自分よりもこう言う説明に向いてる筈なのに、黙っているアーチャーに対しても恨み言を言いたくなった。

アーチャーが黙っているのはこう言う本人が気付かなかったことを指摘した場合、自分であれば照れ隠しと言う名の攻撃が向けられることを経験で知っていたからだ。

そして、ライダーであればそれが無いことも。

理不尽だと思わなくもないが、今更だとアーチャーは達観の域に達していた。

「ですので、今の時期の来客なら十中八九トキオミが呼んだ人物だと予測できるはずですよ。」

そして、呼んだ理由も例の異変に関する事であろうことも。

ならば、その異変に関することを報告しに行くのに、何ら問題は無いと思うのですが。」

ライダーはハッキリと、だが台所にいる葵の耳には届かぬよう告げる。

それを聞き、二人とも自分の考えの至らなさに気付き、凜は空笑いをし桜は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

そして、恥ずかしさを振り払うように、少し大きな声で答えたのだ。

った。

「そ、そう言えばそうよね。私ったら何迷ってたんだろ。」  
「そうでしたね。じゃあ、すぐに行きましょう、姉さん。」

二人は早足で移動を始めた。

その後、苦笑いのアーチャーと柔らかい笑みのライダーを伴いながら。

時臣の部屋の前に到着し、呼吸を落ち着けて声をかける。

どんな状態であれ、家訓である‘常に優雅たれ’を疎かにするわけにはいかないからだ。

「お父様。来客中済みませんが今宜しいでしょうか。」

一拍おいて、返答が来た。

「ああ、大丈夫だ。入ってきなさい。」

失礼します。

そう声をかけ凜が入り、その後に他が続く。

凜達の目に入ったのは、尊大な態度で椅子に座る男とその傍らに立つ美丈夫な男であった。

アーチャーとライダーは立っている男　ディルムツドの姿を認め  
た途端、思わず警戒体制を取っていた。  
それは反射に近いものだった。

それも仕方のないことだろう。

受肉した英霊の気配は当人が誇示しない限り人のそれと同じである。  
故に、ここまで接近しても、気付くことができなかつたのだ。

しかし、すぐ目の前にいるとなれば別だ。

いくら気配が普通の人間に近くても、肉体を得ていたとしても、サ  
ーヴァントはサーヴァントを感知することができる。

そう聖杯から力が与えられているのだから。

そんなアーチャー達に凜達は驚き、ディルムツドは困ったような笑  
みを浮かべた。

375

「ちよつ、一寸。何やってるの、アーチャー。」

「ライダーも、一体どうしたの？」

「凜、あの立っている男はサーヴァントだ。」

「ええ、そうです。まさかこのように近付くまで気付かなかつたと  
は、不覚です。」

アーチャー達の言葉に、再び驚く。

しかし、そこで一つ疑問が浮かび上がる。

「あれ？でも、今回のサーヴァントは全部揃ってたわよね。」



そうだった、と構えを解くアーチャー達。

そして、前回の休日の際に話題に上がったことを思い出した。

男に目を向けたアーチャーは確信した。第四次聖杯戦争に参加したサーヴァント全てが受肉したのだろうと言う事を。

「つまり、君は前回の聖杯戦争に参加したサーヴァントであり、受肉によってここにいと捉えていいのだな？」

「ええ、その通りです。」

確認の意味を込めたアーチャーの問いに、ディルムッドは素直に頷く。

内容に間違いはなく、特に隠すようなことでもないからだ。

ふと、アーチャーはこの男のクラスは何なのか聞きたいと言う好奇心に駆られた。

気づけば口を開いていた。

「ただの好奇心なのだが、君は何のサーヴァントなの……だったのかね？」

「私ですか？私のクラスはランサーでした。」

フム、とアーチャーは頷き、自分の知るランサーとは大違いだなととりとめもなく思った。

今回のランサーは好戦的で野性的。よく言えばおおらかで前向き、悪く言えば大雑把で楽道家。  
そんな存在だ。

しかし、今日の前にいる男は柔らかな物腰で、礼儀正しいと言う印象を受けた。

本当の騎士と言うのはこんな存在を言うのだろうか、相手をよく知らないまでも漠然とそう思った。

軽く考え込むアーチャーを尻目に凜が緊張した面持ちで口を開いた。

「前回参加者でランサーのマスターというと、もしかして時計塔の方ですか？」

ああ、と頷くケイネス。

凜達二人は時計塔の魔術師に会えたことに歓喜の念を滲ませる。  
時計塔は魔術師にとって最高峰の場所なのだ。

「お喋りはそのくらいにして、用事を聞こうじゃないか。二人とも。」

凜達の様子を仕方ないと理解しつつも、話が進まないと促した時臣。その言葉に部屋に訪れた理由を思い出した彼女達は、やっと本題に入った。

「はい、例の異変に関する事なんですが、今夜から見回りに行こうと思ひ報告しに来ました。」

勿論、聖杯戦争とは別件の行動として、です。」

「私も、姉さんと同じく見回りに出たいと考えています。」

時臣は二人の娘を見つめる。

姉の凜は負けず嫌いな性格の持ち主で、魔術師らしい考えを持ちながらも人の心も忘れない。

今回は負けず嫌いという人らしい思考に触ることがあったのだろうな、と時臣は考える。

一方、妹の桜はどちらかと言えば好戦的と言える凜とは違い、争いなどしたくない避けたいという優しい心を持っている。

今回マスターに成りはしたが、主に戦闘が行われる夜は全く出歩くことはなかった。

だが、戦闘を避けられるとは断言できない夜に、それを覚悟で出歩こうとしている。

……桜の決意を垣間見た。

ケイネスは興味深そうに見つめるだけで、口を挟むつもりは毛頭ないようだ。

「アレの事は全く解っていない。危険だぞ。」

忠告の言葉を口にするが、聞き入れるとは始めから思っていない。それでも魔術師として、親として言わずにはいられなかった。

「はい、解っています。」

「それでも、私も姉さんも少しでも力になりたいんです。」

まっすぐ時臣の目を見つめ返す。

二人に共通すること。それは一度決めたことはやり抜くと言う頑固さだ。

この事は凜はよく知られているだろうが、桜に関しては意外に知られていない。

その穏やかさに隠されているからだ。

黙って見つめ合っていると、横から笑い声が響いた。

「十年前にも思ったが本当に気の強い娘だな。しかも妹の方も同類のようだ。」

面白い育てかたをしたものだな、遠坂時臣。」

そして、また笑いだした。

凜は十年前と言う言葉に思い至ることがなかったのか、不思議そうに首を傾げた。

凜がわからないのも無理はない。

実際、会ったと言うより一方的にみただけと言う話なのだ。

「二人の覚悟は分かった。どうせ止めてもやるのだから。」

見透かした時臣の言葉に罰の悪そうな顔をしながらも視線は逸らさない。

それが、何よりも時臣の言葉を肯定していた。

「それに、止めると言うことは英霊である彼等の力を信じないと言うことでもある。」

流石にそんな恐れ多い判断は英雄相手に下せない。

そう言うわけで、娘達を頼んだ。ライダー、アーチャー。」

「勿論です。サクラは私が全力を持って守ります。」

「……マスターを守るのはサーヴァントの役目だからな、せいぜい頑張るとしよう。」

時臣の言葉にライダーはすぐさま返し、アーチャーは一瞬躊躇った後肩を竦めながら返答した。

アーチャーが躊躇ったのは時臣の‘英雄相手に恐れ多い’、と言う言葉に気をとられてしまったからである。

本物の英雄相手であればその考えも当然かもしれないが、まさか自分も含まれるなど思わなかったのだ。

アーチャーとて英雄であることに間違いはない。

しかし、真に己の力のみで英雄になった彼等と、英雄にさせられた

自分は違うモノと言うのがアーチャーの考えである。

そう、‘なった’のではなく、‘させられた’。

確かに英雄になることを決め、受け入れたのは自分の意思だ。しかし、そこに世界の意思ほかが働いていたのもまた事実なのだ。

自分は純正の英雄ホンモノとは違う、ただの掃除屋ニセモノなのだから……

そんなアーチャーの葛藤に気付くようなことはなく、話は進む。

「ふん、ならついでだ。ランサーも見回らせてやる。」

「感謝する、ケイネス。」

ああ、そうだ二人とも。出るならせめて夕食の後にしなさい。」

凜達はハイツ、と返答し退室していった。

「では、我々も帰るとしよう。」

「分かった。何かあったら連絡をくれ。」

ケイネスは背を向けたまま反応することなく出ていき、ディルムツドが主の代わりとでも言うように丁寧丁寧に頭を下げたあとケイネスの後についていった。

下では、帰ろうとするケイネスに葵が見送りに出ていた。

「夕飯も食べていけば宜しいですね。」

「いや、ソラウをホテルに待たせている。」

「あら、一緒でしたのね。それでは無粋なお誘いでしたわね。」

では、道中お気をつけて。」

ケイネスとランサーは帰っていき、葵は夕飯の支度をするべく家中へと戻った。

リビングにいくと、凜と桜がテレビを見ていた。

そのくつろいでいる様子から、今日は出ないのとおもい声をかけた。

「今日も出ないのかしら？」

「はい、今日も家にいます。あつ、でも夕飯食べたら部屋で鍛練するので、桜と一緒に。」

「じゃあ夕飯作るわね。」

一緒に鍛練？そういうのは、一人でするものじゃなかったかしら？」

今日も食べると聞き、嬉しそうな笑顔を浮かべる葵。

その後一緒に鍛練をすると言言葉に疑問を覚えた。

それに答えたのは桜だ。

「もう、姉さん何いつてるんですか。鍛練じゃなくて、理論構築だつて言ってたじゃ無いですか。」

こう言うのは話し合わないといい理論が出ないからって。」

「そうそう、それぞれ。あはは、間違っちゃった。」

葵はまだ疑問に思うところがあつたが、本人達が言うならそうだろうと台所に向かった。

葵の姿が完全に隠れたあと、凜達は盛大な溜め息を吐いた。

「ごめん、桜。助かったわ。」

「姉さんは、こう言うところの事に弱いですね。」

私も、あんまりうまく言えませんでしたけど。」

もうお分かりだろうが、夕飯後に部屋にこもると言うのは嘘である。家にいなくとも不審に思われない理由として挙げたに過ぎないのだ。

穴だらけである理由であつたが、魔術に詳しくない葵だったからこそ通用したのだらう。

何とか凌げた彼女達は安堵したと言つわけである。

因みに従者達と言えば、何も言わず壁の華となっていた。

『御馳走様でした。』



食事が終わり、軽く片付けを行う。

片付けの手伝いは女の子としてのたしなみだ。

ある程度綺麗になったところで、凜が桜に声をかけた。

「こんなもんかな。桜、そろそろ行きましょう。」

「はい、姉さん。」

「準備が終わったら私の部屋に来なさいね。」

「はい。いこ、ライダー。」

「ええ。」

「私達も行くわよ、アーチャー。」

「了解した。」

凜達はそれぞれ己の部屋に向かった。

葵はサーヴァントを引き連れていったことにまた疑問を感じたが、一緒にいることが当たり前なのだからと片付けに戻った。

そして時臣は一連のやり取りを紅茶を飲みながら静かに見つめていた。

凜の部屋では、凜が宝石の準備を行っていた。

手持ち無沙汰なアーチャーはそれを見つめている。

もちろんただ見ているだけではない。

凜がどこかでうつかりをしない様に見張っているのだ。

そう、遠坂のウツカリとはここ一番と言うときにしでかすことが多いのだ。

そんな事態にならないよう、出来うる限り自分も見えていなければならぬ。

「よし、こんなもんかな。」

「何も忘れてはいないな？」

「大丈夫よ、今回はバッチリよ。」

今回はと言う言い回しに乾いた笑いしか出ない。

自覚があるだけましと思うべきなのか。

ウツカリのフォローは自分に回って来るのだがと思うが、これも生前からの運命かと諦めるアーチャー。

その時、コンコンとドアをノックする音が響いた。

気配からそれが桜とライダーだと言うことは既に解っている。

アーチャーは凜を見た。

「いいわよ、入れて。」

凜が許可を出したためアーチャーがドアをあけ、桜とライダーを招き入れた。

入ってきた桜の表情は今までの優しげなものだけではなく、強さが新たに加わったようにアーチャーは感じた。

「桜、準備はできた？」

「はい。」

「そ、じゃサツサと行きましょうか。」

「でも、どうやって外に出しましょう。」

困ったと桜は言う。

いつも母親の葵はリビングにいるため、玄関に向かえばその横を通らなければならずばれてしまう。

それでは意味がない。

凜はニンマリと笑う。

アーチャーはそれを見て、予測が確信に変化したことをしっかり感じ取った。前回のアレか、と。

「何いつてるのよ、桜。そこにいいものがあるじゃない。」

「これ、ですか？」

凜が言いながら指したのは、窓だった。

桜はさつきより更に困ったと言うような表情をする。

大きさは十分あるため、出れなくもないが……

「でも姉さん。私靴を持ってきてないですよ。」

「つっこむところはそこなのか!」

アーチャーは思わず心の中で突っ込んでいた。  
桜も中々にずれている。

「それは問題ないわ。アーチャーに持ってこさせてるから。アーチャー。」

「ああ。」

と言って、桜の靴を差し出した。

用意の良さに、桜は笑みを浮かべるしかない。

窓のそばに紙をしき、その上で靴を履き準備完了だ。

因みに、凧の部屋は二階である。

そのまま飛び降りても問題はないが、地面には小さな石が散在しているため怪我をする可能性があるし、大きな音がたちそれでもばれてしまうかもしれない。

そうならないようどうするかと言えば。

凧は窓枠に足を掛け、外に飛び降りる。

その身には既に重力操作の魔術を掛けており、着地も軽やかに行う。

一緒にでたアーチャーは横から凜に声を掛ける。

「流石だな、マスター。」

「ふふん、私にかかればこのくらい軽いわよ。」

そして二人は桜とライダーが降りてくるのを待つ。

桜の場合こう言う行為に慣れていないため、窓の前で動けずにいた。迷って迷って、そして覚悟を決め飛び降りようとしたときだった。

ヒョイ

「無理はしないでください、サクラ。」

「ふえ、ライダー？」

目の前にライダーの顔が現れた。自分を見下ろせば、ライダーの両手にしっかりと抱えられていた。

それは、俗にお姫様抱っこと呼ばれているものだ。

英霊とは言え女性にだっこされる恥ずかしさに、桜の顔が真っ赤になる。

「ら、ライダー。大丈夫だから。自分で降りれるから。」

「そうですね。ですが、私の方が心配でどうにかなりそうですね、ここは私に任せて貰えれば嬉しいのですが。」

桜に笑みを向けながらライダーは告げた。  
男らしい言動に、‘ライダー、かっこいい’と桜は見惚れた。

桜が大人しくなったのを了承の証と受けとり、ライダーは桜を抱いたまま窓の外に躍り出た。

そのまま降り立ったライダーは自分を含め二人分の体重を支えていると言っのに、まるで重さを感じさせず羽根のようだった。

外に出た四人はここで話すのは不味いと言っことで、取り敢えず家から離れるために移動を開始した。

ある程度離れた位置で立ち止まり、凜は桜に向き直った。

「ここまででは一緒に行動したけど……」

「解っています。私も、今は聖杯戦争のいちマスターですから。」

全部告げずとも解っていると返す桜。

凜は満足そうな、そしてどこか寂しそうな顔をした。

桜が成長しているのは嬉しいが、頼られなくなるのが寂しいといったところだろう。

「解ってるならいいわ、ここで別れましょ。もしこの後会ったとし

ても、手加減はしないからね。」

「はい。でも、私だってそう簡単にはやられませんよ。」

桜も負けじと言い返し、二人は正反対の方へ歩き出した。

「くくく、まるで子離れ出来ない親のようだな。」

「……誰がなんですって？」

桜と完全に離れたところで、アーチャーはやおら口を開いた。内容にカチンと来た凜は凄んでみるが、アーチャーは変わらず喉をならして笑い続けている。

「いや、だれと明言したつもりはないのだがな。」

「くつ、相変わらず口が減らないわね。アンタ。」

「これはこれは、マスターに誉めてもらって何よりだ。」

「そんなわけないじゃない。」

アーチャーのいつもと同じ態度のこのやり取りによって、凜もいつもの調子を取り戻していた。

そんな気配りを察しながらも、誰が感謝なんてしてあげるものですか、と凜は思っていた。

アーチャーと凜は新都に向かうべく、深山と新都を繋ぐ橋に向かっていた。

二人の間にアレから会話は無いが、その沈黙も悪いものではなかつ

た。

アーチャー達が橋の脇の公園のような場所にたどり着いたときだった。

来た方向より二つの魔力の迸りはたけが感じられた。

「これは……もしかして桜達かしら……」

「だろうな。方向的に見て彼女達が向かった方向だ。

そう考える方が妥当だろう。」

魔力が感じる方を見ながら言葉を交わす。

凜の顔には、心配だと言う気持ちが素直に現れていた。

アーチャーはそれを見て見ぬ振りをする。

いくら魔術師でも、感情を殺し慣れてるなど悲しいことにはさせたくない。

「しかし、運がないな。見回りの初日に敵と遭遇するとは。」

「そうね。戦争の残りは私達も含め後四人。

除けば二人しかいない内の一人に当たるなんてね。」

心配なのは変わらないが、それで自分のやることをおろそかにする訳にはいかないと、気持ちを入れ直す凜。

再び新都に向かうべく足を動かそうとしたとき、アーチャーは更に告げた。



「運がないのはコチラも同様みたいだがな。いや、この場合は運がいいと言うべきかな。」

凜が向き直ると、アーチャーが闇の一部に向かって話しかけていた。アーチャーの手には既に夫婦剣が握られており、体から闘気が滲み出していた。

それを確認した凜も、頭が理解する前に戦闘体制をとる。アーチャーと同じ方を睨み付けていると、そちらから声が響いてきた。

「さあな、俺に聞かれてもしらねえよ。」

やりあいたい奴と会えたってんなら、今の状況は俺にとっちゃ運がいいと言えるがな。」

そこから現れたのは、数日前校庭で刃を交えた青い槍兵だった。

己のマスターを従え紅い槍を出している彼の表情は、ようやく会えた弓兵に対して歓喜の表情を隠せずだった。

あの日つけれなかった決着を着けることをアーチャーだけでなくラッサーも望んでいたのだ。

そんな相手に会えて喜ばないはずがない。

「さてと、折角お互いに敗退しないまま会えたんだ。」

この場で決着つけようじゃねえか、アーチャー。」

「それはコチラも望むところだ。」

「負けたところで言い訳は聞かんぞ、ランサー。」

二人の闘志が最高潮にまで高まり、決着を完全に着けるべく彼等は己の力を振るい始めた。

## 十七章 二つの交わり（後書き）

壁の華（笑）

勿論アーチャーも含みますよ。寧ろ私にとってはそっちが本命だったり。

だってアーチャーは私にとって燃えで萌え!!

そして再会するランサーとアーチャー。

もう二人揃うだけで悶えます。

問答無用で押し倒しち（ry

自主規制

佳境に入ってくる物語。

どれだけ上手く表現していけるだろうか……

## 十八章 信頼と光

side 桜&ライダー

凜達と別れたあと、桜達は深山の町を歩いていった。

凜が向かった方向から新都に向かったであろう事を推測し、ならばと自分達は深山を回ることにしたのだ。

全く別のところを見回った方が効率がいいからでもあるが、覚悟を決めたからと言って直ぐに対峙できるほどの整理がついてないのだ。そんな桜の思いが手にとるように分かるライダーは、慈愛に満ちた笑顔を浮かべていた。

そして、聖杯戦争の相手だろうと異変相手だろうと、必ず桜を守り抜こうと己に誓った。

「それでサクラ。具体的に何処を回しましょう。」

「そうね。……取り敢えず学校とその周辺に行こうかな?」

今はまだ宛もなくふらついている状態なため、ライダーは何処に行くのかを尋ねた。

桜は指を顎に当て少し考え込んで、学校にいくと答えた。

ライダーは首をかしげた。学校であれば、初めの頃に凜が一度見回っている筈だからだ。

なのに何故今更行くのだろうかと思ったのだ。

「クスクス、何でって思ってるんでしょ。ライダー？」  
「ええ、まあ。学校はリンが見てるはずですし、私達も昼間いて問題なかったように思うのですが。」

桜はライダーが考えているであろう事を指摘し、ライダーもその事を肯定する。

ライダーの言うことは尤もである。

学校は既に凜の手によって検分は終わっている。

「うん。でもね、学校に人がいる状態だと完全じゃ無いと思うの。

異変が起きてからは姉さんも夜に出てはいないし。」

「ふむ、そうかもしれないね。」

「だから、今夜一度じっくり視ておきたいなって思ったの。

……もし、何かあって皆が傷付くのは嫌だから。」

そう、桜は自分が傷付くことではなく、知り合い（ひと）が傷付くことを恐れているのだ。

自分とて傷つくのは嫌だ。でも、他人が傷付くのはもっと嫌なのだ。

「偽善なんだってわかってる。私は他の人よりちょっと多く知ってるから、守れる気になってるだけなんだってことも。

弱い私に出来ることなんて殆どないのに。」

「サクラ……」

「そう、ただ異変が起きてるって知ってるだけ。それが恐ろしいん

だって知ってるだけ。

でも、それに対処する方法は知らないし、そんな力もない……って、御免ねライダー。こんなこと言っちゃって。」

「構いませんよ、サクラ。」

ライダーは桜が眩しかった。

自分の思いを正確に理解し、それに目を逸らすことなく受け入れる。弱いだなんてとんでもない。単純に魔術まじゅつと言うものがあまりないのかもしれないが、それでも桜は強いとライダーは思った。

それに、魔術まじゅつが無くとも力ちからはある。

そう、ライダー（わたし）と言う名の力が。

桜に召喚された自分は、まさしく桜の力なのだ。

「サクラ、貴女にも力があります。」

「そんな……お世辞はいいよ、ライダー。」

「いいえ、そうではありません。私が貴女の力です。」

サクラがサクラ自身の力で召喚した私こそ、サクラの力と言えます。だから、貴女に力がない筈はありません。」

自分を力だと言うライダー。まるで己を道具のように表現するライダーに怒鳴ろうと振り返り……やめた。

それはライダーが浮かべていた表情のせいだ。

ライダーは桜の力となれることが心底嬉しいと言う表情をしていたのだ。

そこに、卑下と言った様な負の感情は感じない。

純粹に力になれることを喜んでいたのだ。これ以上否定するのは逆に侮辱であると思った桜は、ライダーの気持ちを受け入れる事にした。

「……ありがとう、ライダー。頼りにしてるね。」

「任せて下さい、サクラ。」

そして、いつの間にか止まっていた歩みを再開し、学校へと向かった。

学校に到着した二人がまずは校舎を調べようと足を向けた時だった。校舎より二人の人影　高校生程度のものと同柄なもの　が出てきたのだ。

「あれは？誰なのでしょう。」

「このような時間にまでいるとは……」

「ライダー。見つかったらいけないから隠れないと。」

桜が見つつけられる前に隠れようとしたとき、先に人影から声を掛けられた。

「あれ、桜じゃないか。何やってるんだこんな時間に。」

聞き覚えのある声に目を凝らしてみれば、大きい方の人影は見慣れた赤銅色の髪をした人間　衛宮士郎だった。隣にいるのはこれまた見慣れた金髪をもつ少女　セイバーだ。

どうやら、今のセイバーは気配を押さええていたらしく、ライダーも目にするまで二人であることに気づけなかった。夕方のデイルムツドの時と同じである。

「あつ、先輩こそどうされたんですか？こんな時間に。」

「イリヤの代わりだ。アイツ、毎晩回るんだって言ってたけど、今夜は無理そうだったからな。」

「だから俺がセイバーと一緒に出てきたんだ。」

らしい、と桜は思った。

他人を思い他人のために行動を起こす。衛宮士郎とはそんな人間だからだ。

きつと今回の事も駄々をこねるイリヤを諭し、代わりに自分が行くと言い出したのだからうなと桜は容易に想像できた。

それはきつと間違いではない。

クスクスと笑う桜に不思議そうな顔を浮かべつつ、士郎は尋ね返したのだった。

「それで、桜は？女の子なんだから、あまり夜遅くまでいると駄目



だぞ。」

「大丈夫ですよ、先輩。ライダーがいますから。」

私達も先輩と似たようなものです。」

「そっか。桜たちも町を見回ってるのか。あまり無理しちゃ駄目だからな。」

「それはコツチの台詞ですよ、先輩。」

無理するのはいつも先輩じゃないですか。」

心配から出た言葉だが、桜に正論で返され返す言葉を失う土郎。

口じゃ敵わないと常々感じていることをまた実感していたのだが、先程から自分と桜しか喋ってない事に気づいた。

セイバーと桜は仲が悪いと言うわけでなく、寧ろいいと言える。

会えば料理等の話題で盛り上がり、話し込むこともしばしばある。だと言うのに、今は一言も発する気配がない。

何かあるのかと思えば、セイバーを見れば、ライダーと睨みあっていた。より正確に言えば、お互いの動向を警戒しあいながら対峙していた。

桜は争いを嫌うため聖杯戦争に参加していない筈なのに、何故そんな状態になっているのか土郎は理解できなかった。

だから、土郎は思わずセイバーに大声で声を掛けていた。

「セイバー、何やってるんだ！！桜は戦わないんだぞ。」

「いえ、そんな筈はありません。」

「何でそう断言できるんだ。桜は自分で戦わないって言ってたんだぞ。」

「それは、今此処にいるのが何よりの証拠だからです。」

自分がマスターであることを理解した上で戦いの舞台である夜に外にいると言うことは、戦うことを受け入れ覚悟を決めたからに他なりません。」

士郎は驚き桜を見る。

桜は動揺の欠片も見せずに見つめ返した。

その行動が、何よりもセイバーの言葉を肯定していた。

士郎は狼狽えた。まさか桜が自分から戦いに飛び込んでくる等思ってもいなかったのだ。

そして、桜が戦う覚悟を決めていると言うことは……

「では、やりましょうか。ライダー」

「ええ。そうですね。」

そう、参加者同士としての戦いが始まると言うことだ。

セイバーは空手をまるで剣を持っているかのように正眼に構え、ライダーは釘剣を己の手の中に呼び出した。

その二人から一步下がった位置にいる桜からある提案が挙げられた。

「先輩。本当ならマスターの私も一緒に戦いたい所なんですけど、私には余りそう言うことができません。」

だから、サーヴァントだけの対決で決着をつけませんか？」

「……ああ、俺もそっちの方がいい。」

それは士郎にとっても願ってもないことだ。

士郎は桜と戦うことなんて出来ない。

士郎にとって桜は守るべき対象なのだ。

なのにどうしてその相手と戦えようか。

士郎はセイバー達から距離をとり、桜も同様に離れた場所を位置どつた。

自分達のマスターが戦闘の影響を大きく受けられない程度に離れたのを確認し、ライダーとセイバーは今度は正式に戦闘体勢をとつた。

「セイバー、空手のままでいいのですか？」

「問題ありません、かかってくるさなさい。」

からは、とライダーは牽制を込め釘剣を飛ばした。

自分に迫ってくるそれにセイバーが手を振ると、カキンという金属音をたてて弾いた。

「成る程、見えない武器ですか。間合いがわからないと言うの意味では厄介ですね。」

セイバーは空手ではなく、見えない剣を持っていただけなのだ。

それを理解したライダーは、剣を手元に戻しながら苦言を呈した。

間合いがわからない以上、迂闊に近付くことは出来ない。  
その上、クラスの関係上地力も違うのだ。

ライダーはセイバーの周囲を駆け出した。  
それに、セイバーは驚愕の声を洩らした。  
それも当然だ。このライダーの俊敏は最速の英霊であるランサーに  
匹敵するものを持っているのだから。

セイバーは騎乗兵が乗り物に乗らず自身のみでこのスピードを出し  
た事に驚き、僅かながらに隙を晒してしまった。  
ライダーはそれを見逃さず死角となる位置から釘剣を放つ。

当たる

そう確信したライダーだが、直前でそれは弾かれる。

セイバーの直感だ。

例え見えなくともセイバーの直感が様々なことを教え、危険を回避  
させるのだ。

本人もその直感を多大に信用していた。ライダーは一度弾かれても  
気にすることはなく、絶えず動き回り死角となりうる位置から何度  
も釘剣を飛ばしては攻撃をする。

セイバーはライダーの動きを目で追うような愚は犯さなかった。  
感じる気配と空気の流れ、そして直感によって対処していた。

足を狙って投げた釘剣は掬うように振るった見えない剣で払われ  
る。

だが、ライダーは鎖を操り、その鎖をセイバーの体に巻き付けた。

「捕まえましたよ、セイバー。」

「くっ、しまった。」

ライダーは鎖を強く引き、セイバーを地面へと叩きつけた。

抜け出せる隙を与えないよう、スキルの怪力を使い何度も地面へと叩きつける。

「セイバー!!」

士郎が何も出来ずに叩きつけられるセイバーをみて思わず声を出す。その声を聞き、セイバーはサーヴァントとしてマスターに心配かけるわけにはいかないと思い、どうにかしなければと考えを巡らす。

巻き付けられた鎖によって武器は振るえないが、手首より先は辛うじて動かせる。

この状態で出来る事、それを実行できるタイミングをはかり機会を待つ。

何度も叩きつけられるが、その程度ではダメージらしいダメージはさほど受けない。

セイバーは耐えて待つ。そして、その時は来た。

「ハア!!」

「なっ。」

セイバーは鎖から抜け出した。

セイバーからライダーに繋がる鎖。それを捕まえるタイミングを圖っていたのだ。

セイバーの手元に来る確率は低く、その時も一瞬だ。

だからこそわずかな受け身も取らず、鎖のみに集中していたのだ。

抜け出したセイバーは同じ轍てうを踏まないよう、一気にライダーへ接近した。

見えない剣を振りかぶり、ライダーへと降り下ろす。

ライダーは釘剣で受け止めるが、受けきれずに飛ばされてしまった。かなりの距離を飛ばされ、校庭の脇の木にぶつかりとまる。

「どうしました、ライダー。貴女の実力とはその程度だったのですか？」

「言ってくれますね、セイバー。」

ですが、このままでは貴女に分があると言う事は認めないわけにはいきませんね。流星は最優と言われるだけではありません。」

敵わないなど口にしつつも、戦意は全く衰える様子のないライダーにセイバーは警戒を続ける。

まだ宝具の解放さえしていないのだ。

何か手があると考えるのが当然だ。

ライダーはこのままでは勝てないと言うことをよく理解していた。

だからと言って敗けを甘受するつもりもない。負けるのならば打てる手を全てだし、それを打ち破られたとき。それが、戦うと決めた桜の決意に対する、自分の取るべき行動だと感じていたからだ。

そして、今取れる行動の一つ。

このままで無理ならば、相手が自分のステータスに近づいて、もらえばいいのだ。

ライダーは己の眼帯に手をかける。

セイバーは何かやるつもりであることを察し身構える。

「ですので、少し墮ちてもらいますよ。

「石化の魔眼」キュベレイ

ライダーは魔眼を解放した。

警戒のためにライダーを注視していたセイバーは、その目を直視してしまった。

瞳孔が四角形をしており、仄かに光っている。

そんな目に見つめられたセイバーの体が重くなる。

セイバーは高い対魔力を持つ。

故に本来なら石化するところを免れた。だが、完全にレジスト出来たわけではない。

「これは……ステータスがワンランク下がっただと!」  
「フッフ、いくら高い対魔力でも、私の魔眼からは逃れられませんよ。」

ライダーは魔眼を解放したまま自分からセイバーに突っ込んでいった。  
体と意識の齟齬が起きているセイバーの体から、動きのキレが消え失せた。

ここぞとばかりに己のスピードをいかしライダーは果敢に攻め立てる。  
正面からやりあえば負けるのは必至。ならばこういう隙をつくしかない。

だが、セイバーもそう簡単にはやられない。  
思考と体のずれにあえぎながらも、ライダーの攻撃に対抗する。

「くっ、やはり、そう簡単には、いきませんか。」  
「当然です。我が剣は容易く折れません。」

セイバーは徐々にはあるが、今の体の状態に慣れてきた。  
それに併せ、剣にも鋭さが戻ってきた。

始めライダーが押ししていたが、感覚を取り戻したセイバーが押し返す。

この程度ではだったかと、更に手札を出すことに決めたライダー。  
ギンツと剣を強く弾きセイバーから距離をとった。



「どうしました、ライダー。ここで降参ですか？」

「まさか、そんな筈ありません。」

戦うと決めたのですから、勝ち負けに関係なく全力を出させてもらいますよ。」

ライダーの目にはまだ諦めは無かった。

セイバーもそれを認め、軽く笑みを浮かべる。

それこそ戦うに相応しい、と。

だが、次のライダーの行動に度肝を抜かれた。

「なので、'出させて'貰いましょうか。あの仔を。」

そう言ったライダーは、己の喉に釘剣を突き刺したのだ。

ライダーの喉から赤い血が飛び散る。

セイバーだけでなく士郎も目を見開き絶句していた。

行動だけ見れば自殺としか受け取れない。

戦うと言っておきながらのちぐはぐな行動に、思考が停止してしまっただのだ。

そんな彼女達の目の前で更に驚く事が起きた。

ライダーの喉から溢れた血。本来なら地面へと滴り落ちる筈のそれが中に浮き、陣を書き出したのだ。

そして、その陣に魔力が集まり光だした。

まるで脈打つかのように光る血の陣。  
その奥に‘ナニカ’があるとセイバーは直感で理解した。

「さあ、出てきなさい。」

その一言を引き金に、陣から白い光が飛び出てきた。  
正面にいるセイバーは迎え撃とうと剣を構えたが、本能が警鐘をならしたためそれに従い回避行動をとった。

白い光が通過した場所を見てみれば、通った後に合わせて地面が抉れている。

そこまでの破壊力があつたと予想出来なかつたセイバーは、回避行動が正しかつたのだと思い知らされた。

こんな攻撃を幾度も放たれては堪らないとライダーのいた方向を見るが、その場所にライダーは立っていないなかつた。

ではどこに、と辺りを見回すがいるのは土郎と桜のみ。  
やはりライダーの姿は見えなかつた。

そのセイバーの耳に、バサリという羽ばたきの音が届いた。  
音に導かれるがままに辿れば、月をバックにそれは存在した。  
セイバーは再度身を驚愕に染めた。

「ペガサス！！それが、貴女が騎乗兵足る理由ですか。  
しかもこれ程の威力を有するとは、まさか神代のペガサスなのか。  
か。」

「ええ、その通りです。この仔は神代にいました。」

なので、その後に出てきたモノ達とは格が違います。  
私の仔を侮らないことをお勧めしますよ。」

白い光、それは攻撃でなくペガサス（生き物）だったのだ。  
ライダーはそのペガサスの背に乗っていた。

セイバーはこれ迄のライダーの言動からその正体を考察した。

「石化の魔眼にペガサスですか。それに、『私の仔』と言う言葉。  
ライダー、貴女の真名がわかりましたよ。」

「まあ当然でしょうね。個々まで手札を晒したのですから。」

「その通りです。貴女の真名、それは『メデューサ』ですね。」

断言したセイバー。

答えるようにライダーは笑みを深めた。

その行動が、正解であることを示していた。

だが、それが解ったとしてもセイバーがとる行動に変わりはない。  
己の剣で対応するだけだ。

ライダーはペガサスに股がったままセイバーへと突進する。  
体当たりである。

セイバーも対抗しようとするが、その素早さに翻弄されてしまう。  
ライダーはセイバーの攻撃に当たらないよう、ヒットアンドアウェイに専念しているからだ。

かなりの神秘を込めた存在の攻撃はすさまじいもので、校庭にはい

くつもの大きなクレーターが出来あがった。

「先程までの威勢はどうしたのですか、セイバー？」

ライダーが挑発するも、セイバーは答える余裕がなかった。

攻撃の余波だけでもかなりの衝撃があり、回避にていっばいな為だ。

このまま少しずつ削られるのは不味いとセイバーは思った。

一撃の威力は確かにあり、このままこの方法が続けられれば先に自分の体力が尽きてしまう。

ならばどうするか。

セイバーはライダーにある提案をすることにし、回避の足を止めた。

突如動きを止めたセイバーを疑問に思い、ライダーは空中に身をとどめたままセイバーを注視する。

「ライダー、提案があります。」

「……何でしょうか。」

「この戦略を取られたままでは私には手も足も出ないことを認めます。」

その上で言います。お互い最高の一撃で決着を着けませんか？」

その提案を受けライダーは考えた。

今のまま攻めればセイバーの言う通りこちらの勝ちは揺るがないだろう。

だが、それで勝ったとしても桜の信頼に応えたとと言えるだろうか。

否。確かに勝てることは喜ばしいが、全力で向かい戦ってこそ、本当に信頼に応えたとと言えるのではないか。

そう結論を出したライダーはセイバーの提案を受ける事にした。

「いいでしょう。その提案受け入れます。」

「では、次の一撃で決めましょう。」

ライダーはその手に手綱を出した。

そして、その手綱をペガサスへと取り付けた。

「この仔は本来戦いを嫌います。だからこうでもしないと全力が出せませんから。」

セイバーは全力を出すために剣に纏っているものを解放した。

セイバーの剣を中心に暴風が巻き起こる。

その風は離れてみている土郎や桜の元にまで届き、ペガサスの飛行にまで影響を及ぼした。

風が強くなると共にセイバーの剣が少しずつ露になっていく。

セイバーの手からから現れたのは黄金の剣だ。

「相変わらず、セイバーの剣は凄いな。」

「……綺麗。」

その剣から溢れる輝きは、見るもの全ての目を引き付けた。例えるなら、全ての星の輝きを詰め込んだ様な光。そんな、神秘的な光景だった。

「……それが、貴女の剣ですか。」

「そうです、これが私が誇る剣。

さて、覚悟はいいですか？」

「ええ、私が勝つという覚悟なら何時でも。」

軽口を言い合いながら、各々が己の宝具に魔力を込め始める。

ライダーの宝具には変化らしい変化は訪れないが、セイバーの剣には劇的な変化が現れる。

セイバーが魔力を込めるにつれ、その剣から黄金の光が溢れ出す。その輝きの強さとはどまることを知らず、辺りを昼間のように照らし出した。

互いに魔力を最高潮にまで込め、お互いの視線を絡ませ会つ。どちらともなく顔に笑みが浮かぶ。

そして、示し併せたかのように宝具を解放する。

「 騎英の《ベルレ》」

「 約束された《エクス》」

士郎と桜は息を飲んで見守る。

これが最後の一撃になることを言われずとも理解していたからだ。

二人は自分のサーヴァントが勝つこと以上に、自分のもとへ戻ってきてくれることを願っていた。

そして、セイバーとライダーの宝具が衝突する。

「〔手綱〕<sup>フォー</sup>!!!」

「〔勝利の剣〕<sup>カリバー</sup>!!!」

二人の衝突は、校庭を白と金の光で埋め尽くした。

## 十八章 信頼と光（後書き）

フッフ、今回はアーチャー達の決着の前に此方の激突です。  
楽しみって後にとっておきたくないですか？  
えっ？少数派ですか？

そして、相変わらず戦闘描写は難しいです。  
もっと動きのあるものをかけないものか……

来週は年末の出勤調整のため、また土曜出勤……しかも代休なし。  
ですので、多分また日曜更新となると思うので、悪しからずご了承  
ください。



## 十九章 蓄積する不安（前書き）

なななんと、お気に入りの登録が300人を越えました。  
本当にありがとうございます。

しかも、それに到達した日が24日とは。

大人の私にもサンタが来ましたよ！！

これ、なんてクリスマスプレゼント？

稚拙な文ですが、読んでいただいている方には本当に感謝です。

次の更新は年明けとなるので、この場で挨拶をさせて頂きますね。

今年、これを読んでいただいた方には感謝の念が尽きません。  
皆様によいお年が訪れることを願っています。

## 十九章 蓄積する不安

セイバーとライダーの激突による衝撃は凄いものであった。激突している点を中心に、衝撃波と暴風が巻き起こっている。

士郎と桜も離れてはいたが、校庭の範囲内ではない距離であるためすぐ間近も同然だ。

故に、二人は荒れ狂う空気の中で一生懸命足を踏ん張っていた。

そして、風や光に負けじと目を見開き、セイバーとライダーがいるであろう場所を見つめ続ける。

白と金の光のせめぎ合いは、二人にはとても長く感じた。

一瞬とは言わないがほんの十秒程度であったろうそれが、まるで数分続いたように感じたのだ。

だが、いずれ終わりは訪れる。

暴風と言えた風は微風にまでなり、光も昼間のような明るさから徐々に弱まってきている。

しかし、中心にいる二人は見えず、どちらが勝ったのか解らない。

士郎と桜は目を凝らし続ける。

舞い上がっていた土煙も晴れていき、二つの人影が露になっていく。

「……ライダー。」

「……セイバー。」

己のサーヴァントを眩く。  
人影はピクリとも動かず、勝敗の行方はまだ解らない。

光は収まり土煙も完全に晴れた。  
セイバーとライダーは共に己の足で立っていた。

あれほどの力のぶつかり合いでも勝負はつかなかったのかと、英雄と呼ばれる存在の規格外さに閉口するしかなかった。

そう、彼女達の宝具の衝突は完全に相殺しあっていた。  
セイバーはライダーの魔眼を受けランクが落ちていたこと、そして潤沢な魔力を持たない士郎がマスターであったことにより本来の威力が出せなかったのだ。

それに対し、ライダーはこれが初めての戦闘であり魔力が十分にあったこと、上空からの降下で勢いがつき威力が上がっていたためにセイバーの聖剣と対抗しえたのだ。

力の余波によるものか小さな切り傷が多くあるが、二人に大きな傷は見られない。

だが、二人とも魔力がほぼ尽きかけていた。  
その証拠にセイバーの剣からは輝きが失せており、ライダーのペガサスは「戻って」しまっている。

「まさか、我が剣を耐えきれられるとは思いませんでした。」  
「私こそ、ここまでやれば押しきれれると思っていたのですがね。」

お互い、押し切れなかったという事実苦笑いをする。

そして、再度構えを見せるセイバー。

確かに魔力はほぼ底をつきかけてはいたが、動けないほど消耗しているわけでない。

己には生涯をかけ鍛えてきた剣がある、真実全力を出すまでぶつかる腹積もりなのだ。

そんなセイバーとは裏腹に、ライダーは構えを見せる様子は無かった。

手に持っていた釘剣も消し完全に緊張感を欠いていた。

「どうしたのです、ライダー。まだ決着はついてませんよ。」

挑発するように言葉を発するセイバー。

だが、それにもライダーは特に反応することはなかった。

ライダーはマイペースに桜を見て、自分の状態を確認するかのよう  
に身体を見つめ、最後にセイバーの方を見てこう言った。

「私の負けです、セイバー。」

セイバーは何を言われたのか最初理解できなかったようで、数度目を瞬いた。

そして、内容を理解した途端、カクツとセイバーの肩が落ちた。

「はっ？ちよ、何をいつてるのですか、ライダー。貴女はまだ戦えるのでしょうか。」

自分はまだ戦<sup>や</sup>る気に満ち溢れているというのに、早々に敗北宣言をしたライダーに不満を隠せないセイバー。

ライダーはそんなセイバーをもともせず、自分の主張をした。

「確かに、まだ戦えるには戦えます。」

「なら！！」

「ですが、このまま続けたところで結果は見えているでしょう。」

ライダーの言いたいことがわからず、セイバーは眉根を寄せた。戦いには決まったことなど存在しない。

戦いにおいて強者と言われるものでも必ず勝てるというわけではない。

例えどんなに戦局が傾いていたとしても、一寸した要因で覆りかねないのが戦いと言うものなのだ。

英雄と呼ばれた存在ならその事はよく理解している筈だと言うのに、何故急に戦いをやめるのかその理由が知りたかった。

それを表情から読み取ったのか、ライダーは更に続けた。

「戦えますが、もう宝具の維持や使用のための魔力も残っておらず、残るは体術関連のみです。」

そうなれば、私がセイバーである貴女に勝てる道理はありません。」

そこでセイバーは気づいた。己にかかっていた魔眼の効果が無くなっていると言うことに。

確かに今の状態であれば本来の剣技を十二分に発揮できる。魔力があるうと無かろうと、受肉しているセイバーの動きに影響らしい影響が現れないためだ。

「それに、どうしても勝って叶えたいと言う願いがあるわけではないので、無理に戦闘を続けようという気もありません。無理をしてはサクラに心配をかけてしまいますから。」

心配げに自分を見ている桜を横目で見ながら、柔らかい口調で告げた。

そして、解っていたただけでしたか？という表情をセイバーに向けた。態度や言葉の端々から桜を本気で大切に思っていることがセイバーにも理解できた。

完全に納得はできないがその心境は理解できるため、セイバーは剣を納めることを決めた。

それに、戦いは今回だけというわけでもないのだ。

今回の鬱憤を次回の戦闘の力とすることにしたのだった。

セイバーが完全に剣を納めたことを認めた土郎と桜は決着がついたと言うことを察し、各々が己のサーヴァントへと駆け寄った。

二人の表情には大きな傷がなかったことへの安堵が表れていた。

「すみません、サクラ。負けてしまいました。」

「いいの、ライダー。」

ライダーが私のために頑張ってくれたことが一番嬉しいから。それに、大きな傷も無くて良かった。」

「セイバー、大丈夫か？」

「ええ、問題ありません。」

「そっか、良かった。」

ライダーは全力を出しても抗いきれなかったことに謝罪するが、桜は勝敗よりも自分の願いで戦いに向かっていってくれたことが嬉しいという。

先程ライダーが述べたように、彼女たちにとって聖杯はどうでもいいことなのだ。

聖杯を求めるために怪我をする位なら、無事で側にいて欲しい。そう思っているのだ。

一方、士郎はセイバーに簡単な確認をとるにとどめた。

それは、セイバーが自分よりも腕がたつと言うことを理解してるからであり、当人の事は当人がよくわかるからでもある。

戦闘が終了したことで、場が一気に和む。

「それにしても、ペガサスは格好よかったな。

何て言うか、一般的に言われるイメージの神秘的って言うか。」

「そうですね、先輩。あの純白の毛並みがとても綺麗で、思わず撫でたくなっちゃいました。」

「それには同意します。あの輝きは通常のペガサスより素晴らしいものでした。」

流石は神代のペガサスと言わざるを得ません。内包する神秘も溢れる存在感も桁が違います。」

ライダーは自分の仔を誉められ、満更でもない様子だ。少し誇らしげに胸を張っていたりする。

「いえ、ですが貴女の剣には負けます。」

流石は、騎士王と言われたアーサー王の剣ですね。」

セイバーは当然です、と言った顔をする。

それほど自分の剣に誇りを持っているからだ。

多少ワイワイと語り合っていたが、ライダーが帰還の意を桜に告げた。

「サクラ、私たちはそろそろ帰りませんか？」

「え……？あつ、そっか。」

魔力がなくなっただからね。」

「はい。行動自体には問題ありませんが、もし例のものと会ってしまっても交戦できるだけの余裕がありません。」

現状を省みれば帰った方がいいのは確実なので、十分な見回りが出来ていないことが未練と言えれば未練だが、桜は帰宅することにした。



「セイバー、俺達も帰るか。」

「フム……そうですね。それが懸命でしょう。」

「なら、途中まで桜を送ってやらないとな。」

士郎は桜へと声をかけ、別れ道まで一緒に行動することにした。

道中の話題は、やはり聖杯戦争に関することが中心だ。

「そういえば、勝ち残ってるやつって、あとどのくらい残ってるんだろ。」

「そうですね。姉さんはその事を話さないのので解りませんが、もうほとんどいないと思いますよ。」

残り何人が気になったのか、ふと士郎が呟く。

桜は今日まで戦うつもりがなかったため気にしていなかったが、凜が自分が戦った相手や結果をあまり言わないようにしていたことに今気付いた。

それは真剣に向かっているという事の表れでもあり、何事にも全力で向かう姉さんらしい、と桜は思った。

士郎もやるときはトコトンという気質を知っているから、微妙に桜に甘い凜が喋っていない事にも理解を示す。

「それと、少なくとも今日中にあと一人は脱落すると思いますよ。」

「ええ、彼方に戦闘による魔力が立ち上っています。盛大に使っているようですし、ライダーの言うように勝負がつくまで終わらないでしょうね。」

セイバーとライダーは新都に繋がる橋がある方を見つめて言う。

戦闘中は自分達の魔力が辺りに充満して気づけなかったが、今であればハッキリと感じとることができた。激しい激突が繰り返されているのだらう。瞬間的な魔力の高まりが幾度となく繰り返されている。

桜はその方こうと魔力から戦っている一方が誰なのか気付いた。

「片方の魔力は解りませんが、一つはアーチャーの物ですね。」

魔力の方向からしても、リン達であることに間違いはないでしょう。

「  
少なくとも見積もっても、現時点で三人のサーヴァントがまだ勝ち残っていると言う訳ですね。」

勝負が着けば二人。まだいる可能性もありますが、他の情報から考えればいないと考えた方がいいですね。」

ライダーも既に気付いていたらしい。

片方の魔力の正体を呟いた。

セイバーは冷静に現状を分析していた。

セイバーも十年前に比べ聖杯を得たいという気持ちが薄れていたため、純粹に戦闘というものを楽しんでいたのだ。

そう。十年前、セイバーは今からは考えられない程願望機である聖杯を求めていた。

その理由は故郷を救う為。

その為ただ我武者羅に戦いつづけ、己の身も省みることはなかった。それはマスターであった切嗣にも言えたことであったが、彼は愛する人間が側にいた為次第に変わっていった。

セイバーにはそんな存在はいなかったが、彼等の姿を見ているうち自分の望みに疑問を抱き始めたのだ。

私の望みは本当に民かれらの為になるのか

と。

だが、そんなことはない筈と、己に言い聞かし戦った。

しかし、嘗て共に戦場を駆け抜けた騎士の一人と出会い、迷いがセイバーの心を満たしていった。

そう考えると、十年前の聖杯の誤作動はよかったのかもしれない。

そして今、切嗣達と家族として暮らしていくうちに、己の願いが過ちであった事に気付いたのだ。

今では懐かしいと思えるほどのりこえ、僅かに懐古の念に囚われる。

もし、頑なにあの願いを抱き続けていたならば。

もし、聖杯の誤作動が起きなかつたら。

……もし、誤作動でなく作動自体せずに、今回の戦いに参加していたなら。

そんなイフを考えていたとき、セイバーの背にゾクリとしたものが

駆け抜けた。

それは一瞬の事ではなかったが、何故かセイバーは気のせいだと思えなかった。

忘れてはいけなないと、まるで自分を戒めるかのように直感が囁くのだ。

その事で考え込もうとしたセイバーだが、士朗達の声で我に返った。

「えっ、遠坂の奴も出てたのか？」

「クスクス。先輩、あの姉さんがずっと家でおとなしくしてると思えますか？」

「いや、想像も出来ないな。うん、確かに。」

何て言うか、行動あるのみ！！って感じだしな、遠坂の奴は。」

戦争の名を冠していることは裏腹に、その中身は誰一人死ぬことなく進められている。

そんな優しい世界をみて、セイバーは感じたことを心に仕舞い誰にも告げないことにした。

だが、絶対に忘れないようにしようとも決めた。

直感が囁くのなら、そこには何か意味がある筈だと。

そうと感じさせず、セイバーは笑顔のまま

皆と一緒に足を進めた。

その胸に、少しの不安を宿しながら……

新都へ向かう橋の脇にある公園。

そこで、赤と青の乱舞が起きていた。

片方が攻め、もう片方が守る。

だが、守るだけでなく隙を見つけては反撃も行う。

そんな気の抜けないやり取りを交わしながら、青の表情には歓喜しか見られなかった。

赤い槍と黒白の双剣が幾度となく交わる。

互い、浅い傷を作りながら動きは衰えることを知らなかった。

息つく暇もない攻防のあと、彼等は軽く距離をとる。

「相変わらずおもしれえ男だな、テメエは。」

「おや、こんな真面目な男を捕まえて面白いとは、君の感性を疑うぞ。」

睨みあつたまま会話を行う。

彼等のそばではマスター同士も戦いを繰り広げているが、そちらに気を向けるような愚は犯さない。

マスターはマスター、サーヴァントはサーヴァント。

無言ながらもそう自然と別れていった。

「真面目だあ〜？なら、真面目に弓でも使ってみたらどうだよ、弓兵。」

「やれやれ。弓兵だからといって弓しか使えんようでは、英霊などという存在には成れんと思わんかね。」

それとも、君は肩書きだけでしか人を見れないとでも？」

当てはめられたクラスだけで判断するなどでも言いたげなアーチャーの言葉に、違いねえと悪びれた様子もなく返すランサー。

戦闘をしているとは思えないような気安さで会話を交わしている。まるで、旧友にでもあったかのようなようだ。

無論、お互いの動きに注意を払うことは忘れない。

例えどんなに軽い会話を交わそうとも、戦闘中であることに間違いないのだ。

「英霊になるといやあ、てめえそんな戦い方で良く生き残ってやがったな。」

正直、正気を疑うぜ。」

「ふっ。逆だよランサー。こんな戦い方をしなければ、無才の身では生き残れなかっただけの話しだ。」

私にとって戦いとは常に格上の存在とだったのね。勝って生きるか、負けて死ぬか。そのどちらか一つだったただけに過ぎん。」

ランサーの言う戦い方とは隙を見せそこに攻撃を誘い、相手の攻撃の幅を狭めるといったものだ。

そして、隙を見せる場所は首筋であったり、心臓であったり。生きる上で重要な機関ばかりであった。故に正気を疑うなどと漏らしたのだ。

それは一歩間違えれば致命傷となる傷を負うことでもある。

始めランサーはその事に気付けなかったが、それが何度も重なればいい加減気付くと言うものだ。

そして、その巧妙さにはランサーですら舌を巻いた。

だが、生前からその方法で戦いに身を置いていたと言うのなら、慣れた動きにも気付けなかったことにも納得がいくと言うものだ。

「はっ、成る程な。

んなやり方を続けて生き残るたあ、まだまだ楽しめるって訳だな。さあ続きと行こうぜえ！！」

そして、一気に距離を詰めてきた。

ランサーの高速の突きは目で追えるようなものではなかったが、ランサーの体の動きや今まで心眼（真）で見極めてきた予想で何とか対応するアーチャー。

本来のスピードを駆使したランサーの動きは厄介ではあったが、それでも何度となく刃を交えれば対応ぐらいはできるようになる。

手の内にある双剣を飛ばされることなく、ほぼ完全にランサーの攻撃をいなす。

勿論、守りに徹していたからと言うことも大きい。

ランサーの赤い瞳に見つめられ、アーチャーは人であったときを思い出していた。

磨耗して記録として残っているかさえ定かではないが、彼女と同様にその青を完全に忘れることなどなかった。

最初の邂逅は学校。あの赤に見つめられ、なす統べなく別の赤に貫かれた。

なんとか一命をとりとめ家に帰ったが、再度の襲撃。

……そして、彼女との出会い。二人の激突。

それが、自分の運命を決定付けたと言っても過言ではない。

彼等のような存在に成りたいと、彼等のように人々を救うような力を得たいとただそれだけを目標にした。

目標にし頑張り、行き着いてしまった。

常に戦場に身をおき、助けたいと願った人々を救い続けてきた。

だが、結果は人類の尻拭いをするだけの掃除屋でしかなかった。

絶望や後悔に身を染め、全てを無かったことにしようとしたこともあった。

そう、かつての彼女のよう。

そんな英雄などと評されるには不相応な自分が、再び英雄が集うこの時代に召喚されまた彼等と刃を交える機会を得た。

なんとと言う皮肉だろうか。

だが、純粹にその強さを競い合うこの聖杯戦争に参加できたことを



喜ぶ自分もいる。

それに、経過が違ったため絶対に自分にならないと確信できる奴もいた。

いくら自分殺し（エミヤシロウ殺し）を諦めたとして本来は見たくもない奴だったが、こうなるならば話は別だ。

最期にそれを知れただけでも良かったとアーチャーは思った。

本当に殺すことを諦めたのか？

アーチャーの身の内からそんな声が沸き起こった。

ドクリと心臓が脈打つ。

「（……当然だ、私は答えを得ることができた。

それに、もう奴を殺す事は意味がないことだと知った。」

アーチャーは己の心の声に否定の声をあげた。

自分はもう間違えないと、大丈夫なのだ。

でも、自分を したいほど憎んでいるんだろう？

「（否定はできん。だが奴は私ではない。

そんなことをしても意味はない！！）」

なぜそんな声が聞こえるのか。そもそもこれは本当に自分の声なの

か。  
それに思い至ることはなく、ただ聞こえることに否定の声をあげる  
ことしか出来なかった。

でも、奴もエミヤシロウであることには間違いないだろう。  
何を遠慮することがある。自分をどうしようとする自分の勝手だろう。

確かに衛宮士郎はどこまでいっても衛宮士郎でしかないこともこの  
世界で理解した。

そうだ。奴もお前も結局は、同じだ。

える前に、やりたいことの一つぐらいやってもいいだろう。

「（そんな……ことは……）」

許されない、か？それこそどうでもいいことだろう？

何故なら、この戦争が終わればもう えるだけなんだから。

囁きがアーチャーの心に染み渡ってゆく。

嘗て抱きもつ捨てたと思っただはすの感情、憎悪・後悔・嫌悪と言っ  
た感情が徐々にその体に沸き起こる。

心から聞こえる声。それが甘美な言葉のようにアーチャーを少しず  
つ侵食していった。

自由に振る舞っていいんだ。己の欲望のままに、な。  
その為に、全力で障害を排除しようぜ。

心の声の口調が変わるも、もうそれに気づくだけの余裕などアーチャーには残されていなかった。

声の導くまま全てを斬り捨て奴を したいという感情。

答えを得再度頑張ると誓った決心。

それらがアーチャーの中でせめぎあっていた。

鋼の意思をもつアーチャーであったが、それですら押さえつけるのが困難になっていた。

思わず、歯を食い縛る。

ランサーもそんなアーチャーの僅かな異変に気付いた。

今まで無表情を貫いていたアーチャーが唐突に顔を顰めたのだ。

気付かない方がどうかしている。

だが、一瞬の後には元に戻り、違和感を覚えるも大したことではないと判断した。

アーチャーの中に違和を抱えたまま、彼等の戦闘は続く。

## 十九章 蓄積する不安（後書き）

重なる不安。これがどう変化していくのか！！

因みに凜とバゼットの戦闘は済みませんが書きません。てか書けません。

彼女等のやり取りは皆様の脳内で想像してくださいと嬉しいです。

## 二十章 紅青の交わり（前書き）

皆様、明けましておめでとうございます  
正月の更新が無理だった六爪龍です。

いや、更新したいなとは思ってたんですが、30日まで普通に仕事でその晩直ぐに夜行バスにて実家に帰省。  
実家は実家で遊び盛りアンドこれからお年玉盛りの親戚、の相手で時間がなかったんですよ。

ゆっくりしたかったのに全然出来なかったorz

4日からまた普通に仕事で、しかも風邪まで……

一寸熱が高かったんですがバファリン飲んだら数時間で完全平熱に下がったんですが、薬が効いたのか優しさが効いたのか……

もしそうなら私ってどれだけ優しさに餓えてんのー！ー！？

## 二十章 紅青の交わり

ランサーの槍がアーチャーの右肩を狙って放たれるが、アーチャーはそれを半身になってかわす。

だが、アーチャーを追うように、槍も凧ぎ払うような軌跡を描く。

それをアーチャーは左手の短剣で防ぎ、その勢いを利用して回転。回し蹴りを放った。

槍での防御が間に合わないと見たランサーは、槍から左手を離し腕でガードをする。

そのままアーチャー足を掴み軽く放り投げ、その身が空中にある内にと槍を突き出す。

だが、アーチャーもそのまま食らうまいと槍の進路に己の双剣を間に入れガードする。

空中の身が勢いを殺せる筈もなく、攻撃の勢いそのまま飛ばされ距離があく。

そしてアーチャーは危なげなく体勢を変え着地した。

「追撃をせんとは、余裕のつもりかね？」

私も嘗められたものだな。」

「そんなんじゃないよ。」

「テメエも感じたんじゃないかねえのか？さっき何か妙な気配を感じたと思っただがよ……まっ、気のせいだったみたいだな。」

「妙な気配」という言葉に思わずピクリと反応してしまっ。

しかし、ランサーは周囲の変化と思っていたのか周囲を見ていたため、それを見ることはなかった。

アーチャーは例の声を徐々にだが押さえつけることが出来るようになっていた。

もとより自分を押さええることには慣れすぎるほど慣れているアーチャーだ。

不意打で聞こえた最初であれば兎も角、認めさえすれば意識から除外することなど容易かった。

とは言っても、なんの影響かいつものように完全に意識から除外することは出来ずにいたのだが。

身の内から聞こえてくる声。押さえきれぬそれに苛むまれながらも、ランサーに対応する手がぶれることはなかった。

「そうかね。では、勘違いと解った所で続きといこうではないか。君の事だ、決着がつくまで戦闘をやめるつもりはないのだろうか？」

「よくわかってんじゃねえか。勿論そのつもりだぜ。」

ランサーが言い終わらぬ内に、アーチャーはその手に自分のクラスを表す獲物を呼び出し、矢継ぎ早に攻撃を放つ。

アーチャーとしてのスキルではなく彼自身のスキルとして、弓であれば狙ったところは外さないという類い稀なる技能が存在する。

それをフルに活用し、虚実入り交じった攻撃をする。

顔や体・足などギリギリを狙ったの攻撃は並みの相手なら、見切る

ことなど出来ずに無様に逃げの姿勢をとるしかない。しかし、そこは矢避けの加護を持つランサーである。牽制の矢は自らランサーを避けるように動き、ランサーは己に向かってくるものだけを落とせばいいだけとなっていた。

「ちっ、そういうば君には、矢避けの加護」が存在していたのだっ  
たな。

全く、弓兵にとって狙っても当たらないと言う事程厄介なことはいないな。」

「ほざけ、その加護を押しきらんばかりの技を持つ奴が言う台詞じゃねえよ。」

そう、ランサーの見える場所から自分に向かってくる矢は、本来ならば軽く動くだけで避けられるほどのものであるはずなのだ。

だが矢避けの加護の効果を踏まえた上で、アーチャーの矢は確実にランサーを狙ってきていた。

自分の槍を使って防御しなければならぬほどに。

剣の時とは違い、今度はアーチャーが攻めランサーが守ると言う構図へと変化した。

そして、又もや膠着状態へと変わった。

この二人が対峙する場合、このような膠着が珍しくない様に思われる。

それほど実力が拮抗しているのだろう。いや、この場合は戦闘技術がうまい具合に噛み合ったと考えるべきだろう。

何故なら純粋な戦闘力と言えば、アーチャーはランサーの足元にも及ばないのだから。



変わらぬ状況。そんな現状に知らず知らずアーチャーの心に苛立ちのようなものが積み重なっていく。  
アーチャーの頭の中に、再び声が響く。

やってしまえよ。相手だって本気の戦闘を望んでるんだ。  
文句は誰からもないさ。

アーチャーの矢は外したものであっても意味のないものは存在しない。  
外した矢は外した矢でランサーの動きを制限する働きをしていた。

矢の強度程度では足をとると言うことはないが、それでもランサーの機動力を削ぐと言う立派な効果を発揮していた。  
故にいくら機動力の高いランサーと言っても、スピードに乗れない今は矢を防ぐのに精一杯で前に出る余裕はなかった。

今威力の高い剣<sup>や</sup>を放てば、ランサーでもまともに食らうさ。  
これは戦いだろうか？相手を倒すための行動だろうか？  
やるんだ、さあ……さあ！！

アーチャーの放つ矢の速度が上がる。  
そして、複数の矢を同時に<sup>つが</sup>放った。

アーチャーから同時に放たれた矢は各々が別の軌跡を描いてランサーに殺到する。

あるものは変わらず正面から、またあるものは横の方から。あり得ないと思っていた動きをして襲ってくる矢に、まだ相手を甘く見ていたとランサーは考えを改めた。

前からだけでなく横からも襲ってくる矢に神経を尖らせ、流石に不味いかとランサーは思い始めた。

多少の傷は覚悟の上で突っ込んで槍の間合いの中・近距離の接近戦に持ち込むかと思ったとき、ランサーの背に悪寒が駆け抜けた。

それは、戦場で鍛えられた戦士の勘とでも言えばいいのだろうか。生前の戦場でも感じたことのあるそれ。

無視をすれば確実に命を落とすだろうと予感できるほどのものだ。

ランサーは本能のままその場から飛び去った。

直後、ランサーのいた場所に真上から矢が‘降って’来た。

その矢は、ランサーが動かなければ確実に頭を射抜く軌跡を描いていた。

いつの間にそんな矢を放ったのか。

それは横から襲ってくる矢にランサーが目線を送った瞬間に放たれていたのだ。

ホンの一瞬の間隙をついての攻撃にも関わらず正確にランサーを捕捉していたのは、流石アーチャーのクラスと言ったところか。

当たれば確実に死んでいたであろうそれを理解したランサーは思わず絶句した。

試合の筈の戦いなのに、これではまるで死合ではないかと。

本当の戦いならランサーは嬉々として応じただろうが、今回は殺し合ではないのだ。



いくら驚いたからとて一瞬でも現状を忘れてしまった自分を叱咤し、ランサーはアーチャーの放った剣の迎撃を行う。何とか迎え撃てたが矢の威力は凄まじく、押しきられることはなかったが押しきって払うことも出来なかった。

剣を全力で防いでいると、剣越しにアーチャーの姿が確認できた。見えたアーチャーの姿にランサーは思わず眉根を寄せた。アーチャーに表情らしい表情が浮かんでなかった為だ。

先程までも正に鉄面皮と言えるほど表情を浮かべてなかったアーチャーだが、それでも筋肉の動きによる僅かな表情の変化は存在した。だが、今はそれが全くなく本当の‘無’表情になり、生気すら無いように感じられた。

ふと、アーチャーの口許が動いた。何を言っているのかとランサーは軽く目を凝らす。

壊れた幻想  
ブローケン・ファンタズム

そうアーチャーが呟いた直後、剣から魔力が放出され始めた。危険を感じたランサーは距離を取るため剣の軌道をずらす様にし、自分は横に飛び退こうとした。その瞬間、剣が爆発した。

既に動き始めていたためか、飛び退く動きを追う様な攻撃でランサーへの影響は軽減された。だが、ほぼ間近で爆発が起きたのには間違いなく、余波がランサーを襲い感覚が少し鈍る。

視覚・聴覚が上手く働かなくても気配の察知には影響はない。

直ぐ様周囲の気配を感じとり………真後ろにそれを感じた。

咄嗟に体を捻りアーチャーから距離をとる。

…動いている最中、ランサーの首筋にピリリとした痛みが走った。動きの止まったアーチャーから目を逸らさず首に手をやればヌルリとした感触。

アーチャーが本気で、殺し、にかかっていることが伺い知れる。警戒を露にするランサーだが、件のアーチャーは打って変わって動く様子は無く、ランサーの首から流れる血をただ見つめていた。

その顔には生氣…意思が戻っていた。

なぜそう言えるかと言えば、ランサーを見るアーチャーの顔が戸惑っているように感じたからだ。

前回の戦闘ではその気配はなかったが、もしかして戦いになると頭に血が昇るタイプだったのか？とランサーは思った。

冷静そうに見えて意外とそうでもないんだな、と結論付けた。

そうランサーが感じるほどアーチャーの落差がすごいものであり、今のアーチャーが気まづげな顔をしていたのだ。

アーチャーはランサーに向けて呼び出した剣の切っ先を向けた。

その際、ランサーが何かを喚いているように見えたが、内容はアーチャーの耳に入らなかった。

ただ、相手をタオス為に剣に魔力を込め、その真名を解放した。相手はなぜか動きを止めており、放った剣は真っ直ぐに向かう。

剣は止められ罅迫り合い状態となる。  
それも予想の範疇だ。

どんなときでも最悪の状態を想定して動いているこの身からすれば、  
今はまだましな状態である。

次の攻撃に繋げることができるのだから。

ランサーが動けない今を好機と見て、アーチャーは剣に込められた  
神秘を解放するための行動に移る。  
魔力を燃料に剣を爆弾にするのだ。

解放され始めた魔力を感じランサーも気付いたようだが、もう完全  
に逃れることはできない。

ランサーが離れるより先に剣が爆発した。

至近距離で剣の爆発を受けたランサーは、その対応のため僅かとは  
いえアーチャーから注意をそらしてしまった。

その隙にアーチャーはランサーの背後へと素早く接近する。  
爆発の影響か、ランサーはまだその事に気付く様子はない。

奴を すなら今が好機。

して今度こそ決着を着けるのだ。

その為に弓を消し、再び双剣を手の中に投影する。

目の前には無防備に首筋を晒しているランサー。

この剣を振るだけでランサーは に、勝負はつく。  
タオス為に最も最適な行動だ。

躊躇う素振りすら見せずアーチャーはランサーの首に向かって剣を  
振り下ろした。

完璧なタイミング。だが、感じたのは予想とは違い軽い手応えだった。

しくじった。

そんな思考が浮かび、再度ランサーに斬りかかるために避けた方向へ向く。

そして、首筋から血を流すランサーを目にした。

アーチャーはその赤を見て一気に冷静さを取り戻した。

そして、先程まで自分がとっていた行動を思い返し、軽く血の気が引いた。

自分は一体何を考えていたのか……何をしていたのか。

訳がわからなくなり、困惑するしかなかった。

それが解ったのか直後は睨むようにこちらを見ていたランサーだが、いまは多少訝しげではあるがガシガシと頭をかきたため息をついた。

この戦いでそうされても仕方ない行為をしたとは言え、やはり少しムツとするものがある。

しかし、まずは謝罪をすべきかと思いい口を開いた。

「その……すまない、ランサー。」

なんと言つべきか迷い、結局すまないと言つ言葉だけに止まった。

「あゝ、まあ本来ならあのやり取りは嬉しいところだがよ……」

アーチャーの謝罪に、ランサーは複雑な表情で応じた。

合意の戦闘で謝罪などと言う行為をされたから仕方ないといえは仕方ない。

「にしても、ムカつくほど冷静そうに見えて、意外と熱い奴だったんだな、お前。

まさか熱くなりすぎてああなるとは思わなかったがよ。」

「いや、あれは……」

アーチャーはランサーの考えを否定しようとして途中で言葉を止めた。

否定するのは簡単だがさっきまでの自分の状態を説明してもどうなるわけでもないし、証拠があるわけでもない。

それなら、肯定もしないが否定もしない事で、そう思わせていた方が良いと思ったのだ。

アーチャーはランサーの話に乗ることを決めた。

「まあ、そんなときとてあるだろう。私は純粋な人間なのでね。」

「そんなことは関係ねえだろ。つーか、オメエがただの人間だったことに驚きだつつの。」

アーチャーはどうとでもとれる言葉を放ち、肩を竦めてみせた。



ランサーはアーチャーからもたらされた意外な情報に驚いていた。

何本も同じ剣を出し続けていたことといい、自分の親友の剣を出したことといい普通の人間ができることじゃないと漠然と思っていたからだ。

それが本人の口から否定されたのだ。言い分を信じるなら、ではあるが。

「つと、何時までも駄弁つてもいけねえ。仕切り直しといこうぜ。さつきみたいなのはもう勘弁だがな。」

「心配せずとも、もうあんな風にはならんよ。」

そして、ランサーはアーチャーが再び弓を取り出す前にと向かっていった。

ランサーは高速の突きを繰り出す。

それをアーチャーが双剣で迎え撃つ。

今までと変わらぬ構図だ。

アーチャーは先程のようにならないために、よりしっかりと己の意思を確立させる。

あのように自分の意思でないものに支配されるような状態など我慢ならないのだ。

生前も様々な理不尽な状況に陥ったときもあった。

だが、何れも己の意思で決めたことであり、誰かの言葉で最終的な決定をしたことなどなかった。

だと言うのに、この世界において取り返しもつかない事をしようとした。

そんな自分が許せなかった。

だからアーチャーはいい慣れた言葉を心の内で呟く。自分は剣だと自己催眠でもあるそれを言う毎に、己と言うものを確りと取り戻していく。

…もう、あの声は聞こえない。

アーチャーは変わらず巧みに隙を作り相手の攻撃を誘導する。

ランサーは既に気付いているのだが、それでも隙を見つけて攻撃しないようにはできない。

彼ほどの戦闘者ともなれば、隙を見つけてしまうと体が動くのだ。だからこそ、このアーチャーの戦闘法は格上の存在との戦いにおいて有効だったのだ。

ランサーは凧ぎ払いの攻撃法をすて、突きのみの攻撃に徹した。

それは、突きこそが最も早く攻撃できる方法であり、槍の真髄であるからだ。

アーチャーはそれを剣の面で防ぐようにはせず、添えるように切っ先を剃らすことに専念する。

腕力が違うためそうでもしなければ完全に力負けしてしまうからだ。

避けきれない攻撃がアーチャーの肌の表面を滑る。

突くだけになったランサーの攻撃は、本人の素早さも加わり反撃の余地がなかった。

だが、いくら攻撃してもアーチャーに決定打は与えることができないでいた。

ランサーはつくづく規定外な奴だと舌を巻いた。

「はっはぁー。全く、この俺の最速とも言える突きに、弓兵のお前が剣で凌ぐなんざなあ。

本当に不思議な奴だな。」

「何度も言わせないで貰おうか。いくら後方で弓を引くのが主体とは言えど、前衛も出来んようではここにはおらん。

例え相手が君のような最高の騎士であろうとな。」

ランサーは騎士と言う響きに、ウエっつでも言いたげな表情をした。この聖杯戦争で言えば確かに「槍の騎士」と呼ばれるクラスだが、かつては騎士と呼ばれるような上等な暮らしなどしていなかった。騎士と言えばやはり上品なイメージがあり、それと自分が結び付かないと言つものも大きい。

アーチャーの言葉に辟易すると同時に、それでこそアーチャーとよく知らないながらも安堵が湧くランサー。

先程のような何の感情も浮かばないアーチャーなど、気味悪いにも程があつた。

例えるならば鋼の様な…剣の様な、全てを無感情に切り捨ててしまふいそつな雰囲気。

そして、そんな状態でもらしいと言つ考えすら過つてしまふアーチャーに、ランサーの背に冷たいものが走っていた。

アーチャーも困惑こそあつたがあの状態に慣れているがゆえの困惑と見てとれたのだ。

あれが、アーチャーにとって不思議にも思わない状態と言うならば、  
一体どんな人生を送っていたと言うのか…

暗くなってしまうような思考を自分らしくないと振り切った。

今はそれよりも戦闘が優先だ。

気になるのなら戦闘後にも聞けばいいことと思書の隅に追いやる。

その間も攻撃の手は休めること無く槍を操り続ける。

槍は足元を狙ったかと思えば次の瞬間顔前へと向かう。

アーチャーはそれを時に剣で、時に体を動かして攻撃をかわす。

「そうだな、それだけしかできないようじゃ、英雄なんざ呼ばれね  
えか。」

「……私は君達のように英雄などと持て囃される様な存在ではない。

」

アーチャーは笑みを浮かべながら言う。

それは陰鬱な自嘲の笑み。

アーチャーの言葉は本音である。

自分のようなものが英雄など呼ばれてはいけないと本気で思っているのだ。

自分が英雄と呼ばれては本物の英雄を汚してしまうとも。

だからこそこの言葉。

だが、どんな理由であれ英雄と呼ばれたからこそこうやって存在していると考え、それに誇りを抱いているランサーの琴線に触れるに

は十分だった。

「あ、あ、何言ってるやがる。なら、何でテメエはここにいやがる。英雄と呼ばれたからだろうが。」

「テメエには英雄の誇りってもんはねえのか。」

「誇りか……そんな無駄なもの、この身には存在しない。」

「無駄、だと？」

誇りを無駄と言い切ったアーチャーに、ランサーの目が細まる。

ランサーは静かに、だがハッキリと怒りを抱いていた。

誇りを大事にしているランサーにとって、己を否定されたにも等しい。

アーチャーもそんなランサーに気付いてはいたが、言葉を撤回するような様子はなかった。

それどころか、決定的な一言をランサーに向かっていい放った。

「そうだ。誇りなどと言うものは、そこらの狗にでも喰わせてしまえ。」

ランサーの体から殺気と言うには生温いほどの物が滲み出す。

アーチャーがランサーにとっての禁句を口にしたからだ。

クランの猛犬の二つ名を持つランサーにとって、犬を侮辱する言葉はすべて禁句なのだ。

「この俺を知って尚その事を口にするとは、覚悟は出来てんだろっ  
な。アーチャー。」

ランサーは恐ろしいほど穏やかな声でアーチャーに語りかけた。  
だが、そこに潜む怒気は隠しきれるようなものではなかった。

アーチャーはそれを涼しい顔で受け流していた。  
それが、ますますランサーの怒りに火をつけた。

ランサーは一気に距離を取り、獣のように地面に這いつくばるよう  
な体勢になった。

それはランサーが本気の一撃を放つ気であると言つことに他ならな  
い。

ランサーの槍が暴力的なまでに魔力を貪り出す。

「いいだろう。」

アーチャー、その心臓……………貫き受ける!!」

一歩目から最高スピードでランサーは駆け出した。

始めにとつた距離の半分に到達したとき、ランサーは飛び上がりそ  
の身を限界までそらした。

それは、ランサーの槍の本来の使い方。

よく使用するのはランサーがより使いやすいように編み出した方法。  
ランサーの槍は本当は投擲で使用する物なのだ。

ランサーは真正正銘、全力で槍を投げ放つ。

「受けやがれ。」

「突き穿つ死翔の槍」ゲイ・ホルグ

本来の方法によって放たれた槍は、死の予感を振り撒きながらアーチャーへと向かった。

ランサーは勝利を確信する。

アーチャーがどんな隠し技を持つかが、絶対に逃れられないという自信を持つがゆえに。

アーチャーは自分に迫る槍を見つめ、この槍を防ぐに相応しい宝具の投影を行う。選んだのは剣の丘に唯一存在する純正な盾であり、投擲武器に対し最強の守りを持つ盾。

そして、かつて同じ技を見事に防ぎきった宝具である。

ランサーと同じく、絶対の自信を持ってそれを出す。

何故なら、この身に敗北はただ一つだけなのだから。

「トレース・オン  
投影開始」

「熾天覆う七つの円環」ロー・アイアス

アーチャーの前に七枚のピンク色の花弁が咲き開く。それは一枚一枚が城壁と同じ強度を誇る盾。

ランサーが放った槍。アーチャーが展開した盾。  
二つの宝具がぶつかり合った。



## 二十章 紅青の交わり（後書き）

今回は槍弓のバトルのみです。

いやあ、二人のやり取りは武器でも言葉でも良いですねえ。

二人さえいればもう他にはいりません！！

## 二十一章 月下に響く咆哮（前書き）

咳が……咳が止まらない!!

熱は下がったのに、咳ばっかりがこの一週間出続けるんですよ。

しかも眠る前が一番ひどい……

お陰で毎日三時間程度の睡眠時間ですよ、奥さん。（誰に向かって）

そんな中で書いた話ですが、どうぞ!!

## 二十一章 月下に響く咆哮

深山と新都を結ぶ橋の脇に存在する公園に、局地的な台風が吹き荒れる。

それは、英霊の切り札である宝具のぶつかり合いによって発生している風。

ランサーの槍とアーチャーの盾。その衝突点が中心である。

衝突によって宝具から魔力が迸り、その迸りが空気に影響し震わせていたのだ。

アーチャーとランサーの肌を空気の震えが叩く。

ランサーは目の前で展開されている光景に目を疑った。

本来の力を出した槍の前ではどんなものだろうと貫いて見せると自負した槍が止められているのだ。

しかも、‘アーチャー’が呼び出した‘盾’で。

驚くなどという方が無理である。

アーチャーはかつて凌ぎきったと言う実績はあれど、油断すること無く盾に力を込める。

以前は魔力の豊富なキャスターをマスターにしていたが、供給される魔力は最低限に近かった。

今回は潤沢に魔力は供給されるがマスターが‘人’の為限界はある。

総合的に見れば自分の状態はあまり変わらないと見た方がいいと分析していた。

前は本当にギリギリで競り勝った以上、気を緩めれば負けるのは自分であることに間違いはない。

故に、油断は存在しない。

バリイインソン

罅の入っていた花弁の一枚がとうとう甲高い音を響かせて碎け散った。

それを皮切りに二枚三枚と次々に花弁が碎け散る。

アーチャーはチツと舌打ちした。

解ってはいたが、こつも易々と破られそうになるのはいい気分ではない。

槍の勢いに押されないよう、より一層腕に力を込める。

だが、槍の勢いは徐々に衰えていつている様子を見せてはいるが、アイアスに入る亀裂は止まらない。

四枚目が破れ飛ぶ。

ランサーは止められたことに驚いていたが、アーチャーの盾を貫かんとする己の槍を認め僅かに余裕を取り戻す。

「俺の槍を受け止められるほどの盾を持つてるなんざ驚いたが、それも時間の問題みてえだな。」

「ぐっ…それは、どうかな。」

まだ破られると、決まった訳ではない。」

ランサーの言葉に、全力を込めているために途切れ途切れに反論するアーチャー。

ランサーは虚勢ととり、鼻で一笑にふした。

五枚目の花弁が弾け飛ぶ。

押し合って片方に傾くことのない魔力は一点に留まり高まっていく。そして、至近距離にいるアーチャーの肌を高濃度の魔力を含む風がなせる。

盾を支えるアーチャーの右手が負荷に耐えかねたのか血が吹き出した。

いや、右手だけではなく、体の何カ所にも裂傷が見られた。

魔力のこもった風。それが一時的に刃となりアーチャーを切り裂いていたのだ。

六枚目の花弁が千切れ飛んだ。

魔力の刃は衝突点より一步距離を置いているランサーまでは届かなかった。

そして、もう一人の当事者であるはずのランサーは何もせずただ立っていた。

正確にいうのならは何もしないのではなくて何も出来ないのだが、槍の真名を解放し放った以上、槍が心臓を貫くか途中で推進力が無くなるかするまではランサーとして手を出せないからだ。

ランサーは自分が知る限り槍が途中で落とされる事など知らないため、今回の結果として疑わずにいた。

それは、現状から導き出される答えでもあった。

しかし、最後の一枚。罅が入ってもそれが破られる様子は一向にな

い。

当然だ。アイアスの最後の一枚、それは他の六枚よりも高い防御力を有してるのだから。

アーチャーは残る魔力を全て盾に注ぎ込む。

今まで一ヶ所に留まっていた魔力が揺れた。均衡が崩れる……

一定の方向性を保っていた今までの風とは違い、乱気流が吹き荒れそれによって土埃が立ち視界を遮る。

パアアアン

乾いた破裂音が辺りに響いた。

これはアーチャーの盾が破れた音なのか、それとも自分の槍が弾かれた音なのか。

遮られた視界ではその判別はつかず、ランサーは大人しく視界が晴れるのを待った。

そして……

「オイオイ、まじかよ。」

土埃の晴れたそこには槍が貫けなかったと言う意味で無傷であるアーチャーと、その前に転がる己の槍と言う光景が広がっていた。

ランサーの槍はアーチャーを貫くことが出来なかった。

だが、アーチャーも無事と言うわけではない。魔力を含む風による裂傷もそうだが、盾を支えていた右手がひどかった。

以前と違い千切れかける様な事はなかったが、それでも満遍なく傷

がついていた。

ランサーは一息ついて戦闘の気配を収めた。

「俺の奥の手を防ぎきったんだ、てめえの勝ちだ。」

「ほう、そう簡単に決めていいのかね？」

見たところまだまだやれそうだろうに。」

「はっ、白々しいんだよテメエは。だから頭が回るやつはいけすかねえんだ。」

ランサーは気付いたのだ。この流れがアーチャーによって仕組まれていたことに。

考えれば会話の最後の方では、アーチャーは自分の逆鱗に触れるようなことばかり口にしていた。

それは自分が怒りに身を任せて宝具を使うように仕向ける為だったのだろうと今ならわかる。

そして、自分はまんまとそれに乗ってしまったと言っわけだ。

その上で宝具を防ぎきられては敗けを認めるしかない。

「簡単に挑発に乗っちゃった俺も俺だけだよ、テメエもよくやるよな。」

まさか防ぎきられれとは思わなかったぜ。こつ何度も防がれちゃ、必殺の看板は下ろすしかねえな。」

「そう落ち込むこともあるまい。今回はたまたま防御に回す魔力量があっただけだ。」

証拠に、今の私の魔力はほぼ底をついている。」

「だれが落ち込むかよ。  
その魔力事態も計算してたんだろ。普通に話しててもマジで勘に障るな。」

和やかに、とは言わないが比較的ましに会話をする二人の耳に、不思議な音が届いた。

ズルズル  
じやり

二人から見て横からするその音は、ゆっくりと確実に二人の方に向いていた。

「あ？なんだ、この音は。」  
「……………」

ランサーは不思議そうに首をかしげただけだが、アーチャーは嫌な予感がした。  
物凄く、嫌な予感が。

ダラダラと冷や汗が流れるのが止まらない。  
ランサーとの戦闘の間ですら感じてなかった死の恐怖がアーチャーを襲っていた。

こんな風になる原因は一つしかあり得ない。

ランサーがそんなアーチャーに疑問を感じ再び声をかけようとしたとき、別の声が聞こえた。



「アーチャー……決着ついたみたいね。」

酷く穏やかで優しい声。だが、それはアーチャーにとって恐怖以外何物でもない。

声が聞こえたたん、ビクリと肩を跳ねあげた。

ランサーは特に気にすること無く声のする方へ顔を向けた。

こうやって声をかけられると言うことは、あちらも戦闘が終わったと言うことだ。

聞こえた声が自分のマスターでないと言うことは、アッチも負けたのかと何となく思った。

きっと真面目すぎるバゼットは落ち込んでるんだろうなと、殊更朗らかに声をかけることにした。

「ようー！そっちも決着がつい……た………」

しかし、完全にそっちを向いたランサーの言葉は途中で途切れた。理由は彼女達の姿にあった。

ランサーが言葉を途切れさせたことで、アーチャーの嫌な予感はずます募るばかりだった。

「あ……お前等、そりゃどうしたんだ。」

「どうした、ですって？……ふふ、ふふふふフフフフ。」

問いかけに、凜は不気味な笑いを上げた。

ランサーは思わず体を引いてしまった。

英霊であるランサーをしてそうさせる何かが、笑い続ける凜にはあった。

アーチャーはまだそちらを向いてはないが、ランサーの微妙に引き攣っている表情が逃げたいと言う感情を沸き立たせた。

だが、逃げることは許されない。

この場から逃げるのは容易いが、彼女が自分のマスターである以上事態を悪化させるだけだからだ。

「フフフフ……アーチャー、何時までこっちに向かないつもりかしら？」

とうとう、凜がアーチャーに声をかけた。

向きたくない。向きたくはないが、向かなければ更に酷いことが待ち受けているだろう。

例えば、令呪とか令呪とか令呪とか……

アーチャーはギギツと錆びたブリキのような動きでランサーの見ている方……凜がいる方を向いた。

ゆっくりゆっくりと視界が回り、アーチャーの視線は遂に凜を捉えた。そして、凜の姿を目にする。

凜の綺麗に纏まっていたはずの髪はグシャグシャになり絡まり放題

になっていた。

服も破れてはいないものの土汚れがつき、着方も崩れている。土汚れに関しては服だけでなく顔や髪にもついている。

そしてそれは無言で隣に佇むバゼットも同様だ。

つまりは 二人ともボロボロだった。

凜はそれはそれは綺麗な笑顔を浮かべていた。けれど、纏う雰囲気は物凄く黒かった。

「アーチャー、私達も近くで戦っていた事は解っていたわよね？」

「あ、ああ。」

「勿論、貴方達の戦いに巻き込まれないように距離はとっていたわ。けど、公園内である以上距離も限られるわよね。」

「……………ああ。」

「それにしても流石サーヴァントよね。」

英霊同士のぶつかり合いなんてそうそう見学できるものじゃないけど、今回の宝具の衝突は本当に英雄と言ったことを感じたわ。」

突然、誉めるようなことを言い出す凜。

本音ではあっても本当に言いたいことでないだろう事は、変わらぬ雰囲気から読み取れる。

「ホントに、すごい衝突だったわ。簡単に飛ばされるぐらい……………」

凜は徐に左手を上げた。

その手は親指と人差し指のみをピンと立て、残りの指を握り込んだような状態だった。  
そして……

「もう一寸こつちのことも考えなさいってのよ！！このアホサーヴァントー！！！」

凜からガンドがマシンガンのように放たれた。

アーチャーは理不尽だと反論する余裕もなくそれを食らう。

そして凜はアーチャーに接近し、己が使える体術で的確にアーチャーの急所を抉った。

魔力が録に残っていないアーチャーは体をガードできる筈もない。普通にダメージを食らうアーチャーは翳される痛みにも悶絶する。

後に凜は語った。あの時の動きは人生の中で最高のものだったと。

凜はスッキリしたのか汗をぬぐうしぐさをし、今度は本当に爽やかな笑顔を浮かべている。

足元でピクピクと痙攣しているアーチャーが酷くミスマッチである。

ランサーはそんな凜を見て、‘アカイアクマ’と言う単語が脳裏をよぎった。

バゼットも一言ぐらい自分のサーヴァントに文句を言おうと思っていたが、凜の行動によってその勢いがくじかれ流石にああは出来ないと一言だけにした。

「…ランサー。」

「…なんだ。」

「…次は注意してください。」

「…ああ、気を付けるわ。」

ランサー主従はアーチャーに憐憫の視線を向けつつも手を出すことはしない。

…触らぬ神りんに祟り（ガンド）なし

「それで、本当に負けでいいの？ランサー。」

何事もなかったかのように会話をしだす凜。

いや、事実八つ当たりと言える先程の事は何でもないことなのだろう。凜にとつて。

急に振られた会話にさっきのアーチャーの様に少し肩を揺らしながらもどうにかランサーは返答した。

「お、おうよ。俺の宝具も完全に防がれちまったしな。」

「今回」は俺の負けだ。それでいいかバゼット？」

「貴方がそう判断したのなら従いましょう。此方は決着がつきませんでしたし。」

今回という言葉を強調して言う。

バゼットはランサーに全幅の信頼を置いているため反論すること  
せず受け入れた。

勿論、疑問や違和があればキチンと尋ねる。

「つかなかったのか？」

「ええ、誰かさん達のせいだね。」

答えたのは凜。

気まずげな表情をするが、凜はもう気にしてなかったようだ。  
アーチャーをやったことでストレスが発散できたのだろう。

彼女達の勝負は宝具のぶつかりで発生した風によって中断されたの  
だ。

それほどすごい風だったのだ。

「それで、このあと何がやることはあるかしら？  
もしなければ協力して欲しいことがあるんだけど。」

凜の言葉に二人は何を言いたいのかすぐにわかった。

自分達も当事者なのだから。

「あの『影』の事ですね。」

「ええ。もしよかったらパトロールに協力して貰えないかしら。  
そして、見つけたら教えて欲しいの。」

どうかしら？とランサー達に尋ねる。  
ランサーはニヤリと好戦的な笑みを浮かべる。

「つまりは、まだやり合う機会はあるってことだな。喜ぶことじゃねえんだろうが。」

「いいぜ、協力してやるよ。」

「うふふ、ありがとう。」

「やれやれ、君もご苦労なことだな。態々厄介ごとに自ら首を突っ込みにいくとは。」

「というか、厄介ごとを喜ぶのはよしたまえ。余計なことがついてきかねん。」

ここに来て漸くアーチャーが復活した。

ここまでかかるほどダメージを与えると、未恐ろしいとしかいえない。

「ああ、いいだろ？それに、そうなれば纏めて切り捨てればいいだけの事だ。」

「はあ、全く君と言う奴は自信家なのか、それとただの考えなしなのか……………ああ、楽道家だったな。」

「ただの頭でつかちな野郎よりましだろ。考えるだけ考えて動けないでいるよりかな。」

「ふむ、考えなしに動いて事態を悪化させる様な奴よりもましだとは思うがね。」

ランサーとアーチャーは舌戦を繰り広げながら睨み合う。  
とことん相性が悪いらしい。

そんな二人を無視し、凜はあることをバゼットに聞いた。

「そう言えば、あんた達の拠点ってどこ？もしかしたら此方から連絡したいことができるかもしれないし、決着はついたんだからそのくらいは教えて貰っても良いでしょ？」

「拠点ですか？それは協会から教えられたある屋敷で今は生活しています。」

そんな屋敷が有ったかしら、と心の中で疑問に思いつつ詳しい情報を聞く。

そうして、頭を抱えた。聞いた屋敷は凜も知っているのだが、そこは屋敷と言うよりも廃墟と言う方が正確な建物なのだ。

「貴方達、よくそんなところで生活しているわね。」

ガスも電気も水道も通っていないのに……食事は弁当を買えばいいんでしょうけど。」

「そこまで不便ではありませんよ？食事は弁当ではなくて固形食料や液体食料が主ですが。」

はあ？と凜は大きな声をあげた。

アーチャーも聞こえていたらしくランサーから視線をはずし、信じられないといった表情でバゼットを見つめている。



「ええつと、何かおかしいことを言ったでしょうか……?」

「……因みに、冬木に来てからの食事全部と言う訳じゃないわよね。」

「え? いや、そうですが、何か……」

恐る恐る聞いた凜の問いに、バゼットはアツサリと肯定した。

それに、アーチャーは元より士郎に食事のなんたるかを叩き込まれた凜もバゼットの言葉を聞いて絶句した。

ランサーは現代の食事情はよく知らないながらも、招待された時の食事を考えてバゼットの食事はちよつと違つと言つことは解つていたため、アーチャー達の驚愕にうんうんと頷いて同意していた。

「君は、食事と言うものを一体なんだと思つているのかね。」

「それは体を動かすためのエネルギー補給なのではないのですか?」

「確かにそれも一つだが、ただそれだけでは今のよう食にはならんと思わないかね?」

アーチャーはバゼットの食に対する認識を変えようと説得のようなものを試みることにした。

何故なら、食事と言うものをただのエネルギー補給とされるのに我慢なら無いからだ。

アーチャーはどこまでいっても、エミヤシロウ' だった。

「確かに食事は基本体に栄養を摂取するものだ。だが、同時に心の栄養を補給するものであるとも私は考えている。」

「心の栄養……ですか。」

アーチャーの言葉に理解できないと言う困ったような表情をするバゼット。

バゼットにとって食事とは体を動かす為にとるだけであり、さっと取れるに越したことはないものだ。

だから聖杯戦争の期間中も携帯食料を重宝している。

「しかし、食事に時間をとってしまえば、やるべき事がやれなくなる可能性があるのではないですか？」

「だが、キチンとした食事をとらなければ、いざというときに動けなくなるぞ。」

そういう意味でも君の食の取り方は危険極まりない。栄養がちゃんととれていない可能性が高いからな。」

「そうかもしれませんが……」

ここまで来てもアーチャーの言葉に反論しようとするバゼット。

そんな彼女に、自分も大概だと自覚はしていたが、彼女もかなり頭が堅いなとつい違うことを考えた。

続けてアーチャーが何か言おうとしたが、それは凜によって遮られた。

「バゼット、貴方士郎の家にお世話になりなさい。」

「は、あのセイバーとバーサーカーのマスターの家ですか？」

しかし、家族は別として他のマスターがひとつ屋根のしたと言うの

は……」

「あら、貴方はもう敗退したじゃない。

参加者ではあってももう聖杯を得られないマスターなら、なんの問題もないと思うのだけれど？」

そう、もう敗けを宣言したランサー達にはそう言った面での問題はもう存在しない。

だが、生活する上でなんの問題もないのに、流石に人の家にお世話になると言つのは気が引けるようだ。

「それに、そこにいてくれた方が連絡もしやすいもの。そうしてくれた方が助かるわ。」

「流石に突然そんなことを言っても断られると思うのですが。」

最後の足掻きとして相手が受け入れないだろうとバゼットは凜に告げた。

バゼットの視線は助けを乞うようにランサーに度々向けられているが、ランサーはアーチャーと同様に沈黙を守っている。

どうやら、これをマスター同士の交渉の一種と捉えたようだ。

そうでなくても、バゼットの食事をどうにかしようとしてくれているアーチャー達に口を挟むつもりは毛頭ないのだが。

バゼットの言葉に、凜は我が意を得たりとばかりにニンマリと笑顔を向けた。

「あら、それは問題ないわ。だって士郎達はお人好しなんですもの。切嗣さんに至ってはフェミニストを公言しているから、女性と云うだけで無下にされることは無い筈よ。」

寧ろ喜ぶかも知れないわね。美人が下宿に来たってね。

そうそう、部屋に関しても問題ないわ。何たって民宿並みの広さと部屋数があるんですもの。

別棟も存在するから自分の魔術を秘匿したいのならそっちをお願いしてもいいんじゃない。

それで、まだ反論は有るかしら？」

怒濤の理詰めである。

バゼットは目を白黒させていた。

だが、魔術師として残している冷静な部分で、これはもう決定事項なんだな、と観念していた。

それじゃ行きましようか、と凜は歩き始めた。

ちゃんと衛宮家に向かうか確かめるべく、分かれ道までは一緒に行動するつもりようだ。

バゼットのような性格の人間が一度決めたことを反故にするとは思わないが、念のためと言う奴である。

後ろから大人しくついていくサーヴァント二人は前を歩くマスター達を目に入れながら、辺りを軽く警戒しつつ歩いていた。

「にしてもよお……おっかねえ嬢ちゃんだな、テメエのマスターは。」

「君のマスターも性格はともかく、色々と苦労しそうなマスターだな。」

さっきの一連のやり取りを思いだし、ポツリとランサーが呟いた。

「まあな、ああいう行き過ぎた合理主義って言うのか？それがなけりゃほんとにいい女なんだけだよ。」

「やれやれ、君の頭には戦闘以外にはそんな考えしかないのかね。」

「おうともよ。坊主の家にもいい女はいるが、あいつ等は範疇外だしな。」

せめてやりあえればな。」

「なら頼んでみたらどうかね。セイバーならば喜んで相手すると思っぞ。」

「それもそうだな。なら楽しみが増えるってもんよ。」

そして、彼等は分かれ道に到着した。

「じゃあ、ちゃんと士郎の家に行くのよ。」

「凜の言う通りにしておいた方が賢明だぞ。」

「わかっていきます。」

「ちゃんと俺がつれていくから問題ねえ。」

そうして、彼等は別れた。

二つの戦いが行われた長い夜はこうして終わりを迎えた。

学校の校庭

ライダー vs セイバー

勝者：セイバー

橋の脇の公園

ランサー vs アーチャー

勝者：アーチャー

残り二組

## 二十一章 月下に響く咆哮（後書き）

今回はランサーとアーチャーの対決の完全決着の話と、その後のバゼット達の拠点を決める話でした。

しかし、これで残るはただ二組だけ。

あと一度戦えば勝者が決まります。

アーチャー対セイバー。ある意味では因縁の対決とも言えますね。

そして、バゼットの食事情をどうにかしようとする凜達。

衛宮家にいけば確実に認識が変わること間違いなし。

がんばってくれ、士郎。

## 二十二章 一つの輝き

夜半過ぎの遠坂邸の屋根の上、いつものようにアーチャーは見張りにたっていた。

アーチャーの目線は町を向いているが、思考は今日行なった戦闘の事に向いていた。

ランサーと交戦している時に突然聞こえてきた声。

完全に決着をつけるつもりで挑んだ此度の戦闘は、一人の戦士として高揚する戦いでもあった。

幾度も刃を交えながら着けることの出来なかった決着。それが、着けることができる、と。

だが、途中で聞こえてきたその声に自分は掻き乱されてしまった。死闘となり得る筈の無い戦いとなる筈だったと言うのに、あれにより一歩間違えればただの殺し合いになっていたかもしれないのだ。

あの声は確実に自分の過去の傷……いや、未だ持ち続けている傷を確実に決る言動をしていた。

完全に消し去ることは出来ないとはいえ、折り合いをつけたつもりだった感情<sup>モノ</sup>。

声に引き摺られるようにその感情があふれでていった。

あの時はただ否定することに精一杯で深く考えなかったが、今思えばあれは真実自分の中から聞こえてきたように思えた。

ならば、あれは今も自分が考えていた事なのだろうか。

否、そんな筈はないと自分に言い聞かせる。



答えは得たし、自分ではないものに八つ当たり（そう、これはもう八つ当たりでしかない）をしても今以上に虚しい思いに満たされるだけだと解っている。

衛宮士郎であつても成り立ちからして違う奴は、言い様の無い感情の波を立たせることはあつても以前のような憎悪を感じるまではなくなつたのだから。

そう再認識する事で例の声が聞こえなくなり、押さえ込むのに成功したと考えた。

だが、甘かつた。

ランサーとの交戦で膠着状態に陥つたとき、自分ですら気付かなかつた僅かな苛立ち。

それを取つ掛かりとして再びあの声は聞こえてきた。

しかも、今度はその時の戦闘に対する感情を煽るように、少しずつ心に馴染んでいった。

確かに、あの時はランサーを倒すことに集中していた。

だがあくまでも‘倒す’であつて‘殺す’ではなかつた。

それを、どういつ訳か同一視するようになり、躊躇わず全力で殺しにかかつていた。

微塵の疑問も抱くことなく。

首を狙っていることに気付いたであろう瞬間動いたランサーも、完全に避けることは出来ていなかった。

もし、ランサーでなければあの瞬間確実に首を飛ばしていたに違いない。

最速の英霊だつたからこそ、首の皮一枚ですんだのだ。

そして、ランサーの首から流れ落ちる赤。それを見てやっと自分を取り戻した。

操られていたわけではない。自分を完全に失っていたわけでもない。何かに突き動かされるように動いていたのは事実だが、その事もまた事実だ。

それでも、あれは自分を取り戻したと言った表現が正しいと思うのだ。

自分でもそう捉えるほどおかしかったことが解るだけに……

それともう一つ、あの声が聞こえたときある既視感を覚えた。

すぐにそれに構えるような状態ではなくなったため考えることは出来なかったが、それは確りと覚えている。

感じた既視感。冷静になった今考えれば一目瞭然だった。

凜と共に行った柳洞寺からの帰路、バーサーカーとランサーの激突の時。その時に感じたものと一緒だったのだ。

なぜ、既視感を感じたのか。

普通に考えるならば同じものだからと思うのが当然だ。

それなら、ランサーを殺そうとした行動は「影」と同じ気配がするものが影響したのではないかと推測することも可能だ。

しかし、そこで新たな疑問が浮かび上がってくる。

なぜアーチャーの身の内に「影」と同じ気配がする物が存在するのか。

「…………いや、もう知らない振りをするのはよそつ。  
とっくに解っていたことではないか……………あれが「アンリ・マユ  
《この世全ての悪》」だと言うことは。」

そうなのだ。アーチャーはこの世界で初めて、影の気配を感じた  
ときその正体が解っていたのだ。  
それを否定していたのは認めたくなかったからだ。

この世界にいない筈の「アンリ・マユ《この世全ての悪》」がいる  
と言うことを。  
それによって、この聖杯戦争が壊れてしまつかもしれないと言うこ  
とを。

だが、もう認めないわけにはいかない。  
生前から幾度となく感じてきた奴の気配を、アーチャーが間違える  
筈もないのだ。

あれは間違いなく「アンリ・マユ《この世全ての悪》」だと断言で  
きた。

そこまで解っても何故奴の気配が自分の中から感じるのか、それだ  
けはアーチャーにも解らなかった。

「ランサーとバーサーカーの衝突時に見た映像が関係ありそうだが  
……………磨耗した身にはもう思い出すことなど叶わんか。」

この世界で初めてアレを目撃したとき、ノイズ混じりだが脳裏に走  
った緋い映像。

きつとそれが手掛かりであるだろう事は解つていても、殆どの記憶と記録が消え去った身に思い出せるはずもなく力無く自嘲の笑みを浮かべるしかできない。

一つだけわかるのはアレがエミヤシロウが産まれた瞬間の映像だろうと言うことだけだ。

アレほどまでに緋い世界は、それ以外にあり得ない。

「結局は奴から動くのを待つしかないと言うことか。」

「アンリ・マユ《この世全ての悪》」ならば拠点となる場所は限定される。

だが、今それを告げるわけにはいかない。

何故しつているかと言う事になるし、何より自分だけでは勝てるかわからない。相手の今の情報が無さすぎる。

あの様に街中を彷徨っている以上大した力がないと思われる今が叩き時だと解っているだけに歯痒い気持ちを抑えきれない。

けれど、確実に奴を消すつもりなら今は耐えるときなのだ。

「正義の味方など愚かなものでしかないというに、まだそんな感情が残っていたとはな……」

アーチャーは全てを救いたい等と言う考えはとうに捨て去っている。それが幻想でしかないと言うことを理解したがゆえに。

一を切り捨て九を救う。

それがアーチャーである英霊エミヤシロウの戦い方であり、戻るつもりは無いしそんな資格も無いと考えていた。

でも、‘救いたい’と言う感情まで無くなったわけではない。いや、思い出せたのだ。

ふと、またアーチャーを脱力感が襲った。

全てがなくなっていくような感覚。それを目をきつく瞑り、胸を強く押さえながら耐える。

暫くの後、漸く発作が収まった。

今回の発作は前回よりも長く続いていたようにアーチャーは感じた。

その事で自分に残された時間は少ないのだと悟る。

だが、聖杯戦争が終わるまで……奴を消し、この世界に不安要素が無くなるまでは意地でも現界しようとアーチャーは決意を固めた。

この世界の優しさについて忘れそうになるが自分にはもう座は存在しておらず、真実エミヤシロウとして最後の個体なのだ。

消える前にまた世界を救うのも悪くはない、とアーチャーは思う。

第四次聖杯戦争で死ぬ筈だった者達。

そしてそのサーヴァント。

全てに会った訳ではないが、現代の肉体を得て人として生活している。

大半が孤独の中にいた第五次聖杯戦争のマスター達。

ここでは孤独など感じる事すらなく、全てが笑顔で満たされている。現界して今まで、欠片も悲しい表情をした時を見てもいない。

そんな世界であの地獄を、死だけの世界を再現させるわけにはいかない。

アーチャーは自分自身に誓う。

最悪、この身に変えても守りきろう、と。

最期ぐらいは守護者と言う肩書きに相応しいこと　自分がしたい  
と思えるようなことを、と。

星と少しだけ欠けた月、黒から青へのグラデーションを表している  
空だけが静かにそんなアーチャーを見守っていた。

しかし、その輝きはアーチャーの決意を哀しんでいるかのような、  
憐れんでいるかのような印象を思わせたのだった。

次の日の昼、取り決め通りに凜達三人とそのサーヴァントは集まっ  
ていた。

だが、集まることを決めてまだ初日。

特に話し合うこともなく、和気藹々と食事をとっていた。

皆の食事が終わった頃、あることを聞くために凜が士郎へと話しか  
けた。

「そつだ、士郎。」

「ん、何だ……って、もしかしなくてもバゼットさんのことか？」  
「ええ、そうよ。その様子じゃ、ちゃんとしたみたいね。」

話しかけられた土郎はすべてを語らずとも理解したようで、的確に凧の聞きたかった答えを返してきた。

「ああ、でも流石に驚いたぞ。」

まさかとは思ったけど、戦いに来たのかって勘違いしちゃったしな。

「何言ってるのよ、土郎。あの二人が襲撃紛いなことと思う？  
それに、あいつ等は私達が倒したのよ。」

「ですが、リン。その事を知らないシロウがそう思っても仕方ない  
かと。」

事実、私も恥ずかしながら剣を向けてしまいましたし。」

凧は敗退したのだから大丈夫だと高をくくっていたが、それは相手がその事を知っていたらという前提の上でなりたつことだ。

その前提を知らなかった以上、そう勘違いしたところで責めること  
などできない。

その事を凧はすっかり忘れていたのだ。ウツカリで。

凧は一瞬間抜けな顔をしたあと、フィツと顔をそらした。

きつとそうなのだろうなと解っていた土郎とセイバーは、特に何も  
言うことはなかった。

なんせ長い付き合いなのだ。

そして、そんな凧の反応にアーチャーは深い深いため息をついた。

昨夜の自信満々の発言に対しこの結果かね、とアーチャーの視線が言っていた。

勿論実際に口にはしない。昨夜の悪夢の二の舞になる気はないからだ。

ただ、凜が居たたまれなくなるように見詰めるのみ。

良心（そんなものがあるかどうかと言う質問は受け付けない）を刺激するように。

因みに、バゼットがどうやって敵意がない事を示したかと言えば、敗退すれば色が抜ける決まりの令呪を見せたのだ。

初めはそれに思い至らず慌てていて、それが余計に疑惑を深めていて、ほんとにギリギリだった。

その後で何故家に来たかの事情を聞き、一連の話を聞いてやはりバゼットの食事情に驚いた衛宮一家は喜んでランサー達を迎え入れたと言うわけだ。

「そんなことがあったんですか。姉さんもですけど、バゼットさんでしたっけ？その方もちよつと抜けてますね。」

「あつ、でも大丈夫なんですか？先輩。いきなりお客さんがきちちゃつて。」

桜がバゼットという人物に対し自分の姉とどことなく似ている等と感じていると、急に人が増えても大丈夫なのだろうかと思ひ土郎に尋ねた。



「ん、ああ。大丈夫だ。二人増えるも四人増えるも一緒だしな。」  
家計を一手に預かる士郎の大丈夫と言う言葉に安心するも、ん？と桜は首をかしげた。  
立ち直った凜も同様だったようで、気付いたことを口にした。

「四人、て他にも泊まる人たちがいるの？」

「ああ。バゼットさんと同じ様に協会の人だったかな。  
今日到着するって聞いたから食料に関しては多めに買ってたし、部屋は元々多いからよかったよ。」

士郎が口にした情報で凜達にも正体がわかった。

昨日話していたケイネスの弟子でもあるウェイバーだと。

「でも何で士郎の家に泊まるの？別にそれが悪いって訳じゃないけど、普通ホテルとかじゃないかしら。」

ケイネスが普通にホテルをとってるだけに余計にその疑問が残る。  
士郎を見ると、その視線はセイバーを向いていた。  
どうやらセイバーに理由の一端があるようだ。

「えっと、何故かと言えばライダー　　征服王が泊まりたいと言つて来たからなのですが……」

「だから、何でそう言ってきたかが知りたいんだけど……まあ、言えない事なら良いわよ。無理して言わなくても。」

「いえ、そう言うわけではないのですが……………」

そう言う割に、セイバーの言葉は要領を得ない言葉しか出てこないでいた。

‘あゝ’とか‘うゝ’とか呻き、視線はあちこちさまざまに迷っている。

このままではちが空かないと判断した凜は、事情を知っているだろうと士郎へと話をふった。

士郎も仕方ないといった体で話始める。

「いや、何て言うか俺の料理を食べたいらしいんだ。」

「士郎の？何で相手が士郎の料理を知ってるの。」

「セイバーとイスカンドルは何度かやり取りを交わしていたらしいんだけど、その時俺の料理が話題に上がったらしいんだ。」

やり取りと言っても当然だが手紙ではない。

イスカンドルがウェイバーに使い魔を放って貰ったり、他の用事のついでに会話を交わさせて貰ったりと様々な魔術的要素を用いて行っていた。

その際にセイバーが士郎の料理の腕を自慢し、セイバーがそこまで絶賛する士郎の料理に興味を引かれたイスカンドルがこの機に泊まらせて貰うようにしたのだ。

ウェイバーの許可なしで。

後でその事を知ったウェイバーは怒りもせず、ただ遠くを見つめていたらしい。

変わらず己がサーヴァントに振り回されているウェイバーが不憫である。

「セイバーさん達にそこまで評価されるなんて、流石先輩ですね。」

桜の言葉にセイバーは真っ赤になる。

どうやら、士郎の料理の事で熱弁を交わしたことを知られるのが恥ずかしかったので話せなかつたらしい。

今さらだとは思っただが。

「一気に十人に成るわけか……料理とか大変になりそうね。」

「そうだな。でも、美味しく食べてくれるならそれはそれで作りがいがあるさ。」

人数が増えて大変ねと言う言葉に、寧ろやりがいがあるとでも言いたげな士郎の言葉。

一瞬、魔術師やめて料理人になれと言う言葉が浮かんでも仕方ないことだと思っ。

「夕方にはもうライダーとそのマスターは到着してるのかしら。」

「え？……よくわからないけど、着いてるんじゃないか？」

何だ、遠坂。会いに行きたいのか？」

凜の質問に、何なのだろうかと凜を見る士郎。

からかい混じりに過去の王様に会いに行きたいのかと口にした。

「あら、士郎の割には感がいいじゃない。勿論そのつもりよ。」

冗談のつもりという言葉に素直な肯定が来て士郎は目を瞬いた。

凧がミィハーではないことは知っているから、理由が浮かばないのだ。

「顔見せのようなものよ。早めに挨拶していた方が動きやすいですよ。」

「ああ、そうか。」

確かにその方が良いよな。」

「ふむ。で、そう尋ねると言うことは今日行くつもりかね、マスタ。」

挨拶にいくと言う凧の言葉にアーチャーが応える。

それに凧は当然と返した。

凧が何時ごろかを聞いたときから予想はついていたので、アーチャーもそうかの一言で終わらせた。

「だから桜、アンタも一緒にいくわよ。」

「はい、解りました。」

顔見せなのだから、当然桜も行くことを告げる凜。  
桜もその方がいい事を理解しているので、否はなかった。

それに、桜達にとってはウェイバー達だけでなくバゼット達とも会ってないのだ。

衛宮家にいる今いく方が効率もいいので、ついでに挨拶しておこうと考えていた。

「よし、じゃあ放課後に集合ね。」

「場所はどうしますか？」

「やっぱり校門が一番いいんじゃないか？」

何処に集まるかを話し、校門が一番楽だろうとなったのだがそこで問題が一つだけ浮かび上がった。  
セイバーだ。

他のサーヴァントと違いセイバーは霊体化出来ないため、コッソリと付いていくことが出来ない。

そのまま付いてくるにも何故迎えに来たのかといらん噂を流されてはたまったものではないと却下せざるを得ない。

どうするべきかと頭を悩ませていると、アーチャーから案が出された。

「我々サーヴァントは外から集合するようにはどうかね。無論、私達も姿を見せるようにしてだ。」

「確かにそれならば一緒に行動できますが……」

「なに、セイバーだけでなく我々もいることでどの様にも理由付けは出来るだろう。」

町案内などな。そのついでに迎えに来たとしてもしておけばいい。」

つまり、アーチャーは衛宮家に訪れてきた外国の友人を町案内しているとき、丁度よく迎えに来たと言うことにしてしまえ、と言うことだった。

外国暮らしが長かった切嗣に外人の客が訪れることに違和感はない。その事を知らないにしても奥さんが一見して外国人であることは解るため、その関係とも受け取れる。

それならば確かに違和感もなく、不自然さも少ない。僅かな時間でそこまで考えたアーチャーに尊敬の眼差しを送り、皆はアーチャーの案でいくことにしたのだった。

放課後。士郎達三人が集まった頃、セイバー達も姿を表した。それに、士郎が驚いた様な表情を浮かべる。

「あれ、どうしたんだ？セイバー。」

「士郎ですか。いえ、友人が訪ねてきたので町を案内していたところですよ。」

セイバーも士郎の演技に合わせるように言葉を紡ぐ。  
やり取りは自然であり演技とは思えない。

感情を制御する事に長けた魔術師だからこそ、この程度の演技は手のものと言っわけである。

また、回りの人間の耳に入りやすいように少し大きめの声で話されていた。

「ああ、そうなんだ。」

「じゃあ何でここに来たんだ。こっちは学校じゃないぞ。」

「丁度案内し終わった頃でしたので、どうせなら一緒に帰ろうかと思っまして。」

「偶々、時間が重なったから来ただけだ、と言っことを強調するかのようになげけるセイバー。」

こうでもしないと身の危険があるのだ。主に士郎の。

校門で会話をしている彼等は周囲の視線を一心に集めている。

一番の理由は矢張その外見である。

只でさえ校内美女姉妹との付き合いがある士郎は嫉妬の対象にされやすい。

それに外人の美少女にまで迎えに来て貰ったとなれば、本気でピンチになりかねない。

本人はその事に気付いておらず、無意識でそんな事態を回避してい

ると言うのがまた凄い。

今回は一行の中にアーチャーという男性が居たことも大きいだろう。少なくとも、全員が女性であったら別の意味で修羅場になりかねなかった。

「あら、外国の方々ですか？」

「ええ、国は違いますが。」

「あら、そうなんですか。でしたら是非お話を聞きたいですわ。」

「私も聞きたいです。いいですか、先輩？」

凜が興味津々な態度を隠さず話しかけた。

そして、この後衛宮家に行っても問題ないように話の流れを持っていった。

周囲は彼らの会話に少しの疑問を抱くこともなく見送ったのだった。

「上手くいきましたね。」

「そうみたいね。士郎、アンタ助かってよかったわね。」

凜が意味深に呟く。桜も苦笑いしながら肯定も否定もしない。

士郎はそんな二人の反応が理解できず、ムツと眉を寄せた。

二人には解っているからだ。士郎が周囲に嫉妬混じりの感情を向けられていることを。

知らぬは本人ばかりなり。



「やれやれ……どうでもいいが、さっさと移動するぞ。」

アーチャーはそんな彼らを尻目に足早に移動を開始した。

そのアーチャーを慌てて追いかける三人。

そして、六人で歩き真つ直ぐに家に向かったため直ぐに到着する。

彼等が家に入ろうとしたときだった。

家の中から豪快な笑い声が響いてきた。

六人は顔を見合わせた。

片方はランサーの声であることはすぐに解った。

と言うことはもう一つの声は恐らくライダーであることに間違いなく……

士郎達もいることなので、彼等は遠慮なく家へと上がり込んだ。

上がり込んだ彼らの目に写ったのは向かい合ってご機嫌で酒を飲む二人のサーヴァントと、部屋の隅で膝を抱えて座る一人の華奢な男だった。

## 二十二章 一つの輝き（後書き）

以上、アーチャーの決意と四次ライダー主従との邂逅話でした。

因みにウェイバーの容姿は第四次聖杯戦争のときの姿でお願いします。

今回は何気に五次ライダーが空気でした。

気付いたら一言も喋っていなかった畷（誰のせいと）

いやはや、これからどうなっていくのか。  
どんな展開になるんでしょうね〜

……………え、作者だろうつて？

書いてるうちに徐々にプロットからずれていつちやってるんですよ  
ね……………

大筋はまだなんとか範囲内なんですが。

なにはともあれ、完結目指し頑張ります。

## 二十三章 脱力の宴（前書き）

いや、スミマセン。

日を越えての投稿になってしまいました（汗）

地の文では四次サーヴァント達は真名で、五次サーヴァント達はクラス名で書いていきます。ある時期までは。

ある時期と言うのはその時が来れば解ると思うので……

そして、評価の総合ポイントが1000を越えたことに感謝を！！

本当にありがとうございます！！

## 二十三章 脱力の宴

昼を少し回ったぐらいの時間帯。

衛宮家の門前に二人の男が立っていた。

一人はそれなりに整った服を来た細身の男で、もう一人は巨大な体躯を誇る男である。

彼等とはある情報を聞き、助力になればと駆けつけてきたのだ。

挨拶をするべきセカンドオーナーにはつい先程話を通し、あとは目の前にある家の家主達に挨拶をするだけなのだが……華奢な男の方は既に疲れきった雰囲気を纏っていた。

何故かと言えばもう一人の男が原因だ。

理由は大柄な男の格好を説明すればお分かりいただけれる筈だ。

その大柄な男の格好はTシャツにジーパンと言った、一見するとごく普通のそれである。  
…それだけであれば。

実際の所、Tシャツにはあるアニメキャラがでかかど描かれており、それを隠す処がよく見ると言わんばかりに胸を張って歩いていた。

それが、彼等の拠点からずっと続けられていたのだ。

周囲の視線の痛いこと痛いこと。

本当に普通の格好をしているもう一人の男まで同類であるかのような視線を向けられていた。

大柄な男ほどの凶太い神経を持ち合わせていないもう一人の男は、

移動だけで精神を削られる結果となったのだ。

そして、理由はもうひとつ存在する。  
大柄な男の両手に握られている荷物だ。

その荷物とは紙袋のことだ。

その中身と言えばとあるキャラのグッズであったり、はたまたゲームのカセットであったり……  
所謂、そういう系の物が大量に入っていた。

それらはまだビニール等に覆われており、それが意味することは購入したてと言うことだ。

そう、本来ならばケイネスと同時に着く筈だった彼等は巨漢の男の強い要望により、オタクの集う街に寄って来たがためにこのように遅れて到着したのだ。

「……やっと、着いたな。」

「そうじゃな。騎士王に会うのも久しぶりであるし、楽しみだのう。」

短い旅路である筈なのにまるで長旅をこなした旅人の様な雰囲気を感じ出し、やっと着いたことの安堵を込めた言葉を吐く細身の男

ウェイバー・ベルベット。

巨漢の男 第四次聖杯戦争にライダーとして喚ばれた男はそんなマスターに気付かず、これから再会するであろうセイバーに思いを馳せていた。

いや、ライダーの事である。気付いていたとしても気にしないで決

まっている。

なんと言っても破天荒を絵に描いたような男なのだ。

ウェイバーはそんなイスカンドルの言葉をなるだけ気にしないようにし、目的地である衛宮家へと入っていった。

「……お邪魔します。」

「おうおう、邪魔するぞ!!」

他の魔術師の家に入るのは緊張するのか恐る恐るといった風に声を出すウェイバー。

それとは逆に大声をあげ返事が返ってくる前に、どかどか上がり込むイスカンドル。

性格の違いが如実に表れている。

「って、勝手に上がり込むなよ。」

「わははは、小さいことを気にするでない。余は気にせん。」

「気にしろよ!!他人の家だぞ!!」

構わずズンズンと家の中を進むイスカンドルを慌てて追いかけるウェイバー。

そう時間も掛からず彼等は客間に到着した。

そこではウェイバー達のお茶が既に用意され、会話を漏れ聞いたのが苦笑いを浮かべた士郎以外の衛宮家が揃って二人を迎えていた。イスカンドルの性格を知ってるがゆえに、声が聞こえても迎えにい

かずにお茶の準備をしたのだ。

そして、訪れてきた二人にとって見慣れない人物達がそこにいた。昨夜この家に来たバゼット達である。

「なんじゃ、見慣れん奴等がおるの？」

「うわっ。さ、サーヴァント。」

ウェイバーはもう参加者ではないにも関わらず、相手がサーヴァントと解った瞬間腰が引けた。

イスカンドルは二人に 特にサーヴァントに興味津津の様で、まるで子供の様にキラキラと目を輝かせ彼等に近づいていった。

「お主が今回召喚されたサーヴァントの一人かの？」

「おうよ。俺はランサーだ。」

忌憚なく話しかけてきたイスカンドルに面食らったものの、元来の性分によりこちらもそう動揺することなく返すランサー。

ほうほうと頷きながらドツカリとランサーの前に座り込んだ。

話し込む気満々である。

ウェイバーはどうすればいいかわからず、結局用意されていた座布団の上に座ることにした。

「疲れたでしょう？お茶菓子もどうぞ。」

「あ、ありがとうございます……」  
「見たところ、君達の関係も相変わらずみたいだね。」

アイリスフィールの気配りによってお茶菓子を進められ恐縮するウエイバー。

切嗣は第四次聖杯戦争じより変わらない二人の關係に微笑まじげな表情だ。当人にとっては微笑ましい処ではないのだが。

お茶を飲んで一息ついたウエイバーに、疲れによってスルーしていた疑問が浮かび上がってきた。

「えっと、この人は……？」

「ああ、彼女かい？君も知っていると思うけど、彼女は封印指定執行者のバゼットだよ。」

「バゼット・フラガ・マクレミッツです。貴方の噂はかねがね聞き及んでいます。」

ウエイバーは時計塔で噂になる率が高いのだ。主にイスカンダル関係で。

その噂を聞いていたのだろう。

若干赤面しながらもウエイバーもなんとか挨拶を返した。

そして、その後ウエイバーが一番聞きたかったであろう事を切嗣が説明した。

それを聞き、あんまりな理由に思わず本当なのかと凝視してしまっ



それを受け困惑の表情を浮かべながら視線をそらしたバゼットの態度に、本当なんだと理解したウェイバー。  
「なんとさえばいいか思い至らず、沈黙を貫くことにしたのだった。」

一方、そんなマスター達の空気を知らないサーヴァント達は盛り上がった。

「ランサーといったかの、どこの英霊なんじゃ？」

「クー・フリーンっていやあ、解るか？」

「なんと、光の御子か！！こりゃ凄いやつが召喚されたもんじゃのう。」

本来なら隠すべき真名だが、もう負けた以上隠す意味も無いと堂々と名を告げるランサー。

イスカンドルは有名どころに歓喜を隠せないでいた。

「んな大したもんでもねえよ。」

でアンタは何処の奴か教えてくんねえのか？」

「おおう、余としたことが忘れておったわ。」

余の名はイスカンドルじゃ。」

「名高い征服王サマか。そっちの方がよっぽどスゲー存在じゃねえか。」

イスカンドルの名を聞き目を見開くランサー。

ランサーの驚愕に、心地良さげな笑顔を浮かべるイスカンドル。自分を知られていると言うことは、イスカンドルがよくやることに  
おいて有利になるからだ。  
結果はおいといて。

「それじゃ、コッチのれで……んん、レディーと一緒にいるサー  
ヴァントも気になるんじゃが。」

「あら、レディーだなんて口が上手なのね。イスカンドル王。」

「連れないのう、王など付けんでもよいぞ。」

「あら、そうなの？じゃあ遠慮なく。」

それと、彼は私のサーヴァントのバーサーカーよ。真名はヘラクレ  
ス。」

イスカンドルはテーブルの方でなく自分達の側に座っているイリヤ  
と、そのサーヴァントへと話題を振った。

イリヤは彼等の話題に興味があつたようので、バーサーカーを連れて  
横に座り込んだのだ。

そして、返ってきた返事にさつき以上の喜色を滲ませたのだった。

「うほっ、ヘラクレスとな！？こりゃビックリじゃわい。」

「えへへ、そうでしょ。それに、私のバーサーカーは強いんだから。」

イリヤは胸を張ってヘラクレスを紹介する。

イスカンドルはふむふむと真面目に聞き入っていた。

そして、笑顔を浮かべある一言を放つ。

「時にお主等、余の臣下にならんか？」

後ろのテーブルの方でゴツンと何か重いものがぶつかる音がした。しっかり聞こえている筈のそれを無視しつつ、イスカンドルは二人を見続けていた。

一瞬何を言われたのか解らなかったランサーだが、理解すると同時に此方も楽しそうな表情を浮かべ返したのだった。

「クツクツクツ。そういうことには興味がなくてな。

わりいが断らせて貰わあ。」

キツパリとイスカンドルの誘いを断るランサー。

それも当然だろう。ランサーにとって一番関心があるのはギリギリの戦いであり、騎士ではあっても仕えると言うことに欠片の興味もないのだから。

ランサーの返答を聞いて、バーサーカーはどうかとそちらを向く。

真っ先に目に入ったのはバーサーカーでなく、その前に座る不機嫌そうなイリヤであった。

尋ねたのは英霊自身にあるのに、なぜそのマスターの機嫌が悪くなるのか解らず（考えず？）イスカンドルは首をかしげた。

「ダメよ!!!」

「うん？」

「ダメ、バーサーカーは私のサーヴァントなの!!  
他の人の所に行くなんて許さないんだから!!」

前半をイスカンドルに向けて、後半をバーサーカーに向けて言うイ  
リヤ。

バーサーカーはイリヤの言葉に嬉しそうに頷いた。

元よりバーサーカーにはイリヤ以外の者に従う気など無かった。  
それでも、イリヤがそう主張してくれたことが嬉しかったのだ。

「そうか、そりゃ残念だのう。」

そんな二人……いや、三人の返事に残念だと言葉を返すイスカンド  
ル。

だが、言葉とは裏腹に残念そうな表情はしていない。

イスカンドルとて無理矢理勧誘しているわけではない。

臣下になってくれるに越したことはないが、本人が嫌々やっている  
のなら今のよう拒否してくれる方がいいのだ。

「ライダー!!!お前何考えてんだよ。いい加減そう言うこと言うの  
止めるっていつてんだろ。」

「何を言うか、坊主。余は制服王であるから、欲しいと思ったもの

を欲しがるのは当然だと思わんか？  
それにの、何れは世界征服に乗り出すにあたり臣下が多いに越した  
ことはなかるう。」

ウェイバーは後ろからライダーに拳骨を贈り（この際ウェイバーの  
手の方が痛んだのは言うまでもない）、十年前から変わらぬ主張に  
頭を悩まされるのだった。

ランサーはこの主従の言い合いに笑い出すのを堪えきれなかった。

「面白えな、お前等。」

イリヤもこのやり取りでさっきまでの不機嫌さも吹き飛び、口を押  
さえて笑っていた。

「本来会える可能性のない俺等が会ったんだ。

ここは出会いを祝って一杯やらねえか？」

「ほっほーう、そりゃいい考えじゃのう。」

丁度余もアツチの酒を持ってきておるでな。これでやるとするかの。

「

ニヤツと笑ってランサーは酒を酌み交わさないかと口にした。

酒の一言を聞きイスカンドルも笑顔を浮かべ、またウェイバーを無  
視してランサーに向き直った。

会話はまだ少ないものの馬があうことをお互いに感じたのか、二人

は完全に意気投合していた。

酒の用意をし始めた二人に、流石に参加するわけにはいかないイリヤは二人から離れ両親がいるテーブルへと移動した。  
勿論バーサーカーも一緒である。

そして、二人だけの酒宴が開催されたのだった。

ウェイバーはやめさせようとしたのだが、イスカンダルの「煩いの」の一言と共に酒瓶の口を突っ込まれ、一気に体内に大量のアルコールを摂取したことで完全に酔いが回ってしまった。

酔ったウェイバーはフラフラと壁際に歩みよってしゃがみこみ、何かをブツブツと呟き始めた。

漏れ聞こえてくる声に耳を澄ませれば、「僕なんか」とか「どうせ」とか言っていた。

どうやら落ち込み上戸だったらしい。

ウェイバーが邪魔できなくなったことを確認したイスカンダルは改めてランサーへと向き直ったのだ。

ウェイバーを黙らせた手腕に流石に絶句したランサーだが、自分にそう影響はないとおもいいたりイスカンダル同様無視を決め込んだのだった。

そして、その酒宴の最中に学校組が帰ってきたと言うわけだ。

「え〜と……なんだ、これ。」

第一声を発したのは一家の一員でもある土郎だった。家の中ならばどんな非常識が起きてても可笑しくないと学んだがゆえの回復の早さだった。

「お帰り、土郎。」

「シロウ、帰ってきたんだ。お帰りー。」

「お帰りなさい。お友達も一緒なのね。」

帰ってきた土郎達に部屋に入ってきて気付いた彼等は、お帰りと声をかけた。

「あ、うん。ただ今。」

遠坂達は今日来る人達に挨拶に来ただけ……」

そこまで言って、一斉に酒を飲み続けている二人の方へ目を向けた。サーヴァント故か酔っている様子は全く無かった。しかし、二人きりだと言うのに盛り上がっており、周りの様子は全く目に入っていないようだった。

「うーん……あれじゃ無理そうだな。」

自分達の世界に入っている二人を目にし、邪魔はできないなと土郎

は思った。

だが、他の者達が土郎と同じ判断をするかと言えば否だ。

「何いつてるのよ、土郎。この私がせつかく来たんだから、こつちを向いて貰うに決まってるでしょ。」

「でも、どうするんですか？姉さん。」

桜の言葉に同意するようにライダーも頷く。

単に声をかけても聞いて貰えるか怪しいのが解るだけに尚更だ。

凜はにっこりと笑顔を浮かべ自分のサーヴァントに告げた。

「アーチャー、あいつ等をちゃんと話を聞くようにしなさい。」

凜が声を出し始めたときから予測はしていたが、実際に言われれば人使いの荒さに落ち込むしかなかった。

部屋の中にいる他の者達はそんなアーチャーに同情を寄せつつも、とぼつちりを食らっては堪らないと黙っている。

仕方ないため息を吐きながら自分達の存在に気づいてない二人に歩み寄る。

そつしながら、さてどうするかと考える。

単純に声をかけても駄目だろう。

大きくは無いが小さくもない筈の自分達の会話にも気付いていない



から、耳に入らない可能性が高い。

ならば殺気を纏いつつ武器を向けるのが手っ取り早いと思うが、流石にこんな場所でそんなことをするわけには行かない。

だが、実力行使が一番効率がいいのに間違いはなく……と、そこでアーチャーにいい案が思い浮かんだ。

それならば危険はないが確実に此方へと注意を向けさせることが出来る。

どうやって解決させるのだろうかという興味の込められた視線を背中に受けつつ、人の悪い笑みを浮かべ準備に入る。

そう、昼間っから酒を飲んでいるこの男共に天罰（という名の八つ当たり）を下すために。

トレス・オン  
投影開始

周りに聞こえないように口の中だけで呪文を紡ぐ。  
思い浮かべるは、ある意味では最強の対人宝具。

どんな存在であろうと絶対に避けることは出来ないと確信できるほどの物。

それを、両手に投影する。

「あれって竹刀じゃない。」

そう、アーチャーが投影したのは竹刀だ。  
だが、ただの竹刀ではない。

これは、いつの間にか、自分の中に登録された、宝具としての力を  
持つ、竹刀。虎竹刀だ。

この竹刀を知るもの達にはれない様にストラップはつけていないの  
で、一見するとただの竹刀にしか見えないが中身は本物に近い。

真横に到着したアーチャーは、それでもまだ自分に気づかない二人  
に向かって手に持つ竹刀を振りかぶった。

そして、アカイアクマと同類の笑顔を浮かべ言葉を発しながらそれ  
を降り下ろしたのだった。

「いい加減にせんか、このたわけ共が!!」

バシーン

部屋に音が響き渡る。

二人をしばいたアーチャーはスッキリした顔をして凧達の元に戻っ  
ていった。

竹刀で打たれたランサーとイスカンドルは頭を押さえ、声も出せず  
に突っ伏していた。

そんな二人の姿に、命令した凧ですら冷や汗が止まらなかった。

「凧、これでいいかね？」

「え、あ、うん。ご苦労様、アーチャー。」

ただの竹刀の筈なのに英霊を攻撃しても壊れない処かあの威力、その事実には戦きながらアーチャーにどうにか言葉を返した凜。

竹刀の威力には他の者達も驚愕しかなかった。なんせ、いまだに声なき声で呻いているのだ。

そして、サーヴァント特有の回復の早さで復活したランサーは吼えた。

「てんめえ……アーチャー、何しやがる。痛てえじゃねえか!!」  
「はっ、気付かん貴様が悪い。」

己の注意力のなさを私のせいにしていないで貰おうか。  
それに、マスターが話したいと言っていてね。この方が手っ取り早いだろう?」

アーチャーはシレッとランサーの抗議に反論する。  
確かに気付かなかったことは自分の不注意ではあったし、気を抜きすぎていたと言う自覚もある。  
だが、あれは無いだろうとも思うわけだ。

殴られた瞬間に獲物を見たが、あれは確実に竹刀が有する威力ではなかった。  
それに、あれを見たときなぜか恐怖と共に避けられないと本能が告げた。

「余もこれはないと思うんじゃないのう。」

流石の余もかなり痛かったぞ。うむ、中々の一撃であった。」

「それはすまなかった。だが、ただ声を掛けただけでは気づいて貰えそうにも無かったのだな。」

こういう手段をとらせてもらった。」

盛り上がっていただけに気づかなかった可能性を否定できないイスカンドルは、視線をあらぬ方へ向けポリポリと頬を指で搔いた。

アーチャーの鷹の目から逃れるように、未だ壁際にいるウェイバーのもとへ向かった。

「ほれ、坊主。いい加減しゃっきりせんか。」

まだ壁に向かって咳いているウェイバーの頭に、イスカンドルのゴツイ拳骨が突き刺さった。

「い……たいじゃないか。何すんだよ、ライダー!!」

がつつと鈍い音を出したそれは、どうやらウェイバーの正気を取り戻すには十分だったようだ。

もしかしたら、時間がたっていたことも大きかったのかもしれない。

勢いよくイスカンドルを睨み付けるウェイバーだが、イスカンドルの後ろに到着した時とは違う者達を認め再度驚愕した。

「って人が増えてる！！  
へ、もうこんな時間か？」

人と同時に目に入った時計を見て、今の時間に混乱した。  
どうも酔っていた間の記憶がないようだ。

まあ、その方がいいかもしれない。  
酔っているときの自分の言動を覚えていればきっと落ち込むに違いないのだから。  
なんせ、全ては聞いていないものの近くにいた衛宮夫婦の視線が生温いのだ。

色々とグダグダになりつつある空気を変えようと、凜が咳払いをし視線を集める。  
ウェイバーも自分の方を向いたのを確かめた凜は、ウェイバーとイスカンダルに向かって挨拶をしたのだった。

「初めまして、セカンドオーナー遠坂時臣の娘の凜と言います。  
そして、こっちは私のサーヴァントのアーチャーです。」

優等生の仮面を被って挨拶をする凜。  
その横でアーチャーはおざなりに頭を下げた。

どうせすぐばれるのに、と凜に向けられる視線には笑顔を返す。  
それを向けられた相手は顔を青くして引き攣った顔をした。  
(誰かは言わずとも解るだろう)

「私は妹の桜と言います。そして彼女は私のサーヴァントのライダーです。」

よろしく願います。」

「短い付き合いでしょうが、よろしく願います。」

桜も姉に続き挨拶をする。

ライダーもだ。

二人の挨拶を受け、ウェイバーも慌てて自己紹介をする。

高校生の凜達が落ち着いて挨拶をしていると言うのに、大人のウェイバーが慌てていると言うのはなんと云えばいいのだろうか。

こうして、衛宮家での邂逅はなされたのだった。

## 二十三章 脱力の宴（後書き）

今回もある意味では邂逅話のみとなりました。

そして今回はセイバーが空気に……（汗）

このままではいけませんね。喋らせるとまではいかなくても、せめて存在感があるようにしなければ。

頑張っていきたいと思えます！！

## 二十四章 闇に潜むモノ（前書き）

来週は勤務時間調整のため土日出勤……その代わり平日が休日になると言うわけで、土曜に更新できるかわかりません（汗）

いや、一度に出勤する人が多いからって、みんなずれて休みを取る  
ことになったんですが流石にこれは……（泣）



## 二十四章 闇に潜むモノ

自己紹介と言う名の面通しを終えたあと、折角だからと帰ろうとする凜達を押し留め全員で少し団欒をすることになった。

ウェイバーはこの家での人間でないのに、自分達に自己紹介だけで帰ろうとした凜達に疑問を抱いた。

何も用事がないのに来たのかと。

「えっと、君達はどんな用事できたんだ？」

「なんじゃ、気づいとらんのか坊主。鈍いのー。」

聞いた方が早いと思いい口にしたウェイバーだったが、それに対する返答は真横から来た。

イスカンドルの言葉にムカツとしつつも、わからないのは事実なので睨み付けるだけに留めた。

そんなウェイバーの視線など意にも介さず、イスカンドルは煎餅をバリバリと貪り食べていた。

隣ではセイバーも食べており、ハムハム食べつつコクコクと頷いていることからかなり気に入ったようである。

その更に隣ではランサーが物珍しげに煎餅を眺めたあと、同じく食べ始め、へえ」と言いつつ食べ進めていた。

因みに、この煎餅は大河が何時しか買ってきて臍繰りのごとく隠していたもので、イスカンドルが部屋の中を（勝手に）物色した際に出てきたものである。

大河のモノであると言つことに気付いている衛宮家の面々だが、誰も何も言う様子は無い。

イスカンドル達を制したところで食べるのを止めるわけではないし、大河の隠し菓子が食べられるのは何時もの事でもあるからだ。

「じゃあ、お前は解つてるのかよ。ライダー。」「うむ。余の買ったばかりのコレクションを見に来たのであろう。」  
「ああ、なるほど……」

「つて、んな訳あるかー！ー！ー！ー！」

言われなくとも解つているというようなイスカンドルの態度に、流石王なだけあると感心していた客間の者達。

だが、実際にイスカンドルが口にした内容は全く違う事だった。周りにはただため息を付くもの、脱力したようにテーブルになつくもの、頭を抱えるものと様々な反応を返していた。

アーチャーも自分の知る王とは一味違ったイスカンドルの姿に、なんだかやるせない思いが沸き起こる。

アーチャーが知る王は彼女が英雄王だけなので仕方ないことではあるが。

凜は頭痛を感じる頭を手で押さえ、ウェイバーの疑問に答えることにした。

イスカンドルの発言、いや存在はこの際無視である。

「えーと、私達が来た用事について、でしたよね。」

凜が気を取り直して聞いてきたため、ウェイバーは凜に向き直る。そして、ウェイバーも先ほどのイスカンドルの発言は無かったことにしたのだった。

「そ、そうそう。挨拶だけして帰ろうとしてたからさ。」

自分を無視して会話を進めようとする二人に、子供のように拗ねた表情をするイスカンドル。だが、まあ自業自得だろう。

「私達が来たのは顔見せのためです。」

「顔見せって……… 必要ないんじゃないか？」

僕達はこの家にお世話になるわけだし。」

理由を聞いても疑問符を飛ばしているウェイバー。

態々今顔見せに訪れなくても、いずれ自然と顔を会わせることになると考えてるからだ。

凜はウェイバーの考えてることを表情から推測し、この人は本当に年上の‘魔術師’なのかとつい胡散臭げな目で見てしまった。

だが、長年の猫かぶりもありそれを悟らせるような真似はしない。気付いたのは姉妹として暮らしている桜と、パスが繋がっており生

前から何かと巻き込まれてしまったために気付かざるを得ないスキルを身につけたアーチャーの二人だけであった。

「確かに本来ならばそうかもしれないませんが、今冬木では異常事態が起きています。

もし今日来なくて顔見せを行っていない状態で私達だけが偶然邂逅し、その時が緊急時であった場合挨拶なんてしてる暇はありません。

「あ。」

凜は淡々と言葉を溢す。

それを聞き、遅ればせながらウェイバーも気付くことができた。

緊急時の連絡をスムーズにさせるために、まだなにもない今の内にお互いの顔を見せておこうと言うことなのだ。

その状況に陥る可能性は限りなく低いがゼロではない。

ゼロではないからこそ、最悪の可能性を考慮して動かなければならないのだ。

それがわかったとき、ウェイバーは凜の笑顔がとてつもなく恐ろしいものに見えた。

そして、なるべく逆らわないようにしようと密かに思ったのだった。

親交を深めるための交流もある程度交わしたため、今度こそ帰宅しようとして凜は腰をあげる。

見送りのために士郎も立ち上がろうとしたが、凜がそれを制した。

「別にいいわよ、それくらい。それに、そろそろ夕飯の準備しないとけないんじゃないの？」

「って、うわ。ホントだ。」

思ったより時間にくつたみたいだな。急がないと。悪いな、遠坂。」

士郎は凜の好意に甘えて、台所へと向かっていった。  
凜達もまた帰宅のために移動を開始した。

彼女達の中で一番後ろを歩くアーチャーは、出る時部屋の中へ気が付かれぬよう視線を投じた。

殆ど一人だけで過ごしていたと言っても過言ではない自分の時と比べ、今見ているこの部屋は暖かさに満ちているような気がアーチャーはした。

内装も、家具も、何もかも同じである。

そこに、‘家族’が存在する以外は。

だが、それが一番の要因なのだとすることも解っていた。

切嗣チチオヤとアイリスフィール（ハハオヤ）そしてイリヤスフィール（アネ）。

それらが欠けることなく揃っている。

今はランサーや征服王も滞在し、‘ここ’の特徴として争うこともなく共に笑い合う。

来て直ぐ目にした光景には些か辟易したが、あれも一つの平和とも言える。

……イスカンダルに関しては状況に関係なくそう言うことをしそうではあるが。

懐かしくもあるが、初めてみる部屋。

最初に来たとき見る余裕は無かったアーチャーの、それが再度この部屋を訪れた今の印象であった。

僅かな羨望と渴望が鈍色の瞳に浮かび、一瞬で消え去る。

どんな感情を抱こうとも、もうこの身には関係ない事なのだ。

後ろ髪を引かれる感じながら、それを振り払うようにアーチャーは部屋を後にした。

凜と桜はまだ玄関におり、アーチャーの様子には気付いていない。それに胸を撫で下ろしながら、四人は帰路についた。

その日の夜、凜と桜は再び巡回にでた。

当然のごとく二人は別々の行動だ。

ライダーが敗退した今一緒に行動することにおいて何ら問題はないが、別々に行動することによる効率化を図ったためそう相成ったのだ。

「異変が起きてほしいって訳じゃないけど、あれ以来何も無いわね。少し拍子抜けだわ。」

「何を言っている、凜。何も無いと言ってもたかが数日だぞ。」

それに、嵐の前の静けさと言う言葉もあるだろう。気を抜かんことだ。」

「解ってるわよ、アーチャー。ただ意気込んでた分空回っちゃったな、て思っただけじゃない。」

凜の発言に、諫める言葉をはくアーチャー。

そんなアーチャーに頭が固いわね等と考える凜。

そんな会話のやり取りをしながらも周囲の警戒は怠らない二人。

その様なやり取りを交わしている二人の場所からは、眼下に星とは違った輝きの海が見られた。

二人のいる場所。それは新都にあるビルの屋上だった。

初めは何時ものように歩いて回っていたのだがそれでは搜索範囲が限られてしまうこと、凜の年では下手をすれば補導されかねない（実際に何度か危ない目に会った）事からアーチャーが凜を抱えて移動することにしたのだ。

お陰で移動速度が上がリ見回れる範囲も広がった。

いまはその小休憩といったところだ。

凜の反応にヤレヤレと首を竦め苦笑いを溢すアーチャー。

そのアーチャーの感覚にサーヴァントの気配が引つかかった。

そっちを見れば、さっきまでの自分達と同様にビルを駆ける存在がいた。

アーチャーが気づいたのと同じ様に彼方も気付いたようで、アーチャー達がいるここへと向かってきていた。

「一人で見回りとはご苦勞な事だな。」

「そうでもない。主のためを思えば、これくらい安いものだ。」  
「なるほど。流石は忠義の騎士、と言うべきかな。デイルムツド・オディナ。」

そう、現れたサーヴァントとはデイルムツドだったのだ。

彼が一人で見回っているのには勿論理由がある。

ケイネスは時計塔で軽くない責務が存在するため、婚約者であるソラウと二人揃ってゆつくりできる時間は少ない。

その為、まだ明確な敵が現れていないこの時ぐらいは、ゆつくり二人だけの時間を過ごさせてあげたいと言うデイルムツドの思いが込められているのだ。

十年前であればデイルムツドの言葉を素直に受け入れる事はなかったし、単独行動も殆ど許さなかっただろう。  
だが、すんなりと受け入れたわけでもない。

余計な気を回すな等と一通り文句を言ったあと、そこまで言うなら勝手にしろといい放ったのだ。

もし、デイルムツドにイスカンダルと同じ知識があればこう断じただろう。

ー ツンデレ乙

幸いにもそっちの知識に触れる機会がなかった為、そんな不名誉な称号は避けられたケイネス。

……男のツンデレはあまりいいものではないが。



「で、どうしたの？なにか変化でもあったのかしら。」  
「いいや、何も。ポイントも解らないからな、本当に見回っているだけって感じさ。」

折角会ったのだからと近況を尋ねる凜だったが、返答は予想通りのものだった。

さしたる落胆もなく、そうと返事を返した。

アーチャーはデイルムツドに今日搜索した範囲を訪ねた。

別の日ならともかく、同じ日に同じ場所にいくよりもより広く見回った方がいいからだ。

「我々はアチラの方を既に見てきている。」

「私はホテルからだからここら辺だな。」

「ふむ、では君はこちらの方に向かってくれるか？我々はコッチに行こう。」

「ああ、了解した。」

簡単にこれから向かう先を二人は決めた。

アバウトなのはあくまで重ならない程度にただけであり、他にも警戒に回っている者とているからだ。

デイルムツドは再び夜の闇のなかにその身を投じ、それを見送ったアーチャー達も休憩は終わりと動きを開始した。

「やっぱり、あれの気配は感じられないわね。」

「霊脈にもたいした異常はなかったってお父様も言ってたし。」

街を見回っても表面的な異常等なく、魔術師的観点からも何ら見つけることはできない凜。

完全にあれは身を潜めているとしか思えなく、やっぱり暫くは動きはないものと考えていた。

だが、アーチャーには街のアチコチに潜むアンリ・マユの気配が感じられていた。

凜にも解らないそれを感じられるのは、同じ気配がするものを抱えているからだろうと考えていた。

気配があることは伝えたいが、自分だけしか感じない異常を教えることはできない。

なぜ感じるのか、その理由まで話さなければいけないようになってしまった。

サーヴァントだからと言う理由だけでは難しい。

何故ならデイルムツドですら感じていなかったのだ。

そう、実は屋上で邂逅していたときもアーチャーはアンリ・マユの気配を感じたのだ。

だが、デイルムツドはそれに気付く様子はなかった。

それを考えれば、他のサーヴァントも同じであろうと言うことが考えられる。

不用意に告げれば、自分の異常を伝えるだけになってしまう。

それだけでなく、恐らくは自分のことを怪訝な目で見てくるだろう。あれと実は関わりがあるのではないかと。

真実ではないが事実であるので下手に否定も出来ない。  
もしかしたら、ランサーと交戦していた時と同じ状態に陥ってしま  
う可能性も皆無ではないのだ。

ならば、寧ろ自分を疑っていてくれても構わないが、まだ告げると  
きではない。

今動きを制限されては、奴を消す機会が失われてしまう。

アーチャーが頭の片隅でそんなことを考えていると、今まで独り言  
をいていた凜がアーチャーに向けて語りかけた。

「ねえ、アーチャー。」

「なんだ、凜。」

「思ったんだけど、あの‘影’って普通の人も襲うのかしら。」

凜の問いかけに、昔の映像を呼び起こす。

奴は人を襲い、それを‘養分’として吸収していた。

例え世界が違ってても、この世全ての悪としての存在が同じであれば  
それに関しても同様だろう。<sup>アンリ・マユ</sup>

外見が同じである為楽観視はせず、変化はないと見た方がいいだろ  
う。

なので、少々残酷かも知れないが正直に告げることにした。

「……その可能性は否定できんな。相手の情報が殆どない以上、私  
達が知らないだけの可能性が高いからな。」

「そう、よね。」

「しかし、どうしたのかね。急に。」

アーチャーは何故凜が今になってそんな疑問を感じたのだろうか、逆に尋ね返した。

凜は少し言いずらそうにしながらも、アーチャーが英霊であることを思い出し素直に答えることにした。

「アーチャーは聞いてるかしら、冬木の街で人がたまにいなくなっているって話。」

「むっ。そう言えば以前の休みの日の出掛ける直前に、遠坂葵が通り魔がどうのと言っていたな。」

「もしやその事か？」

アーチャーは休日買い物に出た日の事を思い出した。

その時、確かに「通り魔」と言っていた。

その時はよくある事件だと普通に流していた。

凜の両親とて、大して重要視しているとも見えなかった。

なので、魔術絡みではないだろうと思ったのだ。

「ええ、そうよ。それで思ったんだけど……街から人がいなくなるのは通り魔なんかじゃなくて、もしかしたら「影」のせいじゃないのかって。」

アーチャーは驚いた。

一見別々の事にしか見えない筈の二つの事を、ヒントすら与えられていないというのに辿り着いたのだ。

やはり、優秀な魔術師なだけはあると、改めてその凄さを認識した。だが、凜はアーチャーの驚きを別のものと捉え慌てて弁明を行った。

「そ、そりゃ確かに突拍子も無いことかもしれないけど、それなりに根拠はあるのよ。」

人が襲われるにしては血痕も何もなかったし、浚われるにしても周辺の目撃情報が皆無つてのも怪しいじゃない。

アレだったらそのまま飲み込んでいるって考えられるし、状況的にもおかしくないじゃない。」

アーチャーに抱えられている状態のため離れることは出来ないが、なるべく顔を見ないように凜は顔を背けながら話した。

「まだ何の情報もない以上正しいとは言えないかもしれないけど、間違いとも言えないはずよ。」

魔術師たるものどんな可能性も考慮に入れないと。お父様達は違うものって初めから決めつけてるみたいだけど……

何さつきから黙り込んでるのよ。違うと思うんならさっさと言いなさいよ。」

「いや、私も同様の事を考えていた。」

アーチャーも同じ事を考えていたと聞き、思わずアーチャーを振り

返った。

そこには、思いの外真剣な目をしたアーチャーがいた。

「だが、凜。そこまで考えていると言うことは解っているのだろうか？」

アーチャーが何を言いたいのか。凜はそれを正確に察することができた。

ここまで考えている以上、それに思い至らないはずがないのだ。

「解ってるわ。今まで襲われた人たちはもう………生きていないでしょうね。」

そう、アレに襲われた以上、命がないであろうこと。それを、凜は悔しい思いで受け止めていた。

アレは捕まえるだけ等と言う生易しいものではない。だからこそ、自分の不甲斐なさに凜は歯噛みした。

「その人たちの敵討ちなんて自惚れたことは言わないわ。これはセカンドオーナーの娘でありながらその人たちを守れなかった私のケジメよ。」

ハッキリとアーチャーの目を見て告げる凜。

そこには現状を受け入れながらもそれに屈しないと言う力強さがあった。

「ふっ。意気込むのはいいが私の事も忘れないでいて貰おうか。君は一人ではないのだからな。」

私も奴には少々頭に来ている。全力で力を貸そう。」

アーチャーもまた後悔と共に怒っていた。

奴がどう言うものであるのか知っていた筈なのに、直ぐに思い至らなかった自分の情けなさに。

そして改めて決意するのであった。

アンリ・マユを絶対にこの世界から消滅させよう。

闇を睨み付けるアーチャーの瞳には、苛烈なまでの光が存在していた。

‘影’の所業に本気で怒りを表している紅い弓兵。

そんなアーチャーを間近で見つめる凜。

名も知らない英雄ではあるが、呼び出したのがアーチャーでホントによかったと凜は思った。

そして、再び犠牲者を出さないようにするため、街の闇に二人は溶け込んでいった。

あの日の凜達の決意を尻目に、何事も起きずに土曜日を迎えた。凜と桜は己のサーヴァントをつれ、再び衛宮家に訪れていた。

「ああ、もう。なんとってこんなに進展がないのよ。」

凜はイライラを隠さず茶請けに出された菓子を食べていた。それを現在の衛宮家の住人達が静かに眺めていた。

「荒れてんなー、嬢ちゃん。」

「仕方ないでしょう。自分達が管理している土地に異変があるのに、何も進んでいないのですから。」

ランサーは暢気に凜を見つめ、バゼットは凜の気苦労を思い心配げな表情である。

「うわ、今日は特に機嫌が悪いな。」

ライダー、今日は大人しくしとけよ。」

「うむ。くっ、なかなかやるのう。」

「えい、えい。ふふ、私にかかればこのくらい!」

ウェイバーは凜の逆鱗に触れないようイスカンダルに注意を促すが、イスカンダルはゲームに夢中で聞いていない。

隣にはイスカンダルとやらんでゲームをするイリヤがいた。

イスカンダルがしているゲームに興味を引かれやってみたところ、見事にその魅力に嵌まってしまったのだ。



今では始めたばかりにも関わらず、イスカンドルに匹敵する腕前までになっていた。

「桜、遠坂の奴なんであんなに荒れてるんだ？」

「それが私にも解らないんです、先輩。」

士郎は凜が荒れてる理由を桜に尋ねるが、桜にも解らないようである。緒になって困惑した表情を浮かべている。

ライダーはアーチャーが理由を知っているだろうとそちらを見るが、アーチャーに言う気がないのを察してすぐにその矛を収めた。

一緒に暮らしているうちに、アーチャーが以外に頑固な性格であることを理解したからだ。

言わないと決めたことは意地でも口にしな。故に今回の事も今は絶対に話さないだろうと解ったのだ。

凜の機嫌が悪いのは、事態に進展が無いことが主な要因である。人が居なくなるのが、影のせいだと推測したはいいが、そこから一向に変化がないからである。

だが、回りがその事に思い至るはずもない。

何故なら、その事を言っていないからだ。

これはアーチャーと凜の二人で決めたことである。

影が人を吞んでいると推測したが、確たる証拠があるわけでもない。

それなりの確証を得てから話そうと考えたのだ。

その方がより確実だと。

そんな話せないことの苛立ちも混じり、発散できない鬱憤となって凜に堆積していたのだ。

「やれやれ……凜、苛立つのは解るがもう少し落ち着いたらどうだ。」

「五月蠅いわよ、アーチャー。」

「君のためを思っただけで言ってるのだから。」

もう少し周囲に気を配りたまえ。今の君は完全に珍獣扱いだぞ。」

見かねたアーチャーがとうとう動いた。

凜は聞く耳持たないと言った態度を貫く。

しかし、‘珍獣’の一言は見逃せなかったようでアーチャーを睨み付ける。

が、アーチャー越しに見える他の人達を見て、正にその通りであることを実感した。

その隙にすかさずアーチャーは淹れたての紅茶を凜の前に出した。茶葉は勿論鎮静効果のあるものである。

紅茶の香りを嗅いで一先ずは落ち着いた凜。危険レベルが下がったことを察した土郎が、疑問を直接凜に尋ねることにした。

「遠坂、今日は何時以上に苛ついてるけどなんかあったのか？」

「あら、それは私がいつもイラついていると言いたいのかしら？衛宮君。」

「ちちち、違うって。遠坂。」

「……凜。」

行き場のない苛立ちを士郎にぶつけようとしたが、それはアーチャーに止められた。

意味のない八つ当たりであることを理解している凜は、すぐにそれをやめた。

「何でもないわよ。ただ、まだ何も解らない現状にちよつとね……」

「遠坂は考えすぎじゃないのか？もう少し息抜きをしたらどうだ？」

「息抜きかあ。でも、なにをすればいいの？」

確かに聖杯戦争が始まってから、凜は常に緊張感を纏わせて息を抜く事はなかった。

進展がない以上無駄に疲労を貯めるわけにはいかないと魔術師としての思考も判断を下したが、肝心の息抜きの手段が無い。

暇さえあれば魔術師としての鍛練ばかりやっていたため、趣味らしい趣味を持っていないのだ。

息抜きの方法について頭を悩ませる彼ら。

息抜きのために疲れるなどと言う本末転倒な事に陥りかけたとき、衛宮家に少年の声が響き渡った。

二十四章 闇に潜むモノ（後書き）

次回は再び息抜き話になります。

最後の声が誰か……殆どのかたは解りますよね（ー）（

## 二十五章 わくわくぞぶぐん (前書き)

あっはっはっはっは……………

すみませんでしたー……………!!

最近スマートフォンに変えたのですが、これが意外と文字が打ちにくいんです…

文字を打っている最中に(仮称)キーボードが急に引っ込んだり、打つときにいちいちスクロールが必要だったり。

お陰でいつもより文字数の少ない投稿になります。そんな状態ですが楽しんでいただければ幸いです。

## 二十五章 わくわくぞぶぐん

アーチャーは目の前にの光景をただ茫然と見つめていた。

ザザーン

ザザーン

暖かな気候、打ち寄せる波。

まるで真夏を思わせる光景が展開されていた。

「フム、まさか冬の最中にこの様なことが出来ようとは。

科学とやらの凄さはわかったが、その時期にしか楽しめぬという詫び錆びが失われたのは悲しきことよな。」

本来なら鳥居から動ける筈の無いアサシンが現代の科学に感嘆し、

「ここでやりあうわけにはいかねえからな、泳ぎで勝負といこうぜ。

セイバー。」

「臨むところです、ランサー。」

セイバーとランサーは闘争本能をみなぎらせていた。

また、衛宮一家は揃ってパラソルの下に陣取っており、凜と桜はラ

イダーを引き連れ泳ぎに向かっていた。

その際、凜が他の二人をわずかに羨ましそうに見ていた。理由は押して図るべし。

他にも五次のマスターとそのサーヴァントに、現在冬木に来ている四次のマスターとそのサーヴァントが思い思いに寛いでいた。

特にキャスターは竜牙兵を用いてまで己がマスター為に快適な空間を作り出すことに尽力していたのだった。

秘匿はどうしたといたい所だがそれは問題ない。何故ならこの場にいるのは魔術師かそれに関連する者達で占められているからである。

では何故そんな状況にすることが出来たのだろうか？

それはアーチャーの隣に立っている存在が関係していた。

「うわー、皆さん喜んでますねー。招待したかいがありました。」

ニコニコとした表情でとなり立つ彼は金髪紅眼の少年で、ある存在の面影を強く残していた。

その存在とはアーチャーも良く知る存在なのだが、何度見ても何故この少年がああなるのか不思議に感じられた。

「それで、お兄さんは行かないんですか？せつかく貸し切りにしたんですから、楽しんで行ってくださいね。」

「残念ながら、こんなことではしゃぐような性格は持ち合わせてないのでな。その気持ちだけありがたく貰っておこう。ギルガメッシュ

コ。」

そう、隣に立つ少年の正体とはあのギルガメツシュなのだ。そして、今いる場所とはギルガメツシュが支配人を勤める、わくわくざぶくん、その施設であった。

何故彼等がここにいるのかと言えば、昨日の事が関係する。

そう、時は衛宮邸にアーチャーの横にいる少年の声が響いた時まで戻る。

凜と何故か士郎が気分転換の方法について考え込み、それを他の人間（以外も存在するが）が我関せずとばかりに何気に見ていた時であった。

その声が彼等の耳に届いたのは。

「今日は、お邪魔してもいいですか？」

明らかに子供とわかるその声に、聞き覚えの無い者達は何だろうと目を見合わせた。魔術に関して全くの素人が来ないと言い切れない家だが、それでも不自然さが残る。

そうであっても無闇に騒ごうとしないのは、この家の主人一家がこ



の声の主を知っているようであったからである。

家主が迎えに行きつれ戻ってきた人物は、声から予想された通りまだ幼いとすら表現できる少年だった。

少年はニコニコと笑顔をたたえ彼等の前に現れた。

「その姿でいるなんて珍しいな。最近はずっとあっちのままだったのにな。」

「僕もあっちのボクが何を考えてるかはわかりませんが、きっと退屈だったからとか言う理由だと思いますよ？理由なんか無いってのも考えられますけどね。」

「確かに、理由とか考えてなさそうだよな。あいつは。お陰で何度迷惑した事やら。」

「あはは、自分のことながらホントにごめんなさい。」

士郎は珍しい姿に思わず言葉がこぼれた。

それに少年はへニヨンと困ったように眉を下げ、士郎だけでなく周囲にいる人たちにも謝った。

彼等の会話は事情を知る者達からすればすぐにわかる内容だったが、少年の正体を知らない者達にとっては意味不明なことばかりであった。

故に会話に割り込んでしまっても仕方無いことだろう。

「おーい、坊主。お前らさっきからなに言ってるやがんだ？その姿だとか、あっちのボクだとかよ。」

「そう言えば、あなた達はまだ知らなかったわね。」

ランサーが言葉を発した事でなにも知らない者もいたことを思い出  
す。

そして、少年がどういった存在なのか説明を行った。

少年は第四次聖杯戦争に召喚されたサーヴァントであること、クラ  
スはアーチャーで真名がギルガメッシュであること、本来は大人の  
姿だが今はある若返りの薬のせい少年になっていること。

そして、大人のギルガメッシュは傲慢・慢心を表したような性格で、  
常に回りに迷惑をかけていること等々…できうる限り正確に伝えた。  
大人の姿で会っても心構えが出来ているように。

「ああ、以前であつた彼だつたのですね。道理で同じ気配がすると  
思いました…」

「英霊の姿が変わるとかありえ…なくもねえのか？」

「全ての財を集めたとすら言われるような存在ですし………」

以前大人の状態で会つたことのあるライダーは共通する部分からす  
ぐに納得の色を見せたが、これが初見であるランサー達は半信半疑  
で目の前の少年を見つめる。

しかし、彼等が信じられなくとも事實は変わらなく、いずれわかる  
だろうと一応の説明も済んだことで話を進めることにした。

「それで、どうしたのよ子ギル。いつものあんたならどっかで遊ん  
でるんじゃないかったかしら。」

「子ギルはやめてくださいっていつてるじゃないですか、もう………」

今日はいつも迷惑をかけているお詫びに、皆さんを招待しようかと  
思っています。」

「「招待?」「」

凜がここへ来た理由を尋ねると部屋中の視線が子ギル、ことギルガ  
メツシュに集まった。

普通であれば気圧されるほどの迫力を有していたが見られているほ  
うもまた英霊。構うことなくここに来た目的を思いだし、告げたの  
だった。

「はい。大人のボクが新都のあるレジャー施設の支配人になりまし  
て…」

「フム、わくわくざぶーんとか言うプールだったな。確か。」

「あれえ、知ってたんですか?」

「ああ、たまたまテレビで見たものでな。」

驚かそうとしたのか詳しく言わずにいようとしていたギルガメツシ  
ユだったが、それはアーチャーによって阻まれた。

施設がなんなのか暴露され、すねたように口を尖らした。

だが、アーチャーが何でその事を知ったのか聞くと今度は恥ずかし  
そうに顔を赤らめた。

流星にあれを知られるのは恥ずかしかったのだろう。何せ自分であ  
ることに間違いはないのだから。

「あれを見たんですか、恥ずかしいですね。」

「……まあ、見る限り別人も等しいのだろう？ 気にすることはないと思うぞ。」

大人のギルガメッシュとは絶対に相容れないと言つことを身に染みてわかつているアーチャーだが、常識を知っている目の前の人物とは友好を結んでもいいとすら思っているためフォローの言葉を投げ掛ける。

ギルガメッシュはこのように気遣われる事には慣れていない為さつきとは違つ恥ずかしさで軽く視線を下にずらした。

「ああもう、話が進まないじゃない。で、そこに招待してくれるつてわけなのかしら？」

「はい、その通りです。と言つても明日にありますけど。」

ギルガメッシュが心のなかで嬉しさを噛み締めていると、凜が話を進めるように言葉をかけてきた。

冬にプールが楽しめると言つことに皆は期待に満ちた表情をする。そこから分かる通り、皆行く気満々である。

「ひとつ聞いていいか？ 他にも人って呼んでいいか？」

「？ 皆さん呼ぶつもりですよ。」

士郎の問いに、ちゃんと全員呼ぶつもりだと返すギルガメッシュ。それに違つ違つと士郎は手を振った。

キョトンとしていたギルガメッシュだったが、士郎の性格を思いだ

し苦笑いをした。

「いいですよ、お友達も。でもお兄さん……」

「ああ、大丈夫だ。事情は知ってるからな。」

「そうですか、なら僕に否はありませんよ。それじゃ明日待っていませんね。」

そう言い残しギルガメッシュは帰っていったのだった。

そうして冒頭へ戻るというわけだ。

アサシンは鳥居から動けた事がよほど嬉しいようで、剣士らしい肉体をさらし禪一丁で波のプールへ向かう。

水泳にの勝負に闘志を燃やす白いワンピースタイプの水着のセイバーと、青いトランクス姿で傷のある肉体のランサーは学校にあるものと同じタイプのプールへ足を向けた。

そんな子供のような彼等にアーチャーはため息を隠せなかった。いや彼等よりもっと子供がいる。アーチャーはそちらへと視線を向けた。

「くっ、余としたことが敵の威力を図り間違うとは。」

「何が敵だ！！ただの水だブファ……」

そう、イスカンドルである。彼がマスターと共にいるのは、子供がもっとも喜びそうなプール―流れるプールである。そして、何をしているかといえばありがちなことで、流れに逆らって泳いでいると言うものだ。

だが、それだけではない。水のスピードが違うのだ。イスカンドルはギルガメッシュへとお願いして流れるプールの速度を最高のものにしてもらったのだ。お陰でプールの速度はありえない事になっていた。

イメージで表すのなら、さながらナイアガラ滝の滝だ。なんでそんなスピードの設定があるかなんて聞いてはいけない。何せ支配人が“あの”ギルガメッシュなのだから。イスカンドルに無理矢理付き合わされたウェイバーは御愁傷様である。

溺れかけているウェイバーを片手でつかみながらまだ上がる様子のないイスカンドルを見て、アーチャーは心の中だけで告げた。助けられなくてすまない、と。さすがの正義の味方も巻き込まれたくはなかったようだ。

しかし、傷だらけの巨体をもつ男が笑顔を浮かべ流れに逆らって泳ぐ姿はなんとも言い表しがたいものがある。

アーチャーは今度はセイバー達へと目を向けた。どうやら最初の勝負が決まったようだ。ランサーが喜びセイバーがわずかにうつ向いている。

ランサーはこれで終わりだと思っっているようで別のプールに向かうとしている。

「…甘いぞ、ランサー。」

「ランサーさん達ですか。確かにその通りですね。」

思わず呟いたアーチャーにまだ隣にいたギルガメッシュも同感だと返した。

彼等は知っているからだ、セイバーの並々ならぬ負けず嫌いの事を。

予想通りセイバーはランサーを引き留めた、尻尾のような髪を引っ張って。

文句を言いたげに振り向いたランサーはセイバーの表情をみて引き攣った顔になる。

そこまでみて、再び他のもの達へと視線を巡らした。

凜達からはいつの間にかライダーがいなくなっており、代わりに士郎・慎二・一成・イリヤが一緒に遊んでいた。

ライダーは気をきかせていなくなったらしい。そのライダーは今ではライダーを滑っており、嬉々として何往復もしている。

大人達は水着姿でもプールに入る気はあまりないらしく、プールに設置してある椅子でくつろいでいる。

サーヴァント達も団欒を邪魔しないよう、離れた位置で行動していた。このばに危険はないと判断したが故だ。

「正に、平穩というにふさわしいな。」

また、ポツリと呟く。隣にいるギルガメッシュに辛うじて聞こえていたが、今度は言葉を返す事はなかった。  
アーチャーが意図して呟いた事でないことを察したからだ。

ぼんやりとアーチャーは目の前の光景を見つめ続ける。そして、生前の事を何とはなしに思い返していた。

と言っても、何度も言うようだがアーチャーに残された記憶など殆どない。

自分にはこんな幸せな時間得ることができなかった、いや得る資格は無かった事しかわからない。

原初の赤と決意の青。そして、  
の金。を にして のミ  
チをアユミ続けたジブン。

「なんじゃ、お主らは泳がんのか？」

イスカンドルの声に飛びかかっていった意識が引き戻された。

何か重要なことだった気がするが埋没してしまい既に手にすることは叶わない。また何かのきっかけで出てくるまでは。

アーチャーはため息を吐きイスカンドルへと顔を向ける。手にはぐったりしているウェイバー。

「せーつかくプールに来とるんじゃ。お主も何時までもそんな格好  
でおらんでとつと水着に着替えんか。」



イスカンドルが言う通り、アーチャーは水着ではなく普段着のまま  
でこの場にいた。  
勿論理由はある、水着を着たくないのだ。

「私は別に泳ぎに来た訳ではない。泳ぎたいと思ってるわけでもな  
いので気にしないで貰おう。」  
「なんじゃ、つまらんのう。こつ言つときは付き合つのが常と言つ  
もんじゃろが。」

と言つて、豪快に笑い声をあげる。そして、傷のついた肉体がそれ  
に会わせて震えた。  
そう“傷”のついた。

これが、アーチャーが水着を着たくない理由である。  
理由はわからないが、サーヴァントには生前のものらしい傷が付い  
ていた。これが四次のサーヴァントだけなら気にすることも無いの  
だが、ランサーやアサシン・バーサーカーにもあるとなれば話は別  
である。

ここまで来れば分かるだろう。アーチャーは己の傷を見せたく無い  
のだ。  
だが、そんな事など関係ないとばかりにイスカンドルは動く。

「そりゃ。」  
「うわ！ー！何を、征服王。」

服をつかみ一気に脱がせようとしたイスカンドルだが、気配で迫るものを察知したアーチャーにかわされる。

イスカンドルは悪びれた様子もなく、その姿のお主が悪いといい放った。

睨み合うように対峙していると、いつの間にかセイバーとランサーが彼等のそばに近寄っていた。

そして二人の状態を疑問に思い傍観しているギルガメッシュに尋ねた。

「彼等はいったい何をしているのでしょうか。」

「アーチャーさんが普段着のままなので、脱がせようとしているんですよ。」

「おお、お主らも協力せい。こやつを服を剥くぞ。」

イスカンドルのあまりの表現いにアーチャーは吹き出した。

言動になれているセイバーとギルガメッシュ、そして数日の生活である程度理解したランサーは脱力感に襲われながらもスルーするすべを身に付けていた。

「ふむ、まあ確かにこの場でその様な格好は相応しいとは言えませんね。」

「なんつったか？郷に入らずんば郷に従え、か？諦めるや、アーチャー。」

セイバーとランサーはイスカンドルに協力する姿勢を見せた。なん

と言うか、こんなときにも服を脱がないアーチャーに対する興味が大半を占めているのだが。

これに、アーチャーは己の不利を悟らざるを得なかった。

イスカンドルだけであれば逃げ切る自信はあったのだが、最優と最速が加わればどうなるかわからない。

彼等の間に緊張感が生まれる。

ジリジリと少しずつアーチャーの足が動くが、視線は三人から逸らさない。

セイバーは真面目な顔で、イスカンドルとランサーはニヤニヤとした笑みを浮かべてアーチャーに迫る。

額に冷や汗が浮かぶ。

始めに動いたのはランサーだった。早さをいかし一気に距離を詰める。

アーチャーの服へと伸びる腕を、己の腕をぶつけて弾く。序でにからだが流れた方へと飛ばすように軽く蹴りをぶちこんだ。

そのアーチャーにランサーと同時に動いたセイバーが背後から接近する。

セイバーはまずは移動できないようにしようと、倒すために足を狙って足払いをかける。それを軽く飛び上がって避け、そのまま距離を取る。

イスカンドルはこの間にもせずただ見ていた。こう言う体術系のやり取りはこの中では向かないからだ。

再度彼等は再び対峙する状態へと移行する。

ここにもっとも危険な鬼ごっこが開始された。

二十五章 わくわくざぶざぶん (後書き)

脱ぎたくないアーチャーと脱がせたい回り。

ギャグなんだかシリアスなんだかわからない状態になっております。

…いつもか(笑)

## 二十六章 ある意味熱い鬼ごっこ（前書き）

本来ならあのような地震が起きたばかりで小説を投稿するのは不謹慎かと思いますが、少しでも気分転換になればと思いついていただきました。

かくゆう自分も今月末に結婚するいとこの相手方の実家が福島だったはずと言うことで、一時は大変でした…  
すぐに連絡がとれたのがほんと幸いです。

## 二十六章 ある意味熱い鬼ごっこ

一対の色素の薄い鋼色の瞳と、三対のカラフルな瞳が正面からぶつかり合う。

アーチャーは心のなかでは焦っていたが、それを表に出すことなく毅然とした態度をとっていた。

思考はどうすればこの状況を切り抜けられるかと言うことに大半を割いており、周囲の状況を予断なく確認していた。

マスター達はまだこちらの現状に気付いた様子は見られず、今は大人は大人、子供は子供でそれぞれ一塊になっていた。

いや、宗一郎だけは不穏な気配を察知したのか一瞬こちらに目を向けた。だが、見た瞬間切迫するようなものではない事がわかったのか、すぐに視線をもとに戻した。

サーヴァント達は自分達が対峙した瞬間にその事に気づきはしたが、何をするでもなくただ興味深そうにこちらに視線を向けている。

恐らくイスカンドルがいることで厄介事の空気を読み取ったに違いないとアーチャーは考えた。ここは手助けがないことを嘆くべきなのか、これ以上対応する相手が増えないことを喜ぶべきなのか決めかねていた。

取り敢えず、逃げるにあたりこの場から離れることが先決だとアーチャーは判断を下す。凜の目の前で本気ではないとは言え暴れることに代わりはないのだから。

騒動の理由を耳にすれば凜があきれたため息をつく様子が用意に想像できた。

もしかしたら令呪使用するかもしれない。頭に血が上れば何をす

かわからないのだ、昔“絶対服従”を告げたときのように。

そうと決まれば早速実行に移すのみである。アーチャーは更に距離をとり完全に逃走の姿勢に入った。

「ウウム、一筋縄ではいいかんか。よし、追いかけるぞ。」

「ちっ、待ちやがれアーチャー。」

「観念しなさい、アーチャー!!」

「はっ。そう言われて、はいそうですかと従うとでも思っているの  
かね？だとすれば随分と可哀想な脳ミノだな。」

追跡者の冷静な判断を無くさせるようにアーチャーは挑発の言葉を  
投げ掛ける。ランサー達のような直情型はそうすることで動きが少  
し大振りになり行動が読みやすくなるからだ。

目論み通りセイバーとランサーはアーチャーの言葉にあっさりと頭  
に血を上らせた。これが戦場であればこつも簡単にいかなかっただ  
ろうが、今回はお遊びのようなもので効果が高かったというこ  
とかもしれない。

追いかけてくるものたちの声を聞きながら、アーチャーはどのよう  
に逃げるかの算段を頭のなかで考える。

完全に逃げ切るために。そう、あんなモノを見せて不快にさせるわ  
けにはいかないのだ。

アーチャーは足に力を込め、プールの地図を思い浮かべた。

逃走しやすい通路を選びそちらへと向かう。チラッと後ろを見れば、  
三人は一緒に追いかけてきた。

目につきにくいところまではこのまま移動できるだろうと顔を前に



戻し、移動することにアーチャーは集中した。

「アーチャーなぜ逃げるのです。ただ水着になればいいだけではありませんか。」

「それが嫌だといっているんだ。」

「何嫌がってやがんだ、女じゃあるめえし。」

「当たり前だ。私をみて女と思う奴がいれば正直神経を疑うぞ。ウム、精神科への受診をおすすめする。」

セイバー・ランサー・アーチャーと言った今回の三騎士は口論を交えつつ移動している。サーヴァントの中でも優秀とされるクラスの三人が子供じみた内容で口喧嘩とは、なかなか珍しいものだ。

この先以降は珍しくなくなりそうな予感がするのはきつと気のせいではないだろう。

四人は騒ぎながら移動していった。

そんな彼等を複数の目が見つめていた。はじめは気づかなくとも、あれだけ大声で騒いでいれば気づくのも当然だ。さすがに内容までは彼等の耳には届かなかったがおいかけっこの様なものが始まったことを見れば、大したことでないと簡単に推測できた。

何より彼等の表情がそう物語っていた。追いかけているアーチャーはわりかし切羽詰まっているように傍観者達は感じたが、あの

メンバーに追いかけているのならそれも当然かもしれないと思  
ったのも理由のひとつだ。

傍観していた者達の瞳に含まれる感情は様々だった。その中でもあ  
きれの色を浮かばせていた凜は、さっきまでアーチャー達のそばに  
いて今は一人で苦笑いを浮かべているギルガメッシュに声をかける  
ことにした。

アーチャー達と話していた彼なら、突然開始された鬼ごっここの理由  
を知っているだろうと考えたからだ。

「ギルガメッシュ、ちょっとこっちに来て。」

「はい、何ですか？」

自分に向かっておいでおいでと言う動作をする凜にギルガメッシュ  
はトコトコとよっていった。

すぐ近くまで来ると前置きは省いてずばつと尋ねた。

「それで、どうしてあいつらはあんなこと始めた訳？あんたずつと  
アーチャーの側にいたんだから理由はわかってるんでしょ？」

凜に呼ばれたときにそれを聞かれることはすぐに解ったが、正直に  
言うべきかどうか悩んでいた。何故なら、アーチャーが肌を見せる  
ことに本気で嫌悪感のようなものを抱いていたことを察したからだ。  
英雄と呼ばれる存在だとて闇の部分がないわけではない。詳しくは  
わからないがアーチャーは肌を見せることがそれに当たることなの  
だろうとギルガメッシュは推測したのだ。

心情的には数少ない自分に気遣いを見せてくれた存在であるアーチャーを手助けしたいと思いつつも、そこから興味を逸らせられるようないい考えが思い浮かばない。

凜のことだからきつと面白がってかき回すことになるだろうという予感が抜けなかった。

「え〜とですね。お兄さんが暇そうにしてたので、それを見た征服王が追いかけ始めちゃって。面白そうだからってランサーさん達まで参加しちゃったんですよ。ホント、子供みたいですよ〜。」

「あら、そうなの。アーチャーも大変ね……………で、本当の理由は？」

取り敢えずはぐらかしてみようと試みたギルガメッシュだったが、予想通りというか凜には通用しなかった。

しかも目が笑っていない。危険を本能的に察したギルガメッシュは、態度を一変させ正直に答えたのだった。というか、その選択肢しかなかったと言っている。

「普段着のお兄さんを水着にさせようとしてるんです。」

「そう言うことだったのね。確かに、アーチャーの奴せっかくプールに来たってのに、一人だけいつのも格好だったものね。こんなときぐらい気を抜いてゆっくりしさないってのよ。」

「そうですね、警戒はしていない代わりに気を抜いてもいないって感じられましたからね。」

今度は嘘ではない事がわかった凜は、己のサーヴァントの堅物さのため息を吐いた。

着替えを済ませプールに出てきた凜は、先に着替えを済ませ既にいた男性陣の中で一人浮いた存在を認めた瞬間思わず頭を抱えそうになった。

全員の息抜きをかねて来たというのに、意味がないじゃないかと。

確かにサーヴァントとは戦わせるために召喚した存在だが、日常を楽しんではいけないという決まりがあるわけではない。寧ろ、かつて人としてあつたとき同様にいてもいいのではないかと考えてもいた。

しかし、アーチャーは食事を作ってくれたりとったりはするものの、それ以外では戦闘に関係する行動以外をめたにとることはなかった。夜も睡眠を取ることなく見張りをしていることを凜は知っていた。

今は例の正体不明の存在があるため仕方ないが、それ以前も睡眠を取る様子はなかった。

必要のない行動は心の贅肉だと凜は思っているが、それでもどこか放っておけない雰囲気を纏うアーチャーに少しでもリラックスしてほしいかったのだ。

そう、だからこそ息抜きをどうしようか悩んでいたのだ。自分だけならどうとでもなったが、アーチャーにも息抜きさせるにはどうすればいいか。そこが問題であった。

なので、ギルガメッシュの提案はまさに渡りに船だった。

結局、その効果を得ることはできなかったが。

なら無理矢理にでも戦闘の事を忘れさせるようにすればいいのではないか。そんな考えがアーチャー達が消えていった方を見つめていた凜の頭に浮かんだ。

やってやるうじやないの、と凜は不敵な笑みを浮かべた。そして、考えたことを実行すべく行動を開始した。

一連の動作を静かに見つめていたギルガメッシュは、アーチャーに心の中で黙禱を捧げた。

「ごめんなさい、お兄さん。止められませんでしたけど僕のせいじゃないですから、恨むならお姉さんにお願ひしますね。」

朗らかにそう囁くギルガメッシュには悪意は欠片たりとも感じられず、だからこそ腹黒さが感じられ質が悪いとしか言えなかった。

こつ言う部分では少年である彼の方が恐ろしいとは、両方のギルガメッシュを知る者達の共通の見解であった。

アーチャーは濡れて滑りやすい足場に注意しながら逃亡を続ける。追いかけてきている者達の中にランサーがいる以上すぐに追い付かれそうなものだが、足の遅い人物に合わせているのか一団として行動していた。

それはセイバーにも言える事で、魔力放出による移動速度の上昇は行っていなかった。これらから、彼等が本気であっても全力ではないことがうかがい知れる。

これも一種のコミュニケーションとでも考えているのかもしれない。それも間違いではないだろう、正しくもないが。

アーチャーはこれからの行動を考える。

このまま逃げ続けるといのはさすがに無理だろう。これが屋外であればまだ逃げられる可能性があったかもしれないが、残念なことにはここは屋内。逃げる場所もそれに関する行動も限られてしまう。

一流れるプールの脇を走り、チラリと後ろを確認する。三人は互いに何か話しているようだった。

ではどこかに隠れるか。それも難しいだろう。

こう言う施設には死角になりうる部分は確かに多く存在するが、一つ一つは小さく隠れきれない。よしんば隠れることができたとしても、気配を察知されるかランサーの探索のルーンですぐに発見されてしまうだろう事は想像に固くない。

子供用らしい浅いプールが見えた。また後ろを見ればセイバーは木刀のようなものを持ち出しており、ランサーは己の象徴である槍を出していた。刃の部分を使わなければ確かに自分の武器の方が使いやすいだろう。ランサーである以上自分の武器（槍）を扱い損ねる何て言う馬鹿な事態は起きないだろうし。（そうならおもいつきり笑ってやる。）

考えれば考えるほど現状が芳しくないと言う事実ばかりが突きつけられる。

やはり気を使わず来なければよかったと少しの後悔に襲われた。だが、それはそれでまた別の後悔を感じたであろう事も予感していた。

と、アーチャーは今何か重要なものを見落とした気がした。今見た

光景を走り続けながら脳裏に思い浮かべた。

真つ先に浮かんだのは、セイバーとランサーの手に握られた武器。そう、武器、だ。

本来の役目はを考えるならそれはおかしいことではない。ただ、思いついてほしい。ここがどこであり、何しに来ているのかを。それに気付いた瞬間、思わずアーチャーは叫び声をあげていた。

「一体何て物を出しているんだ、貴様らは!!」

「ああ?別にいいだろ、本来の使い方をしようって訳じゃねえんだ。」

「そういう問題ではないわ、このたわけが!!」

アーチャーは顔だけを完全に振り返らせてランサーに怒鳴り返した。イスカンドルは無手のままである。先程から追いかけては来ているものの手を出そうとする様子は見られない。きつとランサー達に任せた方がよいとも思ったに違いない。

やはり王様は王様である。私情抜きに判断する能力が高い。できない奴も存在するが。

一歩下がった状態で判断を下すイスカンドルを厄介に思いつつ、戦闘以外でそういう奴を排除する方法を知らないアーチャーには手を出すことができない。

飛び込み用のプールの側に差し掛かる。

ランサーが持つ武器に注意すべきかと思うが、今投擲はしないだろうと接近されないことに心血を注ぐ。

追いかけてくる二人はほんとうにしつこいと感じるも、諦めが悪いからこそ英雄になれるんだろうなと少々意識を飛ばした。

ハアと思わずため息を吐く。

ふと、違和感を感じたとき本能が危険信号をはっした。言うなれば勘であるが、これは経験から来る予測にも等しいものである。故に微塵も疑うことなく導かれるまま体を動かした。

直後、アーチャーがいた場所をビュンと何かを通りすぎた。見ればセイバーがプール側から手にした木刀を振るっていた、水の上に立つて。

そうして思い出す。セイバーがランサーに怒鳴り返したときから居なかった事に。そんなことにも気付かなかったとは、自分も思ったほど冷静ではなかったらしい。

「くっ、これで行けると思ったのですが。やりますね、アーチャー。」

「いや、危ないところだったよ。君がアーサー王であったことを失念していた。」

「成る程、加護の事を知っていたのですね。」

恐らく三人で話していたときにでもその事を話し、別行動をとったのだろう。一瞬でも気づくのが遅かったら危なかった。

セイバーの剣は確実に意識を借りとるための動きをしていたのだから。

今の攻防で思わず足を止めてしまったアーチャーを三人が取り囲むしまったと思ってももう遅い。退路は完全に絶たれた。飛び込み台を背にどこか道はないものかと視線を巡らすも、適切な位置に陣取りムカつく表情を浮かべる男どももしか目に入らない。

こうなったら背にした飛び込み台に登り逃走するしかないと思った



とき、金属音と何かが空気を裂く音がアーチャーの耳に届いた。

先程と同じく本能が告げるままに避けるアーチャーが目にした音の正体は鎖だった。驚く間もなくさらに鎖は動いてアーチャーへと襲いかかった。

アーチャーは手になんの変鉄もない木の棒を投影し鎖に向かって投げつける。しかし、ただ投げつけるだけでは効果がない事は一目瞭然。その為鉄甲作用を用いたのだった。

弾かれた鎖ー釘剣を回収しつつ現れたのはライダーだった。これは征服王達も予想できなかったようで驚いていた。

「まさか君も来るとは思わなかったな、ライダー。」

「ええ、わたしも関わる気は無かったのですが、サクラに頼まれたものですから。」

これは凜の差し金である。残ったサーヴァントのうちすぐに動かせそうな存在は妹のサーヴァントだけであったため、桜へと頼んだのだ。

さくらは苦笑いしつつも了承し、現在に至ると言うわけだ。

そしてライダーの出現により、アーチャーの退路は完璧に防がれてしまった。正に八方塞がり、四面楚歌。

アーチャーの額に冷や汗が浮かぶ。

「今度こそ手詰まりって訳だ。おとなしくしろよ、アーチャー。」

「その通りです、アーチャー。ただ着替えるだけではありませんか。」

「うむ、余は諦めんぞ。」  
「……………観念した方が良さそうですね。」

三人はヤル気満々だが、ライダーだけはやる気なくアーチャーに告げた。めんどくさいと言う感情がありありと現れている。さっさとこの下らないやり取りを終わらせて戻りたいのだろう。

だが、ここまで来てもアーチャーに諦める気はなかった。あれを見せる気は全くないのだから。

こうなつてはやりあう以外に逃れるすべはないと、己の手に干将・莫耶を呼び出した。勿論、刃は潰した状態だ。

これでアーチャーがまだ諦めてないことを理解したランサー達も、今手にあるものを構え直す。

今度も最初に動いたのはランサーだった。逆手に持った槍で、変わらぬスピードのまま突きを繰り出す。

本気ではないからかうまく捌け、それだけであれば隙をついて逃げ出せたかもしれないが、ほんの僅かな隙や動きが止まった瞬間を狙ってライダーが釘剣を飛ばしてくる。

その為今いる位置から移動できずにいた。

ランサーが今までの動きを変化させ、突きから払いへと変わった。ライダーの釘剣を打ち落とした直後だったため防御が間に合うかわからなかったが、ギリギリで槍と体の間に剣を滑り込ませる事に成功した。

しかし、受けたときの体の向きや足の位置が悪く、踏ん張ることができずに軽く飛ばされてしまった。さらに運の悪いことにそこはセイバーの目の前であった。

「アーチャー、覚悟!!!」

「それはちよつと違わないか、セイバー!？」

全力で振るわれる木刀を強化した剣で迎え撃つ。だが、飛ばされた直後のアーチャーに、剣で受ける、以外の事ができるはずもなく、再びアーチャーは飛ばされるのであった。

空中にいるアーチャーの手の中で強化を施した箭の干将・莫耶は音もなく崩れ去った。その上、アーチャーの手まで痺れている。もし強化をしていなければ一発だったなと現実逃避のごとく思った。

アーザツパーン

プールから大きな水柱が上がった。アーチャーが飛ばされた先は幸いなことにプールだったのだ。

これ幸いとばかりにアーチャーは反対側に向かって泳ぎ始めた。

上ではそんなアーチャーを眺めつつ追跡者達が会話をしていた。

「ちつ、アーチャーの野郎また逃げ始めやがった。逃げられたのはためえのせいだせ、セイバー。」

「むう、もう少しのところであつたのだがのう。」

「申し訳ありません、もう少し考えて行動に移すべきでした。」

「……………（もう戻りたいのですが。）」

さすがに水中ではライダーの釘剣も勢いがなくなり、水上を歩いて

も水中の動きになれていないセイバーも一人でいくことは憚られた。流石にめんどくさがさが前に出てきたのか、ここまでで終わろうかと言う空気の流れかけたときセイバーが動いた。

「ライダー、今からアーチャーをだしますのでお願いします。」

「それは構いませんが、出すとは……」

どうやって、と聞く前にセイバーは木刀を腰だめに構えて集中し出した。

それでなんとなく察したライダーはそれ以上なにも言わずに釘剣を構えたのだった。

高まるセイバーの闘気、それは水中のアーチャーにも感じられた。嫌な予感に悪寒が走った。

急いで泳ぎ早く岸に上がろうとしたが、その前にそれは起こった。

始めズンと思い衝撃が走ったかと思えばアーチャーの周囲から水分が全くなくなった。なんとなしに下を見てみれば、かなり深い筈の飛び込みようプールの底が見えていた。

このまま行けば叩きつけられるなんて考えたアーチャーに鎖が巻き付き、まるで一本釣りのごとく吊り上げられた。

鎖の主が誰かなんて考えるまでもない。引き寄せられながらアーチャーが見たものはモーゼのごとく割れたプールと、剣を振り抜いた格好のセイバーだった。

「ぐはっ。」

「よう、お帰り。アーチャー。」

とうとう、四人のもとへ戻されたアーチャー。迎えたのは嫌みなくらい爽やかなランサーの笑顔だった。逃げようにも鎖に縛られた状態のアーチャーは動けない。思わず顔を引き攣らせる。

「アーチャー。」

「な、なんだね、セイバー。」

「また追いかけるのも面倒なので、しばらく寝ていてください。」

「は…？つて、待て待て待て…！」

後ろに後ずさるアーチャーだが鎖の先はライダーの手のなか、すぐに一杯になり動けなくなる。

そしてセイバーは容赦なくアーチャーの頭に木刀を降り下ろし、アーチャーの意識を刈り取った。

「さて、では戻りましょう」

「おうよ。」

「楽しみだのう。」

「……（なんだか疲れました。）」

意識のなくなったアーチャーをイスカンドルが担ぎ上げ、皆の元へ戻る四人だった。

凜はランサー達が戻ってくるまでお喋りに興じていた。すると、ライダーからレイラインを通じて伝えられた状況を桜が凜に伝えた。

「姉さん、アーチャーさんを確保したそうですよ。」

「あ、やっど？それじゃ、あとは着替えさせるだけね。」

少年組は二人の会話をずっと聞いてたためアーチャーに同情の念を禁じ得なかった。

そして、皆が集まる場に意識のない（鎖を解かれた）アーチャーを担いだ彼等が戻ってきた。

何をしているのかと大人組が聞けば水着になるのを嫌がるアーチャーを？無理矢理にでも着替えさせるのだと言う返答だ。

内容に苦笑いしつつも、そこまで拒否することに興味を引かれ、結局全員がこの場に集まった。

イスカンドルがドサツとアーチャーを下ろす。

「ぐ…っ。」

下ろされた衝撃にアーチャーは呻き声をあげ目を覚ます。そして、周囲を囲まれた現状に最悪な状態だと理解する。

「よし、と言うわけで脱ぐがよい、アーチャー。」  
「断る！別に関人着替えんでもどうと言う事もあるまい。」  
「じゃがのう、こつ一人だけ普段着と言うものは、こつ、脱がせたくならんか？」  
「ならん！！」

どうしても抵抗するアーチャーにやはり力づくしかないかと判断した周囲は、すぐさま行動に移る。  
まず、すぐ近くにいたイスカンドルがアーチャー羽交い締めにしたサーヴァントのなかで筋力があまり高くないアーチャーは勢いをつける余裕がなくなれば、それだけで抵抗する術がなくなる。  
焦ったアーチャーは助けを求める視線を己がマスターに送るも、凜の笑顔に撃沈された。

服を無理矢理脱がせるための魔の手（ランサーの手）が己に延びる。ここに来てアーチャーはようやく観念した。  
もう抵抗しても無理だと言うことがわかったからだ。  
後は、少しでもあんなものを見せる時間が短いことを祈るばかりであった。

ランサーの手が己の服にかかったのを見て、アーチャーは目を閉じる。  
破らんばかりに思い切り服を開けられた直後に聞こえたのは、複数の息を飲む音だった。

二十六章 ある意味熱い鬼ごっこ（後書き）

本当はイスカンドルの神威の車輪をだそうかどうか悩んだ。だってやりそうじゃないですか？

結局やりませんでしたけど。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2148n/>

---

異なる運命、新たな螺旋

2011年3月14日08時24分発行